

有価証券報告書

事業年度 自 2022年4月1日
(第99期) 至 2023年3月31日

本田技研工業株式会社

(E02166)

第99期（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

有価証券報告書

- 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用して、2023年6月23日に提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書の添付書類は含まれておりませんが、監査報告書および上記の有価証券報告書と同時に提出した内部統制報告書、確認書を末尾に綴じ込んでおります。

本田技研工業株式会社

目 次

頁

第99期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	8
5 【従業員の状況】	11
第2 【事業の状況】	13
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	13
2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】	20
3 【事業等のリスク】	24
4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	30
5 【経営上の重要な契約等】	47
6 【研究開発活動】	47
第3 【設備の状況】	52
1 【設備投資等の概要】	52
2 【主要な設備の状況】	53
3 【設備の新設、除却等の計画】	55
第4 【提出会社の状況】	56
1 【株式等の状況】	56
2 【自己株式の取得等の状況】	61
3 【配当政策】	63
4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	64
第5 【経理の状況】	94
1 【連結財務諸表等】	95
2 【財務諸表等】	166
第6 【提出会社の株式事務の概要】	180
第7 【提出会社の参考情報】	181
1 【提出会社の親会社等の情報】	181
2 【その他の参考情報】	181
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	183

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2023年6月23日

【事業年度】 第99期(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

【会社名】 本田技研工業株式会社

【英訳名】 HONDA MOTOR CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 取締役 代表執行役社長 三 部 敏 宏

【本店の所在の場所】 東京都港区南青山二丁目1番1号

【電話番号】 (03)3423-1111 大代表

【事務連絡者氏名】 経理財務統括部経理部長 川 口 正 雄

【最寄りの連絡場所】 東京都港区南青山二丁目1番1号

【電話番号】 (03)3423-1111 大代表

【事務連絡者氏名】 経理財務統括部経理部長 川 口 正 雄

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第95期	第96期	第97期	第98期	第99期
連結会計年度	2018年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	2019年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	2020年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	2021年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	2022年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
売上収益 (百万円)	15,888,617	14,931,009	13,170,519	14,552,696	16,907,725
営業利益 (百万円)	726,370	633,637	660,208	871,232	780,769
税引前利益 (百万円)	979,375	789,918	914,053	1,070,190	879,565
親会社の所有者に帰属する 当期利益 (百万円)	610,316	455,746	657,425	707,067	651,416
親会社の所有者に帰属する 当期包括利益 (百万円)	637,609	24,287	1,214,757	1,619,997	1,081,429
親会社の所有者に帰属する 持分 (百万円)	8,267,720	8,012,259	9,082,306	10,472,824	11,184,250
総資産額 (百万円)	20,419,122	20,461,465	21,921,030	23,973,153	24,670,067
1株当たり親会社所有者 帰属持分 (円)	4,698.74	4,640.46	5,260.06	6,122.31	6,719.93
基本的1株当たり当期利益 (親会社の所有者に帰属) (円)	345.99	260.13	380.75	411.09	384.02
希薄化後1株当たり 当期利益 (親会社の所有者に帰属) (円)	345.99	260.13	380.75	411.09	384.02
親会社所有者帰属持分比率 (%)	40.5	39.2	41.4	43.7	45.3
親会社所有者帰属持分 当期利益率 (%)	7.5	5.6	7.7	7.2	6.0
株価収益率 (倍)	8.7	9.3	8.7	8.5	9.1
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	775,988	979,415	1,072,379	1,679,622	2,129,022
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△577,555	△619,481	△796,881	△376,056	△678,060
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	22,924	△87,411	△283,980	△615,718	△1,468,359
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	2,494,121	2,672,353	2,758,020	3,674,931	3,803,014
従業員数 (名) (外、平均臨時従業員数)	219,722 (37,897)	218,674 (34,586)	211,374 (28,161)	204,035 (27,069)	197,039 (25,249)

(注) 1 当社は、国際会計基準(以下「IFRS」という。)に準拠して連結財務諸表を作成しています。

2 売上収益には、消費税等は含まれていません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第95期	第96期	第97期	第98期	第99期
事業年度	2018年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	2019年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	2020年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	2021年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	2022年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
売上高 (百万円)	4,077,564	3,642,679	3,092,866	3,454,263	3,586,448
営業利益又は 営業損失(△) (百万円)	1,012	△60,260	△150,932	△11,215	△5,355
経常利益 (百万円)	534,031	512,028	359,362	613,644	642,766
当期純利益 (百万円)	362,203	373,027	373,372	488,046	630,759
資本金 (百万円)	86,067	86,067	86,067	86,067	86,067
発行済株式総数 (株)	1,811,428,430	1,811,428,430	1,811,428,430	1,811,428,430	1,811,428,430
純資産額 (百万円)	2,161,343	2,220,025	2,470,683	2,713,431	2,991,262
総資産額 (百万円)	2,982,107	3,126,421	3,383,432	3,920,756	4,316,643
1株当たり純資産額 (円)	1,228.34	1,285.77	1,430.91	1,586.25	1,797.27
1株当たり配当額 (円)	111.00	112.00	110.00	120.00	120.00
(第1四半期末) (円)	(27.00)	(28.00)	(11.00)	(—)	(—)
(第2四半期末) (円)	(28.00)	(28.00)	(19.00)	(55.00)	(60.00)
(第3四半期末) (円)	(28.00)	(28.00)	(26.00)	(—)	(—)
(期末) (円)	(28.00)	(28.00)	(54.00)	(65.00)	(60.00)
1株当たり当期純利益 (円)	205.33	212.91	216.24	283.75	371.84
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	72.5	71.0	73.0	69.2	69.3
自己資本利益率 (%)	17.1	17.0	15.9	18.8	22.1
株価収益率 (倍)	14.6	11.4	15.3	12.3	9.4
配当性向 (%)	54.1	52.6	50.9	42.3	32.3
従業員数 (外、平均臨時従業員数) (名)	22,675 (6,034)	25,379 (5,489)	35,781 (3,964)	34,067 (2,794)	33,065 (2,309)
株主総利回り (%) (比較指標：配当込みTOPIX) (%)	84.9 (93.8)	72.5 (84.9)	99.8 (120.7)	107.7 (123.1)	111.6 (130.3)
最高株価 (円)	3,836.0	3,259.0	3,475.0	3,724.0	3,755.0
最低株価 (円)	2,733.0	2,120.0	2,135.5	3,043.0	2,990.5

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれていません。

2 第98期より年2回配当を実施しています。

3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載していません。

4 最高株価・最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所市場第一部、2022年4月4日以降は東京証券取引所プライム市場におけるものです。

2 【沿革】

年月	事項
1946年10月	本田宗一郎が静岡県浜松市に本田技術研究所を開設、内燃機関および各種工作機械の製造ならびに研究に従事
1948年 9月	本田技術研究所を継承して本田技研工業株式会社を設立
1949年 8月	二輪車生産開始
1952年 4月	本社を東京都に移転
9月	パワープロダクツ生産開始
1953年 5月	大和工場(1973年 1月より 埼玉製作所 和光工場)稼働開始
1954年 4月	浜松製作所葵工場(2014年 4月より トランスミッション製造部)稼働開始
1957年12月	株式を東京証券取引所に上場
1959年 6月	米国にアメリカンホンダモーターカンパニー・インコーポレーテッドを設立
1960年 5月	鈴鹿製作所稼働開始
7月	本田技術研究所を当社より分離し、株式会社本田技術研究所を設立
1963年 6月	四輪車生産開始
1964年10月	タイにアジアホンダモーターカンパニー・リミテッドを設立
11月	狭山製作所(1973年 1月より 埼玉製作所 狭山工場)稼働開始
1969年 3月	カナダにホンダカナダ・インコーポレーテッドを設立
1970年 9月	狭山製作所第2工場工機部門を当社より分離し、ホンダ工機株式会社(1974年 7月より ホンダエンジニアリング株式会社)を設立
12月	真岡工場(2014年 4月より パワートレインユニット製造部)稼働開始
1971年10月	ブラジルにホンダモーター・ド・ブラジル・リミターダ(2000年 4月より ホンダサウスアメリカ・リミターダ)を設立
1975年 7月	ブラジルにモトホンダ・ダ・アマゾニア・リミターダを設立
1976年 3月	熊本製作所稼働開始
1977年 2月	A D R (米国預託証券)をニューヨーク証券取引所に上場
1978年 3月	米国にホンダオブアメリカマニュファクチュアリング・インコーポレーテッドを設立
1980年 2月	米国にアメリカンホンダファイナンス・コーポレーションを設立
1985年 9月	メキシコにホンダ・デ・メキシコ・エス・エー・デ・シー・ブイを設立
1987年 1月	カナダにホンダカナダファイナンス・インコーポレーテッドを設立
3月	米国に北米子会社事業の統轄機能を有するホンダノースアメリカ・インコーポレーテッドを設立
1989年 8月	英国に欧州子会社事業の統轄機能を有するホンダモーターヨーロッパ・リミテッドを設立
1992年 7月	タイにホンダカーズマニュファクチュアリング(タイランド)カンパニー・リミテッド(2000年12月より ホンダオートモービル(タイランド)カンパニー・リミテッド)を設立
1996年 5月	アジアホンダモーターカンパニー・リミテッドにアセアン子会社事業の統轄機能を設置
1999年 4月	東京都に株式会社ホンダクレジット(2002年 7月より 株式会社ホンダファイナンス)を設立
12月	米国にホンダマニュファクチュアリングオブアラバマ・エル・エル・シーを設立
2000年 4月	ホンダサウスアメリカ・リミターダに南米子会社事業の統轄機能を設置
2002年 6月	埼玉製作所 和光工場の四輪車用エンジンの生産を終了し、その生産機能を埼玉製作所 狭山工場(2002年10月より 埼玉製作所)に移管 (埼玉製作所 和光工場跡地については、2004年 7月よりHonda和光ビルとして活用)
2004年 1月	中国に中国事業の統轄機能を有する本田技研工業(中国)投資有限公司を設立
2009年 9月	埼玉製作所 小川工場稼働開始
2013年 7月	埼玉製作所 寄居工場稼働開始
2020年 4月	ホンダエンジニアリング株式会社を合併
2020年 7月	アメリカンホンダモーターカンパニー・インコーポレーテッドが北米子会社事業の統轄機能を有するホンダノースアメリカ・インコーポレーテッドを合併
2021年 4月	ホンダオブアメリカマニュファクチュアリング・インコーポレーテッドがホンダマニュファクチュアリングオブアラバマ・エル・エル・シー、その他 6社を合併し、ホンダディベロップメントアンドマニュファクチュアリングオブアメリカ・エル・エル・シーへ名称変更
12月	埼玉製作所 狭山工場の四輪完成車の生産を終了

3 【事業の内容】

当社グループは、当社および国内外382社の関係会社(連結子会社313社、持分法適用会社69社)により構成され、事業別には、二輪事業、四輪事業、金融サービス事業およびパワープロダクツ事業及びその他の事業からなっています。

二輪事業、四輪事業、金融サービス事業およびパワープロダクツ事業及びその他の事業における主要製品およびサービス、所在地別の主な会社は、以下のとおりです。

事業	主要製品 およびサービス	所在地	主な会社
二輪事業	二輪車 ATV Side-by-Side 関連部品	日本	当社 ○(株)本田技術研究所 ☆日立アステモ(株) ☆テイ・エス テック(株) ☆(株)エフ・シー・シー ☆(株)エイチワン ☆(株)武蔵精密工業(株)
		北米	○アメリカンホンダモーターカンパニー・インコーポレーテッド ○ホンダカナダ・インコーポレーテッド ○ホンダ・デ・メキシコ・エス・エー・デ・シー・ブイ
		欧州	○ホンダモーターヨーロッパ・リミテッド
		アジア	○本田技研工業(中国)投資有限公司 ○ホンダモーターサイクルアンドスクーターインディアプライベート・リミテッド ○ホンダカーズインディア・リミテッド ○アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド ○タイホンダカンパニー・リミテッド ○ホンダベトナムカンパニー・リミテッド ☆ビー・ティ・アストラホンダモーター
		その他の地域	○モトホンダ・ダ・アマゾン・リミターダ
四輪事業	四輪車 関連部品	日本	当社 ○(株)本田技術研究所 ☆日立アステモ(株) ☆テイ・エス テック(株) ☆(株)エフ・シー・シー ☆(株)エイチワン ☆(株)武蔵精密工業(株) ☆(株)ジーテクト
		北米	○アメリカンホンダモーターカンパニー・インコーポレーテッド ○ホンダディベロップメントアンドマニュファクチュアリングオブアメリカ・エル・エル・シー ○ホンダカナダ・インコーポレーテッド ○ホンダ・デ・メキシコ・エス・エー・デ・シー・ブイ
		欧州	○ホンダモーターヨーロッパ・リミテッド
		アジア	○本田技研工業(中国)投資有限公司 ○本田自動車部品製造有限公司 ○ホンダカーズインディア・リミテッド ○ビー・ティ・ホンダプロスペクトモーター ○ホンダ・マレーシア・エスディーエヌ・ビーエイチディー ○アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド ○ホンダオートモービル(タイランド)カンパニー・リミテッド ○ホンダベトナムカンパニー・リミテッド ☆広汽本田汽车有限公司 ☆東風本田汽车有限公司 ☆東風本田発動機有限公司
金融サービス 事業	金融	日本	○(株)ホンダファイナンス
		北米	○アメリカンホンダファイナンス・コーポレーション ○ホンダカナダファイナンス・インコーポレーテッド
		欧州	○ホンダファイナンスヨーロッパ・パブリックリミテッドカンパニー
		アジア	○ホンダリーシング(タイランド)カンパニー・リミテッド

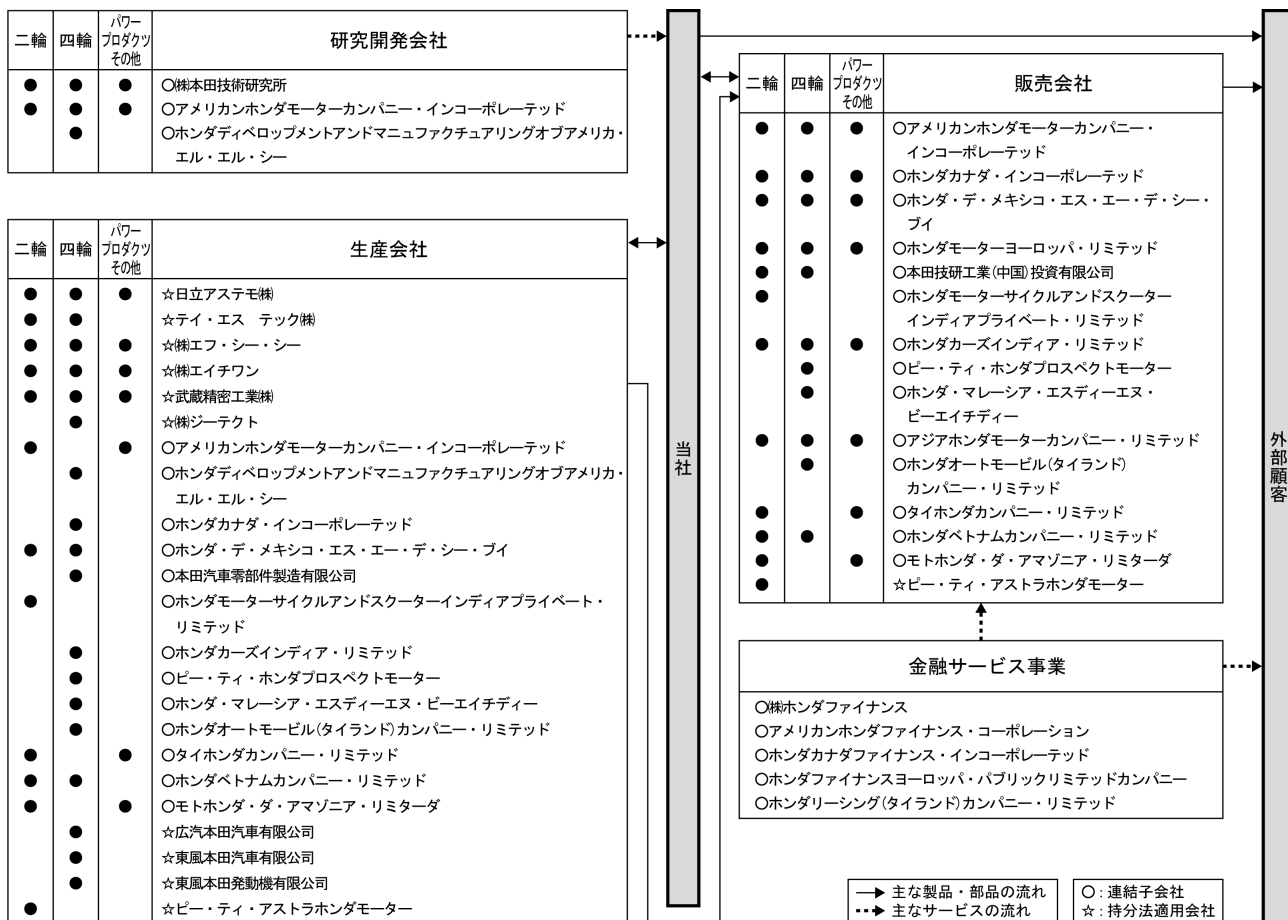
○：連結子会社
☆：持分法適用会社

事業	主要製品 およびサービス	所在地	主な会社
パワープロダクツ事業及びその他の事業	パワープロダクツ 関連部品 その他	日本	当社 ○(株)本田技術研究所 ☆日立アステモ(株) ☆(株)エフ・シー・シー ☆(株)エイチワン ☆武蔵精密工業(株)
		北米	○アメリカンホンダモーターカンパニー・インコーポレーテッド ○ホンダカナダ・インコーポレーテッド ○ホンダ・デ・メキシコ・エス・エー・デ・シー・プイ
		欧州	○ホンダモーターヨーロッパ・リミテッド
		アジア	○ホンダカーズインディア・リミテッド ○アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド ○タイホンダカンパニー・リミテッド
		その他の地域	○モトホンダ・ダ・アマゾン・リミターダ

- (注) 1 主な会社のうち、複数の事業を営んでいる会社については、それぞれの事業区分に記載しています。
2 パワープロダクツ事業は、2022年4月1日の組織変更により、ライフクリエーション事業が名称変更したものです。

○：連結子会社
☆：持分法適用会社

事業の系統図は、以下のとおりです。(主な会社のみ記載しています。)



4 【関係会社の状況】

(連結子会社)

名称	住所	資本金 又は 出資金	主要な事業の内容		議決権の 所有割合 (%)	関係内容			概要
			セグメント の名称	事業 形態		役員の 兼任等	資金 援助	営業上 の取引	
㈱本田技術研究所	埼玉県 和光市	百万円 7,400	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	研究開発	100.0	有	—	当社製品を研 究開発してい る	—
㈱ホンダファイナンス	東京都 千代田区	百万円 11,090	金融サービス事業	金融	100.0	有	—	当社製品に関 わる販売金融 をしている	特定子会社 有価証券報 告書を提出 している
アメリカンホンダ モーターカンパニー・ インコーポレーテッド	米国 カリフォル ニア州 トーランス	千ドル 299,000	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	統轄会社 研究開発 生産販売	100.0	有	—	当社製品を研 究開発、製造 および販売し ている	特定子会社 主要な連結 子会社 (注2)
アメリカンホンダ ファイナンス・コーポレ ーション	米国 カリフォル ニア州 トーランス	千ドル 1,366,000	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)	有	—	当社製品に関 わる販売金融 をしている	特定子会社
ホンダディベロップメン トアンドマニュファクチュ アリングオブアメリ カ・エル・エル・シー	米国 オハイオ州 メアリズビ ル	千ドル 561,568	四輪事業	研究開発 生産	100.0 (100.0)	有	—	当社製品を研 究開発および 製造している	特定子会社
ホンダカナダ・ インコーポレーテッド	カナダ オンタリオ 州 マーカム	千カナダ・ ドル 226,090	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産販売	100.0 (49.9)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	特定子会社
ホンダカナダファイナ ンス・インコーポレーテッ ド	カナダ オンタリオ 州 マーカム	千カナダ・ ドル 285,000	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)	有	—	当社製品に関 わる販売金融 をしている	特定子会社
ホンダ・デ・メキシコ・ エス・エー・デ・シー・ ブイ	メキシコ ハリスコ州 エルサルト	千メキシコ・ ペソ 13,655,652	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産販売	100.0 (99.8)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	特定子会社
ホンダモーターヨーロッ パ・リミテッド (注3)	英国 ブラックネ ル	千英ポンド 665,549	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	統轄会社 販売	100.0	有	当社は 運転資 金を貸 付けて いる	当社製品を販 売している	特定子会社
ホンダファイナンスヨー ロッパ・パブリックリミ テッドカンパニー	英国 ブラックネ ル	千英ポンド 38,251	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)	有	—	当社製品に関 わる販売金融 をしている	—
本田技研工業(中国)投資 有限公司	中国 北京市	千ドル 138,426	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	統轄会社 販売	100.0	有	—	当社製品を販 売している	特定子会社
本田自動車部品製造有限 公司	中国 佛山市	千ドル 200,000	四輪事業	生産	100.0 (100.0)	有	—	当社製品の部 品を製造して いる	特定子会社
ホンダモーターサイクル アンドスクーター インディアプライベ ート・リミテッド	インド グルグラム	千インド・ ルピー 3,100,000	二輪事業	生産販売	100.0 (3.2)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	—
ホンダカーズ インディア・リミテッド	インド グレート ノイダ	千インド・ ルピー 10,727,973	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産販売	100.0 (19.1)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	特定子会社

名称	住所	資本金 又は 出資金	主要な事業の内容		議決権の 所有割合 (%)	関係内容			摘要
			セグメント の名称	事業 形態		役員 の 兼任等	資金 援助	営業上 の取引	
ピー・ティ・ホンダ プロスペクトモーター	インドネシ ア ジャカルタ	千米ドル 70,000	四輪事業	生産販売	51.0	有	—	当社製品を製 造および販売 している	—
ホンダ・マレーシア・エ スディーエヌ・ピーエイ チディー	マレーシア ペゴ	千マレーシア・ リンギット 170,000	四輪事業	生産販売	51.0	有	—	当社製品を製 造および販売 している	—
アジアホンダモーター カンパニー・リミテッド	タイ バンコク	千タイ・ バーツ 10,888,908	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	統轄会社 販売	100.0	有	—	当社製品を販 売している	特定子会社
ホンダリーシング (タイランド)カンパニ ー・リミテッド	タイ バンコク	千タイ・ バーツ 5,550,000	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)	有	—	当社製品に関 わる販売金融 をしている	特定子会社
ホンダオートモービル(タ イランド)カンパニー・リ ミテッド	タイ アユタヤ	千タイ・ バーツ 5,460,000	四輪事業	生産販売	89.0 (25.0)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	特定子会社
タイホンダカンパニー・ リミテッド (注4)	タイ バンコク	千タイ・ バーツ 550,000	二輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産販売	72.5 (35.3)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	—
ホンダベトナムカンパニ ー・リミテッド	ベトナム フックイ エン	千ベトナム・ ドン 1,190,822,800	二輪事業 四輪事業	生産販売	70.0 (28.0)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	—
ホンダサウスアメリカ・ リミターダ	ブラジル スマレ	千ブラジル・ レアル 119,027	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	統轄会社	100.0	有	—	—	特定子会社
モトホンダ・ダ・ アマゾニア・リミターダ	ブラジル マナウス	千ブラジル・ レアル 1,509,632	二輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産販売	100.0 (100.0)	有	—	当社製品を製 造および販売 している	特定子会社
その他290社 (注5, 6, 7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(注) 1 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数です。

2 アメリカンホンダモーターカンパニー・インコーポレーテッドは、連結売上収益に占める売上収益(連結会社相互間の内部売上収益を除く。)の割合が10%を超えています。同社の売上収益は所在地別北米セグメントの売上収益(セグメント間の内部売上収益または振替高を含む。)の90%を超えているため、主要な損益情報等の記載を省略しています。(その関係会社を含む。)

3 ホンダモーターヨーロッパ・リミテッドは、債務超過会社であり、2023年3月末時点で債務超過額は82,646百万円です。

4 タイホンダカンパニー・リミテッドは、当連結会計年度において、タイホンダマニュファクチュアリングカンパニー・リミテッドが商号変更したものです。

5 その他に含まれる会社のうち特定子会社に該当する会社は、以下のとおりです。

ホンダエアロ・インコーポレーテッド、ホンダエアクラフトカンパニー・エル・エル・シー、ホンダバンク・ゲー・エム・ペー・ハー、ホンダターキー・エー・エス、ピー・ティ・ホンダ・プレジジョン・パーツ・マニュファクチュアリング、ホンダフィリピンズ・インコーポレーテッド、台湾本田股份有限公司、ホンダモートル・デ・アルヘンティーナ・エス・エー、バンコホンダ・エス・エー、ホンダオートモーベイス・ド・ブラジル・リミターダ、ホンダコンポーネンツ・ダ・アマゾニア・リミターダ

6 その他に含まれる債務超過会社の債務超過額は、2023年3月末時点で、以下のとおりです。

ホンダエアロ・インコーポレーテッド 50,595百万円(その関係会社の持分相当額を含む。)
ホンダエアクラフトカンパニー・エル・エル・シー 189,685百万円
ホンダオートモーベイス・ド・ブラジル・リミターダ 60,493百万円(その関係会社の持分相当額を含む。)
ユー・エス・ヤチヨ・インコーポレーテッド 15,822百万円

7 その他290社の内訳は国内の二輪販売会社2社、四輪販売会社21社、その他の国内連結子会社44社およびその他の海外連結子会社223社です。

(持分法適用会社)

名称	住所	資本金 又は 出資金	主要な事業の内容		議決権の 所有割合 (%)	関係内容			摘要
			セグメント の名称	事業 形態		役員の 兼任等	資金 援助	営業上 の取引	
日立アステモ㈱	東京都 千代田区	百万円 51,500	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産	33.4	有	—	当社製品の部 品を製造して いる	—
テイ・エス テック㈱	埼玉県 朝霞市	百万円 4,700	二輪事業 四輪事業	生産	24.2 (0.1)	有	—	当社製品の部 品を製造して いる	有価証券報 告書を提出 している
㈱エフ・シー・シー	静岡県 浜松市	百万円 4,175	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産	21.9	無	—	当社製品の部 品を製造して いる	有価証券報 告書を提出 している
㈱エイチワン	埼玉県 さいたま市	百万円 4,366	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産	21.7	無	—	当社製品の部 品を製造して いる	有価証券報 告書を提出 している
武蔵精密工業㈱	愛知県 豊橋市	百万円 5,458	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ 事業及びその他の 事業	生産	25.1	無	—	当社製品の部 品を製造して いる	有価証券報 告書を提出 している
㈱ジーテクト	埼玉県 さいたま市	百万円 4,656	四輪事業	生産	30.3	無	—	当社製品の部 品を製造して いる	有価証券報 告書を提出 している
广汽本田汽車有限公司	中国 広州市	千米ドル 541,000	四輪事業	生産	50.0 (10.0)	有	—	当社製品を製 造している	—
東風本田汽車有限公司	中国 武漢市	千米ドル 1,448,000	四輪事業	生産	50.0 (10.0)	有	—	当社製品を製 造している	—
東風本田発動機有限公司	中国 広州市	千米ドル 121,583	四輪事業	生産	50.0 (10.0)	有	—	当社製品の部 品を製造して いる	—
ピー・ティ・アストラ ホンダモーター	インドネシ ア ジャカルタ	千インドネシ ア ルピア 185,000,000	二輪事業	生産販売	50.0	有	—	当社製品を製 造および販売 している	—
その他59社 (注2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(注) 1 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数です。

2 その他59社の内訳は国内の四輪販売会社4社、その他の国内持分法適用会社16社およびその他の海外持分法適用会社39社です。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

セグメントの名称	従業員数(名)		
	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)	増減
二輪事業	46,448 (12,100)	45,813 (11,433)	△635 (△667)
四輪事業	146,092 (12,370)	139,999 (11,212)	△6,093 (△1,158)
金融サービス事業	2,321 (74)	2,340 (63)	19 (△11)
パワープロダクツ事業 及びその他の事業	9,174 (2,525)	8,887 (2,541)	△287 (16)
合計	204,035 (27,069)	197,039 (25,249)	△6,996 (△1,820)

(注) 従業員数は就業人員です。また、()内に臨時従業員の平均人数を外数で記載しています。

(2) 提出会社の状況

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)	増減
従業員数 (名)	34,067 (2,794)	33,065 (2,309)	△1,002 (△485)
平均年齢 (歳)	44.7	44.7	—
平均勤続年数 (年)	22.2	22.0	△0.2
平均年間給与 (千円)	7,787	8,221	434

セグメントの名称	従業員数(名)		
	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)	増減
二輪事業	5,334 (642)	5,307 (764)	△27 (122)
四輪事業	27,949 (2,080)	26,993 (1,497)	△956 (△583)
パワープロダクツ事業 及びその他の事業	784 (72)	765 (48)	△19 (△24)
合計	34,067 (2,794)	33,065 (2,309)	△1,002 (△485)

(注) 1 従業員数は就業人員です。また、()内に臨時従業員の平均人数を外数で記載しています。

2 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含んでいます。

(3) 労働組合の状況

提出会社、連結子会社ともに、労使関係は安定しており特記すべき事項はありません。

提出会社の状況

労働組合名	本田技研労働組合 (全日本自動車産業労働組合総連合会に加盟)
組合員数	29,343名

(4) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

① 提出会社

当事業年度					補足説明
管理職に占める女性労働者の割合(%) (注2)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注3)	労働者の男女の賃金の差異(注2)			
		全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者	
2.2	88.1	67.0	71.0	99.8	(注4)

- (注) 1 管理職に占める女性労働者の割合については、当事業年度末日を基準日としています。また、男性労働者の育児休業取得率および労働者の男女の賃金の差異については、当事業年度を対象期間としています。
- 2 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(2015年(平成27年)法律第64号)の規定に基づき算出したものです。
- 3 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(1991年(平成3年)法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(1991年(平成3年)労働省令第25号)第71条の4第2号における育児休業等および育児目的休暇の取得割合を算出したものです。
- 4 当社の労働協約適用会社である(株)本田技術研究所、(株)ホンダ・レーシング、学校法人ホンダ学園、(株)ホンダアクセスを含んでいます。

② 主要な連結子会社

当事業年度						補足説明
名称	管理職に占める女性労働者の割合(%) (注2)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注3)	労働者の男女の賃金の差異(注2)			
			全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者	
(株)ホンダファイナンス	4.6	—	67.3	68.1	115.9	—

- (注) 1 管理職に占める女性労働者の割合については、当事業年度末日を基準日としています。また、男性労働者の育児休業取得率および労働者の男女の賃金の差異については、当事業年度を対象期間としています。
- 2 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(2015年(平成27年)法律第64号)の規定に基づき算出したものです。
- 3 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(1991年(平成3年)法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(1991年(平成3年)労働省令第25号)第71条の4第2号における育児休業等および育児目的休暇の取得割合を算出したものです。
- 4 連結子会社のうち主要な連結子会社以外のものについては、「第7 提出会社の参考情報 2 その他の参考情報 (2) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異」に記載しています。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

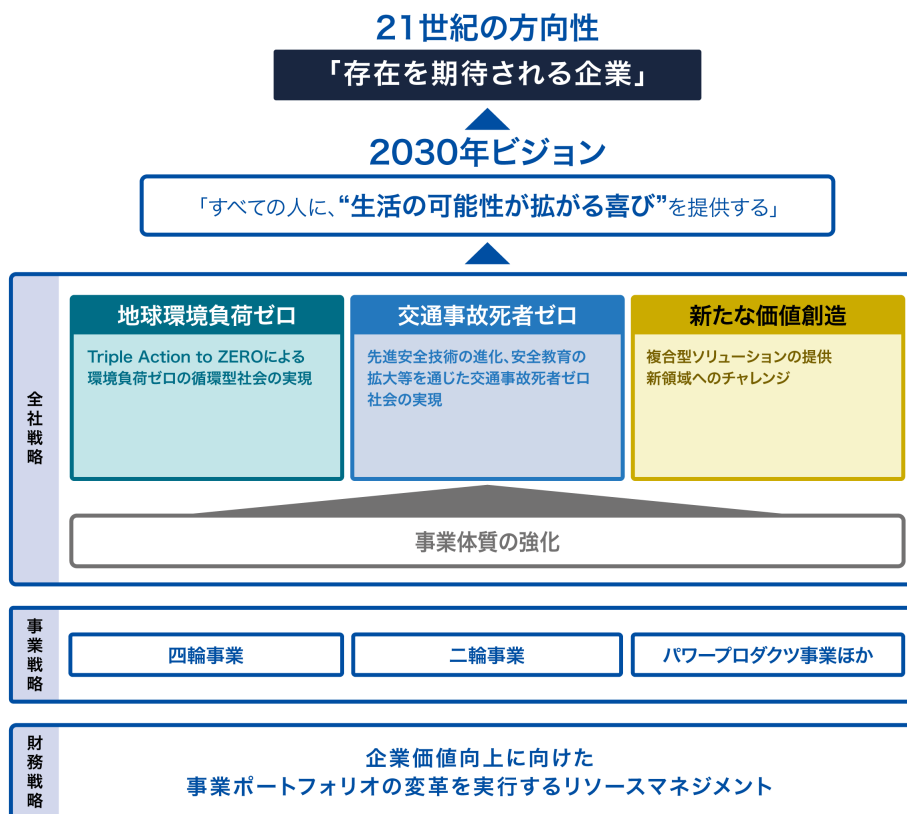
文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日(2023年6月23日)現在において、当社、連結子会社および持分法適用会社(以下「当社グループ」という。)が判断したものであり、将来生じうる実際の結果と大きく異なる可能性もあります。詳細は「3 事業等のリスク」を参照ください。

(1) 経営方針・経営戦略等

当社グループは、「人間尊重」と「三つの喜び」(買う喜び、売る喜び、創る喜び)を基本理念としています。「人間尊重」とは、自立した個性を尊重しあい、平等な関係に立ち、信頼し、持てる力を尽くすことで、共に喜びをわかちあうという理念であり、「三つの喜び」とは、この「人間尊重」に基づき、お客様の喜びを源として、企業活動に関わりをもつすべての人々と、共に喜びを実現していくという信念であります。

こうした基本理念に基づき、「わたしたちは、地球的視野に立ち、世界中の顧客の満足のために、質の高い商品を適正な価格で供給することに全力を尽くす」という社是を実践し、株主の皆様をはじめとするすべての人々と喜びを分かち合い、企業価値の向上に努めていきます。

当社グループは、世の中に「存在を期待される企業」であり続けるため、「すべての人に、“生活の可能性が広がる喜び”を提供する」ことを2030年ビジョンとして掲げ、企業活動を行っています。年間3,000万人規模の製品を供給する世界一のパワーユニットメーカーとして「環境」と「安全」に徹底的に取り組むとともに、新たな価値創造として、複合型ソリューションや新領域へのチャレンジに全社一丸となって取り組んでいます。また、こうした事業ポートフォリオの変革に向けた投入資源を生み出すためにも、さらなる事業体質の強化をはかっていきます。



(2) 経営環境

当社グループを取り巻く経営環境は、大きな転換期を迎えています。価値観の多様化や、高齢化の進展、都市化の加速、気候変動の深刻化、さらに電動化、自動運転化、I o Tといった技術の進化による産業構造の変化が、グローバルレベルで進んでいます。新型コロナウイルス感染症の影響により、日々の生活環境や慣習は大きく変化し、また、世界の分断が加速し、地政学的リスクも顕在化しています。さらには、企業活動に関わるすべてのステークホルダーと、長期的な社会課題を解決するための、積極的な関係構築も求められています。将来の成長に向けては、提供価値の質の向上に取り組むことが不可欠です。

四輪事業では、コネクテッド、自動化、シェアリング、電動化といった技術革新によって、100年に一度といわれる大変革期に直面しています。安心で自由な移動という普遍的な価値に加え、統合化されたサービスやカスタマイズによる新たな体験が求められています。また、世界的に環境規制の一層の強化が進む中、自動車業界においてはEV(電気自動車)事業拡大に伴い、資源の争奪競争が激しくなることが想定されます。このような不透明な環境下においても「電動化」や「安全への取り組み」を確実に進めるために、「事業体質の強化」に取り組んでいきます。

二輪事業は、世界的に環境規制の強化が進む中、先進国に続き、一部の新興国でも電動化の政府目標が発信され、変化の兆しが出てきています。このような事業環境変化や地域特性の中でも、多面的・多角的なアプローチに取り組み、カーボンニュートラルの実現をめざします。また、安全については、車両単体の安全技術適用のみならず、インフラとの連携や安全運転普及活動にもさらに力を入れて取り組んでいきます。

パワープロダクツ事業及びその他の事業は、労働人口の減少や作業者の高齢化により、「もっと安全に」「もっと簡単に」使える作業機の進化が求められています。当社グループは作業機と同時に、センサーや知能化などの技術を進化させるために、プロや熟練作業者のノウハウを収集・データ化し、作業機と連携させて、作業の質を向上させていきます。また、脱炭素へ向けては、エンジンからバッテリーへの単純な置き換えだけでなく、お客様にとって何がベストかを考えながら、さまざまな可能性にアプローチしていきます。

(3) 優先的に対処すべき課題

経営環境を踏まえ、当社グループが持続的な成長を続け、気候変動をはじめとしたさまざまな社会の課題解決に貢献するために、当社グループならではの価値提供の実現に向け、以下の課題に取り組んでいきます。

<価値創造へ向けた取り組み>

① 地球環境負荷ゼロ

当社グループは2050年に、製品だけでなく企業活動を含めたライフサイクルでの環境負荷ゼロをめざします。その柱となるのが、「カーボンニュートラル」「クリーンエネルギー」「リソースサーキュレーション」の3つです。(Triple Action to ZERO)

カーボンニュートラルの取り組み

四輪事業はカーボンフリーを達成するため、「先進国全体でのEV、FCV(燃料電池自動車)の販売比率を2030年に40%、2035年には80%」、そして「2040年には、グローバルで100%」をめざします。

この実現に向けては、市場変化に合わせたラインアップ展開とバッテリーの安定調達が重要な課題です。

ラインアップ展開においては、EV普及の拡大期にある、現在から2020年代後半にかけて、主要市場となる北米・中国・日本など、地域ごとの市場特性に合わせた商品投入を進めていきます。

地域	投入する商品
北米	ゼネラルモーターズ(GM)と共同開発モデルを2024年に2機種投入予定 (Hondaブランド: Prologue、Acuraブランド: ZDX) Honda独自のEV専用プラットフォームをベースとした中大型EVを2025年に投入予定
中国	2027年までに、10機種のEVを投入予定
日本	2024年中にN-VANベースの軽商用EVを投入 その後、2025年にN-ONEベースのEV、2026年に2機種の小型EVを投入予定

また、EVの普及期に入っていると推察される2020年代後半以降は、「各地域ベスト」から進化し、「グローバル視点でベスト」なEVを展開していきます。2030年までに軽商用からフラッグシップクラスまで、グローバルで年間200万台を超える生産を計画しています。

バッテリーの安定調達に向けては、現在から2020年代後半までは外部パートナーシップの強化により、液体リチウムイオン電池の安定的な調達量の確保をめざします。

地域	方針
北米	ゼネラルモーターズ(GM)から「アルティウム」を調達 LGエナジーソリューションとのEV用バッテリー生産合弁会社から調達
中国	寧徳時代新能源科技股份有限公司(CATL)との連携をさらに強化
日本	軽EV向けに、エンビジョンAES Cから調達

2020年代後半には、EV拡大期に合わせ、次世代電池技術の独自開発にチャレンジしていきます。㈱GSユアサとの協力関係においては、10年にわたり協業を進めてきたハイブリッド用電池の次のステージとして、高容量・高出力なEV用リチウムイオンバッテリーの開発に着手し、展開を進めていきます。また、半固体電池では、SES AI コーポレーションへの出資を通じた共同開発を進めると共に、全固体電池は独自開発に向けた研究を進め、2024年には実証ラインを立上げ、より一層取り組みを加速していきます。

これらの調達や開発の領域に加え、長期的視点では、資源確保からリソースサーキュレーションを含めた、新たなバリューチェーンの構築に取り組んでいきます。重要鉱物の確保において阪和興業株式会社とPOSCOホールディングス、リサイクルの観点からは、アセンド・エレメンツやサーバ・ソリューションズとパートナーシップを締結しています。

バッテリー領域においては、各領域における戦略的パートナーシップにより、「当社グループをハブとした、強固なバリューチェーンを構築」し、各パートナーとの共存共栄をはかることで、サステナブルな事業基盤の構築と、競争力の強化をはかっていきます。

二輪事業においては、2050年カーボンニュートラルの達成をめざして、製品領域における電動製品の販売比率目標値を段階的に設定し、取り組みを加速します。具体的には2026年までに100万台、2030年には販売構成比の約15%にあたる年間350万台レベルの電動車販売を目標に掲げ、ICE(内燃機関)の進化と電動化で2040年代にカーボンフリー製品100%をめざします。

二輪車は販売の中心が新興国であり、エネルギー需給、雇用、生活の利便性など各国・地域の社会ニーズが複雑なため、二輪車の利便性とカーボンニュートラルのバランスをとることが課題と考えています。電動車の展開に加えて、ICE車の大幅な燃費改善技術など、多面的・多角的なアプローチでカーボンニュートラルに取り組んでいきます。

電動車においては、各市場の特性に合わせ、電動商品をカテゴリーごとに展開していきます。

商品分類	取り組み内容
通勤用EV	コネクテッドとBaaS(バッテリーアズサービス)に対応したパーソナル向け通勤用EVを2024年から2025年にアジア、欧州、日本で2モデル市販予定
通勤用EM/EB*	手軽に電動車を利用したいというニーズに対応する、よりコンパクトでお求めやすい価格の電動車。中国、アジア、欧州、日本の各市場特性に合わせて投入予定 2024年までにEM/EBを計5モデル展開予定
FUN EV	大型FUN EVモデルのプラットフォームの開発 2024年から2025年までに日本、米国、欧州に計3モデル投入予定

※EM: Electric Moped(電動モペッド)、最高速度25km/h~50km/hのカテゴリー。

EB: Electric Bicycle(電動自転車)、最高速度25km/h以下のカテゴリー。

電動アシスト自転車は含まない。

2025年までに、通勤用とFUNモデルをあわせて合計10モデル以上の新規電動車の投入を計画しています。

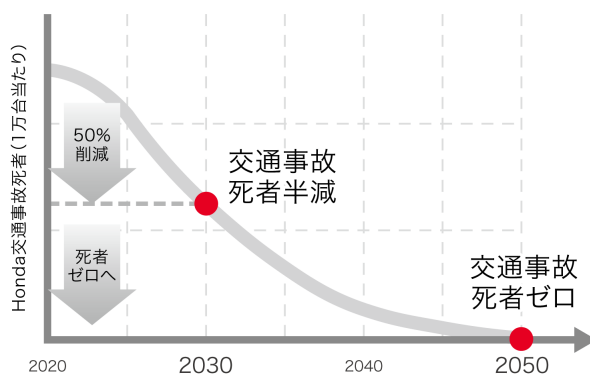
ICE車においては、燃費向上の取り組みとして、熱効率向上や低フリクション技術によるエンジン単体の燃費向上技術のほかに、車両トータルでの燃費を向上させる技術を開発しています。さらに地域特性を考慮して、ガソリンにエタノールなどを混合したカーボンニュートラル燃料対応技術にも取り組んでいきます。

パワープロダクツ事業においては、先進国をターゲットに電動製品を投入し、プレゼンスの確立をめざします。高いプレゼンスを持っているエンジン歩行芝刈機などの完成機においても、電動化を進め、エンジン製品と変わらない強みをお客様に提供していきます。また、エンジン販売で高シェアを有する建設業界の法人様をターゲットに、電動パワーユニットの販売とその搭載支援を提供することで、小型建機メーカー様の電動化を後押ししていきます。電動商品の展開においては、従来通りの販売・アフターサービスだけでなく、法人様の業務効率改善、投資抑制をはかることで、事業運営への貢献をめざします。

詳細については、「2 サステナビリティに関する考え方及び取組」を参照ください。

② 交通事故死者ゼロ

当社グループは、2050年に全世界で当社グループの二輪車・四輪車が関与する交通事故死者ゼロをめざします。また、マイルストーンとして2030年に全世界で当社グループの二輪車・四輪車が関与する交通事故死者半減をめざします。



交通事故死者ゼロの実現に向けては、先進安全技術の展開と開発の強化に加え、交通安全の教育活動やインフラ、政策への働きかけなどが課題であると考えています。

当社グループは、全方位安全運転支援システム「Honda SENSING 360」の普及や、すべての人に安全教育の機会を提供する活動などに取り組み、ハード・ソフト両面で、事故のない社会の実現をリードしていきます。

詳細については、「2 サステナビリティに関する考え方及び取組」を参照ください。

③ 新たな価値創造

1. 複合型ソリューションの提供

当社グループは、製品単体にとどまらずさまざまな製品が連鎖し、領域を超えてつながることで、より大きな価値を提供することをめざします。そのためには、電動モビリティやその他製品を「端末」と位置づけ、各製品に蓄えられたエネルギーや情報を、ユーザーや社会とつなげる技術と枠組みの構築が課題と考えています。

当社グループは、クロスドメインでのコネクテッドプラットフォーム構築に取り組み、価値を創出していきます。バッテリーをはじめとした電動領域、そしてソフトウェア、コネクテッド領域については、今後開発を加速するために、外部からの採用強化も含め、開発能力の強化をはかっていきます。



2. 新領域のチャレンジ

当社グループの研究開発子会社である㈱本田技術研究所は、環境負荷ゼロ社会と事故のない社会の実現に向けた先行技術の研究に加え、モビリティの可能性を三次元、四次元に拡大していくために、空、海洋、宇宙、そしてロボットなどの研究を進めています。具体的なテーマとして、「eVTOL」「アバターロボット」「宇宙領域へのチャレンジ」に取り組んでおり、燃焼・電動・制御・ロボティクス技術といった当社グループが培ってきたコア技術を活用することで、新領域においても人々の生活の可能性を広げる喜びの実現にチャレンジしていきます。

④ 財務戦略

当社グループは、資源の適切な配分を通じて、事業ポートフォリオの変革を加速させ、企業価値向上の実現をめざします。

この実現に向けては、「事業体質の強化」「新たな価値創造を加速する資源投入」「資本効率の向上」が課題と考えています。

1. 事業体質の強化

当社グループは、「事業ポートフォリオの変革」の実現のために、「事業体質の強化」に全社一丸となって取り組んでいます。

四輪事業は、プラットフォームのレイアウト統合や部品共用化などを実現する「Hondaアーキテクチャー」の導入や生産能力の適正化、グローバルモデルの派生削減などを進めています。二輪事業では、カテゴリー・排気量・車格をまたいだ仕様・部品の共通化に取り組んでいます。これらの取り組みの結果、収益体質は確実に改善してきています。

新型コロナウイルス感染症の影響や地政学的リスクの顕在化など、依然として先行きが不透明な事業環境では

あるものの、これまで構築した体質をさらに強化することで、2025年度においては、RO S (売上高営業利益率) 7%以上の達成を見込んでいます。

2. 新たな価値創造を加速する資源投入

当社グループは、「事業ポートフォリオの変革」に向けた資源投入として、2021年度からの10年間で約8兆円の研究開発費を計画しています。その主な投入先は、「電動化・ソフトウェア領域」に約3.5兆円、「新たな成長の仕込み」に約1兆円となります。電動化・ソフトウェア領域については、EV専用工場の建設やバッテリーの安定調達に向けたEV用バッテリー生産合弁会社の設立など、2021年度からの10年間で約1.5兆円の投資を現時点で計画しており、研究開発費と合わせて総額約5兆円を資源投入していきます。

3. 資本効率の向上

事業ポートフォリオの変革を支えるリソースマネジメントのため、ROIC (投下資本利益率) を活用し、資本コストを意識した経営を強化します。事業別には、事業構造に応じた最適な管理指標を活用し、資本コストを上回るリターンの持続的な創出に努めます。二輪・四輪・パワープロダクツ事業などの、金融を除く事業領域では、ROICにより、変革実行のための原資創出を財務管理の面からリードします。ROICの分子である利益を最大化するとともに、保有する資産の徹底的な活用や必要投資の見極めを通じて分母の投下資本を最適化することで、資本効率を高め、変革を支える原資創出の最大化をめざします。

なお、成果の配分については、株主の皆様に対する利益還元を、経営の最重要課題の一つとして位置づけており、長期的な視点に立ち将来成長に向けた内部留保資金や連結業績などを考慮しながら決定していきます。配当は、連結配当性向30%を目安に安定的・継続的に行うよう努めていきます。また、資本効率の向上および機動的な資本政策の実施などを目的として自己株式の取得も適宜実施していきます。



<価値創造を支える取り組み>

① 知的資本

当社グループでは、開発、事業、知財・標準化を一体として連携させ、価値創造ストーリーにおける知的資本に関する資源投入を戦略的に行っていきます。知的資本の活用プロセスでは、外部環境認識・分析および自社戦略に基づき、知的資本を投入し、新領域における特許ポートフォリオの拡充をはかっていきます。構築されたポートフォリオを活用し、各種知財戦略の立案・実行を通じて、提供する価値の質の向上や取り組みの質向上をめざしていきます。

② 品質

当社グループでは「桁違いに高い品質」の実現をめざしています。

業界を取り巻く環境は、特に「環境」「安全」、そして「知能化」への対応を巡って、今まで以上に大きな転換期を迎えようとしています。当社グループは、今後パワートレインの電動化、交通事故ゼロ社会の実現に向けた安全運転支援技術の導入を加速し、オープンイノベーションを通じた「新たな価値」の創造に向けチャレンジしていきます。そのため、当社グループは「移動」と「暮らし」の進化に合わせ、お客様とのあらゆる接点においてトラブルを減らすことをめざし、各領域で質を追求し、桁違いに高い品質を実現する活動を進化させていきます。

③ サプライチェーンマネジメント

当社グループは、世界中に存在するお取引先とともに、サステナブルな取り組みを積極的に進めていくことで、「存在を期待される企業」として、地域社会と共存共栄するサプライチェーンの実現をめざしています。具体的には、世界中のサプライヤーとともに、環境、安全、人権、コンプライアンス、社会的責任などに配慮し、「Hondaフィロソフィー」をベースとして、公平、公正、かつ透明性の高い取引を継続して行っています。さらには、重点課題である低炭素への取り組みステップを表した「購買環境グランドデザイン」を策定し、すべてのサプライヤーと共有・同意のもと、ともに低炭素サプライチェーンの実現に取り組んでいきます。

その他の<価値創造を支える取り組み>の詳細については、「2 サステナビリティに関する考え方及び取組」「4 コーポレート・ガバナンスの状況等」を参照ください。

以上のような企業活動全体を通じた取り組みを行い、株主、投資家、お客様をはじめ、広く社会から「存在を期待される企業」となることをめざしていく所存でございます。

2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】

文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日(2023年6月23日)現在において当社グループが判断したものであり、将来生じうる実際の結果と大きく異なる可能性もあります。詳細は「3 事業等のリスク」を参照ください。

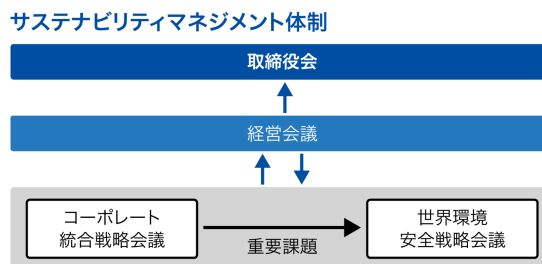
(1) ガバナンス及びリスク管理

① ガバナンス

当社グループは、内外環境認識を踏まえた全社の方向性と、コーポレートとして取り組むべき重要課題を合意することを目的として、「コーポレート統合戦略会議」を設定しており、その中でサステナビリティ課題への方針や取り組みの議論・検討を行っています。

また、モビリティカンパニーとして最重要課題である環境安全領域のさらなる推進強化として、「世界環境安全戦略会議」を設定しています。環境領域の戦略には気候変動対応も含まれており、世界環境安全戦略会議において定めたCO₂排出量の削減目標については、取締役会で決定されています。

これらの会議体は最高経営責任者が議長を務めており、検討された重要課題を踏まえて、経営会議や取締役会で全社戦略を決定し、各本部・統括部、各子会社の方針・施策として実行しています。



② リスク管理

「Hondaグローバルリスクマネジメント規程」を制定し、リスクを能動的にコントロールすることで、「持続的成長」や「経営の安定化」につながる活動を行っています。

リスクマネジメントオフィサー監視、監督のもと、当社グループの有形・無形の資産、企業活動、ステークホルダーに重大な被害・損失を与え、企業経営に影響をもたらす可能性があるものと定義したリスクを分類・管理・対応しています。各組織でリスクの特定・評価を実施し、その評価結果をもとに各本部のリスクマネジメントオフィサーが「本部重点リスク」を特定しています。

また、社内のリスク認識に加え社外のリスクトレンドも反映し、コーポレートとして重要なリスクを「全社重点リスク」として特定し、対応状況の確認・議論を行っています。リスクマネジメントに関する重要事項については、リスクマネジメント委員会で審議しており、実施内容については経営会議で適宜報告されています。気候変動に起因する環境規制に関わるリスクや自然災害等リスクについてもこの管理・監視項目の中で把握し、組織特性を踏まえたより効果的なリスクマネジメント活動の展開をはかっています。例えば、規制リスクは、既存の規制のみならず新規の規制に関しても管理を行っています。

(2) 重要な戦略並びに指標及び目標

① 戦略

世の中に「存在を期待される企業」であり続けるため、当社グループは「すべての人に、“生活の可能性が広がる喜び”を提供する」ことを2030年ビジョンとして掲げ、これまでのビジネスに加え、新たな価値創造に向けて全社一丸となって取り組んでいきます。

その中でも、年間3,000万人規模の製品を供給する世界一のパワーユニットメーカーとして「環境」と「安全」に徹底的に取り組んでいます。

<環境戦略>

Triple Action to ZERO (環境負荷ゼロの循環型社会の実現に向けた取り組み)

当社グループは2050年に、製品だけでなく企業活動を含めたライフサイクルでの環境負荷ゼロをめざします。その柱となるのが、「カーボンニュートラル」「クリーンエネルギー」「リソースサーキュレーション」の3つです(Triple Action to ZERO)。この取り組みによって、可能な限り地球資源の消費を抑制し、環境負荷ゼロの循環型社会の実現をめざします。

カーボンニュートラル(二酸化炭素排出量実質ゼロ)

「気候変動問題」への対応として、企業活動、および、製品ライフサイクル観点から排出されるCO₂に対し、産業革命以前と比較した地球の平均気温上昇を1.5℃に抑える目標の達成をめざします。企業活動からのCO₂排出量低減に向けて、生産効率向上、省エネルギー施策の導入、低炭素エネルギーへの転換、再生可能エネルギーの活用を推進していきます。製品使用時のCO₂排出量低減に向けて、電動化をはじめとした環境革新技術の投入やエネルギーの多様化対応、トータルエネルギーマネジメントといった取り組みを推進していきます。

クリーンエネルギー(カーボンフリーエネルギー活用率 100%)

「エネルギー問題」への対応として、これまでのエネルギーのリスクを減らす取り組みを超えて、企業活動、および、製品使用において使用されるエネルギーをすべてクリーンなエネルギーにすることをめざします。企業活動における再生可能エネルギーの活用において、地域社会のCO₂低減に直接的に貢献できる方法を優先して採用していきます。具体的には新たに再生エネルギーを活用した発電設備を設置することに重点を置き、自社敷地内への設置から検討を始め、順次敷地外まで範囲を広げて活用拡大に取り組んでいます。

リソースサーキュレーション(サステナブルマテリアル使用率 100%)

「資源の効率利用」への対応として、バッテリーのリユースやリサイクルをはじめとした、マテリアル・リサイクルに関する研究を進めます。これまでの、資源と廃棄におけるリスクを減らす取り組みを超えて、環境負荷のない持続可能な資源を使用した製品開発に挑戦します。

<安全戦略>

先進国の交通事故ゼロに向けた対応

先進国においては2030年までに、全方位安全運転支援システム「Honda SENSING 360」や、歩行者保護・衝突性能の強化・先進事故自動通報(歩行者事故を含む)などの死亡事故シーンを100%カバーする技術を、四輪車全機種へ適用することをめざします。

新興国の交通事故死者ゼロに向けた対応

新興国においては2030年までに、二輪車・四輪車双方への安全技術をすべての機種へ展開するとともに、すべての人に安全教育の機会を提供することをめざします。二輪車の安全技術については、先進ブレーキ、視認性・被視認性を備えた灯火器を、より多くの二輪車に搭載していきます。また二輪車と四輪車の双方を担う当社グループの特長を活かした共存技術である、二輪検知機能付き「Honda SENSING」を、2021年の「VEZEL」以降の四輪車の新型モデルに順次投入しております。

全世界の交通事故死者ゼロに向けた対応

一人ひとりの能力や状態に合わせ、運転ミスやリスクを減らし安全・安心な運転へと誘導できる世界初(注1)のAI活用による「知能化運転支援技術」(注2)と、すべての交通参加者である人とモビリティが通信でつながることで、事故が起きる手前でリスクの予兆・回避をサポートする「安全・安心ネットワーク技術」により、当社グループが目標に掲げる「2050年に全世界で当社グループの二輪車・四輪車が関与する交通事故死者ゼロ」の実現をめざします。

(注) 1 当社調べ

2 AIを活用したリスクとの因果関係を視点の特徴量から求めた独自の注意推定モデル

② 指標及び目標

<環境戦略>

Triple Action to ZEROの実行

当社グループは、「環境負荷ゼロ」の循環型社会の実現に向けて、2050年に当社グループの関わるすべての製品と企業活動を通じて、カーボンニュートラルをめざしています。その着実な実現に向けて、企業活動領域においてはCO₂総排出量(Sc o p e 1, 2)を指標とし、2030年に2019年度比で46%削減する目標を設定し進めています。製品領域においては電動製品の販売比率(注1)を指標とし段階的な目標として、2030年に二輪車15%、四輪車30%、パワープロダクツ36%の目標を設定し取り組みを加速します。

<安全戦略>

交通事故死者を2030年に半減(注2)、2050年にゼロへ

当社グループは、2050年に全世界で当社グループの二輪車・四輪車が関与する交通事故死者ゼロをめざします。またマイルストーンとして2030年に全世界で当社グループの二輪車・四輪車が関与する交通事故死者半減をめざします。これらは新車だけでなく市場に現存するすべての当社グループ二輪車・四輪車を対象にしています。

(注) 1 二輪車は電動モーターサイクル(BEV)と電動自転車(EB)、四輪車はBEVと燃料電池自動車(FCV)、パワープロダクツは電動製品の比率。

2 2020年比で2030年に全世界で当社グループの二輪車・四輪車が関与する1万台当たりの交通事故死者数を半減。

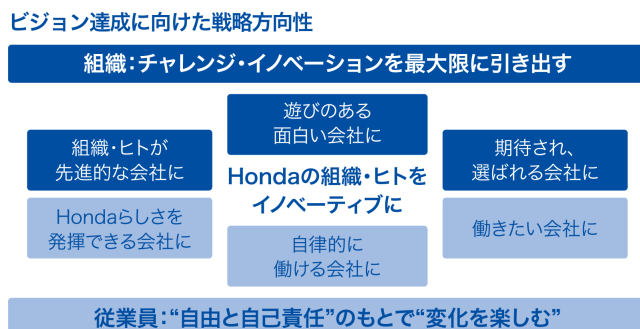
(3) 人的資本(人材の多様性を含む。)に関する戦略並びに指標及び目標

① 戦略

<ヒト・組織戦略ビジョン>

100年に一度といわれる大変革期を勝ち抜くために、当社グループは現在の事業環境を「第二の創業期」と位置づけ、「新たな成長・価値創造を可能とする企業への変革」に向けた取り組みを進めています。

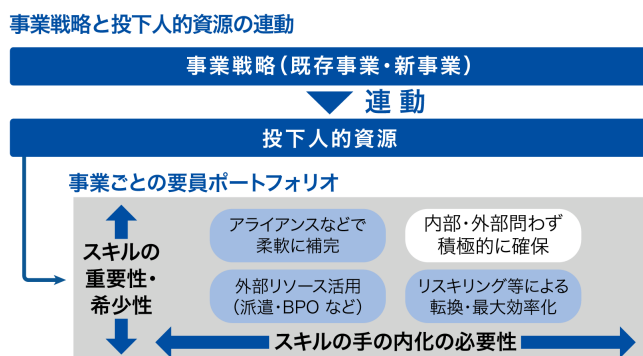
ヒト・組織戦略においても、「企業変革を加速させるヒト・カルチャーへの進化」というビジョンを掲げ、「自立した個」である従業員の強い想いや情熱、チャレンジ精神を最大限に引き出すことで、「変化を楽しむ」ことができるイノベティブで魅力ある企業風土へのさらなる進化をはかっていきます。



<事業戦略と連動した「人」リソースマネジメント>

二輪・四輪・パワープロダクツの既存事業領域、電動化および新価値領域の事業開発を中心とした新事業領域のそれぞれにおける事業方針と連動し、要員ポートフォリオに基づく最適な要員戦略を策定することで、全社的な「人」総合力の最大化をめざしていきます。

特に電動化や新価値事業開発の領域を担う人材の確保に向けては、内部からの育成・登用に加え、幹部レベルを含めた外部採用を積極的に行っています。



② 指標及び目標

<ヒト・組織戦略ビジョンの実現に向けた取り組み>

ヒト・組織戦略ビジョンの達成に向けて、さまざまなフェーズにおいて意欲ある従業員の成長を促し、支え、Hondaというフィールドで「生き活きと輝く」ことを後押しするための取り組みを展開しています。

なお、各地域において「従業員活性化度」(注1)を管理指標として設定しており、日本(注2)においては「非常に良好な状態(5段階評価で総合点平均3.5ポイント以上)」を継続して達成することを目標としています(2021年度実績: 3.48ポイント)。

(注) 1 第三者の調査会社による各地域の従業員活性化度調査
2 労働協約適用会社を対象とする

3 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

当社グループでは、リスクマネジメント委員会において事業運営上重要なリスクを「全社重点リスク」として特定し、対応状況の確認・議論などを行っています。以下のリスクも同委員会で審議のうえ特定されたものです。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日(2023年6月23日)現在において当社グループが判断したものであり、不確実性を内包しているため、将来生じうる実際の結果と大きく異なる可能性もありますので、ご注意ください。

(1) 地政学的リスク

当社グループは、世界各国において事業を展開しており、それらの国や近隣地域での関税、輸出入規制、租税を含む現地法令・制度・協定・商習慣の変化、戦争・テロ・政情不安・治安の悪化、政治体制の変化、ストライキなど様々なリスクにさらされています。これら予期せぬ事象が発生し、政治的、軍事的、社会的な緊張の高まりに伴いサプライチェーンが寸断されるなど、事業活動の遅延・停止が発生した場合、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

その中でも、主に①経済安全保障、②国家間・地域紛争、③人権に関する法規の3つの地政学的リスクを認識しています。これらの地政学的リスクは、当社グループの全社戦略である地球環境負荷ゼロ、交通事故死者ゼロ、新たな価値創造への取り組みに与える影響も大きいため、対策の重要性は高まっています。これらの地政学的リスクが将来及ぼしうる各地域の事業規模については、連結財務諸表注記の「4 セグメント情報 (4) 地域別セグメント補足情報」を参照ください。

① 経済安全保障

<リスク>

各国において重要資源・部品、先端技術などに対する輸出入規制、ブロック化を促進する政策の強化の動きが活発化しています。各国において輸出入などに関する政策が強化された場合、生産活動の停滞や遅延、開発・購買・営業などの事業活動にかかる対応費用などが生じる可能性があります。当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、国内および海外の各部門が連携し各国の政策動向などの情報収集・モニタリングするインテリジェンス機能を強化するとともに、当社グループの事業に影響を与える可能性がある案件が確認された場合は、リスクマネジメント委員会が先行的に検討を行うことで、早期にリスクヘッジできる体制を構築しています。

② 国家間・地域紛争

<リスク>

ウクライナ情勢の悪化など、国際情勢の見通しが不透明な状況が続いています。新たな紛争が発生した場合、発生した国や地域のみならず、それ以外の国や地域でも、人的および物的被害、サプライチェーンの寸断などが生じる可能性があります。当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、国家間・地域紛争の動向などの情報収集・モニタリングするインテリジェンス機能を強化するとともに、当社グループの事業に影響を与える可能性がある事象が確認された場合は、「人命・安全の確保」および「社会からの信頼の維持」を前提としたうえで、当社グループの会社資産・体制の保全、事業継続をはかるための対応を迅速に行っています。

③ 人権に関する法規

<リスク>

各国において、企業に人権の取り組みを求める法規の制定が進んでおり、サプライチェーン全体での人権リスク対応の必要性が急速に高まっています。これらの法規に対して適時適切な対応が出来なかった場合、ブランドイメージや社会的信用の低下に加え、当社グループの生産活動の停滞や遅延、開発・購買・営業などの事業活動にかかる対応費用などが生じる可能性があり、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、Hondaフィロソフィーに掲げる人間尊重の基本理念のもと、事業活動において影響を受けるステークホルダーの人権を尊重する責任を果たすため、「Honda人権方針」を定めています。本方針に基づき、人権デューデリジェンス、適切な教育・啓発活動の実施など、各国法規を踏まえ自社およびサプライチェーンにおける取り組みを行っています。

(2) 購買・調達リスク

<リスク>

当社グループは、良い物を、適正な価格で、タイムリーにかつ永続的に調達することをめざして、多数の外部の取引先から原材料および部品を購入していますが、製品の製造において使用するいくつかの原材料および部品については、特定の取引先に依存しています。効率的かつ適正なコストで継続的に供給を受けられるかどうかは、当社グループがコントロールできないものも含めて、多くの要因に影響を受けます。それらの要因のなかには、取引先が継続的に原材料および部品を確保できるかどうか、また、供給を受けるにあたって、当社グループがその他の需要者に対してどれだけ競争力があるか等が含まれます。

取引先から原材料および部品が継続的に供給を受けられなかった場合、原材料および部品の価格が上昇した場合、もしくは主要な取引先を失った場合、生産活動の停滞や遅延、当社グループの競争力の損失に繋がる等、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。これらの購買・調達リスクは、当社グループの全社戦略である地球環境負荷ゼロ、交通事故死者ゼロ、新たな価値創造への取り組みに与える影響も大きいため、対策の重要性は高まっています。

<対応策>

当社グループにおいては、事業、業績への影響を最小化するため、サプライチェーンの見直しおよび強化を継続的に行っています。また、部品の供給状況についてモニタリングを行い、当社グループの生産などの事業活動に悪影響を与える可能性がある事象が発生した場合には、取引先と連携し速やかに対応を実施しています。

当社グループにおいて、半導体の調達不足が顕在化し、国内外の一部の生産拠点において四輪車および二輪車の生産停止、減産といった影響が発生しています。また、その他の一部の原材料および部品においても価格上昇が発生している、もしくは今後見込まれています。当社グループにおいては、取引先と連携し事業継続の観点から事業、業績への影響を最小化するための対応を行っています。

(3) 情報セキュリティリスク

<リスク>

当社グループは、委託先によって管理されているものを含め、事業活動および当社製品において情報サービスや運転支援に関する様々な情報システムやネットワークを利用しています。特にIoTなどの情報技術が製品の制御に不可欠なものになっています。

サイバー攻撃は攻撃手法の高度化、複雑化が進んでおり、その攻撃対象は世界各国に渡っています。当社グループの全社戦略である地球環境負荷ゼロ、交通事故死者ゼロ、新たな価値創造への取り組みに与える影響も大きいため、対策の重要性は高まっています。

また、近年世界各国で個人情報保護規則が急速に整備されています。新たな価値創造への取り組みにおいては、従来の事業と比べ取り扱う個人情報の量と質が異なる可能性があるため、個人情報保護に向けた対策の重要性は高まっています。

当社グループ、取引先および委託先における外部からのサイバー攻撃のほか、機器の不具合、管理上の不備や人為的な過失、さらには自然災害やインフラ障害等の不測の事態により、当社グループの重要な業務やサービスの停止、機密情報・個人情報等の漏洩、不適切な事務処理、あるいは重要データの破壊、改ざん等が発生する可能性があります。

このような事象が起きた場合、ブランドイメージや社会的信用の低下、影響を受けた顧客やその他の関係者への損害責任、制裁金の支払い、生産活動の停滞や遅延、当社グループの競争力の損失に繋がる等、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、事業、業績への悪影響を最小化するため、情報システムのセキュリティに関する管理体制および基準を定めています。本基準に基づき、ハード面およびソフト面でのセキュリティ対策を実施し、情報システムのセキュリティ強化をはかっています。

サイバーセキュリティ委員会を設置し、業務・生産システム、ソフトウェア、品質などの領域を横断するグローバルでの対応体制を構築しています。法規を踏まえた規程・手順書などの整備、対応フロー策定、サイバーセキュリティに関する演習を通じた改善点の検証・対策、人材育成などを行っています。

サイバー攻撃の脅威および脆弱性の分析を行うとともに、サイバー攻撃に関するインシデントが発生した場合には、迅速に実態把握を行ったうえで、影響を最小化するための対応を行っています。

なお、生産設備へのサイバー攻撃に対しては、国内外の各拠点で生産設備の検証を行うとともに、セキュリティ強化に向けた対策を行っています。

また、各国における個人情報保護規則に対しては、現行の規制のほか、今後施行が見込まれている規則の動向などの情報収集・モニタリングを実施したうえで対応を行っています。

(4) 他社との業務提携・合併リスク

<リスク>

当社グループは、相乗効果や効率化などを期待、もしくは事業展開している国の要件に従う場合に、他社と業務提携・合併による事業運営を行っています。

当社グループの全社戦略である地球環境負荷ゼロ、交通事故死者ゼロ、新たな価値創造への取り組みを進めるにあたっては、業務提携などの活用の重要性は高まっています。

業務提携などにおいて、当事者間で業務上の不一致、利益や技術の流出、意思決定の遅れ、業務提携先などの業績不振が生じた場合、あるいは提携内容の変更や解消が生じた場合、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、中長期の事業戦略に基づき業務提携などの戦略を議論・策定したうえで、デューデリジェンスを通じた情報収集・リスク検証を行っています。契約締結後においても業務提携などに関する運営状況のモニタリングを行い、当社グループの事業、業績への影響が発生する可能性がある場合には、提携先などと連携し影響を最小化するための対応を行っています。

(5) 環境に関わるリスク

<リスク>

当社グループは、世界各国において事業を展開しており、気候変動、資源枯渇、大気汚染、水質汚染、生物多様性などをはじめとする環境に関する様々なリスクの可能性を認識しています。また、これらに関する様々な規制の適用を受けています。

その中でも気候変動に関する規制および燃費・排出ガスに関する規制について、世界各国で見直しが見られ、もしくは今後予定されています。規制内容または見直しの動向によっては、二輪事業、四輪事業、パワープロダクツ事業及びその他の事業において、生産・開発・購買・営業などにかかる対応費用などが生じる可能性があり、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

これらの環境に関わるリスクは、当社グループの全社戦略である地球環境負荷ゼロへの取り組みに与える影響も大きいため、対策の重要性は高まっています。

<対応策>

当社グループにおいては、国内および海外の各部門が連携し、政策・規制動向などの情報収集・モニタリングを実施するとともに、それらの状況に基づく最適な生産・開発体制の構築などの対応を行ってまいります。

(6) 知的財産リスク

<リスク>

当社グループは、長年にわたり、自社が製造する製品に関連する多数の特許および商標を保有し、もしくはその権利を取得しています。これらの特許および商標は、当社グループの全社戦略である地球環境負荷ゼロ、交通事故死者ゼロ、新たな価値創造への取り組みに与える影響も大きいため、対策の重要性は高まっています。

当社グループの知的財産が広範囲にわたって保護できないこと、あるいは、広範囲にわたり当社グループの知的財産権が違法に侵害されること、さらには特許権侵害訴訟による製造・販売の差し止めや高額な損害賠償金、ライセンス料の請求によって、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、外部の専門家、取引先と連携し、特許保有者からの特許権侵害訴訟を想定した対策を実施しています。また、関連法規の動向を注視・分析し、将来の法的手続で不利な判断がなされた場合など当社グループの事業、業績への悪影響が発生する可能性がある場合には、影響を最小化するための対応を行ってまいります。

(7) 自然災害等リスク

<リスク>

地震、風水害、感染症などの発生時に当社グループの拠点や従業員が被害を受け、生産・開発・購買・営業などの事業活動の停止・遅延が発生した場合、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。また、これらの事象によって取引先が被害を受けた場合、あるいはインフラの停止が発生した場合にも、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

加えて、世界各国において、気候変動の影響などにより気象災害が激甚化・頻発化しており、この傾向は今後も継続すると予想されます。その結果、これらの災害が当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、事業、業績への影響を最小化するため、これらの事象のリスク評価や事業継続計画（BCP）の策定および定期的な見直しを行っています。

また、各国で顕在化した事象に基づき、対応体制および規程・手順書の見直し、訓練実施による改善点の検証・対策などを行っています。

なお、当社グループに重大な影響を与える事象が発生した場合には、グローバル危機対策本部を設置し、各地域の情報収集および影響の最小化に向けた対応を全社横断的な観点で実施します。

(新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う影響)

新型コロナウイルス感染症に対しては、社会経済活動を再開する動きが加速しており、当社グループにおいても生産・開発・購買・営業などの事業活動の正常化が進んでいます。

しかしながら、感染症が再び拡大した場合は、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。今後も生産・開発・購買・営業などの事業体質の強化をはかるとともに、感染症が再び拡大した場合は、お客様、お取引先および従業員をはじめとするステークホルダーの安全を最優先にしつつ、事業継続の観点から事業、業績への悪影響を最小化するための対応を行っていきます。

(8) 金融・経済リスク

<リスク>

① 経済動向、景気変動

当社グループは、世界各国で事業を展開しており、様々な地域、国で生産活動を行い、製品を販売しています。これらの事業活動は経済低迷、通貨変動などの影響を受けることで、市場の縮小による販売台数の減少、部品調達価格および製品の販売価格の上昇、信用リスクの上昇、資金調達金利の上昇などに繋がる可能性があります。その結果として当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

② 為替変動

当社グループは、日本をはじめとする世界各国の生産拠点で生産活動を行っており、その製品および部品の多くを複数の国に輸出しています。各国における生産および販売では、外貨建てで購入する原材料および部品や、販売する製品および部品があります。したがって、為替変動は、購入価格や販売価格の設定に影響し、その結果、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

<対応策>

当社グループにおいては、金融・経済などの動向をモニタリングし当社グループに対する事業影響を把握するとともに、事業計画に反映し、対応を実施しています。

(9) 市場環境変化リスク

当社グループは、日本、北米、欧州およびアジアを含む世界各国で事業を展開しています。これらの市場の長期にわたる経済低迷、消費者の価値観、ニーズの変化や、燃料価格の上昇および金融危機、原材料の高騰・供給量低下による製品価格上昇などによる購買意欲の低下、他社との競争激化は、当社グループの製品の需要低下につながり、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

(10) 金融事業特有のリスク

当社グループの金融サービス事業は、お客様に様々な資金調達プログラムを提供しており、それらは、製品の販売をサポートしています。しかしながら、お客様は当社グループの金融サービス事業からではなく、競合する他の銀行およびリース会社等を通して、製品の購入またはリースの資金を調達することができます。当社グループが提供する金融サービスは、残存価額および資本コストに関するリスク、信用リスク、資金調達リスクなどを伴います。お客様獲得に関する競合および上記金融事業特有のリスクは、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

(11) 法務リスク

当社グループは、訴訟、関連法規に基づく様々な調査、法的手続を受ける可能性があります。係争中、または将来の法的手続で不利な判断がなされた場合、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

(12) 退職後給付に関わるリスク

当社グループは、各種退職給付および年金制度を有しています。これらの制度における給付額は、基本的に従業員の給与水準、勤続年数およびその他の要素に基づいて決定されます。また、掛金は法令が認める範囲で定期的に見直されています。確定給付制度債務および確定給付費用は、割引率や昇給率などの様々な仮定に基づいて算出されています。仮定の変更は将来の確定給付費用、確定給付制度債務および制度への必要拠出額に影響を与えることにより、当社グループの業績に悪影響を与える可能性があります。

(13) ブランドイメージに関連するリスク

当社グループのブランドに対するお客様や当社グループを取り巻く社会からの信頼・支持が、企業の永続性において重要な要素の一つとなっています。このブランドイメージを支えるため、製品の品質や法規制への対応、リスク管理の実施、内部統制の充実などあらゆる企業活動において常に社会からの信頼に応えられるように努めています。しかしながら予測できない事象により、当社グループのブランドイメージを毀損した場合や迅速で適切な情報発信などの対応が実施出来なかった場合、当社グループの事業、業績に悪影響を与える可能性があります。

4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

① 経営成績の状況

当連結会計年度の当社、連結子会社および持分法適用会社(以下「当社グループ」という。)をとりまく経済環境は、緩やかな持ち直しの動きがみられたものの、新型コロナウイルス感染症の再拡大、半導体の供給不足、インフレ影響など、厳しい状況が続きました。米国では、物価安定に向けた急速な金融引締めが進んだものの、個人消費の下支えなどにより、景気は底堅い推移となりました。欧州では、緩やかな持ち直しの動きがみられたものの、ウクライナ情勢の悪化によるインフレ影響を受けて、景気は足踏み状態となっています。アジアでは、中国など一部で弱さがみられたものの、景気は緩やかに持ち直しました。日本では、一部で弱さがみられたものの、景気は緩やかに持ち直しました。

主な市場のうち、二輪車市場は前年度にくらべ、ブラジルでは大幅に拡大、ベトナム、インド、タイ、インドネシアでは拡大しました。四輪車市場は前年度にくらべ、インドネシア、インド、タイ、ブラジル、日本では拡大しましたが、欧州、中国ではおおむね横ばい、米国では縮小となりました。

このような中で、当社グループは、世の中に「存在を期待される企業」であり続けるため、「すべての人に、“生活の可能性が広がる喜び”を提供する」ことを2030年ビジョンとして掲げ、「地球環境負荷ゼロ」「交通事故死者ゼロ」「新たな価値創造」を目指すとともに、事業体質の強化にも努めてまいりました。研究開発面では、安全・環境技術や商品の魅力向上、モビリティの変革にむけた先進技術開発に、外部とのオープンイノベーションも活用し、積極的に取り組みました。生産面では、生産体質の強化や、グローバルでの需要の変化に対応した生産配置を行いました。販売面では、新価値商品の積極的な投入や、グローバルでの商品の供給などにより、商品ラインアップの充実に取り組みました。

当連結会計年度の連結売上収益は、二輪事業における増加や為替換算による増加影響などにより、16兆9,077億円と前連結会計年度にくらべ16.2%の増収となりました。

営業利益は、為替影響などはあったものの、販売影響による利益減や品質関連費用を含む諸経費の増加などにより、7,807億円と前連結会計年度にくらべ10.4%の減益となりました。税引前利益は、8,795億円と前連結会計年度にくらべ17.8%の減益、親会社の所有者に帰属する当期利益は、6,514億円と前連結会計年度にくらべ7.9%の減益となりました。

事業の種類別セグメントの状況

(二輪事業)

	Hondaグループ販売台数 ※				連結売上台数 ※			
	2021年度 (千台)	2022年度 (千台)	増 減 (千台)	増減率 (%)	2021年度 (千台)	2022年度 (千台)	増 減 (千台)	増減率 (%)
二輪事業計	17,027	18,757	1,730	10.2	10,721	12,161	1,440	13.4
日 本	244	246	2	0.8	244	246	2	0.8
北 米	437	459	22	5.0	437	459	22	5.0
欧 州	317	347	30	9.5	317	347	30	9.5
アジア	14,589	16,108	1,519	10.4	8,283	9,512	1,229	14.8
その他	1,440	1,597	157	10.9	1,440	1,597	157	10.9

二輪事業の外部顧客への売上収益は、連結売上台数の増加や為替換算による増加影響などにより、2兆9,089億円と前連結会計年度にくらべ33.1%の増収となりました。営業利益は、売価およびコスト影響や販売影響による利益増、為替影響などにより、4,887億円と前連結会計年度にくらべ56.9%の増益となりました。

※Hondaグループ販売台数は、当社および連結子会社、ならびに持分法適用会社の完成車(二輪車・ATV・Side-by-Side)販売台数です。一方、連結売上台数は、外部顧客への売上収益に対応する販売台数であり、当社および連結子会社の完成車販売台数です。

(四輪事業)

	Hondaグループ販売台数 ※				連結売上台数 ※			
	2021年度 (千台)	2022年度 (千台)	増 減 (千台)	増減率 (%)	2021年度 (千台)	2022年度 (千台)	増 減 (千台)	増減率 (%)
四輪事業計	4,074	3,687	△387	△9.5	2,424	2,382	△42	△1.7
日 本	547	550	3	0.5	476	484	8	1.7
北 米	1,283	1,195	△88	△6.9	1,283	1,195	△88	△6.9
欧 州	100	84	△16	△16.0	100	84	△16	△16.0
アジア	2,022	1,744	△278	△13.7	443	505	62	14.0
その他	122	114	△8	△6.6	122	114	△8	△6.6

四輪事業の外部顧客への売上収益は、為替換算による増加影響などにより、10兆5,935億円と前連結会計年度にくらべ15.8%の増収となりました。営業損失は、為替影響などはあったものの、販売影響による利益減や品質関連費用を含む諸経費の増加などにより、166億円と前連結会計年度にくらべ2,528億円の減益となりました。

※Hondaグループ販売台数は、当社および連結子会社、ならびに持分法適用会社の完成車販売台数です。一方、連結売上台数は、外部顧客への売上収益に対応する販売台数であり、当社および連結子会社の完成車販売台数です。また、当社の日本の金融子会社が提供する残価設定型クレジット等が、IFRSにおいてオペレーティング・リースに該当する場合、当該金融サービスを活用して連結子会社を通して提供された四輪車は、四輪事業の外部顧客への売上収益に計上されないため、連結売上台数には含めていませんが、Hondaグループ販売台数には含めています。

(金融サービス事業)

金融サービス事業の外部顧客への売上収益は、オペレーティング・リース売上の減少などはあったものの、為替換算による増加影響などにより、2兆9,540億円と前連結会計年度にくらべ4.7%の増収となりました。営業利益は、為替影響などはあったものの、減収に伴う利益の減少などにより、2,858億円と前連結会計年度にくらべ14.2%の減益となりました。

(パワープロダクツ事業及びその他の事業)

	Hondaグループ販売台数/連結売上台数 ※			
	2021年度 (千台)	2022年度 (千台)	増 減 (千台)	増減率 (%)
パワープロダクツ 事業計	6,200	5,645	△555	△9.0
日 本	353	376	23	6.5
北 米	2,738	2,274	△464	△16.9
欧 州	1,189	1,168	△21	△1.8
アジア	1,487	1,408	△79	△5.3
その他	433	419	△14	△3.2

パワープロダクツ事業及びその他の事業の外部顧客への売上収益は、為替換算による増加影響などにより、4,511億円と前連結会計年度にくらべ13.0%の増収となりました。営業利益は、販売影響による利益増や為替影響などにより、228億円と前連結会計年度にくらべ223億円の増益となりました。なお、パワープロダクツ事業及びその他の事業に含まれる航空機および航空機エンジンの営業損失は、為替換算による利益減などはあったものの、費用の減少などにより、257億円と前連結会計年度にくらべ79億円の改善となりました。

※Hondaグループ販売台数は、当社および連結子会社、ならびに持分法適用会社のパワープロダクツ販売台数です。一方、連結売上台数は、外部顧客への売上収益に対応する販売台数であり、当社および連結子会社のパワープロダクツ販売台数です。なお、当社は、パワープロダクツを販売している持分法適用会社を有しないため、パワープロダクツ事業においては、Hondaグループ販売台数と連結売上台数に差異はありません。

所在地別セグメントの状況

(日本)

売上収益は、全ての事業における増加などにより、4兆5,480億円と前連結会計年度に比べ4.3%の増収となりました。営業利益は、売価およびコスト影響による利益減などはあったものの、為替影響などにより、258億円と前連結会計年度に比べ302.8%の増益となりました。

(北米)

売上収益は、四輪事業における連結売上台数の減少や金融サービス事業におけるオペレーティング・リース売上の減少などはあったものの、為替換算による増加影響などにより、9兆4,162億円と前連結会計年度に比べ16.4%の増収となりました。営業利益は、為替影響などはあったものの、販売影響による利益減や品質関連費用を含む諸経費の増加などにより、2,588億円と前連結会計年度に比べ48.3%の減益となりました。

(欧州)

売上収益は、四輪事業における減少などはあったものの、為替換算による増加影響などにより、7,037億円と前連結会計年度に比べ0.4%の増収となりました。営業損失は、売価およびコスト影響による利益増などはあったものの、販売影響による利益減などにより、25億円と前連結会計年度に比べ292億円の減益となりました。

(アジア)

売上収益は、二輪事業における増加や為替換算による増加影響などにより、4兆8,578億円と前連結会計年度に比べ19.8%の増収となりました。営業利益は、売価およびコスト影響による利益増や為替影響などにより、4,087億円と前連結会計年度に比べ20.5%の増益となりました。

(その他の地域)

売上収益は、二輪事業における増加や為替換算による増加影響などにより、8,196億円と前連結会計年度に比べ38.2%の増収となりました。営業利益は、諸経費の増加などはあったものの、売価およびコスト影響による利益増などにより、589億円と前連結会計年度に比べ157.4%の増益となりました。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物(以下「資金」という。)は、3兆8,030億円と前連結会計年度末にくらべ1,280億円の増加となりました。

当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況と、前連結会計年度に対する各キャッシュ・フローの増減状況は以下のとおりです。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における営業活動の結果得られた資金は、2兆1,290億円となりました。この営業活動によるキャッシュ・インフローは、部品や原材料の支払いの増加などはあったものの、顧客からの現金回収の増加などにより、前連結会計年度にくらべ4,494億円の増加となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における投資活動の結果減少した資金は、6,780億円となりました。この投資活動によるキャッシュ・アウトフローは、有形固定資産の取得による支出の増加などにより、前連結会計年度にくらべ3,020億円の増加となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における財務活動の結果減少した資金は、1兆4,683億円となりました。この財務活動によるキャッシュ・アウトフローは、資金調達に係る債務の返済の増加や自己株式の取得などにより、前連結会計年度にくらべ8,526億円の増加となりました。

③ 生産、受注及び販売の状況

(生産実績)

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	増減	
	台数(千台)	台数(千台)	台数(千台)	増減率(%)
二輪事業	10,153	12,199	2,046	20.2
四輪事業	2,522	2,508	△14	△0.5
パワープロダクツ事業 及びその他の事業	6,621	5,799	△821	△12.4

- (注) 1 生産台数は、当社および連結子会社の完成車の生産台数の合計です。
2 二輪事業には二輪車、ATVおよびSide-by-Sideが含まれています。
3 パワープロダクツ事業及びその他の事業にはパワープロダクツの生産台数を記載しています。

(受注実績)

見込生産のため、大口需要等の特別仕様のものを除いては、受注生産はしていません。

(販売実績)

仕向地別(外部顧客の所在地別)売上収益は、以下のとおりです。

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日) (百万円)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日) (百万円)	増 減 (百万円)	増 減 率 (%)
総 合 計	14,552,696	16,907,725	2,355,029	16.2
日 本	1,943,649	2,013,095	69,446	3.6
北 米	7,624,799	8,945,932	1,321,133	17.3
欧 州	611,889	690,663	78,774	12.9
アジア	3,711,460	4,335,765	624,305	16.8
その他	660,899	922,270	261,371	39.5
二輪事業計	2,185,253	2,908,983	723,730	33.1
日 本	105,023	109,393	4,370	4.2
北 米	230,780	306,725	75,945	32.9
欧 州	202,254	250,088	47,834	23.7
アジア	1,309,977	1,739,764	429,787	32.8
その他	337,219	503,013	165,794	49.2
四輪事業計	9,147,498	10,593,519	1,446,021	15.8
日 本	1,340,775	1,385,830	45,055	3.4
北 米	4,884,934	5,990,544	1,105,610	22.6
欧 州	319,366	332,983	13,617	4.3
アジア	2,321,721	2,523,862	202,141	8.7
その他	280,702	360,300	79,598	28.4
金融サービス事業計	2,820,667	2,954,098	133,431	4.7
日 本	418,383	428,228	9,845	2.4
北 米	2,356,978	2,466,537	109,559	4.6
欧 州	10,876	13,264	2,388	22.0
アジア	15,757	16,576	819	5.2
その他	18,673	29,493	10,820	57.9
パワープロダクツ事業 及びその他の事業計	399,278	451,125	51,847	13.0
日 本	79,468	89,644	10,176	12.8
北 米	152,107	182,126	30,019	19.7
欧 州	79,393	94,328	14,935	18.8
アジア	64,005	55,563	△8,442	△13.2
その他	24,305	29,464	5,159	21.2

(注) 各事業の主要製品およびサービス、事業形態につきましては、連結財務諸表注記の「4 セグメント情報」を参照ください。

(2) 経営成績等の状況の分析

当社グループは2050年に、製品だけでなく企業活動を含めたライフサイクルでの地球環境負荷ゼロ、全世界で当社グループの二輪車・四輪車が関与する交通事故死者ゼロをめざします。詳細については、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」と「2 サステナビリティに関する考え方及び取組」を参照ください。

これらの目標の達成に関連する電動化に向けた設備や施設の新設に係る投資や資産化される研究開発支出などが資本的支出全体に占める割合は現時点では重要性はないものの、将来に向けては、適切な支出規模の範囲内で電動化やソフトウェア領域へのリソースシフトをさらに進め、その割合を大幅に拡大させる見込みです。

当社グループが展開する事業は厳しい経済・社会環境下に置かれており、その収益性は様々な要因により左右されます。その中でも、当社グループは気候変動をはじめとした様々な社会課題の解決、リスクへの対処に積極的に取り組んでおり、認識している課題、リスク事象の詳細については、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」「2 サステナビリティに関する考え方及び取組」「3 事業等のリスク」を参照ください。それらへの対処の過程、結果により販売台数の増減や追加費用などが生じ、将来の収益性に重要な影響を及ぼす可能性があると考えます。

以降の経営成績等の状況の分析は、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与えた事象や要因を経営者の立場から分析し、説明したものです。

なお、この経営成績等の状況の分析に記載した将来に関する事項は、有価証券報告書提出日(2023年6月23日)現在において判断したものであり、リスクと不確実性を内包しているため、将来生じうる実際の結果と大きく異なる可能性もありますので、ご注意ください。

① 経営成績の分析

当社グループの業績

当連結会計年度の連結売上収益は、二輪事業における増加や為替換算による増加影響などにより、前連結会計年度に比べ増収となりました。

営業利益は、為替影響などはあったものの、販売影響による利益減や品質関連費用を含む諸経費の増加などにより、減益となりました。

二輪事業の概要

当連結会計年度の連結売上台数は、インドやベトナム、タイなどで増加したことにより、1,216万1千台と前連結会計年度に比べ13.4%の増加となりました。

四輪事業の概要

当連結会計年度の連結売上台数は、米国などで販売が減少したことにより、238万2千台と前連結会計年度に比べ1.7%の減少となりました。

パワープロダクツ事業及びその他の事業の概要

当連結会計年度のパワープロダクツ事業の連結売上台数は、米国などで販売が減少したことにより、564万5千台と前連結会計年度に比べ9.0%の減少となりました。

(当連結会計年度の連結業績の概況)

売上収益

当連結会計年度の連結売上収益は、二輪事業における増加や為替換算による増加影響などにより、16兆9,077億円と前連結会計年度にくらべ2兆3,550億円、16.2%の増収となりました。また、前連結会計年度の為替レートで換算した場合、前連結会計年度にくらべ約2,532億円、約1.7%の増収と試算されます。

営業費用

営業費用は、16兆1,269億円と前連結会計年度にくらべ2兆4,454億円、17.9%の増加となりました。売上原価は、二輪事業における連結売上収益の増加に伴う費用の増加や為替影響などにより、13兆5,761億円と前連結会計年度にくらべ2兆82億円、17.4%の増加となりました。販売費及び一般管理費は、品質関連費用を含む諸経費の増加や為替影響などにより、1兆6,699億円と前連結会計年度にくらべ3,434億円、25.9%の増加となりました。研究開発費は、8,809億円と前連結会計年度にくらべ938億円、11.9%の増加となりました。

営業利益

営業利益は、為替影響などはあったものの、販売影響による利益減や品質関連費用を含む諸経費の増加などにより、7,807億円と前連結会計年度にくらべ904億円、10.4%の減益となりました。なお、為替影響約2,959億円の増益要因を除くと、約3,863億円の減益と試算されます。

ここで記載されている変動要因の各項目については、当社が現在合理的であると判断する分類および分析方法に基づいています。なお、一部の分析項目において、当社および主要な連結子会社を対象に分析しています。

- ・「為替影響」については、海外連結子会社の財務諸表の円換算時に生じる「為替換算差」と外貨建取引から生じる「実質為替影響」について分析しています。「実質為替影響」については、米ドルなどの取引通貨の、対円および各通貨間における為替影響について分析しています。
- ・「売価およびコスト影響」については、販売価格の変動影響、コストダウン効果および原材料価格の変動影響などを対象に分析し、当該項目に影響する「為替影響」は除いています。
- ・「販売影響」については、連結売上台数や機種構成の変化に伴う利益の変動、金融サービス事業の売上収益の変化に伴う利益の変動に加え、その他の売上総利益の変化要因を対象に分析し、当該項目に影響する「為替影響」は除いています。
- ・「諸経費」については、販売費及び一般管理費の前連結会計年度との差から、当該科目に影響する「為替換算差」を除いて表示しています。
- ・「研究開発費」については、研究開発費の前連結会計年度との差から、当該科目に影響する「為替換算差」を除いて表示しています。

また、為替影響を除いた試算数値は、当社の連結財務諸表の金額とは異なっており、IFRSに基づくものではなく、IFRSで要求される開示に代わるものではありません。しかしながら、これらの為替影響を除いた試算数値は当社の業績をご理解いただくために有用な追加情報と考えています。

税引前利益

税引前利益は、8,795億円と前連結会計年度にくらべ1,906億円、17.8%の減益となりました。営業利益の減少を除く要因は、以下のとおりです。

持分法による投資利益は、当連結会計年度において一部の持分法で会計処理されている投資について、減損損失を計上したことなどにより、850億円の減益要因となりました。

金融収益及び金融費用は、受取利息の増加などはあったものの、デリバティブから生じる損益の影響や為替差損益の影響などにより、150億円の減益要因となりました。なお、詳細については、連結財務諸表注記の「22 金融収益及び金融費用」を参照ください。

法人所得税費用

法人所得税費用は、1,622億円と前連結会計年度にくらべ1,472億円、47.6%の減少となりました。また、当連結会計年度の平均実際負担税率は、前連結会計年度より10.5ポイント低い18.4%となりました。当連結会計年度の法人所得税費用の減少額には、従前は未認識であった税務上の欠損金、税額控除または過去の期間の一時差異から生じた便益の額961億円が含まれています。これは、当社および一部の国内の連結子会社により構成される通算グループにおいて、前連結会計年度および当連結会計年度において課税所得が稼得されたことや、次連結会計年度以降において主に国内外の四輪事業における連結売上台数の増加に伴う利益の増加見込みなどにより、将来課税所得が稼得される可能性が高いと判断したことによるものです。なお、詳細については、連結財務諸表注記の「23 法人所得税（1）法人所得税費用」を参照ください。

当期利益

当期利益は、7,173億円と前連結会計年度にくらべ433億円、5.7%の減益となりました。

親会社の所有者に帰属する当期利益

親会社の所有者に帰属する当期利益は、6,514億円と前連結会計年度にくらべ556億円、7.9%の減益となりました。

非支配持分に帰属する当期利益

非支配持分に帰属する当期利益は、658億円と前連結会計年度にくらべ122億円、22.9%の増益となりました。

(二輪事業)

連結売上台数は、全ての地域で増加したことなどにより、1,216万1千台と前連結会計年度にくらべ13.4%の増加となりました。二輪事業の外部顧客への売上収益は、連結売上台数の増加や為替換算による増加影響などにより、2兆9,089億円と前連結会計年度にくらべ7,237億円、33.1%の増収となりました。なお、販売価格の変動はあったものの、売上収益に与える影響は軽微でした。また、前連結会計年度の為替レートで換算した場合、前連結会計年度にくらべ約3,932億円、約18.0%の増収と試算されます。

営業費用は、2兆4,202億円と前連結会計年度にくらべ5,465億円、29.2%の増加となりました。売上原価は、連結売上台数の増加や為替影響などにより、2兆999億円と前連結会計年度にくらべ4,898億円、30.4%の増加となりました。販売費及び一般管理費は、諸経費の増加などにより、2,484億円と前連結会計年度にくらべ539億円、27.7%の増加となりました。研究開発費は、718億円と前連結会計年度にくらべ27億円、4.0%の増加となりました。

営業利益は、売価およびコスト影響や販売影響による利益増、為替影響などにより、4,887億円と前連結会計年度にくらべ1,772億円、56.9%の増益となりました。

日本

2022年度二輪車総需要(注)は、約40万台と前年度にくらべ約4%の減少となりました。

当連結会計年度の連結売上台数は、新型車「ダックス125」の投入効果や「スーパーカブ110」の増加などにより、24万6千台と前連結会計年度にくらべ0.8%の増加となりました。

(注) 出典：JAMA(日本自動車工業会)

北米

主要市場である米国の2022年(暦年)二輪車・ATV総需要(注)は、約73万台と前年にくらべ約6%の減少となりました。

当連結会計年度の北米地域の連結売上台数は、主にメキシコにおいて、「Navi」や「Dio」の増加などにより、45万9千台と前連結会計年度にくらべ5.0%の増加となりました。

(注) 出典：MIC(米国二輪車工業会)

二輪車・ATVの合計であり、Side-by-Side(S×S)は含まない。

欧州

欧州地域の2022年(暦年)二輪車総需要(注)は、約108万台とほぼ前年並みとなりました。

当連結会計年度の連結売上台数は、「PCX」の増加などにより、34万7千台と前連結会計年度に比べ9.5%の増加となりました。

(注) 英国、ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、スイス、ポルトガル、オランダ、ベルギー、オーストリアの10カ国の合計、当社調べ

アジア

最大市場のインドの2022年(暦年)二輪車総需要(注1)は、約1,536万台と前年に比べ約6%の増加となりました。その他のアジア地域主要国の2022年(暦年)二輪車総需要(注2)は、ベトナムなどで増加したものの、中国などで減少したことにより、約1,989万台とほぼ前年並みとなりました。

当連結会計年度の連結売上台数は、インドにおける「Activa」シリーズや、ベトナムにおける「Wave」シリーズの増加などにより、951万2千台と前連結会計年度に比べ14.8%の増加となりました。

なお、持分法適用会社であるインドネシアのピー・ティ・アストラホンダモーターの販売台数は連結売上台数に含まれませんが、当連結会計年度の販売台数は、「BeAT」シリーズや「Vario」シリーズの増加などにより、約448万台と前連結会計年度に比べ約15%の増加となりました。

(注) 1 当社調べ

2 タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナム、パキスタン、中国の7カ国の合計、当社調べ

その他の地域

主要市場であるブラジルの2022年(暦年)二輪車総需要(注)は、約135万台と前年に比べ約19%の増加となりました。

当連結会計年度の連結売上台数は、ブラジルにおける「CG160」シリーズや「Biz」シリーズの増加などにより、159万7千台と前連結会計年度に比べ10.9%の増加となりました。

(注) 出典：ABRACICLO(ブラジル二輪車製造者協会)

(四輪事業)

連結売上台数は、北米地域で減少したことなどにより、238万2千台と前連結会計年度に比べ1.7%の減少となりました。四輪事業の外部顧客への売上収益は、為替換算による増加影響などにより、10兆5,935億円と前連結会計年度に比べ1兆4,460億円、15.8%の増収となりました。なお、販売価格の変動はあったものの、売上収益に与える影響は軽微でした。また、前連結会計年度の為替レートで換算した場合、前連結会計年度に比べ約1,414億円、約1.5%の増収と試算されます。セグメント間取引を含む四輪事業の売上収益は、10兆7,817億円と前連結会計年度に比べ1兆4,211億円、15.2%の増収となりました。

営業費用は、10兆7,983億円と前連結会計年度に比べ1兆6,739億円、18.3%の増加となりました。売上原価は、為替影響などにより、8兆7,782億円と前連結会計年度に比べ1兆3,307億円、17.9%の増加となりました。販売費及び一般管理費は、品質関連費用を含む諸経費の増加や為替影響などにより、1兆2,382億円と前連結会計年度に比べ2,515億円、25.5%の増加となりました。研究開発費は、7,818億円と前連結会計年度に比べ916億円、13.3%の増加となりました。

営業損失は、為替影響などはあったものの、販売影響による利益減や品質関連費用を含む諸経費の増加などにより、166億円と前連結会計年度に比べ2,528億円の減益となりました。

各カテゴリ別の販売台数構成比は概ね以下のとおりです。(小売販売台数ベース)

パセッジャーカー(セダン・コンパクト等)：前連結会計年度42%、当連結会計年度42%

ライトトラック(SUV・ミニバン等)：前連結会計年度52%、当連結会計年度50%

軽自動車：前連結会計年度6%、当連結会計年度8%

四輪事業における主要な製品は以下のとおりです。

パセッジャーカー(セダン・コンパクト等)：

「ACCORD」、「BRIO」、「CITY」、「CIVIC」、「FIT」、
「INTEGRA」、「JAZZ」

ライトトラック(SUV・ミニバン等)：

「BREEZE」、「CR-V」、「FREED」、「HR-V」、「ODYSSEY」、
「PILOT」、「VEZEL」、「XR-V」、「ZR-V」

軽自動車：

「N-BOX」

カテゴリ別の収益性を決定する要因はさまざまですが、販売価格は重要な要素の一つと考えています。上記カテゴリごとの販売価格については、各モデルによって異なるものの、全体的には、ライトトラックは比較的高く、軽自動車は比較的低い傾向があります。

車両の貢献利益も各モデルによって異なりますが、一般的にライトトラックは販売価格が高いことから貢献利益も高く、軽自動車は販売価格が低いことから貢献利益も低い傾向があります。例えば、当社グループの主要な販売地域である日本市場と米国市場における、当連結会計年度のカテゴリ別の貢献利益は、ライトトラックは全カテゴリ平均より約25%高く、パセッジャーカーは約5%低く、軽自動車は約65%低いと試算されます。上記の貢献利益は売上収益から販売量に比例して発生すると考えられる材料費を控除した金額の台当たり金額と定義して算定したものです。

日本

2022年度四輪車総需要(注1)は、約438万台と前年度にくらべ、約4%の増加となりました。

当連結会計年度の連結売上台数(注2)は、半導体供給不足の影響などを受けたものの、「N-BOX」の増加などにより、48万4千台と前連結会計年度にくらべ1.7%の増加となりました。

当連結会計年度の生産台数は、64万3千台と前連結会計年度にくらべ1.4%の増加となりました。

(注) 1 出典：JAMA(日本自動車工業会：登録車+軽自動車)

2 当社の日本の金融子会社が提供する残価設定型クレジット等が、IFRSにおいてオペレーティング・リースに該当する場合、当該金融サービスを活用して連結子会社を通して提供された四輪車は、四輪事業の外部顧客への売上収益に計上されないため、連結売上台数には含めていません。

北米

主要市場である米国の2022年(暦年)四輪車総需要(注)は、約1,389万台と前年にくらべ約8%の減少となりました。

当連結会計年度の北米地域での連結売上台数は、半導体供給不足の影響などを受け、「HR-V」や「CIVIC」が減少したことなどにより、119万5千台と前連結会計年度にくらべ6.9%の減少となりました。

当連結会計年度の北米地域での生産台数は、124万9千台と前連結会計年度にくらべ1.7%の減少となりました。

(注) 出典：Autodata

欧州

欧州地域の2022年(暦年)四輪車総需要(注)は、約1,128万台と前年にくらべ約4%の減少となりました。

当連結会計年度の連結売上台数は、「CIVIC」の減少などにより、8万4千台と前連結会計年度にくらべ16.0%の減少となりました。

(注) 出典：ACEA(欧州自動車工業会)乗用車部門(EU27カ国、EFTA3カ国、英国)

アジア

アジア地域主要国の2022年(暦年)四輪車総需要(注1)は、インドやマレーシアなどで増加したことにより、約834万台と前年にくらべ約18%の増加となりました。

中国の2022年(暦年)四輪車総需要(注2)は、約2,686万台と前年にくらべ約2%の増加となりました。

当連結会計年度の連結売上台数の合計は、インドネシアにおける「BR-V」や「BRIO」の増加などにより、50万5千台と前連結会計年度にくらべ14.0%の増加となりました。

なお、持分法適用会社である中国の東風本田汽車有限公司および広汽本田汽車有限公司の販売台数は連結売上台数に含まれませんが、当連結会計年度の販売台数は、半導体供給不足の影響などを受け、「XR-V」や「VEZEL」の減少などにより、124万台と前連結会計年度にくらべ21.5%の大幅な減少となりました。

アジア地域の連結子会社の当連結会計年度の生産台数(注3)は、55万6千台と前連結会計年度にくらべ14.1%の増加となりました。

なお、持分法適用会社である中国の東風本田汽車有限公司および広汽本田汽車有限公司の当連結会計年度の生産台数は130万6千台と前連結会計年度にくらべ19.4%の減少となりました。

(注) 1 タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナム、台湾、インド、パキスタンの8カ国の合計、当社調べ

2 出典：中国汽车工業協会

3 タイ、インドネシア、マレーシア、ベトナム、台湾、インド、パキスタンの7カ国の合計

その他の地域

主要市場であるブラジルの2022年(暦年)の四輪車総需要(注)は、約196万台と前年にくらべ約1%の減少となりました。

当連結会計年度の連結売上台数は、ブラジルにおける「CITY」の増加などはあったものの、「CIVIC」の減少などにより、11万4千台と前連結会計年度にくらべ6.6%の減少となりました。

当連結会計年度のブラジル工場での生産台数は、6万6千台と前連結会計年度にくらべ21.4%の大幅な減少となりました。

(注) 出典：ANFAVEA(ブラジル自動車製造業者協会：乗用車+軽商用車)

(金融サービス事業)

当社グループは、製品販売のサポートを主な目的として、日本・米国・カナダ・英国・ドイツ・ブラジル・タイにある金融子会社を通じて、顧客に対する金融サービス(小売金融、オペレーティング・リースおよびファイナンス・リース)および販売店に対する金融サービス(卸売金融)を提供しています。

金融サービスに係る債権およびオペレーティング・リース資産残高の合計は、10兆6,210億円と前連結会計年度末にくらべ274億円、0.3%の増加となりました。また、前連結会計年度末の為替レートで換算した場合、前連結会計年度末にくらべ約6,504億円、約6.1%の減少と試算されます。

金融サービス事業の外部顧客への売上収益は、オペレーティング・リース売上の減少などはあったものの、為替換算による増加影響などにより、2兆9,540億円と前連結会計年度にくらべ1,334億円、4.7%の増収となりました。また、前連結会計年度の為替レートで換算した場合、前連結会計年度にくらべ約2,890億円、約10.2%の減収と試算されます。セグメント間取引を含む金融サービス事業の売上収益は、2兆9,561億円と前連結会計年度にくらべ1,328億円、4.7%の増収となりました。

営業費用は、2兆6,702億円と前連結会計年度にくらべ1,799億円、7.2%の増加となりました。売上原価は、オペレーティング・リース売上の減少に伴う費用の減少などはあったものの、為替影響などにより、2兆5,442億円と前連結会計年度にくらべ1,450億円、6.0%の増加となりました。販売費及び一般管理費は、為替影響などにより、1,260億円と前連結会計年度にくらべ349億円、38.3%の増加となりました。

営業利益は、為替影響などはあったものの、減収に伴う利益の減少などにより、2,858億円と前連結会計年度にくらべ471億円、14.2%の減益となりました。

(パワープロダクツ事業及びその他の事業)

パワープロダクツ事業の連結売上台数は、北米地域で減少したことなどにより、564万5千台と前連結会計年度にくらべ9.0%の減少となりました。パワープロダクツ事業及びその他の事業の外部顧客への売上収益は、為替換算による増加影響などにより、4,511億円と前連結会計年度にくらべ518億円、13.0%の増収となりました。また、前連結会計年度の為替レートで換算した場合、前連結会計年度にくらべ約76億円、約1.9%の増収と試算されます。セグメント間取引を含むパワープロダクツ事業及びその他の事業の売上収益は、4,764億円と前連結会計年度にくらべ546億円、13.0%の増収となりました。

営業費用は、4,536億円と前連結会計年度にくらべ223億円、5.2%の増加となりました。売上原価は、為替影響などにより、3,692億円と前連結会計年度にくらべ198億円、5.7%の増加となりました。販売費及び一般管理費は、諸経費の減少などはあったものの、為替影響などにより、572億円と前連結会計年度にくらべ29億円、5.5%の増加となりました。研究開発費は、271億円と前連結会計年度にくらべ4億円、1.8%の減少となりました。

営業利益は、販売影響による利益増や為替影響などにより、228億円と前連結会計年度にくらべ323億円の増益となりました。なお、パワープロダクツ事業及びその他の事業に含まれる航空機および航空機エンジンの営業損失は、為替換算による利益減などはあったものの、費用の減少などにより、257億円と前連結会計年度にくらべ79億円の改善となりました。

日本

当連結会計年度の連結売上台数は、OEM向けエンジン(注)が増加したことなどにより、37万6千台と前連結会計年度にくらべ6.5%の増加となりました。

(注) 相手先ブランドで販売される商品に搭載されるエンジン

OEM: Original Equipment Manufacturer

北米

当連結会計年度の連結売上台数は、OEM向けエンジンが減少したことなどにより、227万4千台と前連結会計年度にくらべ16.9%の減少となりました。

欧州

当連結会計年度の連結売上台数は、発電機の増加はあったものの、OEM向けエンジンが減少したことなどにより、116万8千台と前連結会計年度にくらべ1.8%の減少となりました。

アジア

当連結会計年度の連結売上台数は、OEM向けエンジンが減少したことなどにより、140万8千台と前連結会計年度にくらべ5.3%の減少となりました。

その他の地域

当連結会計年度の連結売上台数は、OEM向けエンジンが減少したことなどにより、41万9千台と前連結会計年度にくらべ3.2%の減少となりました。

② 重要な会計上の見積り

当社および連結子会社は、IFRSに準拠した連結財務諸表を作成するにあたり、会計方針の適用、資産・負債および収益・費用の報告額ならびに偶発資産・偶発債務の開示に影響を及ぼす判断、見積りおよび仮定の設定を行っています。実際の結果は、これらの見積りとは異なる場合があります。

なお、これらの見積りや仮定は継続して見直しています。会計上の見積りの変更による影響は、見積りを変更した報告期間およびその影響を受ける将来の報告期間において認識されます。

当社の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性のある会計上の見積りおよび仮定に関する情報は、連結財務諸表注記の「2 作成の基礎 (5) 見積りおよび判断の利用」を参照ください。

③ 流動性と資金の源泉

(資金需要、源泉、使途に関する概要)

当社および連結子会社は、事業活動のための適切な資金確保、適切な流動性の維持および健全なバランスシートの維持を財務方針としています。当社および連結子会社は、主に二輪車、四輪車およびパワープロダクツの製造販売を行うとともに、製品の販売をサポートするために、顧客および販売店に対する金融サービスを提供しています。生産販売事業における主な運転資金需要は、製品を生産するために必要となる部品および原材料や完成品の在庫資金のほか、販売店向けの売掛金資金です。また設備投資資金需要のうち主なものは、新機種の投入に伴う投資や、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに販売施設や研究開発施設の拡充のための必要資金です。また、当社および連結子会社は、世界一のパワーユニットメーカーとして「環境」と「安全」に徹底的に取り組むとともに、新たな価値創造として、複合型ソリューションや新領域へのチャレンジに全社一丸となって取り組んでいます。こうした事業ポートフォリオの変革に向けても資金が必要となります。上記取組みに関する資源投入の計画に関しては、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 ④ 財務戦略 2. 新たな価値創造を加速する資源投入」を参照ください。

生産販売事業における必要資金については、主に営業活動から得られる資金、銀行借入金および社債の発行などによりまかなっております。なお、当社は、前連結会計年度において、「環境」と「安全」への取り組みに対する支出の一部を社債発行により調達するためのサステナブル・ファイナンス・フレームワークを設定し、資金使途をそのフレームワークに準じた環境事業に限定する米ドル建てグリーンボンドを、総額27.5億米ドル発行しました。これらを踏まえ、現在必要とされる資金水準を十分確保していると考えています。これら生産販売事業の資金調達に伴う当連結会計年度末の債務残高は8,027億円となっています。また、顧客および販売店に対する金融サービスでの必要資金については、主にメディアムタームノート、銀行借入金、金融債権の証券化、オペレーティング・リース資産の証券化、コマーシャルペーパーの発行および社債の発行などによりまかなっています。これら金融子会社の資金調達に伴う当連結会計年度末の債務残高は6兆8,674億円となっています。

当社および連結子会社の借入必要額に、重要な季節的変動はありません。

今後も必要資金と手元資金の状況を鑑みながら、必要に応じて資金調達を検討していきます。

(流動性)

当社および連結子会社の当連結会計年度末の現金及び現金同等物3兆8,030億円は、主に米ドル建てと円建てを中心としていますが、その他の外貨建てでも保有しています。

当社および連結子会社の当連結会計年度末の現金及び現金同等物は、売上収益の約2.7ヵ月相当の水準となっており、当社および連結子会社の事業運営上、十分な流動性を確保していると考えています。

しかしながら、景気後退による市場の縮小や金融市場・為替市場の混乱などにより、流動性に一部支障をきたす場合も考えられます。このため、特に1兆483億円の短期債務を負う金融子会社では、継続的に債務を借り換えしているコマーシャルペーパーについて、代替流動性として合計1兆3,067億円相当の契約信用供与枠(コミットメントライン)を保有しています。さらに、有価証券報告書提出日(2023年6月23日)現在、当社および連結子会社は世界的に有力な銀行と契約に基づかない信用供与限度額を十分に設定しています。

当社および連結子会社の当連結会計年度末の資金調達に係る債務は、主に米ドル建てを中心としていますが、円建てやその他の外貨建てでも保有しています。

資金調達に係る債務の追加情報については、連結財務諸表注記の「15 資金調達に係る債務」および「25 金融リスク管理」を参照ください。

また、当社および連結子会社が発行する短期および長期債券は、ムーディーズ・インベスターズ・サービス、スタンダード・アンド・プアーズおよび格付投資情報センターなどから、2023年3月31日現在、以下の信用格付を受けています。

	信用格付	
	短期格付	長期格付
ムーディーズ・インベスターズ・サービス	P-2	A3
スタンダード・アンド・プアーズ	A-2	A-
格付投資情報センター	a-1+	AA

なお、これらの信用格付は、当社および連結子会社が格付機関に提供する情報または格付機関が信頼できると考える他の情報に基づいて行われるとともに、当社および連結子会社の発行する特定の債券に係る信用リスクに対する評価に基づいています。各格付機関は当社および連結子会社の信用格付の評価において異なった基準を採用することがあり、かつ各格付機関が独自に評価を行っています。これらの信用格付はいつでも格付機関により改訂または取り消しされることがあります。また、これらの格付は債券の売買・保有を推奨するものではありません。

④ 簿外取引

(貸出コミットメント)

当社および連結子会社は、販売店に対する貸出コミットメント契約に基づき、貸付金の未実行残高を有しています。当連結会計年度末において、販売店への保証に対する割引前の将来最大支払額は、1,192億円です。これらの貸出コミットメント契約には、貸出先の信用状態等に関する審査を貸出の条件としているものが含まれているため、必ずしも貸出実行されるものではありません。

(従業員の債務に対する保証)

当社および連結子会社は、当連結会計年度末において、従業員のための銀行住宅ローン59億円を保証しています。従業員が債務不履行に陥った場合、当社および連結子会社は、保証を履行することを要求されます。債務不履行が生じた場合に、当社および連結子会社が負う支払義務の割引前の金額は、当連結会計年度末において、上記の金額です。2023年3月31日現在、従業員は予定された返済を行えると考えられるため、当該支払義務により見積られた損失はありません。

⑤ 契約上の債務

当連結会計年度末における契約上の債務は、以下のとおりです。

	期間別支払金額(百万円)				
	合計	1年以内	1～3年	3～5年	それ以降
資金調達に係る債務	7,996,385	3,410,145	2,651,286	1,423,700	511,254
その他の金融負債	665,389	196,797	150,408	87,448	230,736
発注残高およびその他契約残高(注1)	107,865	90,669	17,048	148	—
確定給付制度への拠出(注2)	44,301	44,301	—	—	—
合計	8,813,940	3,741,912	2,818,742	1,511,296	741,990

(注) 1 当社および連結子会社の発注残高は、設備投資に関するものです。

2 2024年度以降の拠出額は未確定であるため、確定給付制度への拠出は、次連結会計年度に拠出するもののみ記載しています。

⑥ 市場リスクに関する定量および定性情報の開示

連結財務諸表注記の「25 金融リスク管理 (2) 市場リスク」を参照ください。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

当社および連結子会社の研究開発は、先進の技術によって、個性的で国際競争力のある商品群を生み出すことを目的としています。製品に関する研究開発につきましては、当社のほか、(株)本田技術研究所、ホンダディベロップメントアンドマニュファクチュアリングオブアメリカ・エル・エル・シーを中心に、また、生産技術に関する研究開発につきましては、当社のほか、ホンダディベロップメントアンドマニュファクチュアリングオブアメリカ・エル・エル・シーを中心に、それぞれ現地に密着した研究開発を行っています。

当社はハードとソフトやサービスを融合させた新価値創出の強化をはかるため、事業開発機能とソフトウェア・電動コア技術を集約した事業開発本部を新設しました。従来の二輪、四輪、パワープロダクツといった製品別の事業本部から独立させて1つの組織体制に束ねることで、機動力を高めるとともに、製品間で技術と事業を融合させ、シナジーを強化していきます。

当連結会計年度に発生した研究開発支出は、8,520億円となりました。

また、当社および連結子会社では研究開発支出の一部について、無形資産に計上しています。連結損益計算書に計上されている研究開発費の詳細については、連結財務諸表注記の「21 研究開発費」を参照ください。

セグメントごとの研究開発活動の状況につきましては、以下のとおりです。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日(2023年6月23日)現在において当社グループが判断したものであり、将来生じうる実際の結果と大きく異なる可能性もあります。詳細は「3 事業等のリスク」を参照ください。

(二輪事業)

二輪事業では、「チャレンジする組織風土を最大化し、今後の環境変化を乗り越え、手の届く価格で、お客様に喜んでもらえる商品を創造し続けられるものづくり集団となる」を方針として、研究開発活動に取り組んでまいりました。

主な成果として、2023年3月にアドベンチャースタイルの大型二輪スポーツモデル「XL750 TRANSALP」を発表しました。新開発の水冷・4ストローク・OHC・4バルブ直列2気筒のエンジンを搭載し、防風性能と空力性能を兼ね備えた機能的な大型ウインドスクリーン、車両の情報を集約し表示する5.0インチTFTフルカラー液晶マルチインフォメーションディスプレイを採用しました。また、あらかじめ設定された出力特性を選択できる「ライディングモード」や「HSVCS」など各種の先進装備を採用し、ライダーの利便性を高めています。

2022年9月に「HAWK 11」を発売しました。経験豊かなベテランライダーを中心としたお客様に、新たな価値観と充実したバイクライフを提案する日本市場向けの大型モーターサイクルになっており、水冷・4ストローク・OHC・直列2気筒1,082cm³エンジンに、6速マニュアルトランスミッションと、ライディングをサポートする電子制御技術を搭載し、ゆったりと走るシーンから、軽快にワインディング走行を楽しむシーンまで、ライダーの充足感を追求した、扱いやすい車体パッケージとしています。

また、2023年1月には、アドベンチャースタイルの軽二輪スクーター「ADV160」を発売しました。水冷・4ストローク・4バルブ・156cm³単気筒の新エンジン「eSP+」を搭載し最新の排出ガス規制(注)に対応させることにより、環境にも配慮しています。

さらに、2023年2月に発売した大型クルーザーモデル「Rebel 1100T」はロー&ロングなスタイリッシュなデザインと、長距離走行時の快適性に配慮し、ライダーへの走行風をやわらげる大型フロントカウルを採用し快適なロングツーリングに対応したモデルとしています。

「地球環境負荷ゼロ」へ向けた取り組みとして、2040年代にすべての二輪製品でのカーボンニュートラルを実現することをめざし、ICE(内燃機関)の進化にも継続的に取り組みながら、今後の環境戦略の主軸として二輪車の電動化を加速させていきます。

具体的には、2025年までにグローバルで、電動二輪車を合計10モデル以上投入し、2026年に100万台、2030年にHondaの総販売台数の約15%にあたる年間350万台レベルの電動二輪車の販売をめざしていきます。

その先駆けとして、2022年11月にイタリア・ミラノで開催されたEICMA 2022において、Hondaが初めてヨーロッパで販売する電動二輪車「EM1 e :」を発表しました。若者向けに手軽で楽しいアーバンライディングを提

供します。街中での走行や通学・通勤を、効率よく、静かに、クリーンに走る「EM1 e :」は、現代のニーズやライフスタイルに最適なモデルです。

また、電動二輪車の最大市場である中国では、2023年1月に上海で開催されたオンライン発表会において、中国国内のZ世代(ジェネレーションZ)の若い消費者に向けた電動二輪車、「Honda Cube :」「Dax e :」「ZOOMER e :」の3モデルを発表しました。従来のモデルの特徴的なデザインをモチーフに、先進的な機能・装備などを加えることにより、新しい価値観を提供し、中国の若い消費者にさらなる驚きと選択肢をもたらすことを狙いにしています。

二輪事業に係る研究開発支出は、703億円となりました。

(注) 2020年排出ガス規制

(四輪事業)

四輪事業では、「魅力ある強い商品のために総合力を発揮し、ものづくりプロセスの深化により、四輪事業を永続的に成長させる」を方針として研究開発に取り組んでまいりました。

主な成果として、2022年4月に中国においてEV「e：NS1」、同年6月に新型EV「e：NP1」を発売しました。独創、情熱といった当社グループのものづくりのDNAと、最先端の中国の電動化・知能化技術を融合し開発した「e：N」シリーズの第1弾として、「心動 未体験EV」をコンセプトとし、乗る人の心を揺さぶる新しい価値を数多く取り入れました。2022年7月に発売した新型「CIVIC e：HEV」、同年9月に発売した新型「CIVIC TYPE R」が国産車として初めて、2022-2023日本カー・オブ・ザ・イヤー(主催：日本カー・オブ・ザ・イヤー実行委員会)で「パフォーマンス・カー・オブ・ザ・イヤー」を受賞しました。ハイブリッドカーである「CIVIC e：HEV」は、洗練されたパワートレインにより、現代的でスマートな走りがしっかり作り上げられたスポーツサルーンとして評価されました。また、「CIVIC TYPE R」は、優れたシャシー性能と空力ボディ、滑らかな回転フィールのVTECターボエンジンにより、街乗りからサーキット走行まで幅広くカバーするパフォーマンスを実現し、ドライバーに素直な感動を与えてくれる点に多くの評価を集めることが出来ました。

グローバルでは、新型「CR-V」、新型「ACCORD」を発売しました。パワートレインは1.5L直列4気筒DOHC直噴ターボエンジンに加え、旧型よりさらに進化した2モーター式ハイブリッドシステムを搭載しました。また、安全運転支援システム「Honda SENSING」の機能も刷新し、先進の予防安全技術を提供します。

北米においては、2022年12月に新型「PILOT」を発売しました。新型プラットフォームの採用により、室内空間は拡大し、特に3列目シートはゆとりある設計になりました。また、当社グループ初の組み合わせとなる3.5LV6エンジンと10速オートマチックトランスミッションを搭載し、力強い走りを実現しています。

また、北米では2022年6月に発売したAcuraブランドの新型「INTEGRA」が、そのスポーティなデザイン、魅力的なドライビング エクスペリエンス、多彩なパッケージ、プレミアム機能が評価され、2023 North American Car, Truck and Utility Vehicle of the Year Awards の受賞式において「2023 North American Car of the Year (2023北米カー・オブ・ザ・イヤー)」を受賞しました。昨年の「CIVIC」に続き、2年連続の受賞になりました。

「地球環境負荷ゼロ」へ向けた取り組みとして、バッテリー開発と市場変化に合わせたEV製品の投入を進めていきます。バッテリーにおいては、2020年代後半のEV拡大期に合わせ、次世代電池技術に対する、独自開発へのチャレンジに取り組んでいきます。具体的には、(株)GSユアサと高容量・高出力なりチウムイオンバッテリーの開発に向けて協業を進めていきます。また、半固体電池では、SES AI コーポレーションの出資を通じた共同開発を進めるとともに、全固体電池については、自前開発に向けた研究を進めていきます。

EV製品の投入については、現在から2020年代後半までは主要地域ごとの市場特性に合わせた商品を投入していきます。北米では、ゼネラルモーターズ(GM)と共同開発の中大型クラスEVを2024年に2機種投入します。中国では、HondaブランドEVとなる「e：N」シリーズの開発を更に加速させ、2027年までに10機種を投入します。また、日本においては、2024年中に、軽商用EVの投入を計画しています。そしてEV普及期と想定される2020年代後半以降は、グローバル視点でベストなEVを展開していきます。ハードウェアとソフトウェアの各プラットフォームを組み合わせたEV向けプラットフォーム「Honda e：アーキテクチャー」を採用した商品を2025年からの投入に向けて、開発を進めています。また、GMとのアライアンスを通じて、従来のガソリン車と同等レベルの競争力を持つ量販価格帯のEVを、2027年以降に北米から投入する計画です。

当社グループは電動化へ向けた開発を更に加速していきます。

「交通事故死者ゼロ」へ向けた取り組みとしては、2022年12月に「Honda SENSING 360」と「Honda SENSING Elite」の次世代技術を発表しました。

「Honda SENSING 360」に次世代技術として、ドライバー異常や周辺環境を検知し事故のリスクを減らすことで、ドライバー運転負荷をさらに軽減する新機能を追加し、2024年よりグローバルで順次適用開始していきます。また、「Honda SENSING Elite」の次世代技術として、Honda独自のAI技術を活用した認知・理解技術により、従来の高速道路に加え一般道路も含めた自宅から目的地までシームレスな移動を支援する技術を新開発しました。これらの技術を2020年代半ばから順次適用開始していきます。

四輪事業に係る研究開発支出は、7,541億円となりました。

(パワープロダクツ事業及びその他の事業)

パワープロダクツ事業では、「暮らしの“未来”を創造し「役立ち」と「喜び」を更なる高みへ」を方針として、研究開発活動に取り組んでまいりました。

主な成果として、2022年夏に大型除雪機「HSL2511」を一部改良し発売しました。「HSL2511」は、電子制御燃料噴射装置を採用したエンジンの搭載により、優れた始動・メンテナンス性に加え、高い燃費性能を実現した大型除雪機です。また、Honda独自のオーガ操作支援機能「スマートオーガシステム」の採用で使いやすさとパワフルな除雪能力を両立させたモデルとしてご好評をいただいています。

「地球環境負荷ゼロ」へ向けた取り組みとしては、2022年10月にバッテリー交換ステーション「Honda Power Pack Exchanger e:」の販売を開始し、バッテリーシェアリング事業を行う株式会社Gac hacoに納品しました。「Honda Power Pack Exchanger e:」は、交換式バッテリー「Honda Mobile Power Pack e:」を複数同時に充電し、電動二輪車をはじめとする「Honda Mobile Power Pack e:」ユーザーのスムーズなバッテリー交換を可能にするバッテリー交換ステーションです。ユーザーは街の中のステーションで必要な時に充電済みバッテリーにアクセスすることができ、充電時間を待つことなく、効率よく電動モビリティを利用することが可能になります。

「新たな価値創造」へ向けた取り組みとしては、より良き社会実現に向けた、QOL(Quality Of Life:生活の質)、QOW(Quality Of Work:仕事の質)向上のためのソリューションシステムの開発を進めています。そのための技術として、作業システムの知能化、IoT化を進化させ、社会課題の解決に寄与する活動を加速させています。2023年3月には米国・ラスベガスで開催された「CONEXPO-CON/AGG 2023」において、プラットフォーム型自律移動モビリティの実験用車両「Honda Autonomous Work Vehicle(以下「Honda AWV」という。)」の3代目となるプロトタイプを公開しました。Honda AWVは、CES 2018に出展した「3E-D18」のコンセプトを基に、アタッチメントやツールが追加され、運搬をはじめ、さまざまな作業に活用できるプラットフォームとなっています。なお、Honda AWVはGPSによる位置情報、レーダーやライダーによる障害物検知機能、その他のセンサー類を駆使して自律的に走行します。

また、研究開発中の自動芝刈り機のプロトタイプモデル「Honda Autonomous Work Mower(以下「Honda AWM」という。)」を、2022年10月に米国・ケンタッキー州ルイビル市で開催された「Equip Exposition 2022」で展示しました。1回目に手動で芝刈り作業ルートを記録することで、自動運転するルートを教示し、2回目以降の作業を自動化する、ティーチング&プレイバック機能だけでなく、障害物を検知して停止する機能も搭載しています。

当社グループはこれからも、「新たな価値創造」へ向けた取り組みを加速していきます。

航空機においては、Honda独自の最先端技術を開発して、空の世界においても新しい価値を創造し、長期的な観点から航空機ビジネスを成長させていくためのビジネス基盤の構築をしてまいりました。

2022年10月に米国フロリダ州オーランドで開催された世界最大のビジネス航空ショー、ナショナル ビジネス アビエーションにおいて、小型ビジネスジェット機「Honda Jet」の最新型としてアップグレードされた「Honda Jet Elite II(以下「Elite II」という。)」を発表しました。Elite IIは、燃料タンクの拡張および最大離陸重量の増加により、航続距離を延長し、より遠くの目的地へ移動することが可能になりました。機体構造の改良においてはグランドスポイラーを主翼に初搭載し、着陸時の機体ハンドリングと安定性を向上させました。また、空の領域における新たな安全技術の取り組みとして、最新の自動化技術であるオートスロットル機能と緊急着陸装置の導入を推進しています。

アフターサービスに関しては、高水準のサービスと技術者の専門性が評価され、昨年度に続き、米国連邦航空局(FAA)から最高レベルである「ダイヤモンドレベルAMT賞」を受賞しました。

今後もビジネスジェット市場のさらなる活性化へ向けた体制整備に取り組めます。

パワープロダクツ事業及びその他の事業に係る研究開発支出は、275億円となりました。

次世代技術として、人、機械、社会の共働・共生をサポートする独自のAIである協調人工知能「Honda CI (Cooperative Intelligence)」を活用した「Honda CIマイクロモビリティ」と活用技術を公開しました。2022年11月から茨城県常総市内の複数エリアにて技術実証実験を順次開始しています。今後、少子高齢化やアフターコロナの社会において、ますますマイクロモビリティによる人とモノの自由な移動ニーズが増加することが予想されます。当社グループは、2030年ごろの実用化を見据えCIマイクロモビリティの技術をさらに進化させることで、「移動と暮らしの進化」と「交通事故ゼロ」を両立する「Honda CIマイクロモビリティ」の実現をめざします。また、カーボンニュートラル社会の実現に向けて、製品の電動化の促進のみならず、エネルギーキャリアとしての水素の活用拡大にも積極的に取り組み、水素事業の拡大をめざしていきます。水素事業のコアとなる燃料電池システムのさらなる進化に組み込み、耐久性の向上、コストの削減を進めています。具体的には、燃料電池システム活用のコアドメインを、燃料電池自動車(FCEV)、商用車、定置電源、建設機械の4つと定め、他社との協業にも積極的に取り組んでいきます。

なお、これらの取り組みに係る研究開発支出は各事業に配分されています。

当連結会計年度末時点において、当社および連結子会社は、国内で15,000件以上、海外で27,100件以上の特許権を保有しています。また、出願中の特許が国内で5,800件以上、海外で14,200件以上あります。当社および連結子会社は、特許の重要性を認識していますが、特許のうちのいくつか、または、関連する一連の特許が終了または失効したとしても、当社および連結子会社の経営に重要な影響を及ぼすことはないと考えています。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度は、新機種の投入に伴う投資や、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに販売施設や研究開発施設の拡充などを行いました。

なお、当連結会計年度の設備投資実施額は493,908百万円となり、前連結会計年度にくらべ215,503百万円増加しました。

セグメントごとの設備投資は、以下のとおりです。

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日) (百万円)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日) (百万円)
二輪事業	36,754	44,818
四輪事業	230,476	438,469
金融サービス事業	340	216
パワープロダクツ事業 及びその他の事業	10,835	10,405
合計	278,405	493,908
オペレーティング・リース資産(外数)	2,026,098	1,543,448

(注) 上記の表には、無形資産を含めていません。

二輪事業では、新機種の投入に伴う投資や、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに販売施設や研究開発施設の拡充などにより44,818百万円の設備投資を実施しました。

四輪事業では、新機種の投入に伴う投資や、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに販売施設や研究開発施設の拡充などにより438,469百万円の設備投資を実施しました。

金融サービス事業では、216百万円、パワープロダクツ事業及びその他の事業では、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに研究開発施設の拡充などにより10,405百万円の設備投資を実施しました。

オペレーティング・リース資産については、金融サービス事業におけるリース車両の取得により、1,543,448百万円の設備投資を実施しました。

なお、設備の除却、売却等については、重要なものではありません。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における当社および連結子会社の主要な設備は、以下のとおりです。

(1) 提出会社

事業所名	主な所在地	従業員数(名)	セグメントの名称	設備の内容	土地面積(千㎡)	帳簿価額			
						土地(百万円)	建物及び構築物(百万円)	機械装置及び備品(百万円)	合計(百万円)
埼玉製作所	埼玉県大里郡寄居町	4,003	四輪事業	製造設備等	1,509 (16)	24,939	57,090	37,717	119,746
鈴鹿製作所	三重県鈴鹿市	5,408	四輪事業	製造設備等	1,141 (85)	5,904	27,353	48,761	82,018
トランスミッション製造部および細江船外機工場	静岡県浜松市	1,834	四輪事業 パワープロダクツ事業及びその他の事業	製造設備等	383 (94)	4,063	10,438	23,781	38,282
熊本製作所	熊本県菊池郡大津町	2,485	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業及びその他の事業	製造設備等	1,685	2,785	11,062	9,616	23,463
パワートレインユニット製造部	栃木県真岡市	737	四輪事業	製造設備等	211	2,807	3,637	4,251	10,695
本社他	東京都港区他	18,598	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業及びその他の事業	管理施設貸与資産及び研究開発用設備等	20,338 (628)	295,466	153,870	59,409	508,745
合計	—	33,065	—	—	25,267 (823)	335,964	263,450	183,535	782,949

(2) 国内子会社

会社名	主な所在地	従業員数(名)	セグメントの名称	設備の内容	土地面積(千㎡)	帳簿価額			
						土地(百万円)	建物及び構築物(百万円)	機械装置及び備品(百万円)	合計(百万円)
㈱本田技術研究所	栃木県芳賀郡芳賀町	4,068	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業及びその他の事業	研究開発用設備等	— (23)	0	2,164	18,765	20,929

(3) 在外子会社

会社名	主な所在地	従業員数(名)	セグメントの名称	設備の内容	土地面積(千㎡)	帳簿価額			
						土地(百万円)	建物及び構築物(百万円)	機械装置及び備品(百万円)	合計(百万円)
アメリカンホンダ モーターカンパニー・ インコーポレーテッド	米国 カリフォルニア州 トーランス	5,115	二輪事業 四輪事業 金融サービス 事業 パワープロダク ツ事業及びその 他の事業	管理施設 販売施設 製造及び 研究開発用 設備等	25,310 (555)	11,361	58,684	47,880	117,925
ホンダディベロップメ ントアンドマニュファ クチュアリングオブア メリカ・エル・エル・ シー	米国 オハイオ州 メアリズビル	22,944	四輪事業	製造及び 研究開発用 設備等	50,982 (6)	23,519	175,696	454,163	653,378
ホンダカナダ・ インコーポレーテッド	カナダ オンタリオ 州 アリントン	5,995	二輪事業 四輪事業 パワープロダク ツ事業及びその 他の事業	製造設備等	3,927	6,828	28,193	79,589	114,610
ホンダ・デ・ メキシコ・エス・ エー・デ・シー・バイ	メキシコ グアナフア ト州 セラヤ	6,197	二輪事業 四輪事業 パワープロダク ツ事業及びその 他の事業	製造設備等	6,939	6,390	45,304	41,545	93,239
本田自動車部品製造有 限会社	中国 佛山市	2,340	四輪事業	製造設備等	— (392)	—	7,193	25,380	32,573
ホンダモーターサイク ルアンドスクーターイ ンディアプライベート ・リミテッド	インド グルグラム	7,307	二輪事業	製造設備等	1,090 (795)	5,046	17,346	35,363	57,755
ホンダカーズ インディア・ リミテッド	インド タブカラ	2,354	二輪事業 四輪事業 パワープロダク ツ事業及びその 他の事業	製造設備等	— (2,648)	4,203	14,520	27,051	45,774
ビー・ティ・ホンダ プロスペクトモーター	インドネシ ア カラワン	2,738	四輪事業	製造設備等	785 (40)	4,023	8,540	30,943	43,506
ホンダオートモービル (タイランド)カンパ ニー・リミテッド	タイ アユタヤ	4,080	四輪事業	製造設備等	3,455 (27)	11,401	36,999	36,232	84,632
タイホンダカンパ ニー・リミテッド	タイ バンコク	3,756	二輪事業 パワープロダク ツ事業及びその 他の事業	製造設備等	434 (14)	8,938	9,016	14,756	32,710
ホンダベトナムカン パニー・リミテッド	ベトナム フックイ エン	5,740	二輪事業 四輪事業	製造設備等	— (1,110)	2,361	8,104	18,923	29,388
モトホンダ・ダ アマゾン リミターダ	ブラジル マナウス	6,804	二輪事業 パワープロダク ツ事業及びその 他の事業	製造設備等	11,139	2,428	17,098	15,605	35,131

(注) 1 帳簿価額には、建設仮勘定は含まれていません。

2 提出会社には、(株)本田技術研究所などの連結子会社に対する土地、建物などの賃貸物件が含まれていま
す。

3 連結会社以外の者から賃借している主な設備には、店舗、社宅および駐車場などがあります。

なお、提出会社および子会社が連結会社以外の者から賃借している土地面積については、上記の表の()
内に記載しており、外数です。

4 連結会社以外の者に賃貸している重要な設備はありません。

5 国内子会社および在外子会社の帳簿価額については、IFRSに基づく数値を記載しています。

3 【設備の新設、除却等の計画】

次連結会計年度(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)の設備投資は400,000百万円を計画しています。

新機種の投入に伴う投資や、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに販売施設や研究開発施設の拡充などを計画しています。

セグメントごとの設備投資計画は、以下のとおりです。

セグメントの名称	投資予定金額 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日) (百万円)
二輪事業	51,000
四輪事業	338,000
金融サービス事業	200
パワープロダクツ事業及びその他の事業	10,800
合計	400,000

- (注) 1 経常的な設備の更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。
2 所要資金については主に自己資金および借入金などで充当する予定です。
3 オペレーティング・リースに係る設備投資は、上記の金融サービス事業における設備投資計画に含まれていません。
4 上記の表には、無形資産を含めていません。

二輪事業では、新機種の投入に伴う投資や、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに販売施設や研究開発施設の拡充などに、51,000百万円の設備投資を計画しています。

四輪事業では、新機種の投入に伴う投資や、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに販売施設や研究開発施設の拡充などに、338,000百万円の設備投資を計画しています。

金融サービス事業では、200百万円、パワープロダクツ事業及びその他の事業では、生産設備の拡充、合理化および更新ならびに研究開発施設の拡充などに、10,800百万円の設備投資を計画しています。

当連結会計年度において、新たに確定した重要な設備の新設等にかかる計画は、以下のとおりです。

当社の連結子会社であるホンダディベロップメントアンドマニュファクチュアリングオブアメリカ・エル・エル・シーは、今後のEVの本格的な生産に向けて、米国オハイオ州内の3つの既存工場(四輪車を生産するメアリズビル工場とイーストリバティ工場、四輪車用パワートレインを生産するアンナ・エンジン工場)に、合計7億米ドルを投資して生産設備を更新します。この設備は、2026年の稼働を予定しています。今後、これらの工場を、北米におけるEV生産のハブ拠点として進化させていきます。

当連結会計年度において、新たに確定した重要な設備の除却等にかかる計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	7,086,000,000
計	7,086,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2023年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2023年6月23日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	1,811,428,430	1,811,428,430	東京証券取引所 プライム市場 ニューヨーク証券取引所	単元株式数100株
計	1,811,428,430	1,811,428,430	—	—

(注) ADR(米国預託証券)をニューヨーク証券取引所に上場しています。

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2010年8月6日	△23,400	1,811,428	—	86,067	—	170,313

(注) 2010年8月6日の減少は、自己株式の消却によるものです。

(5) 【所有者別状況】

2023年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 (人)	1	195	54	1,361	1,046	236	191,337	194,230	—
所有株式数 (単元)	6	6,293,648	582,873	1,185,822	7,029,990	754	3,017,077	18,110,170	411,430
所有株式数 の割合(%)	0.00	34.75	3.22	6.55	38.82	0.00	16.66	100.00	—

(注) 1 証券保管振替機構名義の株式2,500株は、「その他の法人」の欄に25単元含めて表示しています。

2 自己株式146,163,724株は、「個人その他」の欄に1,461,637単元、「単元未満株式の状況」の欄に24株をそれぞれ含めて表示しています。

(6) 【大株主の状況】

2023年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を 除く。)の 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
日本マスタートラスト 信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	260,025	15.61
モックスレイ・アンド・カンパニー・ エルエルシー (常任代理人 株式会社三菱UFJ銀行)	米国・ニューヨーク (東京都千代田区丸の内二丁目7番1号)	116,835	7.02
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番12号	103,468	6.21
明治安田生命保険相互会社 (常任代理人 株式会社日本カストディ銀行)	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号 (東京都中央区晴海一丁目8番12号)	49,492	2.97
エスエスピーティシー クライアント オムニバス アカウント (常任代理人 香港上海銀行)	米国・ボストン (東京都中央区日本橋三丁目11番1号)	43,631	2.62
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区大手町二丁目6番4号	31,915	1.92
ステート ストリート バンク ウェスト クライアント トリーティー 505234 (常任代理人 株式会社みずほ銀行)	米国・ノースクインシー (東京都港区港南二丁目15番1号)	29,327	1.76
日本生命保険相互会社 (常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内一丁目6番6号 (東京都港区浜松町二丁目11番3号)	28,666	1.72
ノーザン トラスト カンパニー (エイブイエフシー) リ シルチェスター インターナショナル インベスターズ インターナショナル バリュ エクイティー トラスト (常任代理人 香港上海銀行)	英国・ロンドン (東京都中央区日本橋三丁目11番1号)	26,328	1.58
ジェービー モルガン チェース バンク 385781 (常任代理人 株式会社みずほ銀行)	英国・ロンドン (東京都港区港南二丁目15番1号)	22,752	1.37
計	—	712,443	42.78

(注) 1 モックスレイ・アンド・カンパニー・エルエルシーは、ADR(米国預託証券)の預託機関であるジェービーモルガン チェース バンクの株式名義人です。

2 2022年7月22日付で公衆の縦覧に供されている、ブラックロック・ジャパン株式会社から提出された大量保有報告書において、ブラックロック・ジャパン株式会社他6名の共同保有者が2022年7月15日現在で以下のとおり当社株式を保有している旨が記載されているものの、当社として当事業年度末における実質所有株式数の確認ができていないため、上記大株主の状況には含めていません。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
ブラックロック・ジャパン株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目8番3号	29,920	1.65
ブラックロック(ネザーランド)BV	オランダ・アムステルダム	5,647	0.31
ブラックロック・ファンド・ マネジャーズ・リミテッド	英国・ロンドン	6,015	0.33
ブラックロック・アセット・ マネジメント・アイルランド・ リミテッド	アイルランド・ダブリン	10,508	0.58
ブラックロック・ファンド・ アドバイザーズ	米国・カリフォルニア	28,638	1.58
ブラックロック・ インスティテューショナル・ トラスト・カンパニー、エヌ、エイ	米国・カリフォルニア	24,852	1.37
ブラックロック・インベストメント・ マネジメント(ユークー)リミテッド	英国・ロンドン	3,504	0.19
計	—	109,088	6.02

- 3 2022年8月22日付で公衆の縦覧に供されている、ドッチ・アンド・コックスから提出された大量保有報告書において、ドッチ・アンド・コックスが2022年8月15日現在で以下のとおり当社株式を保有している旨が記載されているものの、当社として当事業年度末における実質所有株式数の確認ができていないため、上記大株主の状況には含めていません。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
ドッチ・アンド・コックス	米国・カリフォルニア	71,634	3.95

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2023年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 146,163,700	—	単元株式数100株
	(相互保有株式) 普通株式 7,816,500	—	同上
完全議決権株式(その他)	普通株式 1,657,036,800	16,570,368	同上
単元未満株式	普通株式 411,430	—	—
発行済株式総数	1,811,428,430	—	—
総株主の議決権	—	16,570,368	—

(注) 1 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、役員報酬B I P (Board Incentive Plan) 信託が所有する当社株式924,100株(議決権の数9,241個)および証券保管振替機構名義の株式2,500株(議決権の数25個)が含まれています。

2 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式24株およびB I P 信託が所有する当社株式17株が含まれています。

② 【自己株式等】

2023年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
本田技研工業(株)	東京都港区南青山 二丁目1番1号	146,163,700	—	146,163,700	8.07
日立アステモ(株)	茨城県ひたちなか市高場 2520番地	2,000,000	—	2,000,000	0.11
武蔵精密工業(株)	愛知県豊橋市植田町 字大膳39番地の5	799,300	661,000	1,460,300	0.08
(株)スチールセンター	東京都千代田区内神田 三丁目6番2号	660,000	661,000	1,321,000	0.07
(株)山田製作所	群馬県桐生市広沢町 一丁目2757番地	1,200,000	112,700	1,312,700	0.07
(株)ジーテクト	埼玉県さいたま市大宮区 桜木町一丁目11番地20	478,000	666,600	1,144,600	0.06
(株)アイキテック	愛知県知多郡東浦町大字 森岡字栄東1番地1	421,600	143,000	564,600	0.03
(株)ホンダカーズ博多	福岡県糟屋郡新宮町 美咲一丁目5番2号	12,300	—	12,300	0.00
総合事務サービス(株)	東京都港区南青山 二丁目1番1号	1,000	—	1,000	0.00
計	—	151,735,900	2,244,300	153,980,200	8.50

(注) 1 武蔵精密工業(株)他4社の他人名義所有株式数は企業持株会加入によるもので、その名称は「ホンダ取引先企業持株会」、住所は「東京都港区南青山二丁目1番1号」です。

2 各社の自己名義所有株式数および他人名義所有株式数は、100株未満を切捨て表示しています。

(8) 【役員・従業員株式所有制度の内容】

当社は、2018年5月15日開催の取締役会、同年6月14日開催の定時株主総会の決議を経て、中長期での企業価値の持続的な向上に対する貢献意識をより高めるとともに、株主の皆様との利益共有をはかることを目的とした株式報酬制度(以下「本制度」という。)を導入し、2021年8月2日開催の報酬委員会において本制度内容の継続を決議いたしました。

本制度の対象は国内居住の執行役および一部の執行職です。(以下、本制度の執行役および執行職を総称して「執行役等」という。)

① 本制度の概要

本制度は、役員報酬BIP(Board Incentive Plan)信託(以下「BIP信託」という。)を用いた株式報酬制度です。BIP信託は、米国の業績連動型株式報酬(Performance Share)および譲渡制限付株式報酬(Restricted Stock)と同様に、役位および当社の業績や企業価値等の経営上の指標の達成度または成長度に応じて、執行役等に対し当社株式および金銭の交付および給付を行う仕組みです。

② 信託契約の内容

・ 信託の種類	特定単独運用の金銭信託以外の金銭の信託(他益信託)
・ 信託の目的	当社の中長期での企業価値の持続的な向上に対する貢献意識をより高めること
・ 委託者	当社
・ 受託者	三菱UFJ信託銀行株式会社 (共同受託者 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)
・ 受益者	執行役等のうち受益者要件を満たす者
・ 信託管理人	当社と利害関係のない第三者(公認会計士)
・ 信託契約日	2018年8月20日
・ 信託の期間	2018年8月20日～2024年8月31日
・ 議決権行使	行使しない
・ 取得株式の種類	当社普通株式
・ 信託延長時の追加信託金の金額	1,975百万円(信託報酬・信託費用を含みます。)
・ 株式の取得時期	2021年8月20日
・ 株式の取得方法	株式市場より取得
・ 帰属権利者	当社
・ 残余財産	帰属権利者である当社が受領できる残余財産は、信託費用準備金の範囲内とします。

③ 執行役等に取得させる予定の株式の総数

787千株(2021年度からの3事業年度を対象とする予定総数)

④ 本株式報酬制度による受益権及びその他の権利を受けることができる者の範囲

執行役等のうち受益者要件を満たす者

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号および会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2022年8月10日)での決議状況 (取得期間2022年8月12日～2023年3月31日)	32,000,000	100,000,000,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	29,939,900	99,999,843,700
残存決議株式の総数及び価額の総額	2,060,100	156,300
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	6.4	0.0
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合(%)	6.4	0.0

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2023年2月10日)での決議状況 (取得期間2023年2月13日～2023年4月30日)	25,000,000	70,000,000,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	16,431,700	56,994,709,700
残存決議株式の総数及び価額の総額	8,568,300	13,005,290,300
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	34.3	18.6
当期間における取得自己株式	3,700,800	13,005,135,900
提出日現在の未行使割合(%)	19.5	0.0

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2023年5月11日)での決議状況 (取得期間2023年5月12日～2024年3月31日)	64,000,000	200,000,000,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	—	—
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	—	—
当期間における取得自己株式	5,354,800	21,000,411,600
提出日現在の未行使割合(%)	91.6	89.5

(注) 1 当期間における取得自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの当該決議に基づく取得による株式は含まれていません。

2 取得自己株式には、BIP信託が取得した当社株式は含まれていません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないもの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	2,138	7,111,747
当期間における取得自己株式	132	493,496

(注) 1 当期間における取得自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれていません。

2 取得自己株式には、BIP信託が取得した当社株式は含まれていません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (円)	株式数(株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った 取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、株式交付、会社分割に 係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (単元未満株式の買増請求による売渡し)	8	26,272	—	—
保有自己株式数	146,163,724	—	155,219,456	—

(注) 1 当期間における処理自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡しによる株式は含まれていません。

2 当期間における保有自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りおよび売渡しによる株式は含まれていません。

3 処理自己株式数および保有自己株式数には、BIP信託が保有する当社株式数は含まれていません。

3 【配当政策】

当社は、グローバルな視野に立って世界各国で事業を展開し、企業価値の向上に努めています。成果の配分にあたりましては、株主の皆様に対する利益還元を経営の最重要課題の一つとして位置づけており、長期的な視点に立ち将来成長にむけた内部留保資金や連結業績などを考慮しながら決定していきます。配当は、連結配当性向30%を目安に安定的・継続的に行うよう努めていきます。

当社の剰余金の配当は、中間配当と期末配当の年2回の配当を基本的な方針としています。配当の決定機関は、取締役会としています。

また、資本効率の向上および機動的な資本政策の実施などを目的として自己株式の取得も適宜実施していきます。

内部留保資金につきましては、将来の成長に不可欠な研究開発や事業拡大のための投資および出資と健全な財務体質の維持に充てていきます。

当事業年度の1株当たりの年間配当金につきましては120円としました。なお、半期毎の配当金は、中間配当金60円、期末配当金60円となりました。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりです。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2022年11月9日 取締役会決議	102,219	60.00
2023年5月11日 取締役会決議	99,915	60.00

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

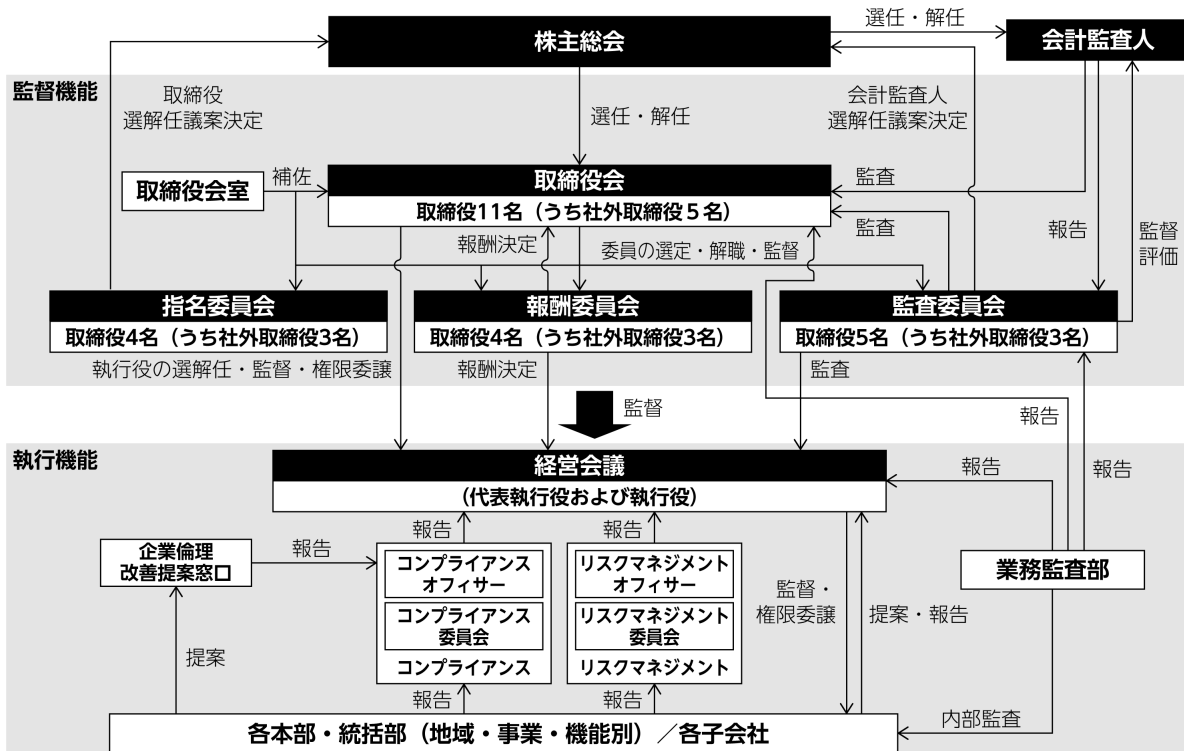
① コーポレートガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、基本理念に立脚し、株主・投資家の皆様をはじめ、お客様、社会からの信頼をより高めるとともに、会社の迅速・果敢かつリスクを勘案した意思決定を促し、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上をはかることで、「存在を期待される企業」となるために、経営の最重要課題の一つとして、コーポレートガバナンスの充実に取り組んでいます。

当社は、経営の監督機能と執行機能を明確に分離し、監督機能の強化と迅速かつ機動的な意思決定を行うため、過半数の社外取締役で構成される「指名委員会」、「監査委員会」、「報酬委員会」を有し、かつ取締役会から執行役に対して大幅に業務執行権限を委譲可能な指名委員会等設置会社を採用しています。

株主・投資家の皆様やお客様、社会からの信頼と共感をより一層高めるため、四半期ごとの決算や経営政策の迅速かつ正確な公表など、企業情報の適切な開示を行っており、今後も透明性の確保に努めていきます。

② 会社の機関の内容



<取締役会>

取締役会は、5名の社外取締役を含む11名の取締役によって構成されています。

取締役会は、株主からの負託に応えるべく、会社の持続的成長と中長期的な企業価値の向上に向けて、経営の基本方針その他経営上の重要事項の決定を行うとともに、取締役および執行役の職務執行の監督を行います。また、法令・定款に定められた事項のほか、取締役会規則で定めた事項を審議・決定し、それ以外の事項は代表執行役または執行役に委任しています。

上記の役割を果たすため、取締役候補者は、性別・国籍等の個人の属性に関わらず、会社経営や法律、行政、会計、教育等の分野または当社の業務に精通するとともに、人格・見識に優れた人物とし、その指名にあたり指名委員会はジェンダーや国際性、各分野の経験や専門性のバランスを考慮しています。

構成員ならびに当事業年度の開催回数／出席率および具体的な検討内容は以下のとおりです。

構成員	取締役会長(議長)	倉石 誠 司
	取締役 代表執行役社長	三 部 敏 宏
	取締役 代表執行役副社長	青 山 真 二
	取締役 執行役専務	貝 原 典 也
	取締役	鈴 木 麻 子
	取締役	鈴 木 雅 文
	取締役(社外)	酒 井 邦 彦
	取締役(社外)	國 分 文 也
	取締役(社外)	小 川 陽 一 郎
	取締役(社外)	東 和 浩
取締役(社外)	永 田 亮 子	
開催回数／出席率	10回／100%(全取締役)	
具体的な検討内容	中期経営計画およびその進捗状況	
	各四半期 連結決算および業績見通し	
	各四半期 業務執行状況	
	各委員会 職務執行状況	
	内部統制システム 整備・運用状況	
内部監査結果 等		

なお、当社は取締役会の機能の現状を確認し、さらなる「取締役会の実効性の向上」と「株主・ステークホルダーの理解促進」につなげることを目的に、毎年度、取締役会全体の実効性の評価を実施しています。当事業年度の取締役会の実効性評価の方法および結果の概要は以下のとおりです。

当事業年度は、評価にあたり、前回同様、取締役の自己評価を行いました。自己評価は、取締役に対して実施したアンケートとヒアリングの結果をもとに、取締役会で審議・決定しました。アンケートの質問項目は、外部の弁護士の監修のもとで設定し、またヒアリングおよび結果の集計は外部の弁護士により実施しました。

取締役会の実効性評価の結果、審議項目・開催頻度の適切な設定、事業所視察を含む社外取締役への情報提供や意見交換機会の充実、三委員会の適切な運営などにより、取締役会の実効性が適切に確保されていることを確認しました。

今後は、取締役会内外の議論をより活性化させるとともに、取締役会と三委員会の連携を一層強化することにより、モニタリング型取締役会としての実効性をさらに高めていきます。

<指名委員会>

指名委員会は、株主総会に提案する取締役の選任および解任に関する議案の内容の決定、その他法令または定款に定められた職務を行っています。指名委員会は、社外取締役3名を含む4名の取締役で構成されています。また、委員長は、独立社外取締役の中から選定しています。

構成員ならびに当事業年度の開催回数／出席率および具体的な検討内容は以下のとおりです。

構成員	取締役(社外)(委員長)	國 分 文 也
	取締役 代表執行役社長	三 部 敏 宏
	取締役(社外)	酒 井 邦 彦
	取締役(社外)	東 和 浩
開催回数／出席率	12回／100%(全委員)	
具体的な検討内容	基本方針・年間活動計画	
	リーダーの在り方	
	取締役の後継者計画	
	取締役候補者 等	

<監査委員会>

監査委員会は、株主からの負託に応えるべく、会社の健全で持続的な成長を確保するため、取締役および執行役の職務執行の監査その他法令または定款に定められた職務を行っています。監査委員会は、社外取締役3名を含む5名の取締役で構成されています。また、委員長は、独立社外取締役の中から選定しています。なお、当社は、監査の実効性を確保するため、取締役会の決議により常勤の監査委員を選定しています。

構成員ならびに当事業年度の開催回数／出席率および具体的な検討内容は以下のとおりです。

構成員	取締役(社外)(委員長)	小 川 陽 一 郎
	取締役(常勤)	鈴 木 麻 子
	取締役(常勤)	鈴 木 雅 文
	取締役(社外)	酒 井 邦 彦
	取締役(社外)	永 田 亮 子
開催回数／出席率	11回／100%(全委員)	
具体的な検討内容	基本方針・年間活動計画	
	各四半期 監査実施状況	
	各四半期 会計監査人 連結財務諸表レビュー	
	内部監査実施状況 等	

取締役 小川陽一郎氏は公認会計士として豊かな知識と経験を有しており、また、取締役 鈴木雅文氏は、当社および当社の子会社における財務・経理部門において十分な業務経験を有しており、両氏は会社法施行規則第121条第9号において規定される「財務及び会計に関する相当程度の知見を有しているもの」に該当します。また、当社の監査委員会は、小川陽一郎および鈴木雅文の両氏を、米国企業改革法第407条に基づく米国証券取引委員会規則において規定される「監査委員会における財務専門家」に認定しています。なお、現在の監査委員5名全員は、米国証券取引委員会規則において規定される独立性を確保しています。

その他、監査委員会の活動状況の詳細については、「(3) 監査の状況」を参照ください。

<報酬委員会>

報酬委員会は、取締役および執行役の個人別の報酬等の内容の決定、その他法令または定款に定められた職務を行っています。報酬委員会は、社外取締役3名を含む4名の取締役で構成されています。また、委員長は、独立社外取締役の中から選定しています。

構成員ならびに当事業年度の開催回数／出席率および具体的な検討内容は以下のとおりです。

構成員	取締役(社外)(委員長)	東 和 浩
	取締役 代表執行役副社長	青 山 真 二
	取締役(社外)	國 分 文 也
	取締役(社外)	小 川 陽 一 郎
開催回数／出席率	11回／100%(全委員)	
具体的な検討内容	基本方針・年間活動計画	
	役員実績評価	
	L T I (Long Term Incentive)および株式交付規程 等	

<組織運営体制>

「電動事業の更なる加速」とモビリティの拡がりによる「新たな価値創造」の実現をめざした運営体制を構築しています。二輪・四輪・パワープロダクツの電動領域の事業戦略機能および商品開発機能を集約した電動事業開発本部を設置するとともに、営業・生産・開発・購買などの各機能を有し、製品別の中長期展開を企画する四輪事業本部および二輪・パワープロダクツ事業本部を設置しています。グローバル戦略に基づく電動化の加速に向けて各事業本部がグローバルでのリソースコントロールを行い、各地域における新たな成長・価値創造と事業運営の効率化をリードしています。そして、新たな価値創造に向けた企業戦略の策定、実行、発信機能を担うコーポレート戦略本部に加え、企業戦略と連動した経営資源の全体最適化を担うコーポレート管理本部を設置し、電動化時代においても「存在を期待される企業」をめざしています。

なお、新技術の基礎応用研究と技術開発、新価値商品の研究開発は、主に独立した子会社である(株)本田技術研究所およびその子会社が担っており、世の中をリードする技術を創出することによって個性的で国際競争力のある新価値の創造をめざしています。

<執行体制>

当社は、地域や現場での業務執行を強化し、迅速かつ適切な経営判断を行うため、地域・事業・機能別の各本部や主要な組織に、代表執行役からの権限委譲を受け、担当分野の業務を執行する責任者として、執行役その他業務執行責任者を配置しています。

<経営会議>

当社は、原則として代表執行役および執行役から構成される経営会議を設置し、取締役会の決議事項等について事前審議を行うとともに、取締役会から委譲された権限の範囲内で、経営の重要事項について審議しています。

構成員については以下のとおりです。

構成員	取締役 代表執行役社長 最高経営責任者 (議長)	三 部 敏 宏
	取締役 代表執行役副社長	青 山 真 二
	取締役 執行役専務	貝 原 典 也
	執行役専務	井 上 勝 史
	執行役常務	安 部 典 明
	執行役常務	大 津 啓 司
	執行役常務	小 林 太 郎
	執行役常務	小 澤 学
	執行役	藤 村 英 司

なお、各事業を強化し、世界での最適な事業運営を円滑に遂行するため、各領域におかれた事業執行会議等が、経営会議から委譲された権限の範囲内で、各領域における経営の重要事項について審議しています。

<現状の体制を採用している理由>

当社は、経営の監督機能と執行機能を明確に分離し、監督機能の強化と迅速かつ機動的な意思決定を行うため、過半数の社外取締役で構成される「指名委員会」、「監査委員会」、「報酬委員会」を有し、かつ取締役会から執行役に対して大幅に業務執行権限を委譲可能な指名委員会等設置会社を採用しています。

<責任限定契約の内容の概要>

当社は、全ての社外取締役との間で、会社法第427条第1項および当社定款第27条第2項に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任について、同法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度とする旨の責任限定契約を締結しています。

<補償契約の内容の概要>

当社は、全ての取締役および執行役との間で会社法第430条の2第1項に基づく補償契約を締結しており、同項第1号に定める費用を法定の範囲内において当社が補償することとしています。

<役員等賠償責任保険契約の内容の概要>

当社は、会社法第430条の3第1項に基づき、全ての取締役および執行役が被保険者に含まれる役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が負担することとなる法律上の損害賠償金・争訟費用を当該保険契約により補填することとしています。

③ 内部統制システムに関する基本的な考え方およびその整備状況

当社の取締役会は、内部統制システム整備の基本方針について、以下のとおり決議しています。

- 1 執行役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
法令や社内規則の遵守等の当社役員および従業員が守るべき行動の規範を定め、周知徹底をはかる。
コンプライアンスに係る内部通報体制を整備する。
コンプライアンスに関する事項を統括する執行役を設置し、コンプライアンスに関する体制を整備する。
- 2 執行役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制
執行役の職務の執行に係る情報については、管理方針を定め、適切に保存および管理を行う。
- 3 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
経営上の重要事項に関しては、会議体においてリスクを評価、検討した上で決定する体制を整備する。
リスク管理に関する事項を統括する執行役を設置するとともに、リスク管理に関する規程を定め、リスク管理体制を整備する。
- 4 執行役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
地域・事業・機能別の各本部や主要な組織に、代表執行役からの権限委譲を受け、担当分野の業務を執行する責任者として、執行役その他業務執行責任者を配置するとともに、当該責任者に授権される権限の範囲と意思決定のプロセスを明確にして、迅速かつ適切な経営判断を行える体制を整備する。
また、効率的かつ効果的な経営を行うため、中期経営計画および年度毎の事業計画などを定め、その共有をはかるとともに、その進捗状況を監督する。
- 5 当社および当社子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
当社の役員および従業員の行動の規範ならびに内部統制システム整備の基本方針を子会社と共有するとともに、子会社を監督する体制を整備し、当社グループとしてのコーポレートガバナンスの充実に努める。
子会社における経営の重要事項などを当社に報告する体制を整備する。
当社の定めるリスク管理方針を子会社と共有するとともに、子会社からの重要リスクの報告に関する規程を定めるなど、当社グループとしてのリスク管理体制を整備する。
当社グループにおける法令違反などの問題を早期に発見し、対応するため、当社グループとしての内部通報体制を整備する。
当社グループとしての内部監査体制の充実をはかる。
(注) 上記において、「当社グループ」とは、当社および当社子会社から成る企業集団を意味しています。
- 6 監査委員会の職務を補助すべき取締役および使用人に関する事項、当該取締役および使用人の執行役からの独立性に関する事項ならびに当該取締役および使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
取締役会直属のスタッフ組織を設置し、監査委員会へのサポートを実施する。
- 7 取締役、執行役および使用人が監査委員会に報告をするための体制ならびに当該報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
監査委員会に対して、当社や子会社の役員および従業員が報告を実施するための体制を整備する。また、当該報告を行ったことを理由に不利な取り扱いを行わない。
- 8 監査委員の職務執行について生ずる費用の処理に係る方針、その他監査委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
監査委員の職務執行に必要な費用は、法令に則って会社が負担する。
その他、監査委員会の監査が実効的に行われるために、必要な体制を整備する。

上記内部統制システム整備の基本方針に基づく、当社の体制整備および運用状況の概要は以下のとおりです。

- 1 執行役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
「Honda行動規範」を制定して、法令遵守などに関する当社の方針と役員および従業員が実践すべき誠実な行動を明確にし、役員研修、入社時研修および階層別の従業員研修の機会を通じて、周知徹底をはかっています。
内部通報窓口として、企業倫理改善提案窓口を設置しています。窓口は、社内に加え、弁護士事務所による社外窓口も設けており、提案者保護などを含む運用規程を定めて運営しています。
執行役常務 二輪・パワープロダクツ事業本部長兼安全運転普及本部長をコンプライアンスオフィサーに任命しています。

コンプライアンスオフィサーを委員長とするコンプライアンス委員会を設置し、コンプライアンスに関する重要事項の審議を行っています。

コンプライアンス委員会の構成員については以下のとおりです。

構成員	執行役常務(委員長)	安部 典明
	執行役常務	大江 健介
	執行役常務	小林 太郎
	執行役常務	伊藤 裕直
	執行職	松尾 歩
	執行職	遠藤 嘉浩
	執行職	安田 啓一

当事業年度において、コンプライアンス委員会を5回(定期委員会4回、臨時委員会1回)開催し、内部統制システムの整備・運用状況、企業倫理改善提案窓口の運用状況、コンプライアンス向上に係る施策などを審議しました。

各部門は、法令遵守について、コントロールセルフアセスメント(CSA)の手法を用いた検証を行い、その結果について、業務監査部による内部監査を実施しました。

2 執行役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

当社における情報管理の方針は、「文書管理規程」により定められており、執行役の職務の執行に係る情報の管理方針も規定されています。

取締役会および経営会議の議事録は、上記規程に従い、開催毎に作成され、担当部門により永年保存されています。

また、指名委員会、監査委員会および報酬委員会の議事録についても、上記規程に従い、開催毎に作成され、担当部門により10年間保存されています。

3 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

経営上の重要事項は、取締役会、経営会議、事業執行会議、地域執行会議などで各審議基準に従って審議され、リスクを評価、検討した上で決定されています。

リスクマネジメントオフィサーとして、取締役 代表執行役副社長 最高執行責任者兼渉外担当を任命しています。

リスクマネジメントオフィサーを委員長とするリスクマネジメント委員会を設置し、リスクマネジメントに関する重要事項の審議を行っています。

リスクマネジメント委員会の構成員については以下のとおりです。

構成員	取締役 代表執行役副社長(委員長)	青山 真二
	執行役常務	小澤 学
	執行役	藤村 英司

当事業年度において、リスクマネジメント委員会を10回開催し、当社グループの重要なリスクの特定、対応、対応状況の確認などを実施しました。

「Hondaグローバルリスクマネジメント規程」を制定し、ビジネスリスク、災害リスクなど、当社におけるリスク管理の基本方針、リスク情報の収集および発生時の対応体制などを規定しています。

各部門は上記規程に従い、定期的にリスクアセスメントなどを行っています。

重大なリスクについては、リスクマネジメントオフィサーにより、その対応状況が監視、監督されており、必要に応じてグローバル危機対策本部を設置します。半導体関連の部品調達影響の発生に対しては、グローバル危機対策本部および各事業における操業に関連する会議を通して、影響を最小化するための対応を行っています。

(注) 上記において、「当社グループ」とは、当社および当社子会社から成る企業集団を意味しています。

4 執行役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

地域や現場での業務執行を強化し、迅速かつ適切な経営判断を行うため、地域・事業・機能別の各本部や主要な組織に、代表執行役からの権限委譲を受け、担当分野の業務を執行する責任者として、執行役その他業務執行責任者を配置しています。

経営の重要事項を決定する機関として、取締役会のほか、経営会議や事業執行会議などが設置されており、各審議基準により執行役その他業務執行責任者に授けられる権限の範囲と意思決定のプロセスが明確になっています。また、指名委員会等設置会社を採用し、取締役会の監督機能を強化するとともに、意思決定のさらなる迅速化のため取締役会から経営会議への権限委譲の拡大をはかっています。

取締役会が経営ビジョン、全社中期経営計画および年度毎の事業計画を決定し、各本部長をはじめとする業務執行責任者を通じて全社で共有しています。

取締役会は、経営ビジョンおよび全社中期経営計画については年度毎に、事業計画については四半期毎に、それぞれ進捗の報告を受け、その執行状況を監督しています。

5 当社および当社子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

当社の内部統制の担当部門が、直接または地域統括会社を通じて「Honda行動規範」および内部統制システム整備の基本方針の子会社への周知をはかっています。

各子会社は、各国の法令や各社の業態に合わせた内部統制体制を整備、運用し、当社にその状況を定期的に報告しています。

子会社の監督責任を担う責任者は、各子会社の事業に関連する領域を管轄する執行役その他業務執行責任者の中から選定しています。当該責任者は、担当する子会社から、事業計画や経営状況などに関して定期的に報告を受け、事業管理関連部門やその他の関連部門と連携して、担当する各子会社を監督しています。

当社は、子会社の経営の重要事項に関して、当社の審議基準に従った当社の事前承認または当社への報告を求めており、子会社は当社の要請を含めた自社の決裁ルールの整備を行っています。

子会社は、当社の「Hondaグローバルリスクマネジメント規程」に基づき、規模や業態に応じたリスク管理体制を整備しており、重大なリスクについては当社に報告しています。なお、当社のリスク管理の担当部門が、子会社のリスク管理体制の整備、運用状況を確認しています。

当社の企業倫理改善提案窓口が、当社および子会社からの内部通報を受け付けるとともに、地域統括会社やその他の主要な子会社は、自社の内部通報窓口を設置しています。

社長直轄の業務監査部が、当社各部門の内部監査を行うほか、主要な子会社に設置された内部監査部門を監視、指導するとともに、必要に応じて子会社に対する直接監査を実施しています。

6 監査委員会の職務を補助すべき取締役および使用人に関する事項、当該取締役および使用人の執行役からの独立性に関する事項ならびに当該取締役および使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項

取締役会および指名・監査・報酬の各委員会の職務を補助する専任の組織として取締役会室を設置しています。

取締役会室に所属する従業員は、取締役会および各委員会の指揮命令下で職務を遂行しています。またその人事評価および人事異動等については、監査委員会の同意を必要としており、執行役からの独立性および監査委員会からの指示の実効性を確保しています。

7 取締役、執行役および使用人が監査委員会に報告をするための体制ならびに当該報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

監査委員会への報告基準として「監査委員会報告基準」を定め、監査委員会に対して、当社の各担当部門が、当社や子会社などの事業の状況、コンプライアンスやリスク管理などの内部統制システムの整備および運用の状況などを定期的に報告するほか、会社に重大な影響を及ぼす事項がある場合には、これを報告しています。

監査委員会に報告を行った者に対して、当該報告を行ったことを理由に不利な取扱いは行っていません。

8 監査委員の職務執行について生ずる費用の処理に係る方針、その他監査委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査委員の職務執行に必要な費用を会社として負担するため、年度毎に、監査委員会からの提案に基づいて必要な予算を確保しています。

監査委員会は、内部監査部門である業務監査部と緊密に連携して、当社や子会社などの監査を実施するほか、常勤の監査委員2名を設置し、必要に応じ、経営会議その他の重要な会議に出席しています。

<反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方およびその体制整備状況>

当社は、社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力に対して毅然とした姿勢を貫くことを基本方針とし、対応総括部署を定め、警察等の関連する外部機関と連携して対応しています。

④ 定款の定め

<取締役会にて決議できる株主総会決議事項>

機動的な資本政策および配当政策が遂行できるようにするため、剰余金の配当等について、取締役会の決議によって決定することができる旨を定款で定めています。

また、取締役および執行役が期待される役割を十分に発揮できるようにするため、会社法第426条第1項に基づき、取締役会の決議によって、同法第423条第1項の取締役および執行役(取締役および執行役であった者を含む。)の損害賠償責任を会社法で定める範囲内で免除することができる旨を定款に定めています。

<株主総会の特別決議要件>

定足数の確保をより確実にするため、株主総会における特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めています。

<取締役選任の決議要件>

取締役の選任の決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款で定めています。(取締役の選任の決議は、累積投票によらないこととしています。)

<取締役の定数>

当社の取締役は、15名以内とする旨を定款で定めています。

⑤ 株主その他の利害関係者に関する施策の実施状況

<株主総会の活性化および議決権行使の円滑化に向けての取り組み状況>

株主総会の活性化をはかるため、スライドやプレゼンテーション等を用いてわかりやすく事業報告や議案に関する説明を行うなど、情報提供の充実に努めています。また、株主総会の開会から閉会までの状況をインターネットにて視聴に限定した形でライブ中継を行い、来場できない株主への配慮と透明性の高い株主総会運営に努めています。

議決権行使の円滑化に向けては、株主総会の招集通知および参考書類を法定の期限より早い時期に発送するとともに、発送に先行して当社ウェブサイト日本語および英語の招集通知および参考書類を掲載しています。また、パソコンやスマートフォンなどを用いたインターネットによる議決権行使手段を提供しているほか、機関投資家が議案検討に十分な期間を確保できるよう、議決権行使プラットフォームに参加しています。

<IRに関する活動状況>

株主ならびに投資家の当社グループの事業内容等に対する理解を深めていただくために、アナリスト・機関投資家向けに、決算説明会を年4回実施しています。また、取締役 代表執行役社長による会見や、事業説明会などを開催しています。個人投資家に向けては、証券会社と共同で個人投資家向け説明会を開催しています。また、当社ウェブサイト内の「個人投資家の皆様へ」コンテンツにて、情報発信を行っています。国内外の機関投資家向けには、適宜、当社グループの事業戦略等の説明を実施しています。また、証券会社主催のカンファレンスやESG説明会に参加するなど、積極的な発信に努めています。

情報開示については、当社ウェブサイト(日本語版 <https://www.honda.co.jp/investors/>、英語版 <https://global.honda/investors/>)において、株主ならびに投資家向けに各種会社情報を公開しています。適時開示は日本語と英語にて同時に行っています。

さらに、株主に対しては、定期的に「株主通信」を発行し、当社の事業、製品、財務状況などに係る情報を提供しています。

<ステークホルダーの立場の尊重に係る取り組み状況>

当社では「ステークホルダーとの対話」が、当社の取り組みに対するより正しい理解につながるとともに、社会環境の変化やリスクを把握できる有益な手段でもあると考えています。こうした認識のもと、当社の事業活動により影響を受ける、もしくはその行動が事業活動に影響を与える主要なステークホルダーと社内各部門がグローバルでさまざまな機会を通じて対話を実施しています。その一環として、当社のめざす姿や価値創造の取り組みをステークホルダーの皆様にご理解いただくために昨年より統合報告書「Honda Report」を発行しています。それに伴い、これまでの「Honda Sustainability Report」に代わり、当社グループの「ESG(環境・社会・ガバナンス)」における活動内容をステークホルダーの皆様にご理解いただくため、「Honda ESG Data Book」を発行し、当社ウェブサイトにて公開する予定です。

<企業情報の開示>

決算発表や財務報告書による企業情報の開示にあたっては、取締役 代表執行役社長および執行役 最高財務責任者による開示内容の正確性・的確性の確認を補佐するために、担当の執行職などによって構成される「ディスクロージャー委員会」を設置し、開示内容について審議しています。

(2) 【役員 の 状 況】

① 役員一 覧

男性19名 女性2名 (役員のうち女性の比率10%)

a. 取締役の状況

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役会長 取締役会議長	倉石誠司	1958年7月 10日生	1982年4月 当社入社 2010年6月 同 取締役 2011年4月 同 取締役 執行役員 2011年6月 同 執行役員(取締役を退任) 2013年11月 本田技研科技(中国)有限公司総経理 2014年4月 当社常務執行役員 2016年4月 同 専務執行役員 2016年6月 同 代表取締役 副社長執行役員 2016年6月 同 リスクマネジメントオフィサー 2016年6月 同 コーポレートブランドオフィサー 2017年4月 同 最高執行責任者 2017年4月 同 戦略・事業・地域担当 2017年6月 同 代表取締役副社長 2019年4月 同 戦略・事業・地域担当取締役 2019年4月 同 四輪事業本部長 2021年6月 同 取締役 代表執行役副社長 2021年6月 同 報酬委員 2022年4月 同 取締役会長(現在) 2022年4月 同 取締役会議長(現在)	(注2)	59
取締役 指名委員	三部敏宏	1961年7月 1日生	1987年4月 当社入社 2014年4月 同 執行役員 2014年4月 同 四輪事業本部パワートレイン事業統括 2014年4月 同 四輪事業本部生産統括部パワートレイン生 産企画統括部長 2015年4月 同 四輪事業本部パワートレイン・駆動系事業 統括 2015年4月 同 四輪事業本部生産統括部駆動系統括部長 2016年4月 同 本田技術研究所取締役 専務執行役員 2018年4月 当社常務執行役員 2018年4月 同 本田技術研究所取締役副社長 2019年4月 同 代表取締役社長 2019年4月 同 当社知的財産・標準化担当 2020年4月 同 専務執行役員 2020年4月 同 ものづくり担当 (研究開発、生産、購買、品質、パーツ、サービ ス、知的財産、標準化、IT) 2020年4月 同 リスクマネジメントオフィサー 2020年6月 同 専務取締役 2020年6月 同 ものづくり担当取締役 (研究開発、生産、購買、品質、パーツ、サービ ス、知的財産、標準化、IT) 2021年4月 同 代表取締役社長 2021年4月 同 最高経営責任者(現在) 2021年6月 同 取締役 代表執行役社長(現在) 2021年6月 同 指名委員(現在)	(注2)	25

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有 株式数 (千株)
取締役 報酬委員	青山 真二	1963年12月 25日生	1986年4月 当社入社 2012年4月 同 執行役員 2013年4月 同 二輪事業本部長 2013年6月 同 取締役 執行役員 2017年4月 同 アジア・大洋州本部長 2017年4月 アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド 取締役社長 2017年6月 当社執行役員(取締役を退任) 2018年4月 同 常務執行役員 2018年4月 同 北米地域本部副本部長 2018年4月 ホンダノースアメリカ・インコーポレーテッド 取締役上級副社長 最高執行責任者 2018年4月 アメリカンホンダモーターカンパニー・ インコーポレーテッド 取締役上級副社長 最高執行責任者 2018年11月 ホンダノースアメリカ・インコーポレーテッド 取締役社長 最高執行責任者 2018年11月 アメリカンホンダモーターカンパニー・ インコーポレーテッド 取締役社長 最高執行責任者 2019年4月 当社北米地域本部長 2019年4月 ホンダノースアメリカ・インコーポレーテッド 取締役社長 最高経営責任者 2019年4月 アメリカンホンダモーターカンパニー・ インコーポレーテッド 取締役社長 最高経営責任者 2021年7月 当社電動化担当 2021年10月 同 執行役常務 2022年4月 同 執行役専務 2022年4月 同 事業開発本部長 2022年4月 同 コーポレートブランドオフィサー 2022年6月 同 四輪事業本部長 2022年6月 同 取締役 執行役専務 2023年4月 同 取締役 代表執行役副社長(現在) 2023年4月 同 最高執行責任者(現在) 2023年4月 同 報酬委員(現在) 2023年4月 同 リスクマネジメントオフィサー(現在) 2023年4月 同 渉外担当(現在)	(注2)	35
取締役	貝原 典也	1961年8月 4日生	1984年4月 当社入社 2012年4月 同 四輪品質保証部長 2013年4月 同 執行役員 2013年4月 同 品質担当 2013年6月 同 取締役 執行役員 2014年4月 同 カスタマーサービス本部長 2014年4月 同 四輪事業本部サービス統括部長 2016年4月 同 カスタマーファースト本部長 2017年6月 同 執行役員(取締役を退任) 2018年4月 同 常務執行役員 2018年4月 同 購買本部長 2020年4月 同 四輪事業本部事業統括部長 2021年4月 同 カスタマーファースト本部長 2021年4月 同 リスクマネジメントオフィサー 2021年6月 同 執行役常務 2021年10月 同 常務執行役員 2021年10月 同 北米地域本部長(現在) 2021年10月 アメリカンホンダモーターカンパニー・ インコーポレーテッド 取締役社長 最高経営責任者(現在) 2023年4月 当社執行役専務 2023年6月 同 取締役 執行役専務(現在)	(注2)	28

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 常勤監査委員	鈴木麻子	1964年1月 28日生	1987年4月 当社入社 2014年4月 東風本田汽車有限公司総経理 2016年4月 当社執行役員 2018年4月 同 日本本部副本部長 2019年4月 同 人事・コーポレートガバナンス本部長 2020年4月 同 執行職 2021年6月 同 取締役(現在) 2021年6月 同 常勤監査委員(現在)	(注2)	23
取締役 常勤監査委員	鈴木雅文	1964年4月 23日生	1987年4月 当社入社 2012年4月 同 欧州地域・C I S中近東アフリカ本部 地域事業企画室長 2013年4月 同 事業管理本部経理部長 2017年6月 同 取締役(常勤監査等委員) 2021年6月 同 取締役(現在) 2021年6月 同 常勤監査委員(現在)	(注2)	61
取締役 指名委員 監査委員	酒井邦彦	1954年3月 4日生	1979年4月 東京地方検察庁検事 2014年7月 高松高等検察庁検事長 2016年9月 広島高等検察庁検事長(2017年3月 退官) 2017年4月 第一東京弁護士会登録 2017年4月 T M I 総合法律事務所顧問弁護士(現在) 2018年6月 古河電気工業(株)社外監査役(現在) 2019年6月 当社取締役(監査等委員) 2021年6月 同 取締役(現在) 2021年6月 同 指名委員(現在) 2021年6月 同 監査委員(現在)	(注2)	1
取締役 指名委員(委員長) 報酬委員	國分文也	1952年10月 6日生	1975年4月 丸紅(株)入社 2013年4月 同 代表取締役社長 2019年4月 同 取締役会長(現在) 2019年6月 大成建設(株)社外取締役(現在) 2020年6月 当社取締役(現在) 2021年6月 同 指名委員(委員長)(現在) 2021年6月 同 報酬委員(現在) 2022年5月 日本機械輸出組合理事長(現在) 2022年5月 一般社団法人日本貿易会会長(現在)	(注2)	1
取締役 監査委員(委員長) 報酬委員	小川陽一郎	1956年2月 19日生	1980年10月 等松・青木監査法人(現有限責任監査法人トーマツ)入社 1984年3月 公認会計士登録 2013年10月 有限責任監査法人トーマツ Deputy CEO 2013年10月 トーマツグループ(現デロイト トーマツグループ) Deputy CEO 2015年6月 デロイト トウシュ トーマツ リミテッド(英国) アジア太平洋地域 代表(2018年5月 退任) 2015年7月 デロイト トーマツグループ CEO 2018年6月 同 シニアアドバイザー(2018年10月 退任) 2018年11月 小川陽一郎公認会計士事務所長(現在) 2020年6月 (株)リクルートホールディングス社外監査役 (現在) 2021年6月 当社取締役(現在) 2021年6月 同 監査委員(委員長)(現在) 2021年6月 同 報酬委員(現在)	(注2)	0

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 指名委員 報酬委員(委員長)	東 和 浩	1957年4月 25日生	1982年4月 りそなグループ入社 2013年4月 ㈱りそなホールディングス取締役 2013年4月 同 代表執行役社長 2013年4月 ㈱りそな銀行代表取締役社長 2013年4月 同 執行役員 2013年6月 一般社団法人大阪銀行協会会長 (2014年6月 退任) 2017年4月 ㈱りそな銀行取締役会長 2017年4月 同 代表取締役社長 2017年6月 一般社団法人大阪銀行協会会長 (2018年6月 退任) 2018年4月 ㈱りそな銀行取締役会長 2018年4月 同 代表取締役社長 2018年4月 同 執行役員 2020年4月 ㈱りそなホールディングス取締役会長 (2022年6月 退任) 2020年4月 ㈱りそな銀行取締役会長(2022年6月 退任) 2020年6月 S O M P Oホールディングス㈱社外取締役 (現在) 2021年6月 当社取締役(現在) 2021年6月 同 指名委員(現在) 2021年6月 同 報酬委員(委員長)(現在) 2022年6月 ㈱りそなホールディングス シニアアドバイザー (現在) 2022年6月 ㈱りそな銀行 シニアアドバイザー(現在)	(注2)	0
取締役 監査委員	永 田 亮 子	1963年7月 14日生	1987年4月 日本たばこ産業㈱入社 2008年6月 同 執行役員 2018年3月 同 常勤監査役(2023年3月 退任) 2021年6月 当社取締役(現在) 2021年6月 同 監査委員(現在) 2023年3月 ㈱メドレー社外監査役(現在)	(注2)	0
計					233

- (注) 1 取締役 酒井邦彦、國分文也、小川陽一郎、東和浩および永田亮子の各氏は、社外取締役です。
2 取締役の任期は、2022年度に係る定時株主総会の終結の時から2023年度に係る定時株主総会の終結の時までです。

b. 執行役の状況

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
代表執行役社長 最高経営責任者	三部 敏 宏	1961年7月 1日生	a. 取締役の状況参照	(注1)	25
代表執行役副社長 最高執行責任者 リスクマネジメントオフィサー 渉外担当	青山 真 二	1963年12月 25日生	a. 取締役の状況参照	(注1)	35
執行役専務 北米地域本部長	貝原 典 也	1961年8月 4日生	a. 取締役の状況参照	(注1)	28
執行役専務 電動事業開発本部長	井上 勝 史	1963年10月 22日生	1986年4月 当社入社 2015年4月 ホンダカーズインディア・リミテッド 取締役社長 2016年4月 当社執行役員 2016年4月 同 欧州地域本部長 2016年4月 ホンダモーターヨーロッパ・リミテッド 取締役社長 2020年4月 当社常務執行役員 2020年4月 同 中国本部長 2020年4月 本田技研工業(中国)投資有限公司総経理 2020年4月 本田技研科技(中国)有限公司総経理 2023年4月 当社執行役専務(現在) 2023年4月 同 電動事業開発本部長(現在)	(注1)	19
執行役常務	松川 貢	1962年5月 9日生	1985年4月 当社入社 2010年4月 同 生産本部浜松製作所長 2012年4月 同 執行役員 2012年4月 本田技研工業(中国)投資有限公司副総経理 2013年4月 当社四輪事業本部四輪生産統括部駆動系統統括部 長 2014年4月 同 四輪事業本部生産統括部駆動系統統括部 長 2015年4月 同 I T本部長 2015年4月 同 四輪事業本部生産統括部S C M統括部長 2016年4月 同 生産本部生産企画統括部長 2017年4月 同 生産本部戦略・新機種・S C M担当 2018年4月 ホンダオブアメリカ マニュファクチュアリング・ インコーポレーテッド取締役副社長 2019年4月 当社常務執行役員 2019年4月 ホンダオブアメリカ マニュファクチュアリング・ インコーポレーテッド取締役社長 2021年4月 ホンダディベロップメントアンド マニュファクチュアリングオブアメリカ・ エル・エル・シー取締役社長(現在) 2023年4月 当社執行役常務(現在)	(注1)	38
執行役常務 二輪・パワープロダクツ事業本部長 安全運転普及本部長 コンプライアンスオフィサー	安部 典 明	1962年10月 8日生	1986年4月 当社入社 2014年4月 同 執行役員 2014年4月 同 アジア・大洋州本部長 2014年4月 アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド 取締役社長 2014年4月 ホンダオートモービル(タイランド) カンパニー・リミテッド取締役社長 2017年4月 当社二輪事業本部長 2019年4月 同 常務執行役員 2021年4月 同 日本本部長 2021年4月 同 安全運転普及本部長(現在) 2021年6月 同 執行役常務(現在) 2021年10月 同 リスクマネジメントオフィサー 2022年4月 同 コンプライアンスオフィサー(現在) 2023年4月 同 二輪・パワープロダクツ事業本部長(現在)	(注1)	21

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
執行役常務	大津啓司	1964年7月7日生	1983年4月 ㈱本田技術研究所入社 2013年4月 同 執行役員 2014年4月 同 常務執行役員 2018年4月 当社執行役員 2018年4月 同 品質担当 2020年4月 同 執行職 2020年4月 同 品質改革本部長 2020年4月 同 認証法規部担当 2020年4月 同 品質監理部担当 2021年4月 同 常務執行役員 2021年4月 ㈱本田技術研究所代表取締役社長(現在) 2021年6月 当社執行役常務(現在)	(注1)	17
執行役常務 中国本部長	五十嵐雅行	1963年7月6日生	1988年4月 当社入社 2014年4月 アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド 取締役 2015年4月 当社執行役員 2015年4月 同 汎用パワープロダクツ事業本部長 2015年6月 同 取締役 執行役員 2017年4月 ホンダノースアメリカ・インコーポレーテッド 取締役副社長 2017年4月 アメリカンホンダモーターカンパニー・ インコーポレーテッド取締役副社長 2017年6月 当社執行役員 2018年4月 同 アジア・大洋州本部長 2018年4月 アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド 取締役社長 2020年4月 当社執行職 2022年4月 同 常務執行役員 2023年4月 同 執行役常務(現在) 2023年4月 同 中国本部長(現在) 2023年4月 本田技研工業(中国)投資有限公司総経理(現在) 2023年4月 本田技研科技(中国)有限公司総経理(現在)	(注1)	27
執行役常務 四輪事業本部生産統括部長	大江健介	1967年5月11日生	1990年4月 当社入社 2018年4月 ホンダカナダ・インコーポレーテッド 製造部門担当 2020年4月 当社執行職 2020年4月 同 四輪事業本部生産統括部埼玉製作所長 2021年4月 同 四輪事業本部ものづくりセンター生産技術 統括部長 2022年4月 同 常務執行役員 2022年4月 同 四輪事業本部生産統括部長(現在) 2023年4月 同 執行役常務(現在)	(注1)	3
執行役常務 四輪事業本部長 統合地域本部長	小林太郎	1966年10月17日生	1990年4月 当社入社 2018年4月 同 アフリカ・中東統括部長 2019年4月 同 執行役員 2019年4月 同 四輪事業本部四輪営業担当 2020年4月 同 執行職 2020年4月 同 四輪事業本部営業統括部長 2021年4月 同 四輪事業本部事業統括部長 2022年6月 同 四輪事業本部副本部長 2023年4月 同 執行役常務(現在) 2023年4月 同 四輪事業本部長(現在) 2023年4月 同 統合地域本部長(現在)	(注1)	5

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
執行役常務 コーポレート戦略本部長	小澤 学	1965年5月 12日生	1989年4月 当社入社 2019年4月 ㈱本田技術研究所常務取締役 2020年4月 当社執行職 2020年4月 同 経営企画統括部長 2020年4月 ホンダイノバージョンズ・ インコーポレーテッド取締役 2023年4月 当社執行役常務(現在) 2023年4月 同 コーポレート戦略本部長(現在)	(注1)	3
執行役常務 電動事業開発本部BEV開発センター所長 四輪事業本部四輪開発センター所長	伊藤 裕直	1966年12月 27日生	1989年4月 当社入社 2019年4月 ㈱本田技術研究所常務取締役 2020年4月 当社執行職 2020年4月 同 デジタル改革統括部長 2021年4月 同 IT本部長 2022年4月 同 デジタル統括部長 2022年4月 同 四輪事業本部ものづくりセンター副所長 2022年6月 同 四輪事業本部副本部長 2023年4月 同 執行役常務(現在) 2023年4月 同 電動事業開発本部BEV開発センター所長 (現在) 2023年4月 同 四輪事業本部四輪開発センター所長(現在) 2023年4月 ㈱本田技術研究所取締役(現在)	(注1)	3
執行役 最高財務責任者 コーポレート管理本部長	藤村 英司	1970年9月 1日生	1993年4月 当社入社 2019年4月 同 北米地域本部地域事業企画部長 2021年4月 同 執行職 2021年4月 同 事業管理本部長 2022年4月 同 経理財務統括部長 2023年4月 同 執行役(現在) 2023年4月 同 最高財務責任者(現在) 2023年4月 同 コーポレート管理本部長(現在)	(注1)	3
計					227

- (注) 1 執行役の任期は、選任後、2023年度に係る定時株主総会の終結後最初に招集される取締役会の終結の時までです。
- 2 当社は、2023年4月1日付で執行役員制度を廃止し、執行責任の所在をより明確にするため、会社法上の役員である執行役に一本化しました。
- 3 当社は、環境変化に柔軟かつスピーディに対応する役員体制への進化を目的に、2020年4月より執行職制度を導入しています。執行職は、経営の指示・監督のもと、各担当する領域の業務執行の責任者として会社の運営に携わっています。

② 社外取締役の状況

<社外取締役>

当社では、豊富な経験と高い見識を有し、社外の独立した立場に基づき、客観的かつ高度な視点から、広い視野に立って、当社の経営全般を監督いただける方を社外取締役に選任しています。社外取締役は2名以上とし、かつ取締役会の3分の1以上は、当社の「独立性判断基準」を満たす独立社外取締役で構成することとしています。

なお、現在の社外取締役5名全員は、当社の「社外取締役の独立性判断基準」を満たしており、いずれも当社との間に特別な利害関係はなく、一般株主との利益相反が生じるおそれはないと考えています。これを踏まえ、当社は、この5名全員を東京証券取引所の規程に定める独立役員として、同取引所に届け出えています。

また、社外取締役は、当社以外の上場会社の役員を兼務する場合、当社の職務に必要な時間を確保するため、当社の他に4社までに限るものとしています。

各社外取締役の選任の理由は以下のとおりです。

氏名	選任理由
酒井 邦彦	検察官、弁護士としての職務経験を有し、2014年7月から2017年3月まで高等検察庁検事長を務めるなど、法律の専門家としての高い専門性と豊富な経験を有しております。2019年6月からは監査等委員である社外取締役として、2021年6月からは社外取締役ならびに指名委員会および監査委員会の委員として独立した立場から当社の経営全般について監査・監督いただき、その職責を十分に果たしております。人格・見識ともに優れた人物であり、客観的かつ高度な視点から、広い視野に立って、当社の経営全般に対する監督の役割を担っていただくため、取締役に選任しています。酒井氏には、当社の経営の監督機能強化に貢献いただくとともに、指名委員会および監査委員会の委員として、取締役の候補者選任プロセスの透明性・客観性強化および監査機能強化の役割を果たしていただくことを期待しております。
國分 文也	2013年4月から丸紅㈱の社長・会長を務めるなど、企業経営に関する豊富な経験と高い見識を有しております。2020年6月からは社外取締役として、2021年6月からは社外取締役、指名委員会の委員長および報酬委員会の委員として独立した立場から当社の経営全般について監督いただき、その職責を十分に果たしております。人格・見識ともに優れた人物であり、客観的かつ高度な視点から、広い視野に立って、当社の経営全般に対する監督の役割を担っていただくため、取締役に選任しています。國分氏には、当社の経営の監督機能強化に貢献いただくとともに、指名委員会の委員長および報酬委員会の委員として、取締役の候補者選任プロセスおよび取締役・執行役の報酬決定プロセスの透明性・客観性強化の役割を果たしていただくことを期待しております。
小川 陽一郎	長年にわたる公認会計士としての職務経験を有し、2015年7月から2018年5月までデロイト トーマツ グループのCEOを務めるなど、会計の専門家としての高い専門性と豊富な経験を有しております。2021年6月からは社外取締役、監査委員会の委員長および報酬委員会の委員として独立した立場から当社の経営全般について監査・監督いただき、その職責を十分に果たしております。人格・見識ともに優れた人物であり、客観的かつ高度な視点から、広い視野に立って、当社の経営全般に対する監督の役割を担っていただくため、取締役に選任しています。小川氏には、当社の経営の監督機能強化に貢献いただくとともに、監査委員会の委員長および報酬委員会の委員として、監査機能強化および取締役・執行役の報酬決定プロセスの透明性・客観性強化の役割を果たしていただくことを期待しております。
東 和浩	2013年4月から2022年6月まで㈱りそなホールディングスの社長・会長を務めるなど、企業経営に関する豊富な経験と高い見識を有しております。2021年6月からは社外取締役、報酬委員会の委員長および指名委員会の委員として独立した立場から当社の経営全般について監督いただき、その職責を十分に果たしております。人格・見識ともに優れた人物であり、客観的かつ高度な視点から、広い視野に立って、当社の経営全般に対する監督の役割を担っていただくため、取締役に選任しています。東氏には、当社の経営の監督機能強化に貢献いただくとともに、報酬委員会の委員長および指名委員会の委員として、取締役・執行役の報酬決定プロセスおよび取締役の候補者選任プロセスの透明性・客観性強化の役割を果たしていただくことを期待しております。
永田 亮子	2008年6月から2023年3月まで日本たばこ産業㈱の執行役員・監査役を務めるなど、企業経営および監査に関する豊富な経験と高い見識を有しております。2021年6月からは社外取締役および監査委員会の委員として独立した立場から当社の経営全般について監査・監督いただき、その職責を十分に果たしております。人格・見識ともに優れた人物であり、客観的かつ高度な視点から、広い視野に立って、当社の経営全般に対する監督の役割を担っていただくため、取締役に選任しています。永田氏には、当社の経営の監督機能強化に貢献いただくとともに、監査委員会の委員として、監査機能強化の役割を果たしていただくことを期待しております。

監査委員である社外取締役は、下記「(3) 監査の状況」の「① 内部監査、会計監査および監査委員会の監査の状況」に記載のとおり、会計監査人、内部監査部門および統制部門と連携をはかっています。

<社外取締役のサポート体制>

当社では、社外取締役に対して、取締役会室が中心となり、社外取締役の機能発揮のため、以下のようなサポートを行っています。

就任時オリエンテーション	新任社外取締役候補者に対し、業界動向、社史、事業、財務、組織および内部統制システム等に関する研修を実施しています。
事前説明会や情報共有会の実施	社外取締役に取締役会へ上程される各議題の内容や背景、中長期の経営計画における位置づけ等の前提情報を十分に理解していただき、取締役会において本質的な審議が行われるようにするため、各取締役会の開催前に事前説明会を実施しています。また、全社的なリスクマネジメントの状況や中期経営計画の進捗状況など重要事項について情報共有し、取締役間で議論する機会を適宜設けています。
経営上の関心事項に対する意見交換会	社外取締役に、当社グループの長期的な課題や進むべき方向に関する認識を共有し、経営上の取り組みに対して理解をより深めていただくとともに、社外取締役の知見を今後の経営方針の議論に活かすため、取締役間の関心事項について、意見交換を実施しました。
執行役との対話／社外取締役間の対話	取締役間のコミュニケーションの充実をはかるため、社外取締役と執行役や社内取締役との対話、また、社外取締役間の対話の場を適宜設けています。
事業所の視察	当社事業への理解促進のため、工場等の事業所への視察を適宜実施しています。

<社外取締役の独立性判断基準>

当社取締役会は、社外取締役が、東京証券取引所の定める独立性基準に加え、以下に定める要件を満たすと判断される場合に、当社に対し十分な独立性を有していると判断します。

- 1 本人が、現在または過去1年間において、以下に掲げる者に該当しないこと。
 - (1) 当社の大株主(注1)の業務執行者(注2)
 - (2) 当社の主要な取引先(注3)の業務執行者、または当社を主要な取引先とする会社の業務執行者
 - (3) 当社グループの主要な借入先(注4)の業務執行者
 - (4) 当社の法定監査を行う監査法人の業務執行者または当社の監査業務の担当者
 - (5) 当社から役員報酬以外に多額(注5)の金銭等を得ているコンサルタント、会計専門家または法律専門家(法人、団体等である場合はその業務執行者)
- 2 本人の近親者(注6)が、現在または過去1年間において、1(1)ないし(5)に該当しないこと。

- (注) 1 大株主とは、事業年度末において、総議決権の10%以上の株式を直接または間接的に保有する株主をいう。
- 2 業務執行者とは、業務執行取締役および執行役ならびに執行役員等の重要な使用人をいう。
- 3 主要な取引先とは、当社の取引先であって、その年間取引金額が当社の連結売上収益または相手方の連結売上収益の2%を超えるものをいう。
- 4 主要な借入先とは、当社グループが借入れを行っている金融機関であって、その総借入金残高が事業年度末において当社または当該金融機関の連結総資産の2%を超える金融機関をいう。
- 5 多額とは、当社から收受している対価が年間1千万円を超えるときをいう。
- 6 近親者とは、本人の配偶者または二親等内の親族をいう。

(3) 【監査の状況】

① 内部監査、会計監査および監査委員会の監査の状況

<内部監査>

社長直轄の独立した内部監査部門である業務監査部は49名で構成され、当社各部門の内部監査を行うほか、主要な子会社に設置された内部監査部門を監視・指導するとともに、適宜、子会社の直接監査を実施するなどして、グループとしての内部監査体制の充実に努めています。業務監査部は、内部監査規程や各事業年度の年間監査計画について、監査委員会の意見を聴取し、経営会議および取締役会で承認を受けています。また、監査の実施結果や部門運営の基本事項について、経営会議、監査委員会および取締役会に定期的に報告を行っています。

<監査委員会監査>

a. 監査委員会の組織、人員および手続

監査委員会の組織、人員および手続については、「(1) コーポレート・ガバナンスの概要」を参照ください。

b. 当事業年度における監査委員会の活動状況

監査委員会の開催及び委員の出席状況		氏名	出席状況	
	取締役 監査委員(委員長)	小川 陽一郎	11回	(100%)
取締役 監査委員(常勤)	鈴木 麻子	11回	(100%)	
取締役 監査委員(常勤)	鈴木 雅文	11回	(100%)	
取締役 監査委員	酒井 邦彦	11回	(100%)	
取締役 監査委員	永田 亮子	11回	(100%)	
具体的な検討内容	<ul style="list-style-type: none"> ・基本方針・年間活動計画 ・各四半期 監査実施状況 ・各四半期 会計監査人 連結財務諸表レビュー ・内部監査実施状況 等 			
決議事項	13件 <ul style="list-style-type: none"> ・監査方針および監査計画 ・監査報告書 ・会計監査人の選任 ・監査委員会規則等の改定 等 			
報告事項	19件 <ul style="list-style-type: none"> ・各四半期の監査実施状況 ・会計監査人や内部監査部門の監査実施状況 ・ディスクロージャー委員会の実施状況 等 			

その他、当事業年度において、監査委員会は、監査委員会が定めた監査委員会監査基準、監査の方針、業務の分担などに従い、オンライン会議システムも活用しながら、以下の主な活動を通じて取締役および執行役の職務執行の監査を行いました。

業務執行責任者との対話	<ul style="list-style-type: none"> ・執行役その他業務執行責任者との経営環境や事業環境に関する意見交換を実施（当事業年度 75回開催（内15回 社外取締役（監査委員）参加））
重要会議への出席	<ul style="list-style-type: none"> ・経営会議等の重要会議へ出席し、必要に応じた意見表明を行うことにより、取締役・執行役の職務執行状況の監視・検証を実施
決裁書類の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・稟議書等の重要な決裁書類を定期的に関覧・確認
往査の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・年間の監査計画に基づき往査を実施 ・一部の国内子会社や海外グループ会社の往査においては、オンライン会議システムを用いた監査を実施 ・当社 本部・事業所 19か所（内1か所 社外取締役（監査委員）参加） ・国内子会社 19社（内5社 社外取締役（監査委員）参加） ・海外グループ会社 25拠点（内6拠点 社外取締役（監査委員）参加）
グループ・ガバナンス体制の強化	<ul style="list-style-type: none"> ・国内グループ会社の監査役等と情報共有や意見交換を実施 ・社外取締役（監査委員）からの講演など、グループ・ガバナンス体制を維持・強化するための活動を実施

<会計監査>

当社は、有限責任 あずさ監査法人による会社法、金融商品取引法および米国証券取引法に基づく会計監査を受けています。

有限責任 あずさ監査法人による継続監査期間は18年です。

継続監査期間は、現任監査人である有限責任 あずさ監査法人が当社の有価証券報告書に含まれる連結財務諸表及び財務諸表の監査を継続実施した期間について記載したものです。なお、同監査法人が所属するネットワークであるKPMGは当社の米国SEC登録目的の監査を1962年より継続実施しています。

有限責任 あずさ監査法人においては、会計監査業務を執行した公認会計士3名（知野雅彦、神塚勲および鎌田健志）とその補助者77名（公認会計士24名、その他53名）の計80名が監査業務に従事しました。

<相互連携>

監査委員会は、会計監査人、内部監査部門および統制部門との間で、以下の主な活動を通じて連携をはかっています。

会計監査人との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・会計監査人との間で会合を開催し、会計監査の計画や結果などについて説明・報告を受け、意見交換を実施（当事業年度 8回開催（内7回 社外取締役（監査委員）参加）） ・会計監査に係る監査上の主要な検討事項について会計監査人と協議を実施 ・会計監査人による監査の実施状況についての報告を受け議論を実施
内部監査部門との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・内部監査部門である業務監査部からの監査方針、監査計画および監査結果について定期報告を受け、必要に応じて追加の情報提供を要請 ・一部の監査に関しては、業務監査部と連携して実施
統制部門との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・「監査委員会報告基準」に基づき、経理部門、法務部門などの統制部門から監査委員会または監査委員会が選定する監査委員へ定期的に報告を受け議論を実施

<監査法人の選定方針と選定した理由>

a. 会計監査人を選定した理由

当社グループは、複数の事業をグローバルに展開しており、財務情報の国際的比較可能性の向上および均質化、財務報告の効率性向上の観点から、国際会計基準を採用しています。また、当社株式は東京証券取引所に加え、ADR(米国預託証券)によりニューヨーク証券取引所に上場しています。

これらに対応できる監査体制、独立性および専門性を有し、監査の品質管理状況、監査報酬水準等を考慮し、適切な監査の実施が可能な監査法人と判断したことから、有限責任 あずさ監査法人を会計監査人を選定しています。

当社監査委員会は、以下の「会計監査人の解任又は不再任の決定の方針」に基づき、当事業年度における会計監査人の監査職務遂行状況等を確認しました。その結果、会計監査人には、当該方針に該当する事象は認められないことから、有限責任 あずさ監査法人を2023年度の会計監査人として、解任もしくは不再任しないこととしました。

b. 「会計監査人の解任又は不再任の決定の方針」の内容

当社監査委員会は、会計監査人に、重大な法令違反や監査品質の著しい低下などの、会計監査人としてふさわしくないと判断される事象が認められた場合、会社法に定められた手続きに従って会計監査人の解任をする、または株主総会に提出する会計監査人の解任もしくは不再任に関する議案の内容を決定します。

<監査委員会による監査法人の評価>

当事業年度において、当社監査委員会は、会計監査人の再任の適否について、日本監査役協会の定める実務指針に基づき会計監査人の評価項目を定め、執行役、社内関係部署および会計監査人から必要な資料を入手しかつ報告を受け、会計監査人の職務遂行状況、監査体制、独立性および専門性などが適切であるかに関し、評価を行いました。

② 監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	584	7	597	4
連結子会社	456	48	482	43
計	1,040	55	1,079	47

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク(KPMG)に属する組織に対する報酬の内容(a.を除く)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	—	—	—	—
連結子会社	3,354	92	4,216	117
計	3,354	92	4,216	117

上記 a. および b. の報酬に関する前連結会計年度および当連結会計年度における非監査業務の内容は、会計事項や情報開示に関する助言および指導などです。

③ その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

④ 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定にあたっては、会計監査人と協議のうえ、当社の規模・特性、監査日程等の諸要素を勘案しています。また、当社は、会計監査人の独立性を保つため、監査報酬については、監査委員会による事前同意を得ることとしています。

⑤ 監査委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当事業年度において、当社監査委員会は、執行役、社内関係部署および会計監査人からの必要な資料の入手や報告の聴取を通じた前事業年度の監査実績の検証と評価を基準に、当事業年度の会計監査人の監査計画の内容、報酬の前提となる見積りの算出根拠を検討した結果、会計監査人の報酬等につき会社法第399条第1項および第4項の同意を行いました。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の個人別の報酬等の決定方針の決定方法

当社は、コーポレートガバナンスの要諦である役員報酬を当社の基本理念、経営方針およびめざす姿の実現に向けた重要な原動力と捉えています。取り巻く環境が大きく変化する中で、全社ビジョンの達成に向け、スピード感を持って変革を推し進めていくための適切なリスクテイクを促し、かつ経営責任を的確に反映する制度内容とするため、以下の決定方針を報酬委員会にて定めています。

- 1 当社の役員報酬制度は、企業価値の継続的な向上を可能とするよう、短期のみでなく中長期的な業績向上への貢献意欲を高める目的で設計され、職務執行の対価として毎月固定額を支給する月度報酬と、当該事業年度の業績に連動した S T I (Short Term Incentive) および中長期の業績と連動した L T I (Long Term Incentive) によって構成されます。
- 2 月度報酬は、報酬委員会で決議された報酬基準に基づいて毎月固定額を支給します。
- 3 S T I は、各事業年度の業績を勘案して、報酬委員会の決議によって決定し、支給します。
- 4 L T I は、持続的な成長に向けた健全なインセンティブとして機能するよう、報酬委員会で決議された基準および手続に基づいて中長期の業績と連動して自社株式および金銭を支給します。
- 5 執行役を兼務する取締役および執行役の報酬は、月度報酬、S T I および L T I によって構成され、報酬委員会によって決議された報酬基準に基づいて構成比率を定めています。構成比率は、役位ごとの経営責任の重さに応じて変動報酬の比率を高めています。
- 6 社外取締役その他執行役を兼務しない取締役の報酬は、月度報酬のみで構成されます。
- 7 L T I の対象とならない取締役および執行役においても、自社株式の保有を通じて株主目線に立った経営を実現し、会社の持続的成長と中長期的な企業価値の向上を促進するため、報酬のうち一定程度を役員持株会に拠出し、自社株式を取得することとします。
- 8 取締役および執行役は、L T I として取得した自社株式および役員持株会を通じて取得した自社株式を、在任期間に加えて退任後 1 年間は継続して保有することとします。

② 報酬水準の考え方

当社の取締役および執行役の報酬水準は、外部調査機関の客観的な報酬データおよび外部コンサルタントからの情報提供等を活用し、同規模の日系グローバル企業20~30社程度をピアグループとした調査・分析を行い、多様で優秀な人材を確保するための競争力のある水準を設定します。また経営環境の変化に対応し、適宜見直しを行うものとします。

③ 報酬構成

当社の執行役の報酬は、月度報酬、S T I および L T I によって構成され、企業価値の継続的な向上に向けたインセンティブとしての観点から、役位ごとの経営責任の重さに応じた S T I および L T I の比率を設定します。

1 執行役報酬制度の概要

報酬種類	業績連動の有無	変動幅	支給方法	支給時期	報酬構成割合 (S T I / L T I が基準額で支給の場合)				
					執行役 社長	執行役 副社長	執行役 専務	執行役 常務	執行役
月度報酬	固定	—	金銭	毎月	25%	40%	50%		
S T I	短期業績連動	0~180%	金銭	年1回	25%	30%	25%		
L T I	中長期業績連動	50~150%	株式	毎年のポイント付与から3年後に退任時までの譲渡制限を設定した株式を交付	50%	30%	25%		

2 月度報酬

月度報酬は、職務執行の対価として役位に応じた固定額を金銭にて毎月支給します。

3 S T I

S T I は、各事業年度の会社業績および各執行役の個人業績を勘案し、金銭にて年 1 回支給する業績連動報酬です。

具体的な計算方式としては S T I 標準額に対して会社業績係数を用いて支給水準を定めた上で、個人業績係数を掛け合わせ最終的な支給金額を決定します。

会社業績係数は、各事業年度における企業価値に対する貢献度合いをはかる重要指標である連結決算の営業利益率および親会社の所有者に帰属する当期利益を K P I とし、K P I の達成度に応じて 0～150% の範囲で変動します。

個人業績係数は、各執行役の役割に応じ設定した個別目標の達成度に応じて 80～120% の範囲で変動します。社長の評価は報酬委員会が決定し、社長を除く執行役については社長が評価を行った上で、報酬委員会で決定します。

会社業績係数(変動幅・・・0～150%)

K P I 項目 (連結決算)	評価方法	各 K P I のウェイト
営業利益率	目標値に対する達成度	50%
親会社の所有者に帰属する当期利益		50%

個人業績係数(変動幅・・・80～120%)

K P I 項目	評価方法	各 K P I のウェイト
役割に応じ設定した個別目標	個別目標の達成度	100%

$$\boxed{\text{S T I 支給額}} = \boxed{\text{S T I 標準額}} \times \boxed{\text{会社業績係数}} \times \boxed{\text{個人業績係数}}$$

4 L T I

L T I は、中長期での企業価値の持続的な向上に対する貢献意識をより高めるとともに、株主の皆様との利益共有をはかることを目的として、財務および非財務の業績に連動した株式を信託の仕組みを通じて支給する非金銭の業績連動報酬です。

毎年 4 月に、役位別の基準額に応じたポイントを付与し、ポイント付与から 3 年後に業績に連動したポイント相当分の株式を支給します。また、交付された株式には譲渡制限期間を設け、原則として当社の取締役および執行役のいずれの地位からも退任する時点で譲渡制限を解除します。また、L T I として取得した自社株式は、在任期間に加えて退任後 1 年間は継続して保有することとします。

業績評価は、中長期での企業価値向上に対する貢献度合いをはかる重要指標により行います。財務指標は、連結営業利益率および連結税引前利益を K P I とし、3 事業年度における成長度に応じて 50～150% で変動します。非財務指標は、ブランド価値、S R I 指標および従業員活性度を K P I とし、評価対象年度の目標値に対する達成度に応じて 50～150% で変動します。

なお、一定の非違行為、または法令・会社規程等の違反があった場合には、ポイントの失効および譲渡制限期間中の株式の当社による無償取得を実施するものとします。

K P I 項目		評価方法	ウェイト	変動幅
財務指標	連結営業利益率	3 事業年度における成長度により評価	35%	50～150%
	連結税引前利益		35%	
非財務指標	ブランド価値	目標値に対する達成度により評価	30%	
	S R I 指標			
	従業員活性度			

(注) 非財務指標については以下の指標を基に評価を行っております。

- ・ブランド価値：第三者の調査会社による二輪、四輪、パワープロダクツ事業に対する調査
- ・S R I 指標：D o w J o n e s S u s t a i n a b i l i t y W o r l d I n d e x
- ・従業員活性度：第三者の調査会社による各地域の従業員活性度調査

また、L T I の対象とならない国内非居住の執行役についても、L T I で用いる業績評価に基づき、同等の報酬額の加減算を行うこととしています。

なお、当事業年度における評価結果は、S T I については基準額に対して6%の減額、L T I については業績連動係数109%での支給としています。

④ 非金銭報酬等に関する事項

持続的な成長に向けた健全なインセンティブとして機能するよう、報酬委員会で承認された基準および手続に基づき、中長期の業績と連動して当社株式と当社株式に生じる配当を交付および給付しています。

⑤ 報酬委員会の概要および活動内容

報酬委員会は、取締役および執行役の個人別の報酬等の内容の決定、その他法令または定款に定められた職務を行っています。報酬委員会は、社外取締役3名を含む4名の取締役で構成されています。また、委員長は、独立社外取締役の中から選定しています。

2022年度は合計11回の報酬委員会を開催し、全委員とも出席率は100%でした。

2022年度に議論された主な事項は以下のとおりです。

- ・基本方針・年間活動計画
- ・役員実績評価
- ・L T I および株式交付規程

⑥ 当事業年度に係る取締役および執行役の個人別の報酬等の内容が決定方針に沿うものであると報酬委員会が判断した理由

当社は、報酬水準、報酬構成および業績連動報酬の目標設定等と役員の報酬の決定に関する基本方針との整合性について、外部環境との比較や外部コンサルタントからの情報提供も踏まえて多角的に検証・審議しております。

このことから、報酬委員会は当事業年度に係る取締役および執行役の個人の報酬の内容が決定方針に沿うものであると判断しています。

⑦ 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別総額および対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)			対象となる 役員の員数(名)
		固定報酬	業績連動報酬		
			S T I	L T I	
取締役 (社外取締役を除く)	291	288	—	3	4
社外取締役	90	90	—	—	5
執行役	794	282	229	283	6
計	1,175	660	229	286	15

- (注) 1 上記の取締役には執行役を兼務する取締役3名は含まれていません。
- 2 上記については、当事業年度において、当社が当社役員に対して支給した報酬等の金額を記載しており、2022年6月22日開催の第98回定時株主総会終結の時をもって退任した取締役1名に対する支給額および、2022年5月31日をもって退任した執行役1名に対する支給額を含んでいます。
- 3 執行役のS T I は、2023年6月15日開催の報酬委員会にて決議された支給金額を記載しています。
- 4 L T I の総額は、B I P 信託に関して当事業年度中に付与した株式交付ポイントに係る費用計上額であり、非金銭報酬等に該当します。

⑧ 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額および種類別の額

氏名 (役員区分)	連結報酬等の総額 (百万円)	会社区分	連結報酬等の種類別の額 (百万円)		
			固定報酬	業績連動報酬	
				S T I	L T I
倉石 誠司 (取締役)	138	当社	135	—	3
三部 敏宏 (取締役 執行役)	348	当社	94	97	157
竹内 弘平 (取締役 執行役)	164	当社	69	49	46
青山 真二 (取締役 執行役)	115	当社	45	38	32

- (注) 1 連結報酬等の総額が1億円以上である者に限定して記載しています。
 2 上記の固定報酬については、当該役員に対する当事業年度の支給額であり、S T Iについては、2023年6月15日開催の報酬委員会にて決議された支給金額、L T Iについては、B I P信託に関して当事業年度中に当該役員に付与した株式交付ポイントに係る費用計上額を記載しています。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、専ら株式の価値の変動または株式に係る配当によって利益を得ることを目的とする株式を純投資目的である投資株式として区分し、それ以外の株式を保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式として区分しています。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式については、中長期的な観点で、取引の性質や規模等に加え、保有に伴う便益やリスクなどを定性、定量両面から検証し、株式保有の必要性を判断しています。また、取締役会において、その保有の必要性を検証しています。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	50	123,954
非上場株式以外の株式	46	134,135

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	7	4,738	中長期的な企業価値の向上を目的とした取得
非上場株式以外の株式	1	19,005	中長期的な企業価値の向上を目的とした取得

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	—	—
非上場株式以外の株式	1	42

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
スタンレー電気(株)	16,735,527	9,235,527	原材料等の調達取引の安定化 資本業務提携による追加取得 にともなう増加	有
	49,051	21,463		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	14,502,680	14,502,680	金融取引等の安定化	無
	12,296	11,026		
東京海上ホールディングス(株)	3,278,310	1,092,770	金融取引等の安定化	無
	8,349	7,789		
大同特殊鋼(株)	1,305,345	1,305,345	原材料等の調達取引の安定化	有
	6,787	4,816		
ニッコンホールディングス(株)	2,449,208	2,449,208	物流取引等の安定化	有
	6,061	5,008		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
オリエンタルホールディングス・ ビー・エイチ・ディ	25,119,424	25,119,424	事業関係の安定化	無
	5,025	4,450		
新電元工業(株)	1,336,332	1,336,332	原材料等の調達取引の安定化	有
	4,470	4,176		
日本特殊陶業(株)	1,541,693	1,541,693	原材料等の調達取引の安定化	有
	4,218	3,047		
日本精機(株)	3,753,238	3,753,238	原材料等の調達取引の安定化	有
	3,175	3,201		
SES AI コーポレーション	7,500,000	7,500,000	共同開発関係の安定化	無
	2,954	8,307		
NOK(株)	1,717,000	1,717,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	2,511	1,969		
(株)ジーエス・ユアサ コーポレーション	958,650	958,650	原材料等の調達取引の安定化	有
	2,283	2,244		
日本製鉄(株)	700,153	700,153	原材料等の調達取引の安定化	有
	2,184	1,520		
(株)商船三井	509,385	169,795	物流取引等の安定化	有
	1,686	1,742		
(株)エフテック	2,551,000	2,551,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	1,681	1,390		
住友ゴム工業(株)	1,400,945	1,400,945	原材料等の調達取引の安定化	有
	1,675	1,574		
SOUNDHOUND AI インコーポレーテッド	4,209,262	—	共同開発関係の安定化 新規上場にとまなう増加	無
	1,551	—		
森六ホールディングス(株)	792,000	792,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	1,458	1,431		
横浜ゴム(株)	489,240	489,240	原材料等の調達取引の安定化	有
	1,368	827		
三櫻工業(株)	2,000,000	2,000,000	原材料等の調達取引の安定化	無
	1,318	1,400		
SOMPOホールディングス(株)	250,000	250,000	金融取引等の安定化	無
	1,313	1,345		
東ブレ(株)	964,309	964,309	原材料等の調達取引の安定化	有
	1,183	1,133		
GRABホールディングス リミテッド	2,704,452	2,704,452	事業関係の安定化	無
	1,086	1,158		
(株)ブリヂストン	200,000	200,000	原材料等の調達取引の安定化	無
	1,073	951		
(株)ハイレックスコーポレーション	850,253	850,253	原材料等の調達取引の安定化	有
	1,031	1,018		
パナソニック ホールディングス(株)	776,414	776,414	原材料等の調達取引の安定化	有
	917	922		
(株)ミツバ	1,662,549	1,662,549	原材料等の調達取引の安定化	有
	867	615		
AGC(株)	172,752	172,752	原材料等の調達取引の安定化	有
	850	847		
(株)J-MAX	988,950	988,950	原材料等の調達取引の安定化	有
	697	642		
日本ペイントホールディングス(株)	500,000	500,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	619	541		
住友電気工業(株)	363,000	363,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	616	530		
名港海運(株)	458,419	458,419	物流取引等の安定化	有
	542	527		
アルプスアルパイン(株)	397,868	397,868	原材料等の調達取引の安定化	無
	504	481		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
NTN(株)	1,100,663	1,100,663	原材料等の調達取引の安定化	有
	370	235		
(株)NITTAN	1,233,690	1,233,690	原材料等の調達取引の安定化	有
	310	349		
澤藤電機(株)	260,000	260,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	304	420		
(株)リケン	84,525	84,525	原材料等の調達取引の安定化	有
	219	206		
(株)今仙電機製作所	290,650	290,650	原材料等の調達取引の安定化	有
	213	174		
JFEホールディングス(株)	122,444	122,444	原材料等の調達取引の安定化	無
	205	210		
関西ペイント(株)	105,000	105,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	187	207		
日本発条(株)	189,750	189,750	原材料等の調達取引の安定化	有
	179	167		
(株)日新	80,200	80,200	物流取引等の安定化	有
	169	131		
(株)みずほフィナンシャルグループ	81,470	81,470	金融取引等の安定化	無
	153	127		
MS&ADインシュアランスグループ ホールディングス(株)	37,233	37,233	金融取引等の安定化	無
	152	148		
凸版印刷(株)	52,500	52,500	原材料等の調達取引の安定化	有
	139	113		
大同工業(株)	151,000	151,000	原材料等の調達取引の安定化	有
	114	140		
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	—	9,920	金融取引等の安定化	無
	—	39		

- (注) 1 定量的な保有効果については記載が困難です。保有の合理性は各銘柄について、中長期的な観点で取引の性質や規模等に加え、保有に伴う便益やリスク等を検証し判断しています。
- 2 東京海上ホールディングス(株)は、2022年10月1日付で普通株式1株を3株とする株式分割を行っています。
- 3 (株)商船三井は、2022年4月1日付で普通株式1株を3株とする株式分割を行っています。

みなし保有株式

該当事項はありません。

③ 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

④ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

⑤ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年(昭和51年)大蔵省令第28号、以下「連結財務諸表規則」という。)第93条の規定により、国際会計基準(以下「IFRS」という。)に準拠して作成しています。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年(昭和38年)大蔵省令第59号、以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しています。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成していません。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2022年4月1日から2023年3月31日まで)の連結財務諸表および事業年度(2022年4月1日から2023年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人により監査を受けています。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備を行っています。その内容は、以下のとおりです。

(1) 会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての的確に対応するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入するなど、情報収集に努めています。

(2) IFRSの適用については、国際会計基準審議会(以下「IASB」という。)が公表するプレスリリースや基準書を随時入手し、最新の基準の把握を行っています。また、IFRSに基づいて連結財務諸表を適正に作成するため、IFRSに準拠したグループ会計方針および関連する会計指針を作成し、これらに基づいてグループで統一した会計処理を行っています。

(3) 取締役 代表執行役社長および執行役 最高財務責任者による開示内容の正確性・的確性の確認を補佐するために、担当の執行役または執行職などによって構成される「ディスクロージャー委員会」を設置し、開示内容について審議しています。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結財政状態計算書】

		(単位：百万円)	
		前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
(資産の部)			
流動資産			
現金及び現金同等物	5	3,674,931	3,803,014
営業債権	6	896,768	1,060,271
金融サービスに係る債権	7	1,694,113	1,899,493
その他の金融資産	8	217,743	263,892
棚卸資産	9	1,918,548	2,167,184
その他の流動資産		439,322	384,494
流動資産合計		8,841,425	9,578,348
非流動資産			
持分法で会計処理されている投資	10	967,404	915,946
金融サービスに係る債権	7	3,740,383	3,995,259
その他の金融資産	8	819,654	855,070
オペレーティング・リース資産	11	5,159,129	4,726,292
有形固定資産	12	3,079,407	3,168,109
無形資産	13	849,507	870,900
繰延税金資産	23	91,592	105,792
その他の非流動資産		424,652	454,351
非流動資産合計		15,131,728	15,091,719
資産合計		23,973,153	24,670,067

		(単位：百万円)	
		前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
(負債及び資本の部)			
流動負債			
営業債務	14	1,236,233	1,426,333
資金調達に係る債務	15	3,118,304	3,291,195
未払費用		375,601	419,570
その他の金融負債	16	236,900	324,110
未払法人所得税		96,116	86,252
引当金	17	268,388	362,701
その他の流動負債		672,857	741,963
流動負債合計		6,004,399	6,652,124
非流動負債			
資金調達に係る債務	15	4,984,252	4,373,973
その他の金融負債	16	282,083	288,736
退職給付に係る負債	18	282,054	255,852
引当金	17	253,625	270,169
繰延税金負債	23	990,754	877,300
その他の非流動負債		403,440	449,622
非流動負債合計		7,196,208	6,515,652
負債合計		13,200,607	13,167,776
資本			
資本金		86,067	86,067
資本剰余金		185,495	185,589
自己株式		△328,309	△484,931
利益剰余金		9,539,133	9,980,128
その他の資本の構成要素		990,438	1,417,397
親会社の所有者に帰属する持分合計		10,472,824	11,184,250
非支配持分		299,722	318,041
資本合計	19	10,772,546	11,502,291
負債及び資本合計		23,973,153	24,670,067

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

		(単位：百万円)	
	注記 番号	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
売上収益	20	14,552,696	16,907,725
営業費用			
売上原価		△11,567,923	△13,576,133
販売費及び一般管理費		△1,326,485	△1,669,908
研究開発費	21	△787,056	△880,915
営業費用合計		△13,681,464	△16,126,956
営業利益		871,232	780,769
持分法による投資利益	10	202,512	117,445
金融収益及び金融費用			
受取利息	22	25,627	73,071
支払利息	22	△16,867	△36,112
その他(純額)	22	△12,314	△55,608
金融収益及び金融費用合計		△3,554	△18,649
税引前利益		1,070,190	879,565
法人所得税費用	23	△309,489	△162,256
当期利益		760,701	717,309
当期利益の帰属：			
親会社の所有者		707,067	651,416
非支配持分		53,634	65,893
1株当たり当期利益(親会社の所有者に帰属)			
基本的小および希薄化後	24	411円09銭	384円02銭

【連結包括利益計算書】

	注記 番号	(単位：百万円)	
		前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
当期利益		760,701	717,309
その他の包括利益(税引後)			
純損益に振り替えられることのない項目			
確定給付制度の再測定		117,042	3,350
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定する金融資産の公正価値の純変動		58,635	△18,465
持分法適用会社の その他の包括利益に対する持分	10	1,786	292
純損益に振り替えられる可能性のある項目			
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定する金融資産の公正価値の純変動		△682	△474
在外営業活動体の為替換算差額		680,724	422,960
持分法適用会社の その他の包括利益に対する持分	10	77,447	30,429
その他の包括利益(税引後)合計	19	934,952	438,092
当期包括利益		1,695,653	1,155,401
当期包括利益の帰属：			
親会社の所有者		1,619,997	1,081,429
非支配持分		75,656	73,972

③ 【連結持分変動計算書】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

注記 番号	親会社の所有者に帰属する持分					合計	非支配 持分	資本合計
	資本金	資本 剰余金	自己株式	利益 剰余金	その他の 資本の 構成要素			
2021年4月1日残高	86,067	172,049	△273,786	8,901,266	196,710	9,082,306	290,533	9,372,839
当期包括利益								
当期利益				707,067		707,067	53,634	760,701
その他の包括利益(税引後)	19				912,930	912,930	22,022	934,952
当期包括利益合計				707,067	912,930	1,619,997	75,656	1,695,653
利益剰余金への振替	19			119,202	△119,202	—		—
所有者との取引等								
配当金の支払額	19			△188,402		△188,402	△45,131	△233,533
自己株式の取得			△62,758			△62,758		△62,758
自己株式の処分			578			578		578
株式報酬取引		△233				△233		△233
資本取引及びその他		13,679	7,657			21,336	△21,336	—
所有者との取引等合計		13,446	△54,523	△188,402		△229,479	△66,467	△295,946
2022年3月31日残高	86,067	185,495	△328,309	9,539,133	990,438	10,472,824	299,722	10,772,546

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

注記 番号	親会社の所有者に帰属する持分					合計	非支配 持分	資本合計
	資本金	資本 剰余金	自己株式	利益 剰余金	その他の 資本の 構成要素			
2022年4月1日残高	86,067	185,495	△328,309	9,539,133	990,438	10,472,824	299,722	10,772,546
当期包括利益								
当期利益				651,416		651,416	65,893	717,309
その他の包括利益(税引後)	19				430,013	430,013	8,079	438,092
当期包括利益合計				651,416	430,013	1,081,429	73,972	1,155,401
利益剰余金への振替	19			3,054	△3,054	—		—
所有者との取引等								
配当金の支払額	19			△213,475		△213,475	△51,601	△265,076
自己株式の取得			△157,001			△157,001		△157,001
自己株式の処分			379			379		379
株式報酬取引		94				94		94
資本取引及びその他							△4,052	△4,052
所有者との取引等合計		94	△156,622	△213,475		△370,003	△55,653	△425,656
2023年3月31日残高	86,067	185,589	△484,931	9,980,128	1,417,397	11,184,250	318,041	11,502,291

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

	注記 番号	(単位：百万円)	
		前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー			
税引前利益		1,070,190	879,565
減価償却費、償却費及び減損損失 (オペレーティング・リース資産除く)		611,063	721,630
持分法による投資利益		△202,512	△117,445
金融収益及び金融費用		△56,352	△71,661
金融サービスに係る利息収益及び利息費用		△155,872	△146,461
資産及び負債の増減			
営業債権		△24,037	△155,924
棚卸資産		△208,895	△171,467
営業債務		50,122	105,272
未払費用		△68,811	42,122
引当金及び退職給付に係る負債		△156,079	90,880
金融サービスに係る債権		509,741	△41,480
オペレーティング・リース資産		171,600	768,070
その他資産及び負債		28,981	218,369
その他(純額)		△19,782	△1,222
配当金の受取額		193,555	244,902
利息の受取額		237,724	324,234
利息の支払額		△97,884	△159,020
法人所得税の支払及び還付額		△203,130	△401,342
営業活動によるキャッシュ・フロー		1,679,622	2,129,022
投資活動によるキャッシュ・フロー			
有形固定資産の取得による支出		△268,143	△475,048
無形資産の取得及び内部開発による支出		△181,083	△157,440
有形固定資産及び無形資産の売却による収入		27,108	16,206
子会社の売却による収入 (処分した現金及び現金同等物控除後)		—	740
持分法で会計処理されている投資の取得による支出		—	△23,826
その他の金融資産の取得による支出		△488,631	△527,334
その他の金融資産の売却及び償還による収入		534,693	488,642
投資活動によるキャッシュ・フロー		△376,056	△678,060
財務活動によるキャッシュ・フロー			
短期資金調達による収入		7,487,724	9,127,333
短期資金調達に係る債務の返済による支出		△7,960,144	△8,684,799
長期資金調達による収入		2,002,823	971,067
長期資金調達に係る債務の返済による支出		△1,761,561	△2,382,190
親会社の所有者への配当金の支払額		△188,402	△213,475
非支配持分への配当金の支払額		△53,813	△51,376
自己株式の取得及び売却による収支		△62,180	△156,622
リース負債の返済による支出		△80,165	△78,297
財務活動によるキャッシュ・フロー		△615,718	△1,468,359
為替変動による現金及び現金同等物への影響額		229,063	145,480
現金及び現金同等物の純増減額		916,911	128,083
現金及び現金同等物の期首残高		2,758,020	3,674,931
現金及び現金同等物の期末残高	5	3,674,931	3,803,014

【連結財務諸表注記】

1 報告企業

本田技研工業株式会社(以下「当社」という。)は日本に所在する企業です。当社および連結子会社は、二輪車、四輪車、パワープロダクツなどの開発、製造、販売を世界各国で行っています。また、これらの事業における販売活動をサポートするために、顧客および販売店に対して金融サービス事業を営んでいます。主な生産拠点は、日本、米国、カナダ、メキシコ、中国、インド、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、ブラジルにあります。

2 作成の基礎

(1) 連結財務諸表がIFRSに準拠している旨の記載

当社は、連結財務諸表規則第1条の2に掲げる「指定国際会計基準特定会社」の要件をすべて満たしているため、同第93条の規定により、連結財務諸表をIFRSに準拠して作成しています。

(2) 測定的基础

当社の連結財務諸表は、連結財務諸表注記の「3 重要な会計方針」に別途記載している一部の資産および負債を除き、取得原価を基礎として作成しています。

(3) 機能通貨および表示通貨

当社の連結財務諸表は、当社の機能通貨である日本円を表示通貨としており、特に注釈のない限り、百万円未満を四捨五入して表示しています。

(4) 未適用の新たな基準書および解釈指針

連結財務諸表の承認日までに公表されている基準書および解釈指針のうち、適用が強制されないため当連結会計年度末において適用していないもので、当社の連結財務諸表に重要な影響を与えるものではありません。

(5) 見積りおよび判断の利用

当社および連結子会社は、IFRSに準拠した連結財務諸表を作成するにあたり、会計方針の適用、資産・負債および収益・費用の報告額ならびに偶発資産・偶発債務の開示に影響を及ぼす判断、見積りおよび仮定の設定を行っています。実際の結果は、これらの見積りとは異なる場合があります。

なお、これらの見積りや仮定は継続して見直しています。会計上の見積りの変更による影響は、見積りを変更した報告期間およびその影響を受ける将来の報告期間において認識されます。

当社の連結財務諸表に重要な影響を与える会計方針の適用に際して行った判断に関する情報は、以下のとおりです。

- ・連結子会社、関連会社および共同支配企業の範囲（注記3(1), 3(2)）
- ・開発から生じた無形資産の認識（注記3(8)）
- ・リースを含む契約の会計処理（注記3(9)）

当社の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性のある会計上の見積りおよび仮定に関する情報は、以下のとおりです。

- ・オペレーティング・リース資産の残存価額（注記3(6)）
- ・償却原価で測定する金融資産およびその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類した負債性証券の評価（注記6, 7, 8）
- ・金融商品の公正価値（注記26）
- ・棚卸資産の正味実現可能価額（注記9）
- ・非金融資産の回収可能価額（注記11, 12, 13）
- ・引当金の測定（注記17）
- ・確定給付負債(資産)の測定（注記18）
- ・繰延税金資産の回収可能性（注記23）
- ・偶発債務により経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性および規模（注記28）

3 重要な会計方針

(1) 連結の基礎

当社の連結財務諸表は、当社および当社が直接または間接に支配する連結子会社、ならびに当社および連結子会社が支配するストラクチャード・エンティティの勘定を全て含んでいます。全ての重要な連結会社間の債権・債務残高および取引高は、当社の連結財務諸表作成にあたり消去しています。

支配とは、投資先への関与により生じる変動リターンに対するエクスポージャーまたは権利を有し、かつ、その投資先に対するパワー(関連性のある活動を指図する能力)を通じてそれらのリターンに影響を及ぼす能力を有している場合をいいます。当社および連結子会社は、支配の有無を、議決権または類似の権利の状況や投資先に関する契約内容などにに基づき、総合的に判断しています。

ストラクチャード・エンティティとは、議決権または類似の権利が支配の有無の判定において決定的な要因とならないように設計された事業体をいいます。当社および連結子会社は、ストラクチャード・エンティティに対する支配の有無を、議決権または類似の権利の保有割合に加え、投資先に対する契約上の取決めなどを勘案して総合的に判定し、支配を有するストラクチャード・エンティティを連結しています。

連結子会社の財務諸表は、支配を獲得した日から支配を喪失した日までの間、当社の連結財務諸表に含めています。連結子会社が適用する会計方針が当社の適用する会計方針と異なる場合には、必要に応じて当該連結子会社の財務諸表を調整しています。

支配の喪失に至らない連結子会社に対する当社の所有持分の変動は、資本取引として会計処理しています。また、連結子会社に対する支配を喪失した場合には、残存する持分を支配を喪失した時点の公正価値で測定したうえで、支配の喪失から生じた利得および損失を純損益として認識しています。

(2) 関連会社および共同支配企業に対する投資(持分法で会計処理されている投資)

関連会社とは、当社および連結子会社が財務および営業の方針決定に対して重要な影響力を有しているものの、支配または共同支配を有していない企業をいいます。

共同支配企業とは、当社および連結子会社を含む複数の当事者が共同支配の取決めに基づき、それぞれの当事者が投資先の純資産に対する権利を有している場合の当該投資先をいいます。共同支配は、契約上合意された支配の共有であり、関連性のある活動に関する意思決定に、支配を共有している当事者全員の一致した合意を必要とする場合にのみ存在します。

関連会社および共同支配企業に対する投資は、投資先が関連会社または共同支配企業に該当すると判定された日から該当しないと判定された日まで、持分法で会計処理しています。持分法では、投資を当初認識時に取得原価で認識し、それ以降に投資先が認識した純損益およびその他の包括利益に対する当社および連結子会社の持分に応じて投資額を変動させています。持分法の適用に際し、持分法適用会社となる関連会社または共同支配企業が適用する会計方針が当社の適用する会計方針と異なる場合には、必要に応じて当該関連会社または共同支配企業の財務諸表を調整しています。

関連会社または共同支配企業に該当しなくなり、持分法の適用を中止した場合には、残存する持分を公正価値で測定したうえで、持分法の適用を中止したことから生じた利得または損失を純損益として認識しています。

(3) 外貨換算

① 外貨建取引

外貨建取引は、取引が発生した時点の為替レートで当社および連結子会社の各機能通貨に換算しています。外貨建債権債務は、報告期間の期末日の為替レートで当社および連結子会社の各機能通貨に換算しています。この結果生じる損益および決済時の為替換算による損益は、純損益として認識し、連結損益計算書の金融収益及び金融費用のその他(純額)に含めています。

② 在外営業活動体

在外の連結子会社、関連会社および共同支配企業(以下「在外営業活動体」という。)の財務諸表項目の換算については、資産および負債は報告期間の期末日の為替レートにより、また、収益および費用は機能通貨が超インフレ経済国の通貨である場合を除き、対応する期間の平均為替レートにより円貨に換算しています。この結果生じる換算差額はその他の包括利益に認識し、連結財政状態計算書のその他の資本の構成要素に含めています。在外営業活動体を処分し、支配、重要な影響力または共同支配企業の取決めを喪失した場合は、この在外営業活動体に関連する換算差額の累積額を純損益に振り替えています。

(4) 金融商品

金融商品とは、一方の企業にとっての金融資産と、他の企業にとっての金融負債または資本性証券の双方を生じさせる契約をいいます。当社および連結子会社は、契約の当事者となった時点で、金融商品を金融資産または金融負債として認識しています。なお、金融資産の売買は、取引日において認識または認識の中止を行っています。

① デリバティブ以外の金融資産

当社および連結子会社は、当初認識時に、デリバティブ以外の金融資産を償却原価で測定する金融資産、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産および純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しています。

当社および連結子会社は、金融資産から生じるキャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅した時点、または、金融資産から生じるキャッシュ・フローを受け取る契約上の権利を譲渡し、リスクと経済的便益を実質的にすべて移転した時点で、金融資産の認識を中止しています。

(償却原価で測定する金融資産)

当社および連結子会社は、契約上のキャッシュ・フローを回収することを事業上の目的として保有する金融資産で、かつ金融資産の契約条件により特定の日に元本および元本残高に対する利息の支払いのみによるキャッシュ・フローを生じさせる金融資産を、償却原価で測定する金融資産に分類しています。償却原価で測定する金融資産は、顧客との契約から生じる営業債権を除き当初認識時に公正価値で測定し、顧客との契約から生じる営業債権は当初認識時に取引価額で測定しています。償却原価で測定する金融資産は、当初認識後は実効金利法による償却原価により測定しています。

(公正価値で測定する金融資産)

当社および連結子会社は、償却原価で測定する金融資産以外の金融資産を、公正価値で測定する金融資産に分類しています。公正価値で測定する金融資産は、さらに以下の区分に分類または指定しています。

(その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産)

負債性証券のうち、契約上のキャッシュ・フローを回収することと売却の両方を事業上の目的として保有する金融資産で、かつ金融資産の契約条件により特定の日に元本および元本残高に対する利息の支払いのみによるキャッシュ・フローを生じさせる金融資産を、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しています。当該負債性証券は、当初認識時に公正価値で測定し、当初認識後の公正価値の変動を、減損利得または減損損失および為替差損益を除き、その他の包括利益として認識しています。当該負債性証券の認識の中止が行われる場合、過去にその他の包括利益に認識した利得または損失の累計額を資本から純損益に振り替えています。

また、投資先との取引関係の維持または強化を主な目的として保有する株式などの資本性証券について、当初認識時に、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に指定しています。その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に指定した資本性証券は、当初認識時に公正価値で測定し、当初認識後の公正価値の変動をその他の包括利益として認識しています。ただし、当該資本性証券から生じる配当金については、原則として、純損益として認識しています。当該資本性証券の認識の中止が行われる場合、過去にその他の包括利益に認識した利得または損失の累計額を直接利益剰余金に振り替えています。

(純損益を通じて公正価値で測定する金融資産)

当社および連結子会社は、公正価値で測定する金融資産のうち、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類または指定しなかった金融資産を、純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しています。純損益を通じて公正価値で測定する金融資産は、当初認識時に公正価値で測定し、当初認識後の公正価値の変動を純損益として認識しています。

(現金及び現金同等物)

現金及び現金同等物は、現金、随時引き出し可能な預金、および容易に換金可能であり、かつ価値の変動について僅少なリスクしか負わない流動性の高い短期投資により構成されています。当社および連結子会社は、取得日から3ヵ月以内に満期の到来する極めて流動性の高い債券および類似金融商品を現金同等物としています。

② デリバティブ以外の金融負債

当社および連結子会社は、デリバティブ以外の金融負債を、当初認識時に公正価値で測定し、当初認識後は、実効金利法による償却原価により測定しています。

当社および連結子会社は、契約上の義務が免責、取消しまたは失効した時点で、金融負債の認識を中止していません。

③ デリバティブ

当社および連結子会社は、為替リスクおよび金利リスクを管理する目的で、種々の外国為替契約および金利契約を締結しています。これらの契約には、為替予約、通貨オプション契約、通貨スワップ契約および金利スワップ契約が含まれています。

当社および連結子会社は、これらのすべてのデリバティブについて、デリバティブの契約の当事者となった時点で資産または負債として当初認識し、公正価値により測定しています。当初認識後における公正価値の変動は、直ちに純損益として認識しています。

なお、前連結会計年度および当連結会計年度において、当社および連結子会社がヘッジ手段として指定しているデリバティブはありません。

④ 金融資産および金融負債の相殺

当社および連結子会社は、金融資産および金融負債について、資産および負債として認識された金額を相殺するため法的に強制力のある権利を有し、かつ、純額で決済するか、もしくは資産の実現と債務の決済を同時に実行する意思を有している場合にのみ相殺し、連結財政状態計算書において純額で表示しています。

(5) 棚卸資産

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のうち、いずれか低い額により測定しています。棚卸資産の取得原価には購入原価、加工費が含まれており、原価の算定に当たっては原則として先入先出法を使用しています。加工費には通常操業度に基づく製造間接費の配賦額を含めています。正味実現可能価額は、通常の事業の過程における予想販売価額から、完成までに要する見積原価および販売に要する見積費用を控除して算定しています。

(6) オペレーティング・リース資産

当社および連結子会社は、原価モデルを採用し、オペレーティング・リース資産を取得原価から減価償却累計額および減損損失累計額を控除した金額で表示しています。

当社および連結子会社は、オペレーティング・リースとして貸与している車両について、当初認識時に取得原価で測定し、リース契約で定められている期間にわたり、残存価額まで定額法によって減価償却しています。

米国に所在する当社の最も重要な金融子会社においては、オペレーティング・リース開始時に、将来の中古車価格の見積りに基づいて、リース車両の契約上の残存価額を設定しています。リース車両については、契約上の残存価額と見積残存価額のいずれか低い価額までリース期間にわたり均等償却をし、少なくとも四半期に一度、見積残存価額を見直しています。なお、見積残存価額の修正については、オペレーティング・リース資産の減価償却費として、残存リース期間にわたり均等償却しています。車両をリースしている顧客は、リース期間満了時において、そのリース車両を契約上の残存価額で買い取るか、もしくは販売店に返却する選択権を持っています(リース期間満了前にリース車両を買い取る場合は、契約上の未払残高で買い取ります)。リース車両を返却された販売店は、リース期間満了時に顧客から返却されたリース車両を契約上の残存価額で買い取るか、市場価格で買い取る選択権を持っています(リース期間満了前にリース車両を買い取る場合は、契約上の未払残高で買い取ります)。リース車両を返却された販売店がリース車両を買い取らなかった場合は、市場のオークションによってリース車両を売却します。

見積残存価額は以下の2つの重要な構成要素に基づいています。

① 予測リース車両返却率、すなわちリース期間満了時に、顧客から金融子会社に返却されると予測されるリース車両の割合

② リース期間満了時における予測市場価額

これらの見積りにあたっては、一般的な経済指標、新車および中古車の外部市場情報並びに過去の実績等のさまざまな要素も勘案しています。

(7) 有形固定資産

当社および連結子会社は、原価モデルを採用し、有形固定資産を取得原価から減価償却累計額および減損損失累計額を控除した金額で表示しています。

当社および連結子会社は、有形固定資産を当初認識時に取得原価で測定しています。有形固定資産の取得後に発生した支出については、その支出により将来当社および連結子会社に経済的便益がもたらされることが見込まれる場合に限り、有形固定資産の取得原価に含めています。

当社および連結子会社は、土地等の減価償却を行わない資産を除き、各資産について、それぞれの見積耐用年数にわたり、見積残存価額まで定額法によって減価償却しています。

有形固定資産の減価償却費を算定するために使用した主な見積耐用年数は、以下のとおりです。

資産	見積耐用年数
建物及び構築物	3年～50年
機械装置及び備品	2年～20年

有形固定資産の減価償却方法、耐用年数および残存価額は、各連結会計年度末に見直しを行い、変更が必要な場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって調整しています。

連結財政状態計算書上の有形固定資産には、リース取引による使用権資産が含まれています。
使用権資産の会計処理については、「3 重要な会計方針 (9) リース」を参照ください。

(8) 無形資産

当社および連結子会社は、原価モデルを採用し、無形資産を取得原価から償却累計額および減損損失累計額を控除した金額で表示しています。

(研究開発費)

製品の開発に関する支出は、当社および連結子会社はその開発を完成させる技術上および事業上の実現可能性を有しており、その成果を使用する意図、能力およびそのための十分な資源を有し、将来経済的便益を得られる可能性が高く、信頼性をもってその原価を測定可能な場合にのみ、無形資産として認識しています。

資産計上した開発費(以下「開発資産」という。)の取得原価は、上記の無形資産に関する認識要件を最初に満たした時点から開発が完了した時点までの期間に発生した費用の合計額で、製品の開発に直接起因する全ての費用が含まれます。開発資産は、開発した製品の見積モデルライフサイクル期間(主に2年～6年)にわたり定額法で償却しています。

研究に関する支出および上記の認識要件を満たさない開発に関する支出は、発生時に費用として認識していません。

(その他の無形資産)

当社および連結子会社は、その他の無形資産を当初認識時に取得原価で測定し、それぞれの見積耐用年数にわたり、定額法で償却しています。その他の無形資産は、主に自社利用目的のソフトウェアであり、その見積耐用年数は概ね3年～5年です。

無形資産の償却方法および耐用年数は、各連結会計年度末に見直しを行い、変更が必要な場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって調整しています。

(9) リース

当社および連結子会社は、契約の開始時に、契約がリースであるまたはリースを含んだものであるか判定します。特定された資産の使用を支配する権利を一定期間にわたり対価と交換に移転する契約は、リースであるかまたはリースを含んでいます。使用期間全体を通じて特定された資産の使用からの経済的便益のほとんどすべてを得る権利と、特定された資産の使用を指図する権利を借手が有している場合に、資産の使用を支配する権利が移転すると判定されます。

① 借手としてのリース

当社および連結子会社は、使用権資産およびリース負債をリース開始日に認識しています。

当社および連結子会社は、使用権資産を当初認識時に取得原価で測定しており、当該取得原価は、主にリース開始日以前に支払ったリース料を調整したリース負債の当初認識の金額、借手に発生した当初直接コスト、原資産の解体および除去費用や原状回復費用の見積りの合計で構成されています。当社および連結子会社は、リース構成部分と非リース構成部分を含んだ契約について、非リース構成部分を区別せずに、リース構成部分と非リース構成部分を単一のリース構成部分として会計処理しています。

当社および連結子会社は、原価モデルを採用し、使用権資産を取得原価から減価償却累計額および減損損失累計額を控除した金額で表示しています。当初認識後、リース開始日から原資産の耐用年数の終了時またはリース期間の終了時のいずれか早い方まで定額法を用いて減価償却しています。原資産の見積耐用年数は、「3 重要な会計方針 (7) 有形固定資産」を参照ください。

リース負債はリース開始日現在で支払われていないリース料の現在価値で当初認識しています。当該リース料は、リースの計算利率が容易に算定できる場合には、当該利率を用いて割引していますが、そうでない場合には、当社および連結子会社の追加借入利率を使用しています。リース負債の測定に含まれているリース料は、主に固定リース料(延長オプションの行使が合理的に確実である場合の延長期間のリース料を含む)、解約しないことが合理的に確実である場合を除いたリースの解約に対するペナルティの支払額で構成されています。

当初認識後、リース負債の残高に対して一定の利率となるように算定された金融費用を増額し、支払われたリース料を減額しています。リース負債は、延長オプションや解約オプションの行使可能性の評価に変更が生じた場合に再測定しています。

リース負債が再測定された場合には、リース負債の再測定の金額を使用権資産の修正として認識しています。ただし、使用権資産の帳簿価額がゼロまで減額され、さらにリース負債を減額する場合は、当該再測定の残額を純損益に認識しています。

② 貸手としてのリース

当社および連結子会社は、リースを含む契約について、原資産の所有に伴うリスクと経済的価値のほとんどすべてを借手に移転するリースをファイナンス・リースに分類し、その他のリースをオペレーティング・リースとして分類しています。サブリースは、原資産ではなくヘッドリースから生じる使用権資産を参照して分類しています。

当社の金融子会社は、車両のリースを行っています。ファイナンス・リースに係る顧客からの受取債権は、リース投資未回収総額をリースの計算利率で割引いた現在価値で当初認識し、連結財政状態計算書上の金融サービスに係る債権に含めています。オペレーティング・リースとして貸与している車両は、オペレーティング・リース資産として連結財政状態計算書に表示しています。

契約がリース構成部分と非リース構成部分を含んでいる場合には、契約における対価をIFRS第15号に従い配分しています。

(10) 減損

① 償却原価で測定する金融資産およびその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類された負債性証券

当社および連結子会社は、営業債権以外の償却原価で測定する金融資産およびその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類された負債性証券の減損に係る引当金については次の3つのステージからなる予想損失モデルにより測定しています。

ステージ1 当初認識以降に信用リスクが著しく増大していない金融資産に対する12ヶ月の予想信用損失

ステージ2 当初認識以降に信用リスクが著しく増大したが、信用減損はしていない金融資産に対する全期間の予想信用損失

ステージ3 信用減損金融資産に対する全期間の予想信用損失

営業債権の減損に係る引当金については常に全期間の予想信用損失に等しい金額で測定しています。

全期間の予想信用損失は金融資産の予想存続期間にわたるすべての生じ得る債務不履行事象から生じる予想信用損失であり、12ヶ月の予想信用損失は全期間の予想信用損失のうち報告日後12ヶ月以内に生じ得る債務不履行事象から生じる予想信用損失です。予想信用損失は契約上のキャッシュ・フローと回収が見込まれるキャッシュ・フローの差額を当初の実効金利で割引き、確率加重した見積りです。

(金融サービスに係る債権 - クレジット損失引当金)

当社の金融子会社は、金融サービスに係る債権の予想信用損失をクレジット損失引当金として計上しています。

信用リスクが著しく増大しているかの判定にあたり、顧客に対する金融債権については、個別的にも集会的にも評価しています。個別的な評価は延滞状況に基づいています。過去の実績では30日以上支払いを延滞した顧客に対する金融債権は貸倒れの可能性が高くなっているため、30日以上期日を超過している場合に信用リスクが著しく増大しているとみなしています。集会的な評価は当初認識した会計期間、担保の形態、契約期間、クレジットスコア等のリスク特性が共通するグループごとに当初認識時からの予想債務不履行率の相対的な変化に基づき行っています。販売店に対する金融債権については、信用リスクが著しく増大しているかの判定は販売店ごとに行われており、支払状況のほか、財政状態の変化や財務制限条項の順守状況等の要素を考慮しています。

金融サービスに係る債権に関する債務不履行の定義は、各金融子会社の内部リスク管理の実務によって定められています。米国に所在する当社の最も重要な金融子会社においては、60日の期日超過を債務不履行とみなしています。60日以上期日を超過している顧客に対する金融債権については、担保車両の差押えを含む回収活動を強化しており、債務不履行の顧客に対する金融債権を信用減損しているとみなしています。販売店に対する金融債権は販売店の重大な財政的困難、債務不履行や延滞等の契約違反、破産等、当初の契約条件に従ってすべての金額を回収できないという証拠が存在する場合に、信用減損しているとみなしています。

当社の米国の金融子会社は、顧客に対する金融債権のうち回収不能と見込まれる部分について、期日を120日超過した時点または担保車両を差し押さえた時点で直接償却しています。履行強制活動が行われる期間や方法は、様々な法的規制により制限されますが、未回収残高は通常、直接償却後も数年間は履行強制活動の対象となります。回収不能額の見積りには、履行強制活動による回収見込額が反映されています。販売店に対する金融債権は回収するという合理的な予想を有していない場合に直接償却しています。

当社の米国の金融子会社において、顧客に対する金融債権に係る予想信用損失の測定は、リスク特性が共通するグループごとに行われ、過去の実績、現在の状況、失業率、中古車価格、消費者の債務返済負担などの将来予測に基づく要素を反映しています。

② 非金融資産および持分法で会計処理されている投資

当社および連結子会社は、棚卸資産および繰延税金資産以外の非金融資産(主に、オペレーティング・リース資産、有形固定資産および無形資産)について、各報告期間の期末日において、資産が減損している可能性を示す兆候の有無を評価しています。減損の兆候が存在する場合は、当該資産の回収可能価額を算定し、当該資産の帳簿価額との比較を行うことにより、減損テストを行っています。

持分法で会計処理されている投資は、減損の客観的な証拠が存在する場合に、投資全体の帳簿価額を単一の資産として減損テストを行っています。

資産または資金生成単位の回収可能価額は、売却費用控除後の公正価値と使用価値のいずれか高い方の金額としています。使用価値は、資産または資金生成単位から生じると見込まれる将来キャッシュ・フローの現在価値として算定しています。資金生成単位は、他の資産または資産グループのキャッシュ・インフローから概ね独立したキャッシュ・インフローを生成する最小の識別可能な資産グループであり、個別の資産について回収可能価額の見積りが不可能な場合に、当該資産が属する資金生成単位の回収可能価額を算定しています。

資産または資金生成単位の帳簿価額が回収可能価額を上回る場合に、当該帳簿価額を回収可能価額まで減額するとともに、当該減額を減損損失として純損益に認識しています。資金生成単位に関連して認識した減損損失は、当該単位内の各資産の帳簿価額を比例的に減額するように配分しています。

過去に減損損失を認識した資産または資金生成単位について減損損失が既に存在しないか、あるいは減少している可能性を示す兆候がある場合で、当該資産または資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を上回るときは、減損損失を戻入れています。この場合、減損損失を認識しなかった場合の減価償却または償却控除後の帳簿価額を上限として、資産の帳簿価額を回収可能価額まで増額しています。

(11) 引当金

当社および連結子会社は、過去の事象の結果として現在の法的または推定的債務を負っており、当該債務を決済するために経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性が高く、その債務の金額について信頼性をもって見積ることができる場合に、引当金を認識しています。

引当金は、報告期間の期末日における現在の債務を決済するために要する最善の見積りで測定しています。なお、貨幣の時間的価値が重要な場合には、債務の決済に必要と見込まれる支出の現在価値で引当金を測定しています。現在価値の算定に当たっては、貨幣の時間的価値および当該債務に特有のリスクを反映した税引前の利率を割引率として使用しています。

(12) 従業員給付

① 短期従業員給付

給与、賞与および年次有給休暇などの短期従業員給付については、勤務の対価として支払うと見込まれる金額を、従業員が勤務を提供した時に費用として認識しています。

② 退職後給付

当社および連結子会社は、確定給付制度および確定拠出制度を含む各種退職給付制度を有しています。

(確定給付制度)

確定給付制度については、確定給付制度債務の現在価値から制度資産の公正価値を控除した金額を、負債または資産として認識しています。

確定給付制度債務の現在価値および勤務費用は、予測単位積増方式を用いて制度ごとに算定しています。割引率は、確定給付制度債務と概ね同じ支払期日を有し、かつ、給付の支払見込みと同じ通貨建ての優良社債の報告期間の期末日における市場利回りに基づいて決定しています。確定給付負債(資産)の純額に係る純利息費用は、確定給付負債(資産)の純額に割引率を乗じて算定しています。

制度改定や制度縮小により生じた確定給付制度債務の現在価値の変動として算定される過去勤務費用は、制度の改定や縮小が発生した時に、純損益として認識しています。

確定給付制度債務の現在価値と制度資産の公正価値の再測定に伴う調整額は、発生時にその他の包括利益として認識し、直ちに利益剰余金に振り替えています。

(確定拠出制度)

確定拠出制度については、確定拠出制度に支払うべき拠出額を、従業員が関連する勤務を提供した時に費用として認識しています。

(13) 資本

① 普通株式

当社が発行した普通株式は資本として分類し、発行価額を資本金および資本剰余金に含めています。

② 自己株式

当社および連結子会社が取得した自己株式は、取得原価で認識し、資本の控除項目としています。自己株式を売却した場合は、受取対価を資本の増加として認識し、帳簿価額と受取対価の差額は資本剰余金に含めています。

(14) 収益認識

① 製品の販売

製品の販売は、二輪事業、四輪事業、パワープロダクツ事業及びその他の事業に区分されます。各事業におけるより詳細な情報については、連結財務諸表注記の「4 セグメント情報」を参照ください。

当社および連結子会社は、製品に対する支配が顧客に移転した時点で収益を認識しています。この移転は、通常、顧客に製品を引渡した時点で行われます。収益は、顧客との契約で明確にされている対価に基づき測定し、第三者のために回収する金額を除いています。契約の対価の総額は、すべての製品およびサービスにそれらの独立販売価格に基づき配分され、独立販売価格は、類似する製品またはサービスの販売価格やその他の合理的に利用可能な情報を参照して算定しています。

当社および連結子会社は、販売店に対して奨励金を支給していますが、これは一般的に当社および連結子会社から販売店への値引きに該当します。また、当社および連結子会社は、販売店の販売活動をサポートするため、顧客に対して主として市場金利以下の利率によるローンやリースを提示する形式の販売奨励プログラムを提供しています。このプログラムの提供に要する金額は、顧客に提示した利率と市場金利の差に基づいて算定しています。これらの奨励金は、取引価格の算定における変動対価として考慮されることとなり、製品が販売店に売却された時点で認識する売上収益の金額から控除しています。売上収益は、変動対価に関する不確実性がその後解消される際に重大な戻入れが生じない可能性が非常に高い範囲でのみ認識しています。

製品の販売に係る対価の支払は、通常、製品に対する支配が顧客に移転してから30日以内に行われます。

なお、製品の販売における顧客との契約には製品が合意された仕様に従っていることを保証する条項が含まれており、当社および連結子会社は、この保証に関連する費用に対して製品保証引当金を認識しています。当該引当金に関するより詳細な情報については、連結財務諸表注記の「17 引当金」を参照ください。

② 金融サービスの提供

金融サービスに係る債権の利息収益は、実効金利法によって認識しています。金融サービスに係る債権の初期手数料および初期直接費用は、実効金利の計算に含めて、金融債権の契約期間にわたって認識しています。

当社の金融子会社が提供する金融サービスにはリースが含まれています。ファイナンス・リースに係る受取債権の利息収益は、実効金利法によって認識しています。なお、当社および連結子会社が、製造業者または販売業者としての貸手となる場合、製品の販売とみなされる部分について、売上収益と対応する原価を製品の販売と同様の会計方針に従って認識しています。オペレーティング・リースから生じる収益は、リース期間にわたり定額法によって認識しています。

(15) 法人所得税

法人所得税費用は、当期税金と繰延税金から構成されています。当期税金と繰延税金は、直接資本またはその他の包括利益で認識される項目を除き、純損益で認識しています。

当期税金は、当期の課税所得について納付すべき税額、または税務上の欠損金について還付されると見込まれる税額で測定しています。これらの税額は、報告期間の期末日において制定または実質的に制定されている税率および税法に基づいて算定しています。

繰延税金資産および負債は、報告期間の期末日における資産および負債の税務基準額と会計上の帳簿価額との差額である一時差異ならびに税務上の繰越欠損金および繰越税額控除に関する将来の税務上の影響に基づいて認識しています。なお、繰延税金資産は、将来減算一時差異、税務上の繰越欠損金および繰越税額控除について、将来それらを利用できる課税所得が稼得される可能性が高い範囲内で認識しています。

連結子会社および関連会社に対する投資ならびに共同支配企業に対する持分に関する将来加算一時差異については、当該一時差異の解消時期をコントロールでき、かつ予測可能な期間内に当該一時差異が解消しない可能性が高い場合は、繰延税金負債を認識していません。また、連結子会社および関連会社に対する投資ならびに共同支配企業に対する持分に関する将来減算一時差異については、当該一時差異からの便益を利用するのに十分な課税所得があり、予測可能な将来において実現する可能性が高い範囲でのみ繰延税金資産を認識しています。

繰延税金資産および負債は、報告期間の期末日に制定または実質的に制定されている税率および税法に基づいて、資産が実現する期間または負債が決済される期間に適用されると予測される税率で測定しています。繰延税金資産および負債の測定に当たっては、報告期間の期末日において当社および連結子会社が意図する資産および負債の帳簿価額の回収または決済の方法から生じる税務上の影響を反映しています。

繰延税金資産の回収可能性は、各報告期間の期末日において見直し、繰延税金資産の一部または全部の税務便益を実現させるのに十分な課税所得の稼得が見込めないと判断される部分について、繰延税金資産の帳簿価額を減額しています。

繰延税金資産および繰延税金負債は、当期税金に対する資産と負債を相殺する法律上の強制力のある権利を有しており、法人所得税が同一の税務当局によって同一の納税主体に課されている場合、または異なる納税主体に課されている場合でこれらの納税主体が当期税金に対する資産と負債を純額で決済するか、あるいは資産の実現と負債の決済を同時に行うことを意図している場合に相殺しています。

当社および連結子会社の税務処理を税務当局が認める可能性が高くないと判断した場合に、不確実性の影響を財務諸表に反映しています。

当社および連結子会社は、2023年5月23日に公表された、「国際的な税制改革-第2の柱モデルルール (IAS第12号の改訂)」を適用し、経済協力開発機構(OECD)が公表した第2の柱モデルルールを導入するために制定または実質的に制定された税法から生じる法人所得税(適格国内最低トップアップ税を含む)に関する繰延税金資産および繰延税金負債について認識および開示を行っていません。

(16) 1株当たり当期利益

基本的1株当たり当期利益は、親会社の所有者に帰属する当期利益を対応する期間の加重平均発行済普通株式数で除して算定しています。

4 セグメント情報

当社のセグメント情報は、経営組織の形態と製品およびサービスの特性に基づいて4つに区分されています。二輪事業・四輪事業・金融サービス事業の報告セグメントに加え、それ以外の事業セグメントをパワープロダクツ事業及びその他の事業として結合表示しています。

以下のセグメント情報は、独立した財務情報が入手可能な構成単位で区分され、定期的に当社の最高経営意思決定機関により経営資源の配分の決定および業績の評価に使用されているものに基づいています。また、セグメント情報における会計方針は、当社の連結財務諸表における会計方針と一致しています。

各事業の主要製品およびサービス、事業形態は以下のとおりです。

事業	主要製品およびサービス	事業形態
二輪事業	二輪車、ATV、Side-by-Side、関連部品	研究開発・生産・販売・その他
四輪事業	四輪車、関連部品	研究開発・生産・販売・その他
金融サービス事業	金融	当社製品に関わる販売金融およびリース業・その他
パワープロダクツ事業及びその他の事業	パワープロダクツ、関連部品、その他	研究開発・生産・販売・その他

(1) 事業の種類別セグメント情報

前連結会計年度および当連結会計年度における当社および連結子会社の事業の種類別セグメント情報は、以下のとおりです。

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

					(単位：百万円)		
	二輪事業	四輪事業	金融サービス事業	パワープロダクツ事業及びその他の事業	計	消去又は全社	連結
売上収益							
(1) 外部顧客	2,185,253	9,147,498	2,820,667	399,278	14,552,696	—	14,552,696
(2) セグメント間	—	213,095	2,656	22,480	238,231	△238,231	—
計	2,185,253	9,360,593	2,823,323	421,758	14,790,927	△238,231	14,552,696
営業利益(△損失)	311,492	236,207	333,032	△9,499	871,232	—	871,232
持分法による投資利益	33,510	168,415	—	587	202,512	—	202,512
資産	1,448,926	9,563,553	11,318,756	475,124	22,806,359	1,166,794	23,973,153
持分法で会計処理されている投資	104,535	855,309	—	7,560	967,404	—	967,404
減価償却費および償却費	65,423	510,755	883,712	17,018	1,476,908	—	1,476,908
資本的支出	49,203	410,169	2,028,700	15,748	2,503,820	—	2,503,820
減損損失(非金融資産)	△23	13,097	1,874	276	15,224	—	15,224
金融サービスに係る債権 - クレジット損失引当金およびリース残価損失引当金繰入額(△戻入額)	—	—	9,282	—	9,282	—	9,282

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	二輪事業	四輪事業	金融サービス 事業	パワープロダ クツ事業及び その他の事業	計	消去又は全社	連結
売上収益							
(1) 外部顧客	2,908,983	10,593,519	2,954,098	451,125	16,907,725	—	16,907,725
(2) セグメント間	—	188,198	2,046	25,307	215,551	△215,551	—
計	2,908,983	10,781,717	2,956,144	476,432	17,123,276	△215,551	16,907,725
営業利益(△損失)	488,709	△16,629	285,857	22,832	780,769	—	780,769
持分法による投資利益	49,119	66,973	—	1,353	117,445	—	117,445
資産	1,580,521	10,082,519	11,197,017	480,166	23,340,223	1,329,844	24,670,067
持分法で会計処理 されている投資	110,665	795,973	—	9,308	915,946	—	915,946
減価償却費および償却費	65,746	600,617	908,942	21,571	1,596,876	—	1,596,876
資本的支出	59,101	613,351	1,546,683	14,386	2,233,521	—	2,233,521
減損損失(非金融資産)	4,662	24,777	5,259	91	34,789	—	34,789
金融サービスに係る債権 - クレジット損失引当金および リース残価損失引当金繰入額 (△戻入額)	—	—	27,018	—	27,018	—	27,018

- (注) 1 各セグメントの営業利益(△損失)の算出方法は、連結損益計算書における営業利益の算出方法と一致しており、持分法による投資利益、金融収益及び金融費用および法人所得税費用を含んでいません。また、各セグメントに直接賦課できない営業費用は、最も合理的な配賦基準に基づいて、各セグメントに配賦していません。
- 2 各セグメントおよび消去又は全社の資産の合計は、連結財政状態計算書の総資産と一致しており、持分法で会計処理されている投資、デリバティブ資産および繰延税金資産などを含んでいます。また、消去又は全社に含まれる金額を除く、各セグメントに直接賦課できない資産については、最も合理的な配賦基準に基づいて、各セグメントに配賦していません。
- 3 セグメント間取引は、独立企業間価格で行っています。
- 4 資産の消去又は全社の項目には、セグメント間取引の消去の金額および全社資産の金額が含まれています。全社資産の金額は、前連結会計年度末および当連結会計年度末において、それぞれ1,319,995百万円、1,462,656百万円であり、その主な内容は、当社の現金及び現金同等物、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産です。
- 5 製品保証引当金繰入額は、前連結会計年度および当連結会計年度において、それぞれ118,378百万円、289,850百万円であり、主に四輪事業に含まれています。
- 6 費用として認識した棚卸資産の評価減の金額は、前連結会計年度および当連結会計年度において、それぞれ11,295百万円、8,400百万円であり、四輪事業や、パワープロダクツ事業及びその他の事業に含まれている航空機および航空機エンジンに関連するものです。
- 7 資本的支出には、使用権資産は含まれていません。

(2) 製品およびサービスに関する情報

前連結会計年度および当連結会計年度における当社および連結子会社の製品およびサービス別に区分した売上収益の金額は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
二輪車、関連部品	2,066,557	2,742,572
ATV、Side-by-Side、関連部品	118,696	166,411
四輪車、関連部品	10,582,764	12,093,972
金融	1,385,401	1,453,645
パワープロダクツ、関連部品	294,577	360,385
その他	104,701	90,740
合計	14,552,696	16,907,725

(3) 地域に関する情報

前連結会計年度および当連結会計年度における当社および連結子会社の所在地別に区分した売上収益および非流動資産(金融商品、繰延税金資産および確定給付資産の純額を除く)の金額は、以下のとおりです。

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

	(単位：百万円)			
	日本	米国	その他	計
売上収益	2,354,532	6,728,800	5,469,364	14,552,696
非流動資産 (金融商品、繰延税金資産および確定給付 資産の純額を除く)	3,036,832	4,490,562	1,768,697	9,296,091

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

	(単位：百万円)			
	日本	米国	その他	計
売上収益	2,409,584	7,905,936	6,592,205	16,907,725
非流動資産 (金融商品、繰延税金資産および確定給付 資産の純額を除く)	2,937,148	4,373,329	1,728,475	9,038,952

(4) 地域別セグメント補足情報

当社は、IFRSで要求される開示に加え、財務諸表利用者に以下の情報を開示します。

所在地別セグメント情報(当社および連結子会社の所在地別)

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

	(単位：百万円)							
	日本	北米	欧州	アジア	その他の地域	計	消去又は全社	連結
売上収益								
(1) 外部顧客	2,354,532	7,618,932	602,695	3,393,323	583,214	14,552,696	—	14,552,696
(2) セグメント間	2,004,754	471,255	98,516	662,124	9,925	3,246,574	△3,246,574	—
計	4,359,286	8,090,187	701,211	4,055,447	593,139	17,799,270	△3,246,574	14,552,696
営業利益(△損失)	6,411	501,073	26,681	339,129	22,899	896,193	△24,961	871,232
資産	5,318,033	12,983,779	597,473	3,803,877	619,998	23,323,160	649,993	23,973,153
非流動資産 (金融商品、繰延税金資産 および確定給付資産の純 額を除く)	3,036,832	5,334,121	49,129	706,562	169,447	9,296,091	—	9,296,091

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

	(単位：百万円)							
	日本	北米	欧州	アジア	その他の地域	計	消去又は全社	連結
売上収益								
(1) 外部顧客	2,409,584	8,939,259	675,728	4,068,234	814,920	16,907,725	—	16,907,725
(2) セグメント間	2,138,418	476,993	27,990	789,603	4,695	3,437,699	△3,437,699	—
計	4,548,002	9,416,252	703,718	4,857,837	819,615	20,345,424	△3,437,699	16,907,725
営業利益(△損失)	25,821	258,805	△2,556	408,728	58,935	749,733	31,036	780,769
資産	5,306,084	13,467,383	648,614	3,771,171	690,904	23,884,156	785,911	24,670,067
非流動資産 (金融商品、繰延税金資産 および確定給付資産の純 額を除く)	2,937,148	5,192,731	47,869	685,311	175,893	9,038,952	—	9,038,952

(注) 1 国又は地域の区分の方法および各区分に属する主な国

(1) 国又は地域の区分の方法……………地理的近接度によっています。

(2) 各区分に属する主な国……………北米：米国、カナダ、メキシコ

欧州：英国、ドイツ、ベルギー、イタリア、フランス

アジア：タイ、中国、インド、ベトナム、マレーシア

その他の地域：ブラジル、オーストラリア

2 各セグメントの営業利益(△損失)の算出方法は、連結損益計算書における営業利益の算出方法と一致しており、持分法による投資利益、金融収益及び金融費用および法人所得税費用を含んでいません。

3 各セグメントおよび消去又は全社の資産の合計は、連結財政状態計算書の総資産と一致しており、持分法で会計処理されている投資、デリバティブ資産および繰延税金資産などを含んでいます。

4 セグメント間取引は、独立企業間価格で行っています。

5 資産の消去又は全社の項目には、セグメント間取引の消去の金額および全社資産の金額が含まれています。全社資産の金額は、前連結会計年度末および当連結会計年度末において、それぞれ1,319,995百万円、1,462,656百万円であり、その主な内容は、当社の現金及び現金同等物、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産です。

5 現金及び現金同等物

前連結会計年度末および当連結会計年度末における現金及び現金同等物の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
現金および預金	2,654,447	2,822,949
現金同等物	1,020,484	980,065
合計	3,674,931	3,803,014

当社および連結子会社が保有する現金同等物は、主にマネー・マーケット・ファンドおよび譲渡性預金です。

6 営業債権

営業債権は償却原価で測定する金融資産に分類しています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における営業債権の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
受取手形および売掛金	793,022	900,312
その他	112,591	168,579
貸倒引当金	△8,845	△8,620
合計	896,768	1,060,271

前連結会計年度および当連結会計年度における営業債権に係る貸倒引当金の増減は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
期首残高	10,521	8,845
再測定	260	297
直接償却	△2,648	△757
在外営業活動体の為替換算差額	712	235
期末残高	8,845	8,620

7 金融サービスに係る債権

当社の金融子会社は、製品の販売をサポートするために、顧客および販売店に対して様々な金融サービスを提供しており、これらの金融サービスに係る債権を以下のように区分しています。

顧客に対する金融債権

小売金融：主に、顧客との割賦契約に係る債権から構成されます。

ファイナンス・リース：主に、顧客との解約不能な車両のリース契約に係る債権から構成されます。

販売店に対する金融債権

卸売金融：主に、販売店の在庫購入のための融資に係る債権および販売店への貸付金から構成されます。

金融サービスに係る債権は主に償却原価で測定する金融資産に分類しています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における金融サービスに係る債権の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
顧客に対する金融債権		
小売金融	5,054,428	5,363,260
ファイナンス・リース	145,932	174,256
販売店に対する金融債権		
卸売金融	284,506	421,166
小計	5,484,866	5,958,682
クレジット損失引当金	△39,063	△48,652
未稼得利益	△11,307	△15,278
合計	5,434,496	5,894,752
流動資産	1,694,113	1,899,493
非流動資産	3,740,383	3,995,259
合計	5,434,496	5,894,752

(ファイナンス・リースに係る債権)

前連結会計年度末および当連結会計年度末におけるファイナンス・リースに基づくリース料債権の期日別の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
1年以内	25,066	32,525
1年超2年以内	25,569	33,924
2年超3年以内	13,192	20,381
3年超4年以内	9,335	13,497
4年超5年以内	2,153	4,020
5年超	1,827	5,008
割引前のリース料債権	77,142	109,355
未稼得金融収益	△4,603	△8,417
無保証残存価値	62,086	58,040
正味リース投資未回収額	134,625	158,978

貸手のリース活動の性質およびリスク管理戦略については、「3 重要な会計方針 (9) リースおよび(10) 減損」を参照ください。

(クレジット損失引当金)

前連結会計年度および当連結会計年度におけるクレジット損失引当金の増減は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)			合計
	12カ月の 予想信用損失 (ステージ1)	全期間の予想信用損失		
		信用減損なし (ステージ2)	信用減損あり (ステージ3)	
小売金融				
2021年4月1日残高	23,480	5,923	4,883	34,286
再測定	△2,513	△925	13,701	10,263
直接償却	—	—	△12,256	△12,256
在外営業活動体の為替換算差額	2,822	516	1,136	4,474
2022年3月31日残高	23,789	5,514	7,464	36,767
再測定	868	5,288	20,673	26,829
直接償却	—	—	△19,942	△19,942
在外営業活動体の為替換算差額	1,810	270	349	2,429
2023年3月31日残高	26,467	11,072	8,544	46,083
ファイナンス・リース				
2021年4月1日残高	470	184	159	813
再測定	△339	△98	182	△255
直接償却	—	—	△97	△97
在外営業活動体の為替換算差額	8	6	12	26
2022年3月31日残高	139	92	256	487
再測定	49	△28	△24	△3
直接償却	—	—	△35	△35
在外営業活動体の為替換算差額	4	5	7	16
2023年3月31日残高	192	69	204	465

	(単位：百万円)			
	12ヵ月の 予想信用損失 (ステージ1)	全期間の予想信用損失		合計
		信用減損なし (ステージ2)	信用減損あり (ステージ3)	
卸売金融				
2021年4月1日残高	1,741	62	464	2,267
再測定	△649	△46	△31	△726
直接償却	—	—	30	30
在外営業活動体の為替換算差額	84	1	153	238
2022年3月31日残高	1,176	17	616	1,809
再測定	△263	△8	463	192
直接償却	—	—	33	33
在外営業活動体の為替換算差額	63	1	6	70
2023年3月31日残高	976	10	1,118	2,104
合計				
2021年4月1日残高	25,691	6,169	5,506	37,366
再測定	△3,501	△1,069	13,852	9,282
直接償却	—	—	△12,323	△12,323
在外営業活動体の為替換算差額	2,914	523	1,301	4,738
2022年3月31日残高	25,104	5,623	8,336	39,063
再測定	654	5,252	21,112	27,018
直接償却	—	—	△19,944	△19,944
在外営業活動体の為替換算差額	1,877	276	362	2,515
2023年3月31日残高	27,635	11,151	9,866	48,652

クレジット損失引当金の詳細は、連結財務諸表注記の「25 金融リスク管理 (3) 信用リスク」を参照ください。

8 その他の金融資産

前連結会計年度末および当連結会計年度末におけるその他の金融資産の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
償却原価で測定する金融資産		
営業債権、金融サービスに係る債権以外の債権	166,936	164,503
負債性証券	79,176	85,235
敷金	11,499	12,689
引出制限付預金	53,290	65,723
その他	4,352	4,167
貸倒引当金	△3,212	△2,988
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産		
負債性証券	19,984	26,555
資本性証券	468,783	475,138
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産		
デリバティブ	134,338	185,968
負債性証券	102,251	101,972
合計	1,037,397	1,118,962
流動資産	217,743	263,892
非流動資産	819,654	855,070
合計	1,037,397	1,118,962

前連結会計年度および当連結会計年度におけるその他の金融資産に係る貸倒引当金の増減は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
期首残高	3,358	3,212
再測定	42	232
直接償却	△191	△461
在外営業活動体の為替換算差額	3	5
期末残高	3,212	2,988

前連結会計年度および当連結会計年度のその他の金融資産に係る貸倒引当金は、主に信用減損金融資産に対するものです。

前連結会計年度末および当連結会計年度末におけるその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に指定した資本性証券の主な銘柄は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	(単位：百万円)
	公正価値
寧徳時代新能源科技股份有限公司	226,938
GMクルーズホールディングス・エル・エル・シー	105,916
スタンレー電気(株)	21,463
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	11,026
SES AI コーポレーション	8,307
東京海上ホールディングス(株)	7,789

当連結会計年度末(2023年3月31日)

	(単位：百万円)
	公正価値
寧徳時代新能源科技股份有限公司	181,366
GMクルーズホールディングス・エル・エル・シー	115,556
スタンレー電気(株)	49,051
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	12,296
東京海上ホールディングス(株)	8,349
Chubb Limited	7,998

9 棚卸資産

前連結会計年度末および当連結会計年度末における棚卸資産の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
製品	907,872	1,154,926
仕掛品	90,871	95,041
原材料	919,805	917,217
合計	1,918,548	2,167,184

前連結会計年度および当連結会計年度において、費用として認識した棚卸資産の評価減の金額は、それぞれ11,295百万円、8,400百万円です。

10 持分法で会計処理されている投資

前連結会計年度末および当連結会計年度末における関連会社および共同支配企業に対する当社および連結子会社の持分相当額は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
持分法で会計処理されている投資		
関連会社	544,563	499,942
共同支配企業	422,841	416,004
合計	967,404	915,946
未分配利益に対する持分相当額		
関連会社	177,231	87,284
共同支配企業	279,288	259,675
合計	456,519	346,959

当社は、当連結会計年度において、一部の活発な市場における公表価格のある持分法で会計処理されている投資について、市場価格の下落により減損の客観的な証拠が存在すると判断したため、公正価値に基づき回収可能価額を測定し、減損損失を計上しました。

また、活発な市場における公表価格のない持分法で会計処理されている投資のうち、当連結会計年度中に締結した株式譲渡契約での取引価格が取得価額を下回った投資先について、減損の客観的な証拠が存在すると判断したため、使用価値に基づき回収可能価額を測定し、減損損失を計上しました。

以上の結果、持分法で会計処理されている投資の減損損失68,545百万円を計上しています。当該減損損失は、持分法による投資利益に含まれており、主に四輪事業に含まれています。

前連結会計年度および当連結会計年度における関連会社および共同支配企業の当期包括利益に対する当社および連結子会社の持分は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
当期利益		
関連会社	△17,844	△81,504
共同支配企業	220,356	198,949
合計	202,512	117,445
その他の包括利益		
関連会社	26,673	25,920
共同支配企業	52,560	4,801
合計	79,233	30,721
当期包括利益		
関連会社	8,829	△55,584
共同支配企業	272,916	203,750
合計	281,745	148,166

持分法で会計処理されている投資、未分配利益に対する持分相当額、当期利益、その他の包括利益、当期包括利益の共同支配企業の項目には、当社にとって重要な共同支配企業の金額が含まれています。

(重要な共同支配企業)

当社にとって重要な共同支配企業は、東風本田汽車有限公司です。当社および連結子会社と東風汽車集団有限公司がそれぞれ50%の持分を保有しており、中国武漢市で四輪製品の製造および販売をしています。

前連結会計年度および当連結会計年度における東風本田汽車有限公司に関する要約連結財務情報は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
流動資産	747,397	615,524
非流動資産	252,219	279,691
資産合計	999,616	895,215
流動負債	610,379	520,257
非流動負債	34,182	31,680
負債合計	644,561	551,937
資本合計	355,055	343,278
資本合計のうち当社および連結子会社の持分(50%)	177,527	171,639
連結調整	△697	△636
共同支配企業への関与の帳簿価額	176,830	171,003
流動資産に含まれる現金及び現金同等物	301,839	99,862
流動負債に含まれる金融負債(営業債務および引当金を除く)	6,168	6,803
売上収益	1,994,534	1,777,882
受取利息	10,653	8,441
減価償却費および償却費	25,996	28,052
法人所得税費用	60,868	52,826
当期利益	182,989	157,914
その他の包括利益	44,812	3,256
当期包括利益	227,801	161,170
当期包括利益(50%)	113,901	80,585
連結調整	607	67
当期包括利益に対する当社および連結子会社の持分	114,508	80,652
当社および連結子会社が受け取った配当金	79,191	86,506

前連結会計年度および当連結会計年度における関連会社に関する合算財務情報は、以下のとおりです。

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

				(単位：百万円)
	二輪事業	四輪事業	パワープロダクツ 事業及び その他の事業	計
流動資産	64,324	1,542,414	14,313	1,621,051
非流動資産	28,330	2,030,822	22,928	2,082,080
資産合計	92,654	3,573,236	37,241	3,703,131
流動負債	25,819	1,013,738	3,768	1,043,325
非流動負債	5,003	583,308	1,065	589,376
負債合計	30,822	1,597,046	4,833	1,632,701
資本合計	61,832	1,976,190	32,408	2,070,430
売上収益	173,696	3,120,190	7,146	3,301,032
当期利益	7,233	73,169	996	81,398

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

				(単位：百万円)
	二輪事業	四輪事業	パワープロダクツ 事業及び その他の事業	計
流動資産	64,051	1,746,374	18,441	1,828,866
非流動資産	25,654	2,050,459	24,110	2,100,223
資産合計	89,705	3,796,833	42,551	3,929,089
流動負債	29,887	1,205,478	4,319	1,239,684
非流動負債	3,109	539,040	655	542,804
負債合計	32,996	1,744,518	4,974	1,782,488
資本合計	56,709	2,052,315	37,577	2,146,601
売上収益	189,332	3,800,943	9,187	3,999,462
当期利益	10,038	△45,204	1,901	△33,265

前連結会計年度および当連結会計年度における共同支配企業に関する合算財務情報は、以下のとおりです。

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

				(単位：百万円)
	二輪事業	四輪事業	パワープロダクツ 事業及び その他の事業	計
流動資産	272,962	1,810,581	4,771	2,088,314
非流動資産	130,271	479,707	909	610,887
資産合計	403,233	2,290,288	5,680	2,699,201
流動負債	227,215	1,513,623	1,704	1,742,542
非流動負債	17,769	70,675	665	89,109
負債合計	244,984	1,584,298	2,369	1,831,651
資本合計	158,249	705,990	3,311	867,550
売上収益	811,764	4,612,394	3,940	5,428,098
当期利益	62,907	375,642	363	438,912

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

				(単位：百万円)
	二輪事業	四輪事業	パワープロダクツ 事業及び その他の事業	計
流動資産	337,603	1,579,996	3,677	1,921,276
非流動資産	134,567	544,319	989	679,875
資産合計	472,170	2,124,315	4,666	2,601,151
流動負債	275,607	1,397,048	1,791	1,674,446
非流動負債	23,272	74,136	2,184	99,592
負債合計	298,879	1,471,184	3,975	1,774,038
資本合計	173,291	653,131	691	827,113
売上収益	1,071,031	4,360,348	6,022	5,437,401
当期利益	93,766	304,119	1,779	399,664

上記には、当社にとって重要な共同支配企業の金額が含まれています。

11 オペレーティング・リース資産

当社および連結子会社は、主に車両を貸与しています。

前連結会計年度および当連結会計年度におけるオペレーティング・リース資産の取得原価、減価償却累計額および減損損失累計額の増減ならびに帳簿価額は、以下のとおりです。

(取得原価)

	(単位：百万円)
2021年4月1日残高	6,302,709
取得	2,026,098
売却または処分	△2,171,117
在外営業活動体の為替換算差額	509,447
その他	—
2022年3月31日残高	6,667,137
取得	1,543,448
売却または処分	△2,357,684
在外営業活動体の為替換算差額	414,052
その他	—
2023年3月31日残高	6,266,953

(減価償却累計額および減損損失累計額)

	(単位：百万円)
2021年4月1日残高	△1,382,793
減価償却費	△879,196
売却または処分	856,835
在外営業活動体の為替換算差額	△100,982
その他	△1,872
2022年3月31日残高	△1,508,008
減価償却費	△904,778
売却または処分	955,122
在外営業活動体の為替換算差額	△77,740
その他	△5,257
2023年3月31日残高	△1,540,661

(帳簿価額)

	(単位：百万円)
2022年3月31日残高	5,159,129
2023年3月31日残高	4,726,292

(将来受取リース料)

前連結会計年度末および当連結会計年度末における、オペレーティング・リースに係る将来受取リース料の受取期間別の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
1年以内	824,769	737,110
1年超2年以内	574,536	458,830
2年超3年以内	240,437	220,722
3年超4年以内	84,911	78,727
4年超5年以内	27,796	25,641
5年超	—	10,148
合計	1,752,449	1,531,178

上記に記載されている将来受取リース料の金額は、必ずしも将来の現金回収額を示すものではありません。

(リース収益)

前連結会計年度および当連結会計年度におけるオペレーティング・リースのリース収益はそれぞれ1,134,898百万円、1,152,964百万円です。

12 有形固定資産

前連結会計年度および当連結会計年度における有形固定資産の取得原価、減価償却累計額および減損損失累計額の増減ならびに帳簿価額は、以下のとおりです。

(取得原価)

	(単位：百万円)				
	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び備品	建設仮勘定	合計
2021年4月1日残高	628,724	2,558,905	5,687,117	217,198	9,091,944
取得	8,473	26,268	102,835	229,253	366,829
建設仮勘定から本勘定への振替	387	28,766	199,242	△228,395	—
売却または処分	△4,151	△33,722	△275,348	—	△313,221
在外営業活動体の為替換算差額	11,585	123,536	429,662	21,124	585,907
その他	454	△5,487	4,421	△1,606	△2,218
2022年3月31日残高	645,472	2,698,266	6,147,929	237,574	9,729,241
取得	10,366	35,335	87,630	444,732	578,063
建設仮勘定から本勘定への振替	4,198	47,021	476,942	△528,161	—
売却または処分	△9,980	△80,024	△297,580	—	△387,584
連結除外	△3,580	△19,932	△82,733	△3,384	△109,629
在外営業活動体の為替換算差額	7,167	84,744	285,024	16,047	392,982
その他	275	△6,556	△1,572	△2,029	△9,882
2023年3月31日残高	653,918	2,758,854	6,615,640	164,779	10,193,191

(減価償却累計額および減損損失累計額)

	(単位：百万円)				
	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び備品	建設仮勘定	合計
2021年4月1日残高	△16,609	△1,496,313	△4,555,420	△2,088	△6,070,430
減価償却費	△7,087	△88,928	△342,254	—	△438,269
売却または処分	1,403	22,920	251,628	—	275,951
在外営業活動体の為替換算差額	△235	△68,557	△344,775	△19	△413,586
その他	△391	△2,324	△1,889	1,104	△3,500
2022年3月31日残高	△22,919	△1,633,202	△4,992,710	△1,003	△6,649,834
減価償却費	△6,025	△96,136	△410,340	—	△512,501
売却または処分	6,090	72,290	274,535	—	352,915
連結除外	2,580	18,743	80,882	3,384	105,589
在外営業活動体の為替換算差額	△87	△48,748	△245,648	126	△294,357
その他	△2,863	△7,768	△12,857	△3,406	△26,894
2023年3月31日残高	△23,224	△1,694,821	△5,306,138	△899	△7,025,082

(帳簿価額)

	(単位：百万円)				
	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び備品	建設仮勘定	合計
2022年3月31日残高	622,553	1,065,064	1,155,219	236,571	3,079,407
2023年3月31日残高	630,694	1,064,033	1,309,502	163,880	3,168,109

有形固定資産の購入に関する発注契約については、連結財務諸表注記の「28 契約残高および偶発債務」を参照ください。

(使用権資産)

連結財政状態計算書上の有形固定資産には、リース取引による使用権資産が含まれており、主に四輪事業に関連するものです。

当社および連結子会社は主に延長および解約オプションを含む店舗、社宅、駐車場に対するリース契約を締結しています。リース契約は各社で管理されており、その条件は個別交渉されるため、多様な契約条件を含んでいます。延長および解約オプションは、各社のマネジメントが事業上の柔軟性を高めるために設けたものです。

前連結会計年度および当連結会計年度における使用権資産の帳簿価額の増減は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)			
	土地	建物及び 構築物	機械装置 及び備品	合計
2021年4月1日残高	80,543	135,303	79,484	295,330
取得	8,283	18,952	61,189	88,424
減価償却費	△7,087	△15,882	△45,326	△68,295
その他	△102	△8,192	535	△7,759
2022年3月31日残高	81,637	130,181	95,882	307,700
取得	10,386	30,294	43,474	84,154
減価償却費	△6,025	△15,887	△51,193	△73,105
その他	370	△8,529	△2,245	△10,404
2023年3月31日残高	86,368	136,059	85,918	308,345

13 無形資産

前連結会計年度および当連結会計年度における無形資産の取得原価、償却累計額および減損損失累計額の増減ならびに帳簿価額は、以下のとおりです。

(取得原価)

	(単位：百万円)			
	開発資産	ソフトウェア	その他	合計
2021年4月1日残高	1,108,616	429,222	60,905	1,598,743
取得	—	8,597	11,235	19,832
内部開発	159,174	20,311	—	179,485
売却または処分	△118,065	△15,760	△12,966	△146,791
在外営業活動体の為替換算差額	6,565	22,365	6,057	34,987
その他	—	△2,484	△339	△2,823
2022年3月31日残高	1,156,290	462,251	64,892	1,683,433
取得	—	12,163	35,103	47,266
内部開発	120,811	28,088	—	148,899
売却または処分	△267,115	△5,107	△9,741	△281,963
在外営業活動体の為替換算差額	4,280	15,870	3,503	23,653
その他	—	4,285	△336	3,949
2023年3月31日残高	1,014,266	517,550	93,421	1,625,237

(償却累計額および減損損失累計額)

	(単位：百万円)			
	開発資産	ソフトウェア	その他	合計
2021年4月1日残高	△437,213	△329,104	△13,663	△779,980
償却費	△129,384	△29,290	△769	△159,443
売却または処分	118,065	15,003	3,447	136,515
在外営業活動体の為替換算差額	△1,288	△17,442	△906	△19,636
その他	△12,821	1,364	75	△11,382
2022年3月31日残高	△462,641	△359,469	△11,816	△833,926
償却費	△149,659	△29,058	△880	△179,597
売却または処分	267,115	4,693	938	272,746
在外営業活動体の為替換算差額	△719	△12,893	△758	△14,370
その他	—	△1,036	1,846	810
2023年3月31日残高	△345,904	△397,763	△10,670	△754,337

(帳簿価額)

	(単位：百万円)			
	開発資産	ソフトウェア	その他	合計
2022年3月31日残高	693,649	102,782	53,076	849,507
2023年3月31日残高	668,362	119,787	82,751	870,900

開発資産の償却費は連結損益計算書の研究開発費に、開発資産以外の無形資産の償却費は連結損益計算書の売上原価、販売費及び一般管理費ならびに研究開発費にそれぞれ含まれています。

無形資産の購入に関する発注契約については、連結財務諸表注記の「28 契約残高および偶発債務」を参照ください。

14 営業債務

営業債務は償却原価で測定する金融負債に分類しています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における営業債務の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
支払手形および買掛金	1,047,623	1,181,893
その他	188,610	244,440
合計	1,236,233	1,426,333

15 資金調達に係る債務

資金調達に係る債務は償却原価で測定する金融負債に分類しています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における流動負債に区分される資金調達に係る債務の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
流動		
コマーシャルペーパー	421,801	965,468
銀行等借入金	434,675	358,874
資産担保証券	50,067	41,433
小計	906,543	1,365,775
非流動負債からの振替 (1年以内期限到来分)	2,211,761	1,925,420
合計	3,118,304	3,291,195

前連結会計年度末および当連結会計年度末における流動負債に区分される資金調達に係る債務(非流動負債からの振替を除く)の加重平均利率は、以下のとおりです。

	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
加重平均利率	1.01%	4.29%

前連結会計年度末および当連結会計年度末における非流動負債に区分される資金調達に係る債務の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
非流動		
銀行等借入金	1,026,769	958,836
メディアムタームノート	3,996,486	3,359,462
社債	1,035,379	1,001,187
資産担保証券	1,137,379	979,908
小計	7,196,013	6,299,393
流動負債への振替 (1年以内期限到来分)	△2,211,761	△1,925,420
合計	4,984,252	4,373,973

前連結会計年度末および当連結会計年度末における非流動負債に区分される資金調達に係る債務(流動負債への振替を含む)の利率および返済期限の要約は、以下のとおりです。

	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
銀行等借入金	利率： 0.07%～11.75% 返済期限： 2022年～2046年	利率： 0.14%～12.90% 返済期限： 2023年～2046年
メディアムタームノート	利率： 0.30%～3.63% 返済期限： 2022年～2031年	利率： 0.30%～5.88% 返済期限： 2023年～2031年
社債	利率： 0.01%～2.97% 返済期限： 2022年～2032年	利率： 0.01%～2.97% 返済期限： 2023年～2032年
資産担保証券	利率： 0.11%～3.30% 返済期限： 2022年～2025年	利率： 0.11%～5.50% 返済期限： 2023年～2028年

(担保差入資産)

前連結会計年度末および当連結会計年度末における資金調達に係る債務に対する担保差入資産は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
営業債権	15,298	20,811
金融サービスに係る債権	1,101,778	944,414
オペレーティング・リース資産	142,097	133,936
有形固定資産	2,548	2,293
合計	1,261,721	1,101,454

金融サービスに係る債権およびオペレーティング・リース資産は資産担保証券の担保として供されています。その他の項目は主に銀行等借入金の担保として供されています。

日本における慣行として、銀行借入金については一般的な契約に基づき行われており、現在および将来に発生する債務について、銀行の請求に基づき担保の設定または保証の差入れの義務があります。また、当社および連結子会社が支払遅延あるいは債務不履行に陥った場合、銀行は、全ての債務について、銀行預金と相殺する権利を有しています。

(財務活動から生じた負債の調整表)

前連結会計年度および当連結会計年度における財務活動から生じた負債の内訳および増減は、以下のとおりです。

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	2021年4月1日 残高	財務活動による キャッシュ・フロー	営業活動による キャッシュ・フロー	非資金変動				2022年3月31日 残高
				取得	為替変動	公正価値 変動	その他	
短期資金調達に係る債務	1,299,347	△472,420	—	—	78,863	—	753	906,543
長期資金調達に係る債務	6,421,638	238,060	—	—	526,822	—	9,493	7,196,013
リース負債	317,429	△80,165	—	84,413	6,096	—	△9,015	318,758
デリバティブ金融負債(△資産) (注)	△33,883	3,202	△1,296	—	3,217	67,396	—	38,636
財務活動から生じた負債 計	8,004,531	△311,323	△1,296	84,413	614,998	67,396	1,231	8,459,950

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	2022年4月1日 残高	財務活動による キャッシュ・フロー	営業活動による キャッシュ・フロー	非資金変動				2023年3月31日 残高
				取得	為替変動	公正価値 変動	その他	
短期資金調達に係る債務	906,543	442,534	—	—	27,055	—	△10,357	1,365,775
長期資金調達に係る債務	7,196,013	△1,356,965	—	—	459,754	—	591	6,299,393
リース負債	318,758	△78,297	—	79,202	3,675	—	△7,380	315,958
デリバティブ金融負債(△資産) (注)	38,636	△54,158	△8,641	—	3,718	85,721	—	65,276
財務活動から生じた負債 計	8,459,950	△1,046,886	△8,641	79,202	494,202	85,721	△17,146	8,046,402

(注) デリバティブ金融負債(△資産)は、当社および当社の金融子会社が長期資金調達に係る債務の元本および利息の支払いの為替変動リスクをヘッジするために保有しており、元本および利息の支払いに対応するキャッシュ・フローは、それぞれ財務活動によるキャッシュ・フローおよび営業活動によるキャッシュ・フローに含めています。

16 その他の金融負債

前連結会計年度末および当連結会計年度末におけるその他の金融負債の内訳は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
償却原価で測定する金融負債	48,283	53,920
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債		
デリバティブ	151,942	242,968
リース負債	318,758	315,958
合計	518,983	612,846
流動負債	236,900	324,110
非流動負債	282,083	288,736
合計	518,983	612,846

17 引当金

当連結会計年度における引当金の内訳および増減は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)		
	製品保証引当金(注)	その他	合計
2022年4月1日残高	419,201	102,812	522,013
繰入額	289,850	27,766	317,616
取崩額	△160,757	△30,887	△191,644
戻入額	△33,070	△8,624	△41,694
在外営業活動体の為替換算差額	19,875	6,704	26,579
2023年3月31日残高	535,099	97,771	632,870

前連結会計年度末および当連結会計年度末における引当金の流動負債、非流動負債の残高は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
流動負債	268,388	362,701
非流動負債	253,625	270,169
合計	522,013	632,870

(注) 当社および連結子会社は、将来の製品保証に関連する費用に対して製品保証引当金を認識しています。製品保証に関連する費用には、(i)保証書に基づく無償の補修費用、(ii)主務官庁への届出等に基づく無償の補修費用が含まれています。(i)保証書に基づく無償の補修費用は、製品を販売した時点で認識しており、(ii)主務官庁への届出等に基づく新規の保証項目に関連する費用については、経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性が高く、その債務の金額について信頼性をもって見積ることができる場合に、引当金を認識しています。これらの引当金の金額は、過去の補修実績、過去の売上実績、予測発生台数および予測台当たり補修費用等を含む将来の見込みに基づいて見積っており、顧客および販売店からの請求等に応じて取崩されるものです。

18 従業員給付

(1) 退職後給付

当社および連結子会社は、各種退職給付および年金制度を有しており、ほぼ全ての日本における従業員および一部の海外の従業員を対象としています。当社および日本の連結子会社は、日本の確定給付企業年金法に基づくキャッシュバランスプラン類似制度またはその他の確定給付型年金制度を設けています。また、当社および一部の連結子会社は、退職年金制度に加え退職一時金制度を設けており、これらの制度における給付額は、基本的に従業員の給与水準、勤続年数およびその他の要素に基づいて決定されます。これらの制度に加え、一部の北米の連結子会社は、健康保険や生命保険等の制度を退職後の従業員に提供しています。

当社が設けている年金制度は、当社より法的に独立したホンダ企業年金基金によって運営されており、基金の理事は、法令、法令に基づき行われる厚生労働大臣または地方厚生局長の処分、規約および代議員会の議決を遵守し、基金のために忠実にその職務を遂行する義務を負っています。当社には、ホンダ企業年金基金に対する掛金の拠出が要求されており、将来にわたってホンダ企業年金基金が定める掛金の拠出義務を負っています。また、掛金は法令が定める範囲で定期的に見直されています。

① 確定給付制度債務と制度資産

前連結会計年度および当連結会計年度における当社および一部の連結子会社の確定給付制度債務の現在価値および制度資産の公正価値の変動は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)			
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)		当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	
	国内制度	海外制度	国内制度	海外制度
確定給付制度債務の現在価値				
期首残高	1,305,054	1,104,894	1,262,245	1,087,526
当期勤務費用	35,045	22,351	30,632	22,555
過去勤務費用	-	-	-	-
利息費用	8,360	29,822	9,732	40,151
従業員拠出	-	3,657	-	4,165
再測定				
人口統計上の仮定の変更	6,346	△777	△3,387	△317
財務上の仮定の変更	△25,500	△85,754	△71,936	△220,863
その他	5,502	△3,603	12,291	38,427
給付額	△72,562	△82,561	△63,085	△116,150
連結除外	-	-	△15,765	-
在外営業活動体の為替換算差額	-	99,497	-	70,467
期末残高	1,262,245	1,087,526	1,160,727	925,961
制度資産の公正価値				
期首残高	1,365,509	910,436	1,355,276	1,013,050
利息収益	8,865	24,981	10,589	37,211
利息収益を除く制度資産に係る収益	21,172	50,833	△76,690	△137,659
事業主拠出	20,484	17,404	20,409	21,178
従業員拠出	-	3,657	-	4,165
給付額	△60,754	△82,561	△58,544	△116,150
連結除外	-	-	△14,285	-
在外営業活動体の為替換算差額	-	88,300	-	58,180
期末残高	1,355,276	1,013,050	1,236,755	879,975
資産上限額の影響	-	35,321	-	62,516
確定給付負債(資産)の純額	△93,031	109,797	△76,028	108,502

前連結会計年度末および当連結会計年度末の確定給付負債(資産)の純額に含まれる退職給付に係る資産は、それぞれ216,604百万円、180,700百万円であり、連結財政状態計算書において、その他の非流動資産に含まれています。

② 制度資産の公正価値

当社および連結子会社の国内制度および海外制度に係る資産運用方針は、従業員の将来の給付を確保するため許容されるリスクのもとで中長期的に総運用収益の最適化をはかるべく策定されています。制度資産は、資産配分目標に基づいて主に国内外の株式および債券に幅広く分散投資されており、リスクの低減を図っています。資産配分については、長期的なリスク、リターン予想および各資産の運用実績の相関に基づき、中長期的に維持すべき配分の目標を設定しています。この資産配分目標は、制度資産の運用環境等に重要な変化が生じた場合には、適宜見直しを行っています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における国内制度および海外制度の制度資産の公正価値の内訳は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	(単位：百万円)					
	国内制度			海外制度		
	活発な市場における 公表市場価格		合計	活発な市場における 公表市場価格		合計
	有	無		有	無	
現金及び現金同等物	56,192	—	56,192	15,147	—	15,147
株式						
日本	32,349	—	32,349	9,483	—	9,483
米国	260,424	58	260,482	72,349	—	72,349
その他	248,143	276	248,419	51,606	—	51,606
債券						
日本	65,388	—	65,388	—	575	575
米国	2,795	150,494	153,289	—	81,155	81,155
その他	173,477	71,516	244,993	—	7,100	7,100
団体年金保険						
一般勘定	—	40,008	40,008	—	—	—
特別勘定	—	22,317	22,317	—	—	—
合同運用						
不動産	—	402	402	—	87,540	87,540
未公開株式	—	—	—	—	191,196	191,196
ヘッジファンド	—	145,474	145,474	—	34,341	34,341
年金投資基金信託及び その他の投資信託	1,798	129,080	130,878	4,732	425,668	430,400
その他	67	△44,982	△44,915	61	32,097	32,158
合計	840,633	514,643	1,355,276	153,378	859,672	1,013,050

当連結会計年度末(2023年3月31日)

(単位：百万円)

	国内制度			海外制度		
	活発な市場における 公表市場価格		合計	活発な市場における 公表市場価格		合計
	有	無		有	無	
現金及び現金同等物	20,230	—	20,230	6,929	—	6,929
株式						
日本	22,388	—	22,388	398	—	398
米国	195,611	—	195,611	13,794	—	13,794
その他	171,921	153	172,074	7,413	—	7,413
債券						
日本	66,416	862	67,278	—	768	768
米国	35,338	136,352	171,690	—	114,757	114,757
その他	152,213	89,536	241,749	—	10,656	10,656
団体年金保険						
一般勘定	—	40,942	40,942	—	—	—
特別勘定	—	23,130	23,130	—	—	—
合同運用						
不動産	—	398	398	—	73,017	73,017
未公開株式	—	—	—	—	162,414	162,414
ヘッジファンド	—	117,422	117,422	—	26,061	26,061
年金投資基金信託及び その他の投資信託	1,419	151,752	153,171	—	454,352	454,352
その他	54	10,618	10,672	263	9,153	9,416
合計	665,590	571,165	1,236,755	28,797	851,178	879,975

③ 数理計算上の仮定

前連結会計年度末および当連結会計年度末における確定給付制度債務の現在価値の算定に用いた重要な数理計算上の仮定は、以下のとおりです。

	前連結会計年度末 (2022年3月31日)		当連結会計年度末 (2023年3月31日)	
	国内制度	海外制度	国内制度	海外制度
割引率	0.8%	2.8 ~ 4.0%	1.2%	4.8 ~ 5.1%
昇給率	1.5%	2.0 ~ 3.6%	1.6%	2.0 ~ 4.4%

④ 感応度分析

前連結会計年度末および当連結会計年度末における割引率が±0.5%変動した場合の確定給付制度債務に与える影響は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)			
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)		当連結会計年度末 (2023年3月31日)	
	国内制度	海外制度	国内制度	海外制度
0.5%減少	93,079(増加)	86,569(増加)	80,821(増加)	57,236(増加)
0.5%増加	83,077(減少)	78,153(減少)	72,450(減少)	50,643(減少)

感応度分析は、前連結会計年度末および当連結会計年度末において、当社が合理的に考えうる数理計算上の仮定の変化による確定給付制度債務の変動を示したものです。これらの分析は、あくまで試算ベースであり、実際の結果はこれらの分析と異なる可能性があります。また、昇給率については変動を見込んでいません。

⑤ キャッシュ・フロー

当社および一部の連結子会社の制度資産への拠出額は、従業員の給与水準や勤続年数、制度資産の積立状態、数理計算等様々な要因により決定されます。また、確定給付企業年金法の規定により、ホンダ企業年金基金では、将来にわたって財政の均衡を保つことができるよう、5年毎に報告期間の期末日を基準日として掛金の額の再計算を行っています。当社および一部の連結子会社は、積立金の額が最低積立基準額を下回る場合には、必要な額の掛金を拠出する場合があります。

当社および一部の連結子会社は、次連結会計年度において国内制度に拠出する金額を20,000百万円、海外制度に拠出する金額を24,301百万円と見積っています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における確定給付制度債務の加重平均デュレーションは、以下のとおりです。

	前連結会計年度末 (2022年3月31日)		当連結会計年度末 (2023年3月31日)	
	国内制度	海外制度	国内制度	海外制度
	確定給付制度債務の 加重平均デュレーション	14年	14年	13年

(2) 人件費

前連結会計年度および当連結会計年度における連結損益計算書に含まれる人件費は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
	人件費	1,502,364

人件費には、給与、賞与、法定福利費および退職後給付に係る費用などを含めています。

19 資本

(1) 資本の管理

当社および連結子会社は、グローバル規模での成長を通じた企業価値向上のために、設備投資および研究開発投資等を行っています。これらの資金需要に対応するために、資金調達に係る債務および資本の適切なバランスを考慮した資本管理を行っています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における資金調達に係る債務および資本の残高は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
資金調達に係る債務	8,102,556	7,665,168
資本	10,772,546	11,502,291

(2) 資本金

前連結会計年度および当連結会計年度における当社の発行可能株式総数および発行済株式総数は、以下のとおりです。

	(単位：株)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
発行可能株式総数		
期末残高		
普通株式(無額面株式)	7,086,000,000	7,086,000,000
発行済株式総数		
期首残高	1,811,428,430	1,811,428,430
期中増減	—	—
期末残高	1,811,428,430	1,811,428,430

前連結会計年度末および当連結会計年度末における発行済株式は、すべて払込済です。

(3) 資本剰余金および利益剰余金

資本剰余金は、資本取引から生じた金額のうち資本金に含まれない金額で構成され、主な内訳は資本準備金です。日本の会社法は、株式の発行に対する払込みまたは給付に係る金額の2分の1以上を資本金に組み入れ、残りを資本準備金に組み入れることを規定しています。資本準備金は、株主総会の決議により、資本金に組み入れることができます。

利益剰余金は、利益準備金とその他の剰余金により構成されます。日本の会社法は、利益剰余金を原資とする配当を行う日において、配当額の10分の1を、資本準備金および利益準備金の合計が資本金の4分の1に達するまで、資本準備金または利益準備金として積み立てることを規定しています。利益準備金は、株主総会の決議により、取り崩すことができます。なお、一部の海外の連結子会社についても、各国の法律に基づき、同様の利益準備金を積み立てることが定められています。

(4) 自己株式

前連結会計年度末および当連結会計年度末における当社および連結子会社が保有する当社株式の総数は、以下のとおりです。

	(単位：株)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
普通株式	100,828,074	147,087,841

日本の会社法では、株主総会の決議により分配可能額の範囲内で、取得する株式の数、取得価額の総額などを決定し、自己株式を取得することができます。また、市場取引または公開買付による場合には、定款の定めにより会社法上定められた条件の範囲内で、取締役会の決議により自己株式を取得することができます。

(5) その他の資本の構成要素

前連結会計年度および当連結会計年度におけるその他の資本の構成要素の内訳ごとの増減は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)			
	確定給付制度 の再測定	その他の包括利益 を通じて 公正価値で測定 する金融資産の 公正価値の純変動	在外営業活動体 の為替換算差額	合計
2021年4月1日残高	—	88,570	108,140	196,710
期中増減	117,489	58,863	736,578	912,930
利益剰余金への振替	△117,489	△1,713	—	△119,202
2022年3月31日残高	—	145,720	844,718	990,438
期中増減	3,304	△19,030	445,739	430,013
利益剰余金への振替	△3,304	250	—	△3,054
2023年3月31日残高	—	126,940	1,290,457	1,417,397

(6) その他の包括利益

前連結会計年度および当連結会計年度におけるその他の包括利益の内訳と対応する税効果額(非支配持分を含む)は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)					
	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)			当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)		
	税効果 考慮前	税効果額	税効果 考慮後	税効果 考慮前	税効果額	税効果 考慮後
純損益に振り替えられる ことのない項目						
確定給付制度の再測定						
当期発生額	153,785	△36,743	117,042	7,192	△3,842	3,350
純変動額	153,785	△36,743	117,042	7,192	△3,842	3,350
その他の包括利益を通じて 公正価値で測定する金融資産 の公正価値の純変動						
当期発生額	76,909	△18,274	58,635	△26,279	7,814	△18,465
純変動額	76,909	△18,274	58,635	△26,279	7,814	△18,465
持分法適用会社のその他の 包括利益に対する持分						
当期発生額	1,862	△76	1,786	294	△2	292
純変動額	1,862	△76	1,786	294	△2	292
純損益に振り替えられる 可能性のある項目						
その他の包括利益を通じて 公正価値で測定する金融資産 の公正価値の純変動						
当期発生額	△915	203	△712	△444	98	△346
純損益への振替額	39	△9	30	△166	38	△128
純変動額	△876	194	△682	△610	136	△474
在外営業活動体の為替換算差額						
当期発生額	680,724	-	680,724	427,650	△1,612	426,038
純損益への振替額	-	-	-	△4,690	1,612	△3,078
純変動額	680,724	-	680,724	422,960	-	422,960
持分法適用会社のその他の 包括利益に対する持分						
当期発生額	79,484	△1,972	77,512	32,436	△1,905	30,531
純損益への振替額	△65	-	△65	△102	-	△102
純変動額	79,419	△1,972	77,447	32,334	△1,905	30,429
その他の包括利益 合計	991,823	△56,871	934,952	435,891	2,201	438,092

前連結会計年度および当連結会計年度における非支配持分に含まれるその他の包括利益の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
純損益に振り替えられる ことのない項目		
確定給付制度の再測定		341
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定する金融資産の公正価値の純変動	△136	88
純損益に振り替えられる 可能性のある項目		
在外営業活動体の為替換算差額	21,593	7,650
合計	22,022	8,079

(7) 剰余金の配当

当社は、剰余金の配当について、日本の会社法の規定に基づいて算定される分配可能額の範囲内で行っています。分配可能額は、日本において一般に公正妥当と認められた会計原則に準拠して作成された当社の会計帳簿における利益剰余金の金額に基づいて算定されます。

前連結会計年度および当連結会計年度における利益剰余金を原資とする配当の金額は、以下のとおりです。

① 配当金支払額

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2021年5月14日 取締役会	普通株式	93,272	54.00	2021年3月31日	2021年6月7日
2021年11月5日 取締役会	普通株式	95,130	55.00	2021年9月30日	2021年12月1日

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年5月13日 取締役会	普通株式	111,256	65.00	2022年3月31日	2022年6月6日
2022年11月9日 取締役会	普通株式	102,219	60.00	2022年9月30日	2022年12月5日

② 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度末後となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年5月11日 取締役会	普通株式	利益剰余金	99,915	60.00	2023年3月31日	2023年6月6日

20 売上収益

(1) 収益の分解

当社のセグメント情報は、連結財務諸表注記の「4 セグメント情報」に記載のとおり、4つに区分されています。

前連結会計年度および当連結会計年度における仕向地別(外部顧客の所在地別)に分解された売上収益および分解された売上収益と各セグメントの売上収益の関係は、以下のとおりです。

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

					(単位：百万円)
	二輪事業	四輪事業	金融サービス 事業	パワープロダ クツ事業及び その他の事業	合計
顧客との契約から認識した収益					
日本	105,022	1,337,860	146,185	79,182	1,668,249
北米	230,766	4,877,900	1,289,076	152,096	6,549,838
欧州	202,254	319,340	—	79,393	600,987
アジア	1,307,915	2,314,425	37	63,861	3,686,238
その他の地域	337,219	280,702	—	24,305	642,226
合計	2,183,176	9,130,227	1,435,298	398,837	13,147,538
その他の源泉から認識した収益 (注)	2,077	17,271	1,385,369	441	1,405,158
合計	2,185,253	9,147,498	2,820,667	399,278	14,552,696

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

					(単位：百万円)
	二輪事業	四輪事業	金融サービス 事業	パワープロダ クツ事業及び その他の事業	合計
顧客との契約から認識した収益					
日本	109,393	1,375,593	158,653	89,627	1,733,266
北米	306,725	5,985,958	1,341,863	182,126	7,816,672
欧州	250,088	332,928	—	94,328	677,344
アジア	1,739,330	2,523,613	29	55,354	4,318,326
その他の地域	502,917	360,299	—	29,464	892,680
合計	2,908,453	10,578,391	1,500,545	450,899	15,438,288
その他の源泉から認識した収益 (注)	530	15,128	1,453,553	226	1,469,437
合計	2,908,983	10,593,519	2,954,098	451,125	16,907,725

(注) その他の源泉から認識した収益には、IFRS第16号に基づくリース収益およびIFRS第9号に基づく利息収入等が含まれています。

(2) 契約残高

前連結会計年度末および当連結会計年度末における顧客との契約から生じた債権および契約負債は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
顧客との契約から生じた債権：		
営業債権	785,157	893,559
契約負債：		
その他の流動負債	261,049	292,552
その他の非流動負債	193,845	240,556

前連結会計年度および当連結会計年度に認識した収益のうち、期首時点の契約負債残高に含まれていたものはそれぞれ199,902百万円、219,873百万円です。なお、前連結会計年度および当連結会計年度において、過去の期間に充足（または部分的に充足）した履行義務から認識した収益の金額に重要性はありません。また、当社および連結子会社における契約資産の残高に重要性はありません。

(3) 残存履行義務に配分した取引価格

前連結会計年度末および当連結会計年度末における未充足（または部分的に未充足）の履行義務に配分した取引価格の総額および収益の認識が見込まれる期間別の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
1年以内	127,377	150,507
1年超5年以内	221,282	280,981
5年超	15,748	14,892
合計	364,407	446,380

上記の表には、当初の予想期間が1年以内の残存履行義務に関する情報および収益認識が制限されている変動対価の金額の見積りは含めていません。

(4) 顧客との契約の獲得または履行のためのコストから認識した資産

前連結会計年度末および当連結会計年度末における顧客との契約の獲得のためのコストから認識した資産は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
顧客との契約の獲得のためのコストから認識した資産	128,864	148,074

当社および連結子会社は、顧客との契約を獲得するための増分コストおよび契約に直接関連する履行コストのうち、回収可能であると見込まれる部分を資産として認識しています。顧客との契約獲得のための増分コストとは、顧客との契約を獲得するために発生したコストで、当該契約を獲得しなければ発生しなかったであろうものです。契約の獲得のためのコストから認識した資産については、連結財政状態計算書上は主にその他の非流動資産に計上し、契約に基づくサービスが提供される期間にわたって償却しています。なお、契約の履行のために発生したコストから認識した資産の額に重要性はありません。

前連結会計年度および当連結会計年度における当該資産の償却額はそれぞれ39,682百万円、52,193百万円です。

21 研究開発費

前連結会計年度および当連結会計年度の研究開発費の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
当期中に発生した研究開発支出	804,025	852,067
開発資産への振替額	△159,174	△120,811
開発資産の償却費及び減損損失	142,205	149,659
合計	787,056	880,915

22 金融収益及び金融費用

前連結会計年度および当連結会計年度における金融収益及び金融費用の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
受取利息		
償却原価で測定する金融資産	22,847	69,217
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	185	497
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産	2,595	3,357
合計	25,627	73,071
支払利息		
償却原価で測定する金融負債	△15,706	△34,065
その他	△1,161	△2,047
合計	△16,867	△36,112
その他(純額)		
受取配当金		
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	4,777	6,150
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産	—	—
デリバティブから生じる損益		
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産および金融負債	△77,789	△92,144
為替差損益	68,033	47,705
その他	△7,335	△17,319
合計	△12,314	△55,608
合計	△3,554	△18,649

23 法人所得税

(1) 法人所得税費用

前連結会計年度および当連結会計年度における税引前利益および法人所得税費用の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)					
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)			当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)		
	国内	海外	合計	国内	海外	合計
税引前利益	△42,213	1,112,403	1,070,190	△40,638	920,203	879,565
法人所得税費用						
当期分	9,539	277,894	287,433	12,699	353,611	366,310
繰延分	△4,081	26,137	22,056	△92,631	△111,423	△204,054
合計	5,458	304,031	309,489	△79,932	242,188	162,256

当連結会計年度の国内の法人所得税費用(繰延分)の減少額には、従前は未認識であった税務上の欠損金、税額控除または過去の期間の一時差異から生じた便益の額96,195百万円が含まれています。これは、当社および一部の国内の連結子会社により構成される通算グループにおいて、将来課税所得が稼得される可能性が高いと判断したことによるものです。

当社および国内の連結子会社の法定実効税率は前連結会計年度および当連結会計年度において30.2%です。海外の連結子会社の所得に対しては、16.0%から34.0%の範囲の税率が適用されています。

日本の法定実効税率と平均実際負担税率との差異は、以下のとおりです。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
法定実効税率	30.2%	30.2%
海外連結子会社の法定実効税率との差異	△4.5	△6.3
持分法で会計処理されている投資による影響	△5.7	△4.0
未分配利益およびロイヤルティに係る外国源泉税による影響	7.1	11.3
未認識の繰延税金資産の変動	1.4	△10.3
課税所得計算上加減算されない損益による影響	0.0	0.1
税額控除による影響	△0.9	△2.9
過年度の税効果に対する見直し	△0.1	△0.5
法人所得税の不確実性に係る調整	0.9	0.6
税法変更に伴う調整額	0.1	△0.6
その他	0.4	0.8
平均実際負担税率	28.9%	18.4%

(2) 繰延税金資産および繰延税金負債

前連結会計年度末および当連結会計年度末における繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
繰延税金資産		
棚卸資産	44,029	51,604
未払費用	36,567	56,926
引当金	100,408	133,007
有形固定資産	27,592	27,854
無形資産	12,017	47,995
退職給付に係る負債	67,120	64,275
繰越欠損金	67,787	108,106
繰越税額控除	22,285	14,930
その他	103,114	109,399
合計	480,919	614,096
繰延税金負債		
有形固定資産	82,518	106,715
無形資産	195,542	182,258
その他の金融資産	61,580	59,275
オペレーティング・リース	846,978	772,991
未分配利益	59,650	60,914
退職給付に係る資産	68,772	56,932
その他(注)	65,041	146,519
合計	1,380,081	1,385,604
繰延税金資産(△負債)純額	△899,162	△771,508

(注) 当連結会計年度において、米国における金融サービスに係る債権の税務上の評価を発生原因とする繰延税金負債が68,005百万円含まれています。

前連結会計年度および当連結会計年度における繰延税金資産および繰延税金負債の増減のうち、連結損益計算書で法人所得税費用として認識された金額は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
棚卸資産	△9,865	△7,407
引当金	△3,491	△27,854
有形固定資産	△3,738	18,708
退職給付に係る負債(資産)	△4,991	△4,149
オペレーティング・リース	△35,308	△153,429
未分配利益	4,198	△1,005
繰越欠損金	△1,608	△42,172
繰越税額控除	16,102	9,504
その他(注)	60,757	3,750
合計	22,056	△204,054

(注) 前連結会計年度において、未払費用を発生原因とする繰延税金資産の減少により認識された法人所得税費用が27,321百万円含まれています。

繰延税金資産の認識にあたり、将来減算一時差異、繰越欠損金および繰越税額控除の一部又は全部が将来課税所得に対して利用できる可能性を考慮しています。繰延税金資産の回収可能性の評価においては、予定される繰延税金負債の取崩し、予測される将来課税所得およびタックス・プランニングを考慮しています。当社および連結子会社は、過去の課税所得水準および繰延税金資産が控除可能な期間における将来課税所得の予測に基づき、前連結会計年度末および当連結会計年度末における繰延税金資産は、回収される可能性が高いものと考えていますが、当社および連結子会社を取り巻く市場の動向や為替変動などの経済情勢により、将来課税所得の予測の不確実性は増大します。なお、前連結会計年度末および当連結会計年度末の繰延税金資産のうち、それぞれの前連結会計年度または当連結会計年度に損失が生じている納税主体に帰属しているものは、それぞれ26,109百万円、19,414百万円です。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における繰延税金資産を認識していない将来減算一時差異、繰越欠損金および繰越税額控除は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
将来減算一時差異	553,778	391,536
繰越欠損金	693,323	532,191
繰越税額控除	549	35,629

前連結会計年度末および当連結会計年度末における繰延税金資産を認識していない繰越欠損金の失効期限別の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
1年以内	3,603	13,331
1年超5年以内	73,448	82,173
5年超20年以内	256,340	107,052
無期限	359,932	329,635
合計	693,323	532,191

前連結会計年度末および当連結会計年度末における繰延税金資産を認識していない繰越税額控除の失効期限別の内訳は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
1年以内	147	5
1年超5年以内	259	35,611
5年超20年以内	143	13
無期限	—	—
合計	549	35,629

前連結会計年度末および当連結会計年度末の連結子会社に対する投資および共同支配企業に対する持分に係る繰延税金負債を認識していない一時差異の合計は、それぞれ6,323,299百万円、6,956,545百万円です。

24 1株当たり当期利益

前連結会計年度および当連結会計年度における基本および希薄化後1株当たり当期利益(親会社の所有者に帰属)は、以下の情報に基づいて算定しています。なお、前連結会計年度および当連結会計年度において、希薄化効果のある重要な潜在的普通株式はありません。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
親会社の所有者に帰属する当期利益(百万円)	707,067	651,416
基本的加重平均普通株式数(株)	1,719,961,835	1,696,307,115
基本的1株当たり当期利益(親会社の所有者に帰属)	411円09銭	384円02銭

25 金融リスク管理

(1) リスク管理に関する事項

当社および連結子会社は、日本をはじめとする世界各国の生産拠点で生産活動を行っており、その製品および部品を複数の国で販売しています。その過程において、当社および連結子会社は、事業活動から生じる営業債権、金融サービスに係る債権、営業債務および資金調達に係る債務等を保有し、当該金融商品を保有することで市場リスク、信用リスクおよび流動性リスクにさらされています。

当社および連結子会社は、定期的なモニタリングを通じてこれらのリスクを評価しています。

(2) 市場リスク

当社および連結子会社は、為替または金利の変動により金融商品の公正価値または将来キャッシュ・フローが変動するリスクを有しています。

当社および連結子会社は、主に、為替または金利の変動により将来キャッシュ・フローが変動するリスクを低減するために、為替予約、通貨オプション契約、通貨スワップ契約および金利スワップ契約などのデリバティブ取引を行っています。

デリバティブ取引については、リスク管理方針に従い、実需の範囲で行っています。また、当社および連結子会社は、売買目的でデリバティブを保有していません。

① 為替リスク

当社および連結子会社は、日本をはじめとする世界各国の生産拠点で生産活動を行っており、その製品および部品の多くを複数の国に輸出しています。各国における生産および販売では、外貨建てで購入する原材料および部品や、販売する製品および部品があります。したがって、為替変動は、当社および連結子会社の収益またはその保有する金融商品の価値に影響を及ぼす可能性があります。

為替予約および通貨オプション契約は、外貨建取引(主に米ドル建)の為替レートの変動リスクを管理するために行っています。

(為替感応度分析)

当社および連結子会社が前連結会計年度末および当連結会計年度末において保有する金融商品の為替リスクに対する感応度分析は、以下のとおりです。なお、感応度分析は、為替以外のその他の全ての変数が一定であることを前提として、米ドルに対して日本円が1%円高(上昇)となった場合における税引前利益への影響を示しています。

	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
税引前利益への影響	△1,780	△2,696

(単位：百万円)

② 金利リスク

当社および連結子会社は、主に債務契約および金融サービスに係る債権に関連する金利変動リスクを有しています。当社および連結子会社は、コマーシャルペーパーのような短期調達資金に加え、固定または変動金利の長期債務を保有しています。通常、金融サービスに係る債権は、固定金利です。金利スワップ契約については、主に金融サービスに係る債権の金利変動に対するリスクを管理し、金融収益と金融費用を対応させることを目的としています。通貨スワップ契約は、上記の金利スワップ契約を他通貨間で行う際のもので、為替変動リスクのヘッジ機能を併せもつものです。

(金利感応度分析)

当社および連結子会社が前連結会計年度末および当連結会計年度末において保有する金融商品の金利リスクに対する感応度分析は、以下のとおりです。なお、感応度分析は、金利以外のその他の全ての変数が一定であることを前提として、金利が100ベース・ポイント上昇した場合における税引前利益への影響を示しています。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
税引前利益への影響	△25,830	△2,092

③ 株価リスク

当社および連結子会社は、市場性のある資本性証券を保有していることから価格変動リスクを有しています。市場性のある資本性証券は、売買以外の目的で保有しており、主にその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しています。

(3) 信用リスク

当社および連結子会社は、相手方が債務を履行できなくなることにより、財務的損失を被るリスクを有しています。デリバティブ以外の金融資産については、与信管理規定に従ってリスクの低減を図っています。また、デリバティブについては、契約相手を既定の信用基準に該当する国際的な有力銀行や金融機関に限定することでリスクの低減を図っています。

当社および連結子会社の信用リスクは、主に、金融サービスに係る債権に関して発生しています。顧客に対する金融債権に係る信用リスクは、一般的な経済動向によって影響を受けることがあります。失業率の上昇などの経済情勢悪化は貸倒れのリスクを高め、中古車価格の下落は、担保の回収による補填金額を減少させる可能性があります。当社の金融子会社は、信用リスクに影響を与えると考えられる審査基準のモニタリングおよび見直し、見積損失を考慮した契約金利の設定、損失を最小化する回収努力を通じ、顧客に対する金融債権に係る信用リスクに対処しています。販売店に対する金融債権に係る信用リスクは、販売店の財務体質、担保の価値、販売店の信用力に影響を与える可能性のある経済要因などにより影響を受けます。当社の金融子会社は、融資前に実施する販売店の財務体質の包括的な審査、支払実績と既存の融資に対する弁済能力の継続的なモニタリングなどを通じ、直面する信用リスクに対処しています。

また、当社および連結子会社は、さまざまな保証契約を結んでいます。これらの契約には販売店に対する貸出コミットメントおよび従業員の銀行住宅ローンに対する保証が含まれます。当社の金融子会社は、販売店に対する貸出コミットメント契約に基づき、貸付金の未実行残高を有しています。これらの貸出コミットメント契約には、貸出先の信用状態等に関する審査を貸出の条件としているものが含まれるため、必ずしも貸出実行されるものではありませんが、貸出実行後に販売店が債務を履行できなくなることにより、財務的損失を被るリスクを有しています。また、従業員が銀行住宅ローンについて債務不履行に陥った場合、当社および連結子会社は、保証を履行することが要求されます。当連結会計年度末において、従業員は予定された返済を行えると考えられるため、当該支払義務により見積られた損失はありません。

① 信用リスク・エクスポージャー

前連結会計年度末および当連結会計年度末における支払期日を過ぎた金融サービスに係る債権の年齢分析は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	(単位：百万円)				合計
	30日未満	30-59日 経過	60-89日 経過	90日以上 経過	
顧客に対する金融債権					
小売金融	204,661	43,051	11,452	7,512	266,676
ファイナンス・リース	200	51	7	324	582
販売店に対する金融債権					
卸売金融	9,661	36	4	23	9,724
合計	214,522	43,138	11,463	7,859	276,982

当連結会計年度末(2023年3月31日)

	(単位：百万円)				合計
	30日未満	30-59日 経過	60-89日 経過	90日以上 経過	
顧客に対する金融債権					
小売金融	223,674	55,675	13,185	9,481	302,015
ファイナンス・リース	545	118	5	300	968
販売店に対する金融債権					
卸売金融	8,929	9	11	18	8,967
合計	233,148	55,802	13,201	9,799	311,950

前連結会計年度末および当連結会計年度末における顧客に対する金融債権のうち小売金融の内訳は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	(単位：百万円)			合計
	12ヵ月の 予想信用損失 (ステージ1)	全期間の予想信用損失		
		信用減損なし (ステージ2)	信用減損あり (ステージ3)	
顧客に対する金融債権				
小売金融(注)	4,897,471	139,306	17,651	5,054,428

当連結会計年度末(2023年3月31日)

	(単位：百万円)			合計
	12ヵ月の 予想信用損失 (ステージ1)	全期間の予想信用損失		
		信用減損なし (ステージ2)	信用減損あり (ステージ3)	
顧客に対する金融債権				
小売金融(注)	4,985,289	356,005	21,966	5,363,260

(注) 当社の金融子会社は小売金融に係る債権の予想信用損失を集散的に測定しており、当該債権の残高を信用リスクごとの等級に直接配分していないことから、小売金融に係る債権について予想信用損失モデルのステージ毎の総額を表示しています。

当社の金融子会社は、販売店毎に各社の財政状態などを踏まえて等級を設定しています。等級については、少なくとも年に一度見直しを行い、リスクの高い販売店については、より高い頻度で見直しを行っています。

以下の表は、販売店に対する金融債権および貸出コミットメントの残高を、等級を基にグループA、グループB、2つのグループに分類して表示しています。リスクの低い販売店に対する残高をグループAに分類し、残りの残高をグループBに分類しています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における、販売店に対する金融債権の残高および貸出コミットメントに対する割引前の将来最大支払額の等級別の内訳は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	12カ月の 予想信用損失 (ステージ1)	全期間の予想信用損失		合計
		信用減損なし (ステージ2)	信用減損あり (ステージ3)	
(単位：百万円)				
販売店に対する金融債権				
グループA	188,101	88	2,117	190,306
グループB	91,995	2,133	72	94,200
合計	280,096	2,221	2,189	284,506
貸出コミットメント				
グループA	95,485	—	—	95,485
グループB	23,683	—	—	23,683
合計	119,168	—	—	119,168

前連結会計年度末における、従業員の銀行住宅ローンに対する割引前の将来最大支払額は、7,098百万円です。

当連結会計年度末(2023年3月31日)

	12カ月の 予想信用損失 (ステージ1)	全期間の予想信用損失		合計
		信用減損なし (ステージ2)	信用減損あり (ステージ3)	
(単位：百万円)				
販売店に対する金融債権				
グループA	297,885	706	4,612	303,203
グループB	116,156	1,684	123	117,963
合計	414,041	2,390	4,735	421,166
貸出コミットメント				
グループA	103,858	—	—	103,858
グループB	15,364	—	—	15,364
合計	119,222	—	—	119,222

当連結会計年度末における、従業員の銀行住宅ローンに対する割引前の将来最大支払額は、5,988百万円です。

② 保証として保有している担保

当社の金融子会社は顧客に対する金融債権については、通常、販売した製品を担保として保有しています。販売店に対する金融債権については、販売した製品に加えて、販売店のその他の資産を担保として保有しています。担保が信用リスクをどの程度軽減しているかは、担保回収時の未回収債権残高に対する、担保の価値に影響されます。帳簿価額を上回る部分を除くと、前連結会計年度末および当連結会計年度末における信用減損した顧客に対する金融債権に対する担保の見積公正価値は、それぞれ概ね帳簿価額の90%、80%であり、信用減損した販売店に対する金融債権に対する担保の見積公正価値は、それぞれ概ね帳簿価額の100%、100%です。担保が信用リスクをどの程度軽減しているかは、担保を回収できるか否かにも影響されます。

(4) 流動性リスク

当社および連結子会社は、コマーシャルペーパーの発行、銀行借入金、メディアムタームノート、社債の発行、金融債権の証券化およびオペレーティング・リース資産の証券化等により資金を調達しており、資金調達環境の悪化などにより支払期日にその支払を実行できなくなるリスクを有しています。

当社および連結子会社は、事業活動のための適切な資金確保、適切な流動性の維持および健全なバランスシートの維持により、流動性リスクに対処しています。

生産販売事業における必要資金については、主に営業活動から得られる資金、銀行借入金、社債の発行およびコマーシャルペーパーの発行などによりまかなっています。また、顧客および販売店に対する金融サービスにおける必要資金については、主にメディアムタームノート、銀行借入金、金融債権の証券化、オペレーティング・リース資産の証券化、コマーシャルペーパーの発行および社債の発行などによりまかなっています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における当社および連結子会社のコマーシャルペーパープログラムおよびメディアムタームノートプログラムに関する発行限度額のうち、未使用の金額は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
コマーシャルペーパー	1,190,631	729,096
メディアムタームノート	1,291,612	3,832,311
合計	2,482,243	4,561,407

これらのプログラムにより、当社および連結子会社は市中金利で資金調達を行うことが出来ます。

当社および連結子会社は、景気後退による市場の縮小や金融市場・為替市場の混乱などにより、流動性に一部支障をきたす場合に備え、継続的に債務を借り換えているコマーシャルペーパーについて、代替流動性として十分な契約信用供与枠(コミットメントライン)を有しています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における当社および連結子会社の金融機関からの契約信用供与枠(コミットメントライン)のうち、未使用の金額は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
コマーシャルペーパープログラム	1,226,138	1,306,781
その他	67,976	65,299
合計	1,294,114	1,372,080

通常、この契約信用供与に基づく借入は、プライムレート(最優遇貸出金利)で行われます。

(金融負債の満期分析)

① デリバティブ以外の金融負債

前連結会計年度末および当連結会計年度末における非デリバティブ金融負債の期日別の内訳は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	帳簿価額				(単位：百万円)
					1年以内
営業債務	1,236,233	1,236,233	—	—	1,236,233
資金調達に係る債務	8,102,556	3,218,988	4,407,350	765,207	8,391,545
未払費用	375,601	375,601	—	—	375,601
その他の金融負債	367,041	93,054	94,837	206,529	394,420
合計	10,081,431	4,923,876	4,502,187	971,736	10,397,799

当連結会計年度末(2023年3月31日)

	帳簿価額				(単位：百万円)
					1年以内
営業債務	1,426,333	1,426,333	—	—	1,426,333
資金調達に係る債務	7,665,168	3,410,145	4,074,986	511,254	7,996,385
未払費用	419,570	419,570	—	—	419,570
その他の金融負債	369,878	87,685	100,800	207,949	396,434
合計	9,880,949	5,343,733	4,175,786	719,203	10,238,722

その他の金融負債には、リース負債が含まれています。前連結会計年度末および当連結会計年度末のリース負債の期日別の内訳は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

					(単位：百万円)
	帳簿価額	1年以内	1年超5年以内	5年超	契約上のキャッシュ・フロー合計
リース負債	318,758	71,510	86,305	188,321	346,136

当連結会計年度末(2023年3月31日)

					(単位：百万円)
	帳簿価額	1年以内	1年超5年以内	5年超	契約上のキャッシュ・フロー合計
リース負債	315,958	69,297	87,428	185,790	342,515

② デリバティブ金融負債

前連結会計年度末および当連結会計年度末におけるデリバティブ金融負債の期日別の内訳は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

				(単位：百万円)
	1年以内	1年超5年以内	5年超	契約上のキャッシュ・フロー合計
デリバティブ金融負債	53,895	106,214	25,140	185,249

当連結会計年度末(2023年3月31日)

				(単位：百万円)
	1年以内	1年超5年以内	5年超	契約上のキャッシュ・フロー合計
デリバティブ金融負債	109,112	137,056	22,787	268,955

26 公正価値

(1) 公正価値ヒエラルキーの定義

当社および連結子会社は、公正価値の測定に使われる評価手法における基礎条件を次の3つのレベルに順位付けしています。

レベル1 測定日現在において入手しうる同一の資産または負債の活発な市場における公表価格

レベル2 レベル1に分類される公表価格以外で、当該資産または負債について、直接または間接的に市場で観察可能な基礎条件

レベル3 当該資産または負債について、市場で観察不能な基礎条件

これらの基礎条件に基づき測定された資産および負債の公正価値は、重要な基礎条件のうち、最も低いレベルの基礎条件に基づき分類しています。なお、当社および連結子会社は、資産および負債のレベル間の振替を、振替のあった報告期間の期末日に認識しています。

(2) 公正価値の測定方法

資産および負債の公正価値は、関連市場情報および適切な評価方法を使用して決定しています。

資産および負債の公正価値の測定方法および前提条件は、以下のとおりです。

(現金及び現金同等物、営業債権、営業債務)

これらの公正価値は、短期間で決済されるため、帳簿価額と近似しています。

(金融サービスに係る債権)

金融サービスに係る債権の公正価値は、主に類似の残存契約期間の債権に対し適用される直近の利率を使用し、将来のキャッシュ・フローを現在価値に割引くことによって測定しています。したがって、金融サービスに係る債権の公正価値の測定は、レベル3に分類しています。

(負債性証券)

負債性証券は、主に投資信託、社債、地方債およびオークション・レート・セキュリティで構成されています。

活発な市場のある投資信託の公正価値は、市場における公表価格に基づいて測定しています。したがって、活発な市場のある投資信託の公正価値の測定は、レベル1に分類しています。

社債や地方債の公正価値は、金融機関等の独自の価格決定モデルに基づき、信用格付けや割引率などの市場で観察可能な基礎条件を用いて測定しています。したがって、社債および地方債の公正価値の測定は、レベル2に分類しています。

当社の連結子会社が保有するオークション・レート・セキュリティはA格からAAA格で、保証機関による保険および教育省や米国政府による再保険がかけられており、約95%は米国政府によって保証されています。オークション・レート・セキュリティの公正価値は、市場で観察可能な基礎条件に加えて、各オークションの成立確率のような市場で観察不能な基礎条件を用いる、第三者機関の評価を使用しています。したがって、オークション・レート・セキュリティの公正価値の測定は、レベル3に分類しています。

(資本性証券)

活発な市場のある資本性証券の公正価値は、市場における公表価格に基づいて測定しています。したがって、活発な市場のある資本性証券の公正価値の測定は、レベル1に分類しています。

活発な市場のない資本性証券の公正価値は、主に割引キャッシュ・フロー法、類似企業比較法またはその他の適切な評価方法を用いて測定しています。したがって、活発な市場のない資本性証券の公正価値の測定は、レベル3に分類しています。なお、活発な市場のない資本性証券について、取得原価が公正価値の最善の見積りを表す場合には、取得原価をもって公正価値としています。

レベル3に区分された資本性証券の公正価値の測定に関する重要な観測不能な基礎条件は、割引キャッシュ・フロー法においては将来キャッシュ・フローの見積りおよび割引率、類似企業比較法においては類似企業の株価純資産倍率です。公正価値は将来キャッシュ・フローの増加(減少)、割引率の低下(上昇)および類似企業の株価純資産倍率の上昇(低下)により増加(減少)します。当該公正価値測定は、適切な権限者に承認された連結決算方針書に従い、当社および連結子会社の経理部門担当者等が評価方法を決定し、公正価値を測定しています。

(デリバティブ)

デリバティブは、主に為替予約、通貨オプション契約、通貨スワップ契約および金利スワップ契約で構成されています。

為替予約および通貨オプション契約の公正価値は、為替レートや割引率、ボラティリティなどの市場で観察可能な基礎条件に基づいて測定しています。通貨スワップ契約および金利スワップ契約の公正価値は、金利や為替レートなどの市場で観察可能な基礎条件を使用し、将来のキャッシュ・フローを現在価値に割引くことによって測定しています。したがって、デリバティブの公正価値の測定は、レベル2に分類しています。

デリバティブの評価については、契約相手先の信用リスクを考慮しています。

(資金調達に係る債務)

資金調達に係る債務の公正価値は、条件および残存期間の類似する債務に対し適用される現在入手可能な利率を使用し、将来のキャッシュ・フローを現在価値に割引くことによって測定しています。したがって、資金調達に係る債務の公正価値の測定は、主にレベル2に分類しています。

(3) 経常的に公正価値で測定する資産および負債

前連結会計年度末および当連結会計年度末における経常的に公正価値で測定する資産および負債の測定値の内訳は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	レベル1	レベル2	レベル3	(単位：百万円) 合計
その他の金融資産				
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産				
デリバティブ				
為替商品	—	15,674	—	15,674
金利商品	—	114,016	—	114,016
その他	—	—	4,648	4,648
合計	—	129,690	4,648	134,338
負債性証券	42,837	54,641	4,773	102,251
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
負債性証券	—	19,984	—	19,984
資本性証券	335,745	—	133,038	468,783
合計	378,582	204,315	142,459	725,356
その他の金融負債				
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債				
デリバティブ				
為替商品	—	66,644	—	66,644
金利商品	—	83,669	—	83,669
その他	—	1,629	—	1,629
合計	—	151,942	—	151,942
合計	—	151,942	—	151,942

前連結会計年度において、レベル1とレベル2の間の振替はありません。

当連結会計年度末(2023年3月31日)

	(単位：百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
その他の金融資産				
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産				
デリバティブ				
為替商品	—	29,026	—	29,026
金利商品	—	151,242	—	151,242
その他	—	—	5,700	5,700
合計	—	180,268	5,700	185,968
負債性証券	43,264	53,634	5,074	101,972
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
負債性証券	—	26,555	—	26,555
資本性証券	325,318	—	149,820	475,138
合計	368,582	260,457	160,594	789,633
その他の金融負債				
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債				
デリバティブ				
為替商品	—	95,412	—	95,412
金利商品	—	141,786	—	141,786
その他	—	5,770	—	5,770
合計	—	242,968	—	242,968
合計	—	242,968	—	242,968

当連結会計年度において、レベル1とレベル2の間の振替はありません。

前連結会計年度および当連結会計年度における経常的に公正価値により測定するレベル3の資産および負債の増減は、以下のとおりです。

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

	(単位：百万円)		
	デリバティブ	負債性証券	資本性証券
2021年4月1日残高	4,829	5,314	110,050
利得または損失			
純損益	△674	112	—
その他の包括利益	—	—	17,973
購入	—	—	7,075
売却	—	△1,124	△1,487
上場によるレベル1への振替	—	—	△1,158
在外営業活動体の為替換算差額	493	471	585
2022年3月31日残高	4,648	4,773	133,038
純損益に含まれる報告期間の末日に保有する資産に係る未実現損益	△674	112	—

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

	(単位：百万円)		
	デリバティブ	負債性証券	資本性証券
2022年4月1日残高	4,648	4,773	133,038
利得または損失			
純損益	678	△136	—
その他の包括利益	—	—	9,156
購入	—	—	10,029
売却	—	—	△1,144
上場によるレベル1への振替	—	—	△1,551
在外営業活動体の為替換算差額	374	437	292
2023年3月31日残高	5,700	5,074	149,820
純損益に含まれる報告期間の末日に保有する資産に係る未実現損益	678	△136	—

- (注) 1 前連結会計年度および当連結会計年度の純損益に含まれる利得または損失は、連結損益計算書の金融収益及び金融費用 その他(純額)に含まれています。
 2 前連結会計年度および当連結会計年度の資本性証券のその他の包括利益に含まれる利得または損失は、連結包括利益計算書の純損益に振り替えられることのない項目のその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の公正価値の純変動に含まれています。

(4) 償却原価で測定する金融資産および金融負債

前連結会計年度末および当連結会計年度末における償却原価で測定する金融資産および金融負債の帳簿価額と公正価値は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)			
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)		当連結会計年度末 (2023年3月31日)	
	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値
金融サービスに係る債権	5,434,496	5,374,754	5,894,752	5,696,283
負債性証券	79,176	79,176	85,235	85,235
資金調達に係る債務	8,102,556	7,984,057	7,665,168	7,440,205

上記の表には、償却原価で測定する金融資産および金融負債のうち、帳簿価額が公正価値と近似するものを含めていません。

27 金融資産および金融負債の相殺

前連結会計年度末および当連結会計年度末における金融資産および金融負債の相殺に関する情報は、以下のとおりです。

前連結会計年度末(2022年3月31日)

	(単位：百万円)				
	認識した金融資産および金融負債の総額	連結財政状態計算書で相殺した金額	連結財政状態計算書に表示している純額	マスター・ネットティング契約または類似の契約の対象だが、相殺の要件を満たさない金額	純額
その他の金融資産					
デリバティブ	134,338	—	134,338	△98,419	35,919
その他の金融負債					
デリバティブ	151,942	—	151,942	△98,419	53,523

当連結会計年度末(2023年3月31日)

	(単位：百万円)				
	認識した金融資産および金融負債の総額	連結財政状態計算書で相殺した金額	連結財政状態計算書に表示している純額	マスター・ネットティング契約または類似の契約の対象だが、相殺の要件を満たさない金額	純額
その他の金融資産					
デリバティブ	185,968	—	185,968	△133,472	52,496
その他の金融負債					
デリバティブ	242,968	—	242,968	△133,472	109,496

金融資産および金融負債の相殺の要件を満たさないため相殺していない金融商品に関する相殺の権利は、通常、倒産その他の事由により取引先が債務を履行できなくなるなどの特定の状況が発生した場合にのみ強制力が生じるものです。

28 契約残高および偶発債務

(1) 契約

(発注契約)

前連結会計年度末および当連結会計年度末における設備投資の発注残高およびその他契約残高は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
設備投資の発注残高およびその他契約残高	60,527	107,865

(2) 損害請求および訴訟

当社および連結子会社は、さまざまな訴訟および損害賠償請求の潜在的な義務を負っています。当社および連結子会社は、経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性が高く、かつ、その債務の金額について信頼性をもって見積ることができる場合に、引当金を計上しています。当社および連結子会社は、定期的に当該引当金を見直し、訴訟および損害賠償請求の性格や訴訟の進行状況、弁護士の意見などを考慮して、当該引当金を修正しています。

製造物責任(P L)または個人傷害に関する損害賠償請求または訴訟に関して、当社および連結子会社は、一般的な損害や特別な損害について原告側が勝訴した判決による債務および裁判のための費用は、保険および引当金で十分に賄えるものと考えています。いくつかの訴訟では懲罰的な損害賠償が申し立てられています。

弁護士と相談し、現存する訴訟および損害賠償請求に関連する知る限りの全ての要素を考慮した結果、これらの訴訟および損害賠償請求は当社および連結子会社の財政状態および経営成績へ重要な影響を与えるものではないと考えています。

(エアバッグインフレーターに関連する損失)

当社および連結子会社は、エアバッグインフレーターに関連した市場措置を実施しています。当該案件に関連し、経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性が高く、かつ、その債務の金額について信頼性をもって見積ることができる製品保証費用について、引当金を計上しています。新たな事象の発生等により追加的な引当金の計上が必要となる可能性があります。現時点では、将来の引当金の金額、発生時期を合理的に見積ることができません。

29 ストラクチャード・エンティティ

当社および連結子会社は、IFRS第10号「連結財務諸表」に基づき、ストラクチャード・エンティティに対する支配についての検討を行っています。当社および連結子会社は、ストラクチャード・エンティティに対する支配の有無を、議決権または類似の権利の保有割合に加え、投資先に対する契約上の取決めなどを勘案して総合的に判定し、支配を有するストラクチャード・エンティティを連結しています。

当社の金融子会社は、流動性の確保および資金調達のために、定期的に金融債権およびオペレーティング・リース資産の証券化を行っています。証券化された資産は、資産担保証券を発行することを目的に設立したストラクチャード・エンティティに譲渡されます。当社の金融子会社は、金融債権およびオペレーティング・リース資産の受益権に対する支払いの延滞や不履行を含むサービス業務の権利を保持することにより、当該ストラクチャード・エンティティの経済実績にもっとも重要な影響を与える活動を指揮する能力を有していると判断しています。また、当社の金融子会社は、当該ストラクチャード・エンティティの劣後持分の一部を保有することにより、当該ストラクチャード・エンティティの潜在的に重要な損失を負担する義務および様々な便益を享受する権利を有していると判断しています。したがって、当社は当該ストラクチャード・エンティティを実質的に支配しているとみなし、当社が支配を有するストラクチャード・エンティティとして連結しています。

なお、当該資産担保証券の所有者は、業界の慣行において、当社の金融子会社が当該ストラクチャード・エンティティに提供する表明事項および保証事項を除き、当社の金融子会社の債権一般に対して遡及権を有しません。

前連結会計年度末および当連結会計年度末において、重要な連結対象外のストラクチャード・エンティティはありません。

30 関連当事者

(1) 関連当事者との取引

当社および連結子会社は、関連会社および共同支配企業から、原材料、部品およびサービスなどについて仕入れており、また、製品、生産用部品、設備およびサービスなどを売上げています。関連会社および共同支配企業との取引は、独立企業間価格を基礎として行っています。

前連結会計年度末および当連結会計年度末における関連会社および共同支配企業に対する債権債務の残高は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度末 (2022年3月31日)	当連結会計年度末 (2023年3月31日)
債権残高		
関連会社	34,317	95,429
共同支配企業	346,370	340,368
合計	380,687	435,797
債務残高		
関連会社	147,705	207,090
共同支配企業	36,380	67,044
合計	184,085	274,134

前連結会計年度および当連結会計年度における関連会社および共同支配企業との取引高は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
売上収益		
関連会社	93,187	125,318
共同支配企業	1,053,370	942,003
合計	1,146,557	1,067,321
仕入高		
関連会社	1,176,066	1,443,840
共同支配企業	194,321	238,341
合計	1,370,387	1,682,181

(未認識のコミットメント)

当社は、2022年8月29日付でLGエナジーソリューションとの間で合弁契約を締結し、新たに設立されたL-Hバッテリーカンパニー・インコーポレーテッド(当社の関連会社)に対する1,730百万米ドルの出資に合意しました。当社は、当連結会計年度末において、当該合弁契約に基づく出資のコミットメントを1,627百万米ドル有しています。

(2) 主要な経営幹部に対する報酬

前連結会計年度および当連結会計年度における当社の取締役および執行役に対する報酬は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
役員報酬	696	679
STI (Short Term Incentive)	188	229
LTI (Long Term Incentive)	159	286
合計	1,043	1,194

(3) 主要な連結子会社

2023年3月31日現在、主要な連結子会社は、以下のとおりです。

名称	住所	主要な事業の内容		議決権の 所有割合 (%)
		セグメントの名称	事業形態	
(株)本田技術研究所	埼玉県 和光市	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	研究開発	100.0
(株)ホンダファイナンス	東京都 千代田区	金融サービス事業	金融	100.0
アメリカンホンダモーターカンパニー・インコーポレーテッド	米国 カリフォルニア州 トーランス	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	統轄会社 研究開発 生産販売	100.0
アメリカンホンダファイナンス・コーポレーション	米国 カリフォルニア州 トーランス	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)
ホンダディベロップメントアンドマニュファクチュアリングオブアメリカ・エル・エル・シー	米国 オハイオ州 メアリスビル	四輪事業	研究開発 生産	100.0 (100.0)
ホンダカナダ・インコーポレーテッド	カナダ オンタリオ州 マーカム	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	生産販売	100.0 (49.9)
ホンダカナダファイナンス・インコーポレーテッド	カナダ オンタリオ州 マーカム	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)
ホンダ・デ・メキシコ・エス・エー・デ・シー・ブイ	メキシコ ハリスコ州 エルサルト	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	生産販売	100.0 (99.8)
ホンダモーターヨーロッパ・リミテッド	英国 ブラックネル	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	統轄会社 販売	100.0
ホンダファイナンスヨーロッパ・パブリックリミテッドカンパニー	英国 ブラックネル	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)
本田技研工業(中国)投資有限公司	中国 北京市	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	統轄会社 販売	100.0
本田汽車零部件製造有限公司	中国 佛山市	四輪事業	生産	100.0 (100.0)
ホンダモーターサイクルアンドスクーターインディアプライベート・リミテッド	インド グルグラム	二輪事業	生産販売	100.0 (3.2)
ホンダカーズインディア・リミテッド	インド グレートノーイダ	二輪事業 四輪事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	生産販売	100.0 (19.1)

名称	住所	主要な事業の内容		議決権の 所有割合 (%)
		セグメントの名称	事業形態	
ピー・ティ・ホンダプロスペクトモーター	インドネシア ジャカルタ	四輪事業	生産販売	51.0
ホンダ・マレーシア・エスディーエヌ・ビーエイチディー	マレーシア ペゴ	四輪事業	生産販売	51.0
アジアホンダモーターカンパニー・リミテッド	タイ バンコク	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	統轄会社 販売	100.0
ホンダリーシング(タイランド)カンパニー・リミテッド	タイ バンコク	金融サービス事業	金融	100.0 (100.0)
ホンダオートモビル(タイランド)カンパニー・リミテッド	タイ アユタヤ	四輪事業	生産販売	89.0 (25.0)
タイホンダカンパニー・リミテッド	タイ バンコク	二輪事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	生産販売	72.5 (35.3)
ホンダベトナムカンパニー・リミテッド	ベトナム フックイエン	二輪事業 四輪事業	生産販売	70.0 (28.0)
ホンダサウスアメリカ・リミターダ	ブラジル スマレ	二輪事業 四輪事業 金融サービス事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	統轄会社	100.0
モトホンダ・ダ・アマゾニア・リミターダ	ブラジル マナウス	二輪事業 パワープロダクツ事業 及びその他の事業	生産販売	100.0 (100.0)

(注) 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数です。

31 重要な後発事象

自己株式取得

当社は、2023年5月11日開催の取締役会において、以下のとおり、会社法第459条第1項および当社定款第36条の規定に基づき、自己株式取得に係る事項について決議しました。

(1) 自己株式の取得を行う理由

資本効率の向上および機動的な資本政策の実施など

(2) 取得に係る事項の内容

① 取得対象株式の種類	普通株式
② 取得し得る株式の総数	64,000千株(上限) (発行済株式総数(自己株式を除く)に対する割合 3.8%)
③ 株式の取得価額の総額	200,000百万円(上限)
④ 取得期間	2023年5月12日から2024年3月31日まで
⑤ 取得方法	東京証券取引所における市場買付 1 自己株式立会外買付取引(ToSTNeT-3)による買付け 2 自己株式取得に係る取引一任契約に基づく市場買付け

32 連結財務諸表の発行の承認

連結財務諸表の発行は、2023年6月23日に当社の取締役 代表執行役社長である三部敏宏および執行役 最高財務責任者である藤村英司によって承認されています。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期 (自 2022年4月1日 至 2022年6月30日)	第2四半期 (自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)	第3四半期 (自 2022年4月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
売上収益 (百万円)	3,829,550	8,085,304	12,523,490	16,907,725
営業利益 (百万円)	222,216	453,452	733,943	780,769
税引前利益 (百万円)	237,404	515,831	859,377	879,565
親会社の所有者に帰属する 四半期(当期)利益 (百万円)	149,219	338,514	583,169	651,416
基本的1株当たり四半期(当期)利益 (親会社の所有者に帰属) (円)	87.23	198.08	342.38	384.02

(会計期間)	第1四半期 (自 2022年4月1日 至 2022年6月30日)	第2四半期 (自 2022年7月1日 至 2022年9月30日)	第3四半期 (自 2022年10月1日 至 2022年12月31日)	第4四半期 (自 2023年1月1日 至 2023年3月31日)
基本的1株当たり四半期利益 (親会社の所有者に帰属) (円)	87.23	110.85	144.49	40.73

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	825,406	1,010,601
売掛金	※1 478,615	※1 552,975
有価証券	274,991	184,994
製品	89,770	98,122
仕掛品	26,088	30,786
原材料及び貯蔵品	35,177	39,833
前払費用	16,779	9,889
未収入金	※1 186,709	※1 243,049
その他	※1 159,107	※1 205,925
貸倒引当金	△360	△347
流動資産合計	2,092,288	2,375,832
固定資産		
有形固定資産		
建物	242,333	232,146
構築物	32,626	31,303
機械及び装置	162,994	146,452
車両運搬具	5,357	4,791
工具、器具及び備品	23,521	23,257
土地	338,733	335,963
リース資産	8,768	9,033
建設仮勘定	21,053	17,930
有形固定資産合計	835,389	800,878
無形固定資産		
ソフトウェア	43,335	49,019
リース資産	1	0
その他	2,936	2,746
無形固定資産合計	46,273	51,766
投資その他の資産		
投資有価証券	217,221	262,885
関係会社株式	596,433	612,272
関係会社出資金	88,740	88,740
長期貸付金	7	3
繰延税金資産	—	45,530
その他	※1 48,286	※1 82,304
貸倒引当金	△3,883	△3,570
投資その他の資産合計	946,805	1,088,166
固定資産合計	1,828,468	1,940,811
資産合計	3,920,756	4,316,643

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	5	27
電子記録債務	※1 26,705	※1 30,008
買掛金	※1 262,425	※1 275,071
短期借入金	※1 35,167	※1 69,050
1年内償還予定の社債	40,000	—
リース債務	※1 4,822	※1 4,675
未払金	※1 80,380	※1 117,598
未払費用	※1 159,865	※1 179,508
未払法人税等	2,539	1,886
前受金	22,992	9,654
預り金	※1 3,308	※1 3,517
前受収益	2,527	2,554
製品保証引当金	32,185	65,353
賞与引当金	41,964	47,047
役員賞与引当金	185	227
執行役員賞与引当金	38	85
その他	8,354	8,146
流動負債合計	723,467	814,414
固定負債		
社債	396,572	427,207
長期借入金	11	8
リース債務	※1 6,439	※1 7,128
繰延税金負債	408	—
製品保証引当金	60,530	54,349
退職給付引当金	14,950	14,667
役員株式給付引当金	280	429
執行役員株式給付引当金	416	362
その他	※1 4,247	6,813
固定負債合計	483,857	510,966
負債合計	1,207,324	1,325,381
純資産の部		
株主資本		
資本金	86,067	86,067
資本剰余金		
資本準備金	170,313	170,313
その他資本剰余金	622	622
資本剰余金合計	170,936	170,936
利益剰余金		
利益準備金	21,516	21,516
その他利益剰余金		
圧縮記帳積立金	16,380	16,258
繰越利益剰余金	2,697,733	3,112,681
利益剰余金合計	2,735,630	3,150,456
自己株式	△328,401	△485,023
株主資本合計	2,664,232	2,922,436
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	49,198	68,825
評価・換算差額等合計	49,198	68,825
純資産合計	2,713,431	2,991,262
負債純資産合計	3,920,756	4,316,643

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2021年 4 月 1 日 至 2022年 3 月 31 日)	当事業年度 (自 2022年 4 月 1 日 至 2023年 3 月 31 日)
売上高	※1 3,454,263	※1 3,586,448
売上原価	※1 2,406,294	※1 2,435,622
売上総利益	1,047,968	1,150,825
販売費及び一般管理費	※1, ※2 1,059,184	※1, ※2 1,156,181
営業損失(△)	△11,215	△5,355
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	※1 618,032	※1 651,522
その他	※1 23,973	※1 29,046
営業外収益合計	642,006	680,569
営業外費用		
支払利息	※1 151	※1 247
減価償却費	3,394	3,454
固定資産賃貸費用	※1 2,465	※1 2,435
デリバティブ損失	1,629	12,305
社債利息	575	9,941
支払補償費	※1 2,520	※1 1,741
為替差損	2,983	—
その他	※1 3,426	※1 2,321
営業外費用合計	17,146	32,447
経常利益	613,644	642,766
特別利益		
固定資産売却益	※1 3,390	※1 2,308
関係会社整理益	※1, ※3 6,968	※1, ※3 16,141
関係会社株式売却益	—	7,147
その他	—	90
特別利益合計	10,359	25,687
特別損失		
固定資産処分損	※1 8,369	※1 6,288
投資有価証券評価損	611	6,971
退職特別加算金	36,098	6,825
その他	※1 997	※1 946
特別損失合計	46,077	21,031
税引前当期純利益	577,926	647,422
法人税、住民税及び事業税	56,968	71,098
法人税等調整額	32,910	△54,435
法人税等合計	89,879	16,662
当期純利益	488,046	630,759

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益 剰余金	
						特別償却 積立金	圧縮記帳 積立金
当期首残高	86,067	170,313	0	170,314	21,516	103	16,484
会計方針の変更による 累積的影響額							
会計方針の変更を反映 した当期首残高	86,067	170,313	0	170,314	21,516	103	16,484
当期変動額							
特別償却積立金の取崩						△103	
圧縮記帳積立金の取崩							△104
剰余金の配当							
当期純利益							
自己株式の取得							
自己株式の処分			621	621			
会社分割による変動額							
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)							
当期変動額合計	—	—	621	621	—	△103	△104
当期末残高	86,067	170,313	622	170,936	21,516	—	16,380

(単位：百万円)

	株主資本				評価・換算差額等		純資産合計
	利益剰余金		自己株式	株主資本合計	その他有価証 券評価差額金	評価・換算 差額等合計	
	その他利益 剰余金	利益剰余金 合計					
	繰越利益 剰余金						
当期首残高	2,400,610	2,438,715	△273,883	2,421,214	49,469	49,469	2,470,683
会計方針の変更による 累積的影響額	△2,729	△2,729		△2,729			△2,729
会計方針の変更を反映 した当期首残高	2,397,881	2,435,986	△273,883	2,418,484	49,469	49,469	2,467,954
当期変動額							
特別償却積立金の取崩	103	—		—			—
圧縮記帳積立金の取崩	104	—		—			—
剰余金の配当	△188,402	△188,402		△188,402			△188,402
当期純利益	488,046	488,046		488,046			488,046
自己株式の取得			△62,757	△62,757			△62,757
自己株式の処分	—	—	8,239	8,861			8,861
会社分割による変動額	—	—		—			—
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					△271	△271	△271
当期変動額合計	299,852	299,644	△54,517	245,748	△271	△271	245,476
当期末残高	2,697,733	2,735,630	△328,401	2,664,232	49,198	49,198	2,713,431

当事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益 剰余金	
						特別償却 積立金	圧縮記帳 積立金
当期首残高	86,067	170,313	622	170,936	21,516	—	16,380
会計方針の変更による累 積的影響額							
会計方針の変更を反映 した当期首残高	86,067	170,313	622	170,936	21,516	—	16,380
当期変動額							
特別償却積立金の取崩						—	
圧縮記帳積立金の取崩							△121
剰余金の配当							
当期純利益							
自己株式の取得							
自己株式の処分			0	0			
会社分割による変動額							
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)							
当期変動額合計	—	—	0	0	—	—	△121
当期末残高	86,067	170,313	622	170,936	21,516	—	16,258

(単位：百万円)

	株主資本				評価・換算差額等		純資産合計
	利益剰余金		自己株式	株主資本合計	その他有価証 券評価差額金	評価・換算 差額等合計	
	その他利益 剰余金	利益剰余金 合計					
	繰越利益 剰余金						
当期首残高	2,697,733	2,735,630	△328,401	2,664,232	49,198	49,198	2,713,431
会計方針の変更による累 積的影響額	—	—		—			—
会計方針の変更を反映 した当期首残高	2,697,733	2,735,630	△328,401	2,664,232	49,198	49,198	2,713,431
当期変動額							
特別償却積立金の取崩		—		—			—
圧縮記帳積立金の取崩	121	—		—			—
剰余金の配当	△213,475	△213,475		△213,475			△213,475
当期純利益	630,759	630,759		630,759			630,759
自己株式の取得			△157,001	△157,001			△157,001
自己株式の処分	—	—	379	379			379
会社分割による変動額	△2,457	△2,457		△2,457			△2,457
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					19,627	19,627	19,627
当期変動額合計	414,947	414,826	△156,622	258,204	19,627	19,627	277,831
当期末残高	3,112,681	3,150,456	△485,023	2,922,436	68,825	68,825	2,991,262

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法については、以下のとおりです。

- ① 満期保有目的の債券は、償却原価法(定額法)により評価しています。
- ② 子会社株式および関連会社株式は、移動平均法による原価法により評価しています。
- ③ その他有価証券のうち市場価格のない株式等以外のものは、時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)により評価しています。
- ④ その他有価証券のうち市場価格のない株式等は、移動平均法による原価法により評価しています。

(2) デリバティブは、時価法により評価しています。

(3) 棚卸資産は、先入先出法に基づく原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)により評価しています。

2 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)の減価償却方法は、定額法を採用しています。

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)の減価償却方法は、定額法を採用しています。

(3) 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産の減価償却方法は、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しています。

3 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金は、債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しています。

(2) 製品保証引当金は、製品の無償補修費用の支出に備えるため、以下の金額の合計額を計上しています。

- ① 保証書に基づく無償の補修費用として、過去の補修実績に将来の見込みを加味して算出した保証対象期間内の費用見積額
- ② 主務官庁への届出等に基づく無償の補修費用として、見積算出した額

(3) 賞与引当金は、従業員に対して支給する賞与に充てるため、賞与支払予定額のうち当事業年度に属する支給対象期間に見合う金額を計上しています。

(4) 役員賞与引当金は、役員賞与の支出に備えるため、支給見込額に基づき計上しています。

(5) 執行役員賞与引当金は、執行役員賞与の支出に備えるため、支給見込額に基づき計上しています。

(6) 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しています。

過去勤務費用については、その発生時の従業員の平均残存勤務期間による按分額を費用処理しています。数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間による按分額をそれぞれ発生翌事業年度より費用処理しています。

(7) 役員株式給付引当金は、役員に対する当社株式および金銭の交付および給付に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しています。

(8) 執行役員株式給付引当金は、執行役員および一部の執行職に対する当社株式および金銭の交付および給付に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しています。

4 収益及び費用の計上基準

製品の販売は、二輪事業、四輪事業、パワープロダクツ事業及びその他の事業に区分されます。

当社は、製品に対する支配が顧客に移転した時点で収益を認識しています。この移転は、通常、顧客に製品を引渡した時点で行われます。

(重要な会計上の見積り)

当社は、財務諸表を作成するにあたり、会計方針の適用、資産・負債および収益・費用の金額に影響を及ぼす判断、見積りおよび仮定の設定を行っています。実際の結果は、これらの見積りとは異なる場合があります。なお、これらの見積りや仮定は継続して見直しています。会計上の見積りの変更による影響は、見積りを変更した事業年度およびその影響を受ける将来の事業年度において認識されます。

財務諸表に重要な影響を与える可能性のある会計上の見積りおよび仮定に関する情報は、以下のとおりです。

1 棚卸資産の評価

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
製品	89,770百万円	98,122百万円
仕掛品	26,088	30,786
原材料及び貯蔵品	35,177	39,833

会計上の見積りおよび仮定に関する情報については、注記事項の「(重要な会計方針) 1 資産の評価基準及び評価方法」を参照ください。

2 製品保証引当金の算出

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
製品保証引当金	92,715百万円	119,702百万円

会計上の見積りおよび仮定に関する情報については、連結財務諸表注記の「17 引当金」を参照ください。

3 退職給付引当金の算出

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
退職給付引当金	14,950百万円	14,667百万円

会計上の見積りおよび仮定に関する情報については、連結財務諸表注記の「18 従業員給付」を参照ください。

4 繰延税金資産の回収可能性

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
繰延税金資産	—	45,530百万円
繰延税金負債	408百万円	—

会計上の見積りおよび仮定に関する情報については、連結財務諸表注記の「23 法人所得税」を参照ください。

(表示方法の変更)

(損益計算書関係)

1 前事業年度において、区分掲記していた営業外費用の「寄付金」は、金額的重要性がないため、当事業年度より「その他」に含めて表示しています。また、前事業年度において、営業外費用の「その他」に含めていた「デリバティブ損失」および「社債利息」は、それぞれ金額的重要性が増したため、当事業年度より区分掲記しています。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っています。

この結果、前事業年度の営業外費用に表示していた「寄付金」1,045百万円、「その他」4,586百万円は、「デリバティブ損失」1,629百万円、「社債利息」575百万円、「その他」3,426百万円として組替えています。

2 前事業年度において、特別損失の「その他」に含めていた「投資有価証券評価損」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より区分掲記しています。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っています。

この結果、前事業年度の特別損失の「その他」に表示していた1,609百万円は、「投資有価証券評価損」611百万円、「その他」997百万円として組替えています。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権および金銭債務は、以下のとおりです。

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
短期金銭債権	669,950百万円	786,186百万円
短期金銭債務	221,970	308,714
長期金銭債権	826	1,111
長期金銭債務	416	109

2 保証債務等は、以下のとおりです。

(1) 保証債務

以下の関係会社等の銀行借入金等に対して債務保証を行っています。

前事業年度(2022年3月31日)

	百万円	
ホンダモーター ヨーロッパ・リミテッド	42,786	銀行借入金
その他	11,969	従業員に対する「ホンダ住宅共済会」制度等による銀行からの借入金等
計	54,755	

当事業年度(2023年3月31日)

	百万円	
ホンダモーター ヨーロッパ・リミテッド	74,663	銀行借入金
その他	9,356	従業員に対する「ホンダ住宅共済会」制度等による銀行からの借入金等
計	84,019	

(2) 保証類似行為

当社は、連結子会社の資金調達に係る信用を補完することを目的に連結子会社との間で合意書(キープウェル・アグリーメント)を締結しています。当該連結子会社の対象債務残高は、以下のとおりです。

前事業年度(2022年3月31日)

	百万円	
アメリカンホンダファイナンス・ コーポレーション	3,729,158	ミディアムタームノート、コマーシャルペーパー
(株)ホンダファイナンス	697,500	無担保社債、コマーシャルペーパー
ホンダカナダファイナンス・ インコーポレーテッド	556,698	無担保社債、コマーシャルペーパー
その他	41,422	無担保社債、コマーシャルペーパー
計	5,024,779	

当事業年度(2023年3月31日)

	百万円	
アメリカンホンダファイナンス・ コーポレーション	3,691,171	ミディアムタームノート、コマーシャルペーパー
(株)ホンダファイナンス	659,500	無担保社債、コマーシャルペーパー
ホンダカナダファイナンス・ インコーポレーテッド	527,492	無担保社債、コマーシャルペーパー
その他	29,319	無担保社債、コマーシャルペーパー
計	4,907,483	

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引に係るものは、以下のとおりです。

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
売上高	2,700,135百万円	2,800,655百万円
営業費用	1,605,306	1,678,536
営業取引以外の取引高	644,535	686,488

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目および金額ならびにおおよその割合は、以下のとおりです。

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
製品保証引当金繰入額	23,615百万円	65,667百万円
貸倒引当金繰入額	△1,852	△138
退職給付費用	△802	△28
賞与引当金繰入額	10,029	11,143
減価償却費	14,700	13,024
役員賞与引当金繰入額	185	227
執行役員賞与引当金繰入額	38	85
役員株式給付引当金繰入額	159	287
執行役員株式給付引当金繰入額	185	160
研究開発費	722,811	759,725

おおよその割合

販売費	15%	17%
一般管理費	85%	83%

※3 関係会社整理益は、グローバルにおける生産配置と生産能力の適正化を方針とした四輪車生産体制の見直しの一環として、欧州地域子会社の生産再編に関連した移転価格調整等を当社で計上したものです。

(株主資本等変動計算書関係)

自己株式数は、以下のとおりです。

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
普通株式	100,828,074株	147,087,841株

(注) 当社は、当事業年度において、取締役会の決議に基づき、自己株式46,371,600株を市場買付により取得しています。

期末自己株式数には、B I P信託が保有する当社株式が含まれています。前事業年度および当事業年度の期末自己株式数に含まれるB I P信託が保有する当社株式数はそれぞれ1,038,080株、924,117株です。なお、当事業年度において売却または交付により減少したB I P信託が保有する当社株式数は113,963株です。

(有価証券関係)

前事業年度(2022年3月31日)

子会社株式および関連会社株式

種類	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	9,858	50,559	40,700
関連会社株式	11,001	93,727	82,725
計	20,860	144,286	123,425

(注) 上表に含まれない市場価格のない株式等

種類	貸借対照表計上額 (百万円)
子会社株式	336,223
関連会社株式	239,349
計	575,572

当事業年度(2023年3月31日)

子会社株式および関連会社株式

種類	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	9,858	58,074	48,215
関連会社株式	11,001	128,545	117,544
計	20,860	186,620	165,759

(注) 上表に含まれない市場価格のない株式等

種類	貸借対照表計上額 (百万円)
子会社株式	328,284
関連会社株式	263,126
計	591,411

(税効果会計関係)

- 1 繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、以下のとおりです。

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
(繰延税金資産)		
繰越欠損金	118,142百万円	110,619百万円
有価証券評価損等加算額	81,172	80,647
製品保証引当金加算額	27,999	36,150
繰越外国税額控除	—	35,195
減価償却限度超過額	20,092	16,317
棚卸資産評価関連加算額	13,047	14,590
賞与引当金加算額	12,673	14,208
その他	27,820	24,709
繰延税金資産小計	300,947	332,438
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	△118,142	△90,874
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△148,066	△146,342
評価性引当額小計	△266,208	△237,216
繰延税金資産合計	34,739	95,221
(繰延税金負債)		
その他有価証券評価差額金	△20,783	△29,281
前払年金費用	△7,276	△13,376
圧縮記帳積立金	△7,087	△7,034
繰延税金負債合計	△35,147	△49,691
繰延税金資産(負債)の純額	△408	45,530

- 2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳は、以下のとおりです。

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
法定実効税率	30.2%	30.2%
(調整)		
外国源泉税	10.3	11.0
移転価格税制関連	2.1	—
評価性引当額	2.5	△9.9
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△30.6	△29.4
その他	1.1	0.7
税効果会計適用後の法人税等の負担率	15.6	2.6

- 3 法人税および地方法人税の会計処理またはこれらに関する税効果会計の会計処理

当社は、当事業年度から、グループ通算制度を適用しています。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」(実務対応報告第42号 2021年(令和3年)8月12日)に従って、法人税および地方法人税の会計処理またはこれらに関する税効果会計の会計処理ならびに開示を行っています。

(1 株当たり情報)

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
1 株当たり純資産額	1,586.25円	1,797.27円
1 株当たり当期純利益	283.75	371.84

(注) 1 株当たり当期純利益は、期中平均発行済株式数に基づき算出しています。1 株当たり情報の算定において、B I P 信託が保有する当社株式を自己株式として処理していることから、期末株式数および期中平均株式数から当該株式数を控除しています。前事業年度および当事業年度の B I P 信託が保有する当社株式の期末株式数はそれぞれ1,038,080株、924,117株、期中平均株式数はそれぞれ903,748株、969,317株です。前事業年度および当事業年度の期中平均発行済株式数はそれぞれ1,719,961,835株、1,696,307,115株です。なお、前事業年度および当事業年度に、希薄化効果のある潜在的普通株式はありません。

(重要な後発事象)

自己株式取得

当社は、2023年5月11日開催の取締役会において、以下のとおり、会社法第459条第1項および当社定款第36条の規定に基づき、自己株式取得に係る事項について決議しました。

1 自己株式の取得を行う理由

資本効率の向上および機動的な資本政策の実施など

2 取得に係る事項の内容

- | | |
|----------------|---|
| (1) 取得対象株式の種類 | 普通株式 |
| (2) 取得し得る株式の総数 | 64,000千株(上限)
(発行済株式総数(自己株式を除く)に対する割合 3.8%) |
| (3) 株式の取得価額の総額 | 200,000百万円(上限) |
| (4) 取得期間 | 2023年5月12日から2024年3月31日まで |
| (5) 取得方法 | 東京証券取引所における市場買付
① 自己株式立会外買付取引(ToSTNeT-3)による買付け
② 自己株式取得に係る取引一任契約に基づく市場買付け |

④ 【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首 残 高	当 期 増加額	当 期 減少額	当 期 償却額	当期末 残 高	減価償却 累計額
有形 固定 資産	建物	775,694	8,185	7,939	17,058	775,940	543,793
	構築物	153,112	2,622	2,074	3,716	153,660	122,357
	機械及び装置	898,823	23,839	63,695	37,401	858,968	712,515
	車両運搬具	23,083	3,153	8,315	1,571	17,921	13,130
	工具、器具及び備品	248,127	10,946	17,946	10,993	241,127	217,869
	土地	338,733	7	2,778	—	335,963	—
	リース資産	18,568	4,394	4,604	4,128	18,358	9,324
	建設仮勘定	21,053	46,277	49,401	—	17,930	—
	計	2,477,196	99,427	156,754	74,870	2,419,869	1,618,991
無形 固定 資産	ソフトウェア	228,497	20,650	1,404	14,574	247,743	198,724
	リース資産	2	—	1	0	1	0
	その他	4,118	4	42	152	4,080	1,333
	計	232,618	20,655	1,448	14,726	251,825	200,058

(注) 当期首残高および当期末残高については、取得価額により記載しています。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	4,243	346	672	3,917
製品保証引当金	92,715	65,667	38,680	119,702
賞与引当金	41,964	47,047	41,964	47,047
役員賞与引当金	185	227	185	227
執行役員賞与引当金	38	85	38	85
役員株式給付引当金	280	287	138	429
執行役員株式給付引当金	416	186	241	362

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しています。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取・買増手数料	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 — 株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当社の公告は、電子公告により行います。 ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、東京都において発行する日本経済新聞に掲載してこれを行います。 当社の公告掲載URLはつぎのとおりです。(https://www.honda.co.jp/investors/)
株主に対する特典	当社は、株主の皆様の日頃のご支援に感謝するとともに、より多くの方々に当社株式を保有していただくことを目的として株主優待制度を導入しています。 (1) 2023年3月末時点で1単元(100株)以上の当社株式をご所有の株主様 Hondaカレンダー(応募制・全員) (2) 2023年3月末時点で1年以上連続で1単元(100株)以上の当社株式をご所有の株主様 レースご招待(応募制・抽選) Enjoy Hondaご招待(応募制・抽選) (3) 2023年3月末時点で3年以上連続で1単元(100株)以上の当社株式をご所有の株主様 事業所見学会ご招待(応募制・抽選) Honda Jet見学会ご招待(応募制・抽選)

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

(1) 当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に提出した書類

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、以下の書類を提出しています。

① 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第98期(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日) 2022年6月22日関東財務局長に提出

② 内部統制報告書及びその添付書類

2022年6月22日関東財務局長に提出

③ 四半期報告書及び確認書

第99期第1四半期(自 2022年4月1日 至 2022年6月30日) 2022年8月12日関東財務局長に提出

第99期第2四半期(自 2022年7月1日 至 2022年9月30日) 2022年11月10日関東財務局長に提出

第99期第3四半期(自 2022年10月1日 至 2022年12月31日) 2023年2月13日関東財務局長に提出

④ 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書

2022年6月24日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号(代表執行役の異動)の規定に基づく臨時報告書

2023年1月25日関東財務局長に提出

⑤ 自己株券買付状況報告書

2022年9月15日関東財務局長に提出

2022年10月14日関東財務局長に提出

2022年11月15日関東財務局長に提出

2022年12月15日関東財務局長に提出

2023年1月13日関東財務局長に提出

2023年2月14日関東財務局長に提出

2023年3月15日関東財務局長に提出

2023年4月14日関東財務局長に提出

2023年5月15日関東財務局長に提出

2023年6月15日関東財務局長に提出

(2) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

連結子会社のうち、主要な連結子会社以外のものに係る管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率および労働者の男女の賃金の差異は、以下のとおりです。

名称	当事業年度					補足説明
	管理職に占める女性労働者の割合(%) (注2)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注3)	労働者の男女の賃金の差異(%) (注2)			
			全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者	
沖繩ホンダ(株)	7.7	20.0	77.5	84.3	86.8	—
合志技研工業(株)	—	—	79.7	77.6	56.5	—
新日工業(株)	3.4	—	—	—	—	—

当事業年度						補足説明
名称	管理職に占める女性労働者の割合(%) (注2)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注3)	労働者の男女の賃金の差異(%) (注2)			
			全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者	
㈱T D E C	4.5	100.0	—	—	—	—
㈱ベストロジ熊本	—	100.0	—	—	—	—
㈱ベストロジ埼玉	0.0	—	93.6	96.8	98.2	—
㈱ベストロジ静岡	0.0	—	—	—	—	—
㈱ベストロジ三重	0.0	25.0	70.6	77.0	85.7	—
ホンダオートボディー(株)	—	0.0	58.9	58.8	41.0	—
ホンダ開発(株)	3.3	33.3	27.8	47.2	49.0	—
㈱ホンダカーズ愛知	—	33.3	67.5	62.6	76.7	—
㈱ホンダカーズ京都	—	—	76.1	73.7	25.1	—
㈱ホンダカーズ埼玉	1.4	3.6	51.6	62.2	55.1	—
㈱ホンダカーズ静岡西	3.0	—	67.1	68.5	90.2	—
㈱ホンダカーズ千葉	—	—	54.1	68.3	91.5	—
㈱ホンダカーズ東京中央	1.5	11.5	73.2	71.9	74.8	—
㈱ホンダカーズ兵庫	3.6	0.0	72.6	69.7	114.1	—
㈱ホンダカーズ横浜	—	—	62.9	70.7	27.3	—
本田金属技術(株)	1.6	76.5	75.9	78.3	111.0	—
ホンダ太陽(株)	—	33.3	—	—	—	—
㈱ホンダテクノフオート	2.6	36.8	87.3	86.3	59.3	—
㈱ホンダドリームジャパン	—	50.0	62.0	76.8	120.1	—
㈱ホンダトレーディング	7.6	—	66.2	66.4	80.0	—
㈱ホンダモーターサイクルジャパン	—	66.7	96.8	87.6	97.9	—
ホンダモビリティランド(株)	1.6	66.7	57.2	61.1	63.8	—
㈱ホンダ四輪販売岡山	0.0	28.6	—	—	—	—
㈱ホンダ四輪販売関西	—	100.0	63.8	62.8	60.7	—
㈱ホンダ四輪販売関東中央	0.0	20.0	58.0	60.9	86.1	—
㈱ホンダ四輪販売北関東	—	—	57.6	57.5	137.8	—
㈱ホンダ四輪販売北・東北	4.2	0.0	74.7	73.6	101.4	—
㈱ホンダ四輪販売九州北	2.5	21.4	52.9	68.3	42.5	—
㈱ホンダ四輪販売四国	3.2	—	65.7	70.2	113.5	—
㈱ホンダ四輪販売西中国	—	—	59.6	65.2	52.6	—
㈱ホンダ四輪販売北陸	0.0	—	61.5	59.1	79.2	—
㈱ホンダ四輪販売北海道	2.3	0.0	55.0	62.1	95.9	—
㈱ホンダ四輪販売南九州	3.3	0.0	69.9	64.9	67.8	—
㈱ホンダ四輪販売南・東北	—	11.1	70.4	68.9	105.1	—
㈱ホンダロジスティクス	2.4	45.5	75.7	70.9	94.4	—
八千代工業(株)	0.0	50.0	66.7	66.5	80.0	—
㈱ユタカ技研	0.0	28.0	70.2	71.1	95.9	—

- (注) 1 管理職に占める女性労働者の割合については、当事業年度末日を基準日としています。また、男性労働者の育児休業取得率および労働者の男女の賃金の差異については、当事業年度を対象期間としています。
- 2 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(2015年(平成27年)法律第64号)の規定に基づき算出したものです。
- 3 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(1991年(平成3年)法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(1991年(平成3年)労働省令第25号)第71条の4第2号における育児休業等および育児目的休暇の取得割合を算出したものです。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年6月23日

本田技研工業株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 知 野 雅 彦

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 神 塚 勲

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鎌 田 健 志

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている本田技研工業株式会社の2022年4月1日から2023年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結財政状態計算書、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結持分変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結財務諸表注記について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第93条により規定された国際会計基準に準拠して、本田技研工業株式会社及び連結子会社の2023年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

主務官庁への届出等に基づく個別の無償補修費用に対する製品保証引当金の見積り	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>連結財務諸表注記「17 引当金」に記載のとおり、本田技研工業株式会社の当連結会計年度の連結財政状態計算書において、製品保証引当金535,099百万円が計上されており、これには主務官庁への届出等に基づく個別の無償補修費用に対する製品保証引当金（以下「特別製品保証引当金」という。）が含まれている。</p> <p>特別製品保証引当金は、主務官庁への届出等に伴って将来発生する製品に対する無償補修費用の見積りに基づいて計上される。</p> <p>将来発生する製品に対する無償補修費用は、過去の補修実績を基礎として、予測発生台数及び予測台当たり補修費用を含む補修費用の将来見込みを加味して見積られる。無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用に関する見積りには経営者の重要な判断を伴うことから、その評価にあたっては監査上の高度な判断が要求される。</p> <p>以上から、当監査法人は、特別製品保証引当金の見積りが、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項の一つに該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、特別製品保証引当金の見積りの合理性を評価するための監査上の対応を行った。これには、連結子会社の監査人に監査の実施を指示し、監査手続の実施結果についての報告を受け、十分かつ適切な監査証拠が入手されているかどうかを評価することが含まれる。当監査法人及び連結子会社の監査人が実施した主な監査手続は、以下のとおりである。</p> <p>(1) 内部統制の評価</p> <p>無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用に関する仮定の設定を含む、特別製品保証引当金の見積りに係る内部統制の整備及び運用状況の有効性の評価</p> <p>(2) 引当金の見積りに係る仮定の適切性の評価</p> <p>無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用に関する仮定の適切性を評価するための以下の手続</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 会社及び連結子会社に影響を与える状況や事象の変化を踏まえた、過去の特別製品保証引当金の見積りに使用された仮定と直近の補修費用の実績との整合性の検討 ● 無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用の決定に使用されるインプットデータについての、根拠資料及び過去の補修実績データとの整合性の検討 ● 連結会計年度末以降、連結財務諸表の提出日までに識別された無償補修に関する事実及び状況が、当連結会計年度の特別製品保証引当金の見積りの基礎となる予測発生台数及び予測台当たり補修費用に与える影響についての検討

米国金融子会社の小売金融債権に対するクレジット損失引当金の見積り	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>連結財務諸表注記「7 金融サービスに係る債権」に記載のとおり、本田技研工業株式会社の当連結会計年度の連結財政状態計算書において、金融サービスに係る債権の予想信用損失がクレジット損失引当金として48,652百万円計上されており、これには米国金融子会社等における小売金融債権の予想信用損失に対するクレジット損失引当金46,083百万円が含まれている。</p> <p>クレジット損失引当金は、予想損失モデル（信用リスクが当初認識以降に著しく増大したかどうかの判定を含む。）により測定される。予想信用損失は、契約上のキャッシュ・フローと回収が見込まれるキャッシュ・フローとの差額を確率加重して見積もられ、当該見積りは将来の経済動向の見込みによる影響を受ける。米国金融子会社における小売金融債権に係る予想信用損失は、借手、担保、マクロ経済要因等の関連するリスク特性に基づいたグループごとに決定される。</p> <p>当該クレジット損失引当金の測定には高い不確実性を伴うことから、その見積りの評価には監査上の複雑な判断並びに専門的な技能及び知識が要求される。また、特に、クレジット損失引当金の算定手法及びモデル（信用リスクが当初認識以降に著しく増大したかどうかの判定を含む。）の評価並びに経済動向に関する将来予測及びその確率加重の選択にあたって監査上の複雑な判断が要求される。さらに、入手する監査証拠の十分性を評価するにあたって、監査上の判断が必要となる。</p> <p>以上から、当監査法人は、米国金融子会社の小売金融債権に対するクレジット損失引当金の見積りが、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項の一つに該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、米国金融子会社の小売金融債権に対するクレジット損失引当金の見積りの合理性を評価するため、米国金融子会社の監査人に監査の実施を指示し、以下を含む監査手続の実施結果についての報告を受け、十分かつ適切な監査証拠が入手されているかどうかを評価した。</p> <p>(1) 内部統制の評価</p> <p>以下に関連する統制を含む、クレジット損失引当金の見積りに係る内部統制の整備及び運用状況の有効性の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 予想信用損失の算定手法及びモデル（信用リスクが当初認識以降に著しく増大したかどうかの判定を含む。）の一貫性及び適切性並びに経済動向に関する将来予測及びその確率加重の選択 ● 損失額の実績とモデルにより算定された金額との比較分析 ● 予想信用損失の見積りに使用するモデルの再評価 <p>(2) クレジット損失引当金の見積りの合理性の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ● クレジット損失引当金の見積りに使用する仮定の適切性及びデータの信頼性と適合性の評価 ● 専門的な技能及び知識を有する信用リスクの専門家を利用した以下の手続 <ul style="list-style-type: none"> ・ 予想信用損失の算定手法の、国際会計基準の要求事項への準拠性の検証 ・ 使用したモデルが予想信用損失の算定手法と整合しているかどうか及びその目的に適合しているかどうかを検証するための、関連資料の閲覧並びに使用したモデルの理論的な健全性及び適切性の評価 ・ 信用リスクの著しい増大があったかどうかの判断規準を変えることに対する感応度分析による、信用リスクが当初認識以降に著しく増大したかどうかの判定手法の適切性の評価 ・ 米国金融子会社の事業環境及び関連する業界における実務との比較による、経済動向に関する将来予測及びその確率加重の選択の妥当性の評価 ・ 予想信用損失の金額と損失の実績額との比較及び差異の分析による、使用したモデルのバックテスト結果の評価 ● 上記の監査手続に加えて米国金融子会社の会計実務の質的側面及び会計上の見積りにおける潜在的な偏向の有無を検討することによる、入手した監査証拠の十分性の評価

米国金融子会社におけるオペレーティング・リース資産の残存価額の見積り	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>連結財務諸表注記「3 重要な会計方針（6）オペレーティング・リース資産」に記載のとおり、オペレーティング・リースとして貸与している車両は、リース契約で定められている期間にわたり、定額法で減価償却される。本田技研工業株式会社の当連結会計年度の連結財政状態計算書において、オペレーティング・リース資産4,726,292百万円が計上されており、これには米国金融子会社が保有するリース車両が含まれている。</p> <p>リース車両は契約上の残存価額と見積残存価額のいずれか低い価額まで減価償却され、見積残存価額の見直しによる影響は残存リース期間で将来にわたって均等償却される。米国金融子会社におけるリース車両の見積残存価額の見直しに影響を与える主要因には、リース期間満了時に顧客から返却されると予測されるリース車両の割合（予測リース車両返却率）及びリース期間満了時におけるリース車両の予測市場価格が含まれる。見積残存価額の算定にあたっては、一般的な経済指標、新車及び中古車の外部市場情報並びに過去の実績等の様々な要素が勘案されている。</p> <p>当該オペレーティング・リース資産の残存価額の測定には高い不確実性を伴うことから、その見積りの評価には監査上の複雑な判断及び専門的な技能及び知識が要求される。また、特に、見積残存価額の算定手法の検討、予測リース車両返却率の見積りに使用するモデルの評価及びリース期間満了時におけるリース車両の予測市場価格の評価にあたって監査上の複雑な判断が要求される。さらに、入手する監査証拠の十分性を評価するにあっても、監査上の判断が必要となる。</p> <p>以上から、当監査法人は、米国金融子会社におけるオペレーティング・リース資産の残存価額の見積りが、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項の一つに該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、米国金融子会社におけるオペレーティング・リース資産の残存価額の見積りの合理性を評価するため、米国金融子会社の監査人に監査の実施を指示し、以下を含む監査手続の実施結果についての報告を受け、十分かつ適切な監査証拠が入手されているかどうかを評価した。</p> <p>(1) 内部統制の評価</p> <p>以下に関連する統制を含む、オペレーティング・リース資産の残存価額の見積りに関連する内部統制の整備及び運用状況の有効性の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ● リース期間満了時におけるリース車両の予測市場価格の識別及び決定を含む見積残存価額の算定手法の適用 ● 予測リース車両返却率の見積りに使用するモデルの一貫性及び適切性 ● 実績値との比較による予測リース車両返却率の評価 ● リース車両の処分により実際に生じる損益の分析 <p>(2) 残存価額の見積りの合理性の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 残存価額の見積りに使用する仮定の適切性及びデータの信頼性と適合性の評価 ● 専門的な技能及び知識を有する評価の専門家を利用した以下の手続 <ul style="list-style-type: none"> ・見積残存価額の算定手法の、国際会計基準の要求事項への準拠性の検証 ・使用したモデルが見積残存価額の算定手法と整合しているかどうか及びその目的に適合しているかどうかを検証するための、関連資料の閲覧並びに使用したモデルの理論的な健全性及び適切性の評価 ・リース車両の種類に応じたリスクの特性及び趨勢に照らした、リース期間満了時におけるリース車両の予測市場価格の評価 ● 上記の監査手続に加えて米国金融子会社の会計実務の質的側面及び会計上の見積りにおける潜在的な偏向の有無を検討することによる、入手した監査証拠の十分性の評価

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における執行役及び取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者及び監査委員会の責任

経営者の責任は、国際会計基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、国際会計基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における執行役及び取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・連結財務諸表の表示及び注記事項が、国際会計基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査委員会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

<内部統制監査>

財務報告に係る内部統制に関する監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、米国トレッドウェイ委員会支援組織委員会が公表した「内部統制—統合的枠組み（2013年版）」で確立された規準（以下、「COSO規準（2013年版）」という。）を基礎とする本田技研工業株式会社の2023年3月31日現在の財務報告に係る内部統制について監査を行った。

当監査法人は、本田技研工業株式会社が、2023年3月31日現在において、COSO規準（2013年版）を基礎として、全ての重要な点において財務報告に係る有効な内部統制を維持しているものと認める。

監査意見の根拠

財務報告に係る有効な内部統制を維持する責任、及び内部統制報告書において財務報告に係る内部統制の有効性を評価する責任は経営者にある。当監査法人の責任は、独立の立場から会社の財務報告に係る内部統制についての意見を表明することにある。当監査法人は、米国公開会社会計監視委員会（The Public Company Accounting Oversight Board（以下、「PCAOB」という））に登録された監査法人であり、米国連邦証券法並びに適用される米国証券取引委員会及びPCAOBの規則等に従って、本田技研工業株式会社から独立していることが要求されている。

当監査法人は、PCAOBの定める財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して監査を行った。PCAOBの基準は、財務報告に係る有効な内部統制が全ての重要な点において維持されているかどうかについて合理的な保証を得るために、当監査法人が監査を計画し実施することを求めている。内部統制監査は、財務報告に係る内部統制についての理解、開示すべき重要な不備が存在するリスクの評価、評価したリスクに基づく内部統制の整備及び運用状況の有効性についての検証及び評価、並びに当監査法人が状況に応じて必要と認めたその他の手続の実施を含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

我が国の内部統制監査との主要な相違点

当監査法人は、PCAOBの監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠した場合との主要な相違点は以下のとおりである。

1. 我が国の基準では、経営者が作成した内部統制報告書に対して監査意見を表明するが、PCAOBの基準では、財務報告に係る内部統制に対して監査意見を表明する。
2. PCAOBの基準では、「経理の状況」に掲げられた連結財務諸表の作成に係る内部統制のみを内部統制監査の対象としており、個別財務諸表のみに関連する内部統制や財務諸表の信頼性に重要な影響を及ぼす開示事項等に係る内部統制は監査の対象には含まれていない。
3. PCAOBの基準では、持分法適用関連会社の財務報告に係る内部統制については、監査の対象には含まれていない。

財務報告に係る内部統制の定義及び限界

財務報告に係る内部統制は、財務報告の信頼性及び一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠した外部報告目的の財務諸表の作成に対して合理的な保証を提供するために整備されたプロセスである。財務報告に係る内部統制には、(1)会社の資産の取引及び処分を合理的な詳細さで正確かつ適正に反映する記録の維持に関連する方針及び手続、(2)一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠した財務諸表の作成を可能にするために必要な取引が記録されること、及び、会社の収入と支出が経営者及び取締役の承認に基づいてのみ実行されることに関する合理的な保証を提供するための方針及び手続、並びに(3)財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性のある会社の資産が未承認で取得、使用又は処分されることを防止又は適時に発見することに関する合理的な保証を提供するための方針及び手続が含まれる。

財務報告に係る内部統制は、固有の限界があるため、虚偽表示を防止又は発見できない可能性がある。また、将来の期間に向けて有効性の評価を予測する場合には、状況の変化により内部統制が不十分となるリスク、又は方針や手続の遵守の程度が低下するリスクを伴う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2 XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2023年6月23日

本田技研工業株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 知 野 雅 彦

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 神 塚 勲

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鎌 田 健 志

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている本田技研工業株式会社の2022年4月1日から2023年3月31日までの第99期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、本田技研工業株式会社の2023年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

主務官庁への届出等に基づく個別の無償補修費用に対する製品保証引当金の見積り	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>本田技研工業株式会社の当事業年度の貸借対照表において、製品保証引当金119,702百万円が計上されており、これには主務官庁への届出等に基づく個別の無償補修費用に対する製品保証引当金（以下「特別製品保証引当金」という。）が含まれている。</p> <p>特別製品保証引当金は、主務官庁への届出等に伴って将来発生する製品に対する無償補修費用の見積りに基づいて計上される。</p> <p>将来発生する製品に対する無償補修費用は、過去の補修実績を基礎として、予測発生台数及び予測台当たり補修費用を含む補修費用の将来見込みを加味して見積もられる。無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用に関する見積りには経営者の重要な判断を伴うことから、その評価にあたっては監査上の高度な判断が要求される。</p> <p>以上から、当監査法人は、特別製品保証引当金の見積りが、当事業年度の財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、特別製品保証引当金の見積りの合理性を評価するための監査上の対応を行った。当監査法人が実施した主な監査手続は、以下のとおりである。</p> <p>(1) 内部統制の評価 無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用に関する仮定の設定を含む、特別製品保証引当金の見積りに係る内部統制の整備及び運用状況の有効性の評価</p> <p>(2) 引当金の見積りに係る仮定の適切性の評価 無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用に関する仮定の適切性を評価するための以下の手続</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 会社に影響を与える状況や事象の変化を踏まえた、過去の特別製品保証引当金の見積りに使用された仮定と直近の補修費用の実績との整合性の検討 ● 無償補修の予測発生台数及び予測台当たり補修費用の決定に使用されるインプットデータについての、根拠資料及び過去の補修実績データとの整合性の検討 ● 事業年度末以降、財務諸表の提出日までに識別された無償補修に関する事実及び状況が、当事業年度の特別製品保証引当金の見積りの基礎となる予測発生台数及び予測台当たり補修費用に与える影響についての検討

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における執行役及び取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における執行役及び取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業的前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業的前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査委員会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2 XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2023年6月23日

【会社名】 本田技研工業株式会社

【英訳名】 HONDA MOTOR CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 取締役 代表執行役社長 三 部 敏 宏

【最高財務責任者の役職氏名】 執行役 藤 村 英 司

【本店の所在の場所】 東京都港区南青山二丁目1番1号

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

当社の経営者は、米国1934年証券取引所法Rule13a-15(f)および15d-15(f)に定義される財務報告に係る内部統制を適切に構築し維持する責任を有しています。

当社は、米国1934年証券取引所法およびトレッドウェイ委員会支援組織委員会(COSO)が発表した「内部統制の統合的枠組み(2013年版)」において設定された規準に準拠して財務報告に係る内部統制を整備および運用しています。

なお、財務報告に係る内部統制によっても、その固有の限界のため、財務報告における誤りを未然に防止したり、発見したりすることができない可能性があります。また、将来の財務報告に係る内部統制の有効性の評価結果は、前提条件が変化したり、方針や手続きに準拠する程度が低下したりすることにより、内部統制の適正性を失う可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

当社の経営者は、米国1934年証券取引所法およびトレッドウェイ委員会支援組織委員会(COSO)が発表した「内部統制の統合的枠組み(2013年版)」において設定された規準に基づいて、2023年3月31日現在における財務報告に係る内部統制の有効性の評価を実施しました。

当社の財務報告に係る内部統制は、財務報告の信頼性および国際会計基準に準拠した外部報告目的の財務諸表の作成について、合理的な保証を与えるように設計され、次のような方針と手続きを含んでいます。

- (1) 当社の資産の取引や処分を合理的に正確かつ適正に反映した記録を維持するための方針および手続き
- (2) 国際会計基準に準拠した財務諸表を作成するために必要な取引が記録されること、および、収入と支出が経営者および取締役の承認に従って行われていることについての合理的な保証を提供する方針および手続き
- (3) 財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性がある、未承認の資産の取得、使用および処分の防止、または、それらが適時に発見されるための合理的な保証を提供する方針および手続き

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、2023年3月31日現在において財務報告に係る内部統制は有効であると結論付けました。

また、当社の独立登録監査人である有限責任 あずさ監査法人は、監査報告書に記載のとおり、当社の財務報告に係る内部統制の有効性について監査を実施しました。

4 【付記事項】

当社は、内部統制報告書を作成するにあたって、米国1934年証券取引所法に準拠しています。

我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に従って作成する場合との主要な相違点は次のとおりです。

- (1) 財務報告に係る内部統制の評価を実施する際の基準は、企業会計審議会の定めた内部統制の基本的枠組みではなく、トレッドウェイ委員会支援組織委員会(COSO)が発表した規準である「内部統制の統合的枠組み(2013年版)」となっています。
- (2) 財務報告に係る内部統制の評価範囲は、「経理の状況」における当社の連結財務諸表の作成に関するものであり、当社の財務諸表に関する開示内容などを含みません。
- (3) 財務報告に係る内部統制の評価対象会社は、持分法適用会社を含みません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】 確認書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の2第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2023年6月23日

【会社名】 本田技研工業株式会社

【英訳名】 HONDA MOTOR CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 取締役 代表執行役社長 三部 敏 宏

【最高財務責任者の役職氏名】 執行役 藤 村 英 司

【本店の所在の場所】 東京都港区南青山二丁目1番1号

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社の取締役 代表執行役社長である三部敏宏および執行役 最高財務責任者である藤村英司は、当社の2022年4月1日から2023年3月31日までの連結会計年度に係る有価証券報告書の提出時点において、以下のとおり、当該有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき、すべての重要な点において適正であることを確認しております。

1. 私たちが知る限りにおいて、当該有価証券報告書は、その提出時点で、重要な事実に関するいかなる虚偽の記載も含んでおりません。また、記載がなされた際の状況に照らし、重要な事実の記載の省略はありません。
2. 私たちが知る限りにおいて、当該有価証券報告書の連結財務諸表、財務諸表ならびにその他の財務情報は、それらに記載されている時点および期間の、当社の財政状態、経営成績ならびにキャッシュ・フローのすべての重要な事項について、適正に表示しております。

私たちが、当該有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき、すべての重要な点において適正であるとした理由は、以下の事項を実施していることによります。

1. 当該有価証券報告書の作成において、当社および連結子会社に関する重要な情報が確実に報告されるような開示に関する統制および手続きを、私たちの監督のもと、構築しました。
2. 当該有価証券報告書における、財務報告の信頼性および国際会計基準に準拠した外部報告目的の財務諸表の作成について合理的な保証を与えるような財務報告に係る内部統制を、私たちの監督のもと、構築しました。
3. 2023年3月31日時点における、開示に関する統制および手続きと財務報告に係る内部統制の有効性について、評価を実施しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。